

---

# 咸宜園教育研究センター 研究紀要

---

## 第 3 号

下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察  
— 本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開 — 亀田 一 邦

廣瀬淡窓における自省と養生について—『自新録』『再新録』を中心に— 深 町 浩一郎

史料紹介 廣瀬家所蔵の「凶禮記」について(上) 吉 田 博 嗣  
園 田 大

資料紹介 西村天囚 著『亀門の二廣』について(上)廣瀬淡窓編 溝 田 直 己

咸宜園門下生略伝(二) 吉 田 博 嗣  
原 千 里

---

咸宜園教育研究センター年報(平成24年度)

咸宜園教育研究センター要覧

---

日田市教育委員会  
2014.3

---

咸宜園教育研究センター

# 研究紀要

第三号

二〇一四年三月



廣瀬旭莊没後 150 年記念事業 鼎談



特別展「廣瀬旭莊—東遊 大坂 池田—」



くまモン訪問



世界遺産登録推進講演会

目次

咸宜園教育顕彰事業 學術部門優秀賞 受賞論文

下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察

— 本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開 —

九州国際大学客員教授 亀田 一邦 …………… 一

廣瀬淡窓における自省と養生について—『自新録』『再新録』を中心に—

咸宜園教育研究センター 深町 浩一郎 …………… 一五

史料紹介 廣瀬家所蔵の「凶禮記録」について(上)

咸宜園教育研究センター 吉田 博嗣 …………… 三七

公益財団法人廣瀬資料館 園田 大 …………… 大

資料紹介 西村天囚著『亀門の二廣』について(上) 廣瀬淡窓編

咸宜園教育研究センター 溝田 直己 …………… 五一

咸宜園門下生略伝(二)

咸宜園教育研究センター 吉田 博嗣 …………… 七九

朝倉教育クラブ 理事長 原 千里 …………… 九一

咸宜園教育研究センター年報(平成二十四年度)

I. 教育普及事業(展示事業、講座・講演会・イベント等)…………… 1

II. 調査研究事業…………… 8

III. 史料収集事業(購入史料・寄贈史料・寄託史料・寄贈図書・咸宜園関係参考文献)…………… 11

IV. 教育顕彰事業…………… 20

V. 世界文化遺産登録推進の取り組み…………… 21

VI. 利用状況・日誌抄…………… 26

VII. 各種委員委員会・職員名簿…………… 27

咸宜園教育研究センター要覧

I. 沿革…………… 28

II. 施設の概要・組織…………… 29

III. 利用案内…………… 30

IV. 条例・規則…………… 31

## 下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察

— 本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開 —

亀田一邦

キーワード：岡研介、生葺塾、『岡常用方』、『生機論』、佐甲宗勝、下関蘭学

### はじめに

大正期に横山健堂<sup>1)</sup>が先鞭をつけ、呉秀三<sup>2)</sup>、田中助一<sup>3)</sup>が継承発展させた岡研介研究は、昭和48年に三宅紹宣論文<sup>4)</sup>が出て以来、事歴や思想を包括的に考察する文化史的な研究はなく、空白状況が長く続いている。先人により生涯の足跡はある程度まで掌握されたが、それはあくまで大略を示したに過ぎず、実際の所、医人研介が長崎や大坂でどんな生活を送っていたかという点までよく分かっていない。

研介関連の資料は比較的伝存するほうである。早稲田大学図書館（洋学文庫）には岡家旧蔵の自筆稿本類が一括寄贈され、天理図書館の『生機論』（自筆稿）とともに貴重資料の双璧をなす。また山口県立文書館及び平生町立図書館にも所蔵があり、他との重複も多いがそれでも一読の価値を失なわない。だが先行研究はこれらを十分に活用できておらず、そのため研介伝には不正確な記述が氾濫する。岩国開塾説などはその最たるもので、あのような訛伝が一度も検証されず、簡単に通説化してしまう所に従来の研介研究の甘さが指摘できるかと思う。よって新研究を起こそうとすれば、まずは自筆稿本類の徹底した閲読が求められ、あわせて地方資料中に関係記事を捜査するのが、オーソドックスながらも最も有効な方法と結論されることになる。

ところで研介は上坂後まもない天保2年10月前後には精神性疾患を発し<sup>5)</sup>、帰郷療養を余儀なくされるが、平生・岩国でも病状は一進一退を繰り返し、快癒す

年次	事項	出典
文政11年 5月29日	肥後藩氏野口儀平悻律兵衛の当直医として、蘭館にあるシーボルトの指示を仰ぎつつ、青囊堂（古雄塾）で徹宵看病にあたる。	『シーボルト治療日記』
文政11年秋	長崎を離れ、帰郷の途に着く。	『欽齋日歴』3
文政11年 8月9日	シーボルト事件の発端となる「子の年の大風」襲来。九州北部～関門地方にかけて被害甚大。	淡窓日記その他
文政12年	下関に寄寓開業し、蘭医塾を主宰する。	『岡常用方』自序
文政12年 3月2～27日	長崎奉行所より禁書（『三山論学記』）所持及び譲渡の嫌疑で召喚され、急度叱となる。	『犯科長』106
文政12年 4月4日	賀来左一郎、長崎より帰郷の途次、研介の書を宜園に持参、淡窓は研介の放免を知る。	『欽齋日歴』3
文政12年 4月6日	淡窓師、門生菱形真澄（下関・亀山八幡社家）の帰郷に際し、在関研介に書簡を託す。	同上
文政12年 8月16日	菱形生の帰郷に際し、岡研介、福原伯亮宛書簡を託し、あわせて研介には草稿を包む。	『欽齋日歴』4
文政13年 正月18日	淡窓師、11月1日付の研介書簡へ返信する。研介からは、蘭人一件の終息、門弟20人を擁する医塾の盛況、さらには今春上坂の予定等を告げられていた。	『廣瀬淡窓旭莊書翰集』前篇2
文政13年 2月16～18日	長崎よりの帰途、日田に淡窓師を訪ね、再度上坂の意を語る。これが両者の遠別となる。	『欽齋日歴』5
文政13年 2月27日	離関を3月4～5日に予定していたところ、佐甲家の小児が疱瘡を病み、重症となったため、延期せざるを得なくなったとの書簡を萩の豪商で親友の熊谷五右衛門（鳳辺）に送る。	蘭学資料研究会 研究報告152
文政13年 3月26日	三田尻で熊谷氏の来臨を4～5日待ったが会うことができず、大いに落胆する。さらに商用で下松へ来ることを聞き、平生か室積での再会をぜひとも期待する旨の書を萩へ送る。	同上
文政13年 3月28日	平生より乗船して広島に向かう予定日とした。既に門人を先発させており、芸州で合流する手はずであった。ただし予定は変更され、平生に長期滞在した後、上坂したようである。	同上
文政13年夏	『生機論』なる。	『生機論』題辞
文政13年秋	郷里平生で藤保高（未詳）の後裔に滞留し、古刹般若寺に遊び、「般若寺記」を書く。	「般若寺記」
文政13年 8月22日	在坂研介に宛てた美濃大垣・江馬春齡よりの書簡（8月17日付）に返信する。舎弟元齡の入門を謝し、育成に尽力する旨を誓う。	『江馬家来簡集』28

ることにはなかった。そのため研介の学生生活は実質的には発病により終結したと見られる。ただし治療は天保8年頃まで確認され<sup>6)</sup>、名声も周東地方では後々まで衰えることがなかった。しかし発病後は西洋医学への批判的言辭が散見し<sup>7)</sup>、晩年の治療・投薬も意識的に蘭方を避けた感がある<sup>8)</sup>。そういった点を考慮すると、蘭学者、蘭方医としての岡研介の学問、思想、技術の熟達度は上坂直前の時期に頂点に達し、そこにこそ最後の英姿が存在したと思料されるのである。

その最盛期の中核に位置するのが、ここに取り上げる文政末の下関開業時代である。研介は当地で蘭学者、蘭方医として短かくも充実した時間を過ごし、下関蘭学の発展に寄与、本邦蘭学史上にも注目すべき業績を残している。それらを医育と著書撰述の問題を軸に把握しようとするのが本論のねらいである。

また今日まで下関の蘭学を論じた研究はないことから、必要に応じて文政前後の状況に触れ、それらと関連させながら研介来関の意義や寄寓の背景についても考察したいと思う。

### (1) 来関時期と滞在期間の検討

呉が大正13年に発表した研介伝には、発病後の内容にかなり過誤があつて訂正を要するが、研介の下関開業を初めて記したのは呉であり、その点の評価を怠つてはならない。呉は2ヶ所において次のように述べている。

①何時の頃にか、研介は其秋の後大阪（オーストリア）の前に馬関（馬関）に於て開業し居たることあり<sup>9)</sup>。

②シーボルト先生疑獄の時は既に吉雄塾にあらざりしものゝ如し、此間郷里にありしものか、或は赤間関に開業し居たるかは詳ならず。(1830年頃天保之初)<sup>10)</sup>

翌々年に再版されたシーボルト研究の大著にも同様の記載がある<sup>11)</sup>。①は自筆稿『雑録』に「卜居萩 赤間 大坂 岩国 或一年或数年」<sup>12)</sup>とある点を論拠とする。また②は淡窓日記(『懐旧楼筆記』巻27、29、『欽斎日曆』巻3)に基づく推論であろう。いま諸々の資料に徴して、長崎を離れる頃からの関連事項を時系列的に

並べると前頁の表のようになる。

表によつて離崎Ⅱ文政11年7月頃、来関Ⅱ文政12年初春、離関Ⅱ文政13年3月中旬と推定される。このうち下関寄寓の時期は最も曖昧である。早ければ11年秋冬の来関もありえるが、最も信のおける『岡常用方』自序に「文政己丑、余、赤間に寓す」と明言するため、文政12年と考えるべきであろう。研介がシーボルト事件発生前に長崎を去つたことは、遊学から戻つた加藤俊民が淡窓師にもたらした情報中に「研介、去秋、防に帰り、再びは崎に至らずと云ふ」<sup>13)</sup>(『欽斎日曆』巻3、文政12年2月3日の割書)と見えている。長崎を出てからの数ヶ月、どこで何をしていたかは判らないが、筑前の武谷家などは蘭学者を厚遇、高野長英が長逗留した例もあり<sup>14)</sup>、豊筑各地の親蘭家や同業者のもとに滞在しつつ、ゆつくり東上したことが予想される。

禁書一件は種々の興味深い点を含み、別に稿を改めて考察したいので、ここでは詳論を控え、必要なことを最小限述べるに止める。何といつても究明すべきは召喚時の研介の居場所である。これについては『雑記』(天保6年12月2日)に「禁書ノ事ニ付下関ヨリ鎮台ニ赴キ時ニ云々」<sup>15)</sup>と明記され、『懐旧楼筆記』巻27が「ココノコロハ、長崎ヲ去ツテ、赤馬関ニ客タリシガ、長崎大尹ヨリ急ニ召サルルコトアリテ、彼地ニ赴ケリ」<sup>16)</sup>(同年2月3日)というのと一致するから、在関中の出来事であつたと断定される。本件は吉雄新作・稲沢草庵師弟の拘引に発端した。両名は2月8日〜3月4日まで入牢吟味が続き<sup>17)</sup>、入手経緯が判明した結果、讓渡側の研介に召喚状が届いたのは2月中旬以降と見られ、遅くともそれまでには下関に居留していたはずである。そして3月に長崎に滞在、同27日の処分決定後は再び下関へ戻つたようである。

下関の龜山八幡社家の宜園生・菱形真澄は、在関旧門人と淡窓師との書簡往復の仲介役をつとめたが、文政12年3月19日に預かつた手紙は、福原仙菴と広江方太郎(後の西島秋航)分のみであり、そこに研介宛は含まれていない。淡窓は4月4日に賀来佐一郎が長崎から帰郷の途次に持参した研介の手紙で、初めて禁書一件と下関寄寓の事実を知つた。ただし書中には嫌疑が晴れたとあつたため大いに安堵し、急ぎ慶賀の返信を認め、翌々日に菱形生に託している。この点から4月初には帰関、通常業務に復したものと考えられる。

## (2) 下関における実績 I — 蘭医塾の開設

### (a) 下関開塾と市宰・中川鯉淵の協力

研介が下関に寄寓開業したのは、文政12年春～同13年3月にかけての約1年間の出来事であった。この期間の動静を述べた資料は極めて少ないが、だからといって手がかりとなる記事が全くないというわけでもない。

『雑記』には「一生六大変」と題された覚書がある。第一〓周防大島小松の母方の祖母に預けられたこと、第二〓俗字師への従学、第三〓漢字師への従学、第四〓他邦での医学修業、第五〓開業による自立、第六〓結婚の順となっている。各々について年次、関係者等が記され、研介の履歴研究には不可欠の内容を提供する。研介は大坂親遊を33歳とするから、斎藤方策の娘ツルを娶ったのは天保2年となる。このうち「十九歳第五生変」の条下には、以下のことが書かれてある。

萩においては則ち初め一僕或は一童同居す。赤関においては則ち忠なる門人或は学僕同居す。大坂においては則ち後に妻孥、門人、僕、同居す<sup>18)</sup>。

ここで見逃してはならないのは、萩の研介が零細に医業を展開していたのに比べ、下関では複数の門人・学僕を抱え、業態の拡充が指摘できる点である。つまりこの記述に従えば、滞関中は開業に付随して医塾が経営され、そこで門弟に医学を講義し、初の医育事業に取り組んでいた可能性が浮上することになる。

この点は長府藩士・中川清左衛門（馬廻、百七十石）の遺稿『中川涼斎詩藁』に事実を裏づける記事がある。涼斎は致仕後の号、むしろ鯉淵で知られた藩内随一の文雅者である。涼斎は天保2年3月15日～6月1日にかけて、京坂から伊勢を旅行し、先祖の戦跡を訪ね、知友と旧交を温めたが、そのなかに研介も含まれていた。紀行文の体裁をとる「瘦筇」の3月27日の条には次の一節がある。

晡時、小竹と共に岡研海の宅に至る。研海、周防平生の産。嘗て前筑の南溟堂に至り、儒を学ぶ。後、長崎の吉雄氏及び西洋人某に随ひ、西洋学を修む。其の学大成し、近年、赤間関に在つて生徒を教育す。時に余、馬関に幸たり。故に結べり。三年前、浪華に來り、門戸を張る。近ごろ屋を築いて甚だ高し、内を迎ふ。内も亦美なり（斎藤氏）。乃ち酒を命じ、魚鮓を饗す<sup>19)</sup>。

4月には東上途中の戸塚静海が訪問<sup>20)</sup>、この頃が在坂研介にとつての至福期であった。上掲の記事により研介が下関で医塾を開き、西洋医学を生徒に教授していたことが確定する。

涼斎は文政6年9月27日～同12年10月21日まで赤間関在番の職にあり<sup>21)</sup>、善政を布いて領民に敬慕された<sup>22)</sup>。また長府詩壇にも重きをなし、在関中は広江殿峰の随陽吟社の人々と韻事を楽しんだ。殿峰・秋水父子は詩、書、篆刻に通じた風流人であり、山陽との雅交が有名であるが、長崎へ蘭方修業に下る医家を積極的に歓待した富商としても記憶しておきたい<sup>23)</sup>。研介終生の知己・坪井信道も寄留中、殿峰と詩酒応酬したが<sup>24)</sup>、研介の来関時、殿峰はすでに亡く、宜園一流の詩家研介と交際したのは秋水と思われ、蘭医研介、市宰涼斎の三者が親交を結ぶには時間を要さなかつたであろう。秋水は山口行齋の追悼詩を作り<sup>25)</sup>、六子の半数が医家となつた。四男春齋は小倉藩医・西元礼に蘭方を学び、五男力四郎は陸奥棚倉藩医の養子となり、上田元泰と改名した。これらの事実から寄寓蘭医と広江家の活発な交流及びその影響がうかがえるかと思ふ。

研介はときの市宰・中川涼斎の知遇をえて、流寓医師の脆弱な立場を安定させた。広江家等の親蘭派富商が信頼を寄せた理由のひとつがこの涼斎の後見にあり、医塾経営が成功した遠因でもあつた。市政トップに著名な仁厚の雅士が在任していた点は新参蘭医の研介に大いに幸いし、また涼斎側も民益の増進を期待して診療と医育が円滑に進むよう種々の便宜を恵与し、支援を惜しまなかつたのである。

### (b) 医塾名の再考 — 万松精舎と生葺塾規

研介が岩国で「万松精舎」という塾を開き、「生葺塾規」を作つたとするのは横山以来の通説である<sup>26)</sup>。だがこれは正しい理解ではない。本節では大正期以来、

盲信され続けて来た横山説の誤りを訂し、真説を提示したいと思う。

帰郷療養中とはいえ、研介の蘭方医療に対する世評は高く、医学振興に熱心であつた岩国藩は急ぎ招聘の準備に取りかかった。岡泰純・泰安父子は仁和寺宮家からともに法眼、法橋位を賜っていたが、岩国領の在郷医としては浪人格医師に過ぎなかつた。藩は研介を父兄よりも重く処遇し、天保3年3月7日には蔵元支配医師、翌4年正月13日には御家人医師に昇格させ、手廻組に編入して十五人扶持を与えた<sup>27)</sup>。だが本人はこの抜擢をあまり歓迎していない。「脚氣論」によると、研介は病気を理由に再三辞退したが許されず、やむなく平生から岩国に赴き、藩主拝診のためしばらく滞在した。短期間にも関わらず、蘭方の名医との評判に治を乞うものはおびただしく、君家以下、諸士とその家族、商農を含め数百人を診療したという<sup>28)</sup>。まずこれが病身の研介に大きな負担となつた。また武家社会の複雑なしきたりや人間関係にも心身を勞し、ついに病状が悪化、「岩国に病を養ひ、書を万松精舎に読む」<sup>29)</sup>という事態へと追い込まれたのである。天保3年11月20日には、病氣療養中の代診を弟子にさせたい旨の届けが藩府に受理される<sup>30)</sup>から、夏秋の候には加療を必要とする状態となつていたらしい。

通説ではこの「万松精舎」を研介が岩国に開いた塾の名とするのである。確かに精舎には生徒を教授する学校、学舎の意味もあるが、本件に限っては全くの誤解という他はない。

研介は天保6、7年にも岩国に行くが、そのときは藩医の桑原太淳郎や妹サトの嫁ぎ先の水谷松茂宅に滞在した。しかし初期には、この万松精舎を宿所としたのではないかと思うのである。研介の『草稿』中に「万松精舎読書」と題する連作詩がある<sup>31)</sup>。31篇の大半に仏語が含まれ、仏教思想の影響が顕著である。「精舎」を寺院と見る根拠のひとつがこの点にある。事実、岩国藩五ヶ寺の筆頭・横山寺谷の洞泉寺(曹洞宗)は来藩者の宿坊として利用され<sup>32)</sup>、通りを隔てた真向いに万松庵という塔頭を所有した<sup>33)</sup>。『雑記』には寺名が散見し、「洞泉寺の犬は水死を患ふ」<sup>34)</sup>などという自身の生活体験がなければ書けない記事もある。また天保9年3月17日には、洞泉寺住職の立大字禪が柳井講業の折、平生まで足をのぼして研介を訪ねている<sup>35)</sup>から、両者が旧知の間柄にあつたことを知る。これらの事実を視野に入れて論ずれば、研介は岩国に招かれた際、洞泉寺塔頭のひとつ万松庵に寄宿し、引き続き同庵で療養したと判断される。

寺院名を塾名と取り違えた理由であるが、これは恐らく『雑録』中の挿入位置が関わるかと思う。自筆稿は多く反古であり、後裔はそれらを無作為に重ねたと見え、厳密に年次順に配列されてはいない。その点を考慮せず、後に独立して『万松精舎読書』となる草稿の直後に「生葦塾規」が綴じられ、ここに偶々「岩国」「精舎」「塾規」が揃つたことから、ついに錯誤が生じたものと考えられる<sup>36)</sup>。

万松精舎が寄寓先の寺院名と判明した結果、塾規に冠する「生葦塾」こそが正しい塾名であつたと結論される。では所在地はどこであつたか。著述の項で触れる『岡常用方』自序には「周防／生菴／岡研子究著」と署名がある。本書は門弟の求めに応じて編述され、下関の葉室に常備された西洋処方書であるから、生菴は在関期に使用された庵号であつた。また『雑記』中に「生葦日記」と書し、下に「研介、生機を論じて小稿を著すに生葦と号す」<sup>37)</sup>と由来を説明する点は特に注目される。なお「葦」は「菴」の異体字に他ならず「庵」と全く同義である。「小稿」とは本邦における西洋生理学書の嚆矢『生機論』を指す。つまり、生菴とは下関で進められた『生機論』の訳述作業にちなむ号だったのである。この点が判明したことで、「生葦塾規」は下関に創設された生葦塾の塾規であつたと確定する。

下関開塾説の正当性を補強する条項は塾規中にも存在する。ひとつは医学専修でも広く自然科学を学ぶことの大切さを説いた第五条である。研介は理学六分科説(『天造堂漫筆』<sup>38)</sup>、泰西理科三分説(『西説会談引』<sup>39)</sup>)を紹介し、医学教育における理学の重視(『周礼医師職鈔解』<sup>40)</sup>)を提唱した。この考えは下関における講学姿勢にも反映し、それは当地で脱稿された『生機論』の訳述動機(蘭学不熟の門弟の理解を助けるため)にも鮮明である。蘭書の和訳テキスト化は理学重視の持論を実践に移した行為であり、研介の優れた教育者の資質を示すと同時に、初の門人育成に挑む意気込みを表わしたものと見えよう。

さらに第十条には「酒樓、茶店、妓館に遊ぶを禁す」<sup>41)</sup>とあるが、これは一般論でも、岩国城下の話でもない。本条は西国有数の遊郭のあつた下関を前提にしてこそ説得力を増す訓戒となる。友人・中村文杏(三田尻の人)が長崎丸山で遊蕩に耽り、金を使い果たして自刃した事件(文政11年6月)<sup>42)</sup>の記憶もまだ生々しく残っていたはずで、類似の施設をもつ海港下関に医育を開始した研介にとつて、この方面は特別に警戒すべき問題であつた。

研介が下関に生葦塾を主宰したのと同じ年、親友坪井信道も江戸深川に蘭学塾

安懷堂を創設した。文政12年は東西蘭学を隆盛に導く原点の年として、医学史上に銘記されてよい。

### (c) 「生葺塾」の位置・規模・門人

研介の生葺塾が下関のどの辺りに位置したかは、現時点では把握できていない。しかし市街東域の龜山下（阿弥陀寺町）には、同門の蘭医山口行齋が早くに来関して地域の信頼をえており<sup>43</sup>、加えて各々の庇護者で「東の伊藤」「西の佐甲」と並称された下関の大年寄両家との関係も考慮すべきである。当時、山口行齋―伊藤李之允、岡研介―佐甲甚右衛門という後援の構図が確立しており、研介はおそらく本関の西部で開塾したものと推測される。

次に生葺塾がどれほどの規模であったかについては、淡窓師の手紙で知ることができる。それは研介の親友恒遠頼母が持参した11月1日付書簡への返信で、全4条からなる。第3は詩集出版への周旋依頼、第4は旭荘が近々結婚するとの報知である。第1、2条については肝心の部分であるから以下に示そう。

一、当時御教校門人も二十人程も御座候由、不堪欣然候。当春ハ浪華御出張の由、何卒御努力可被下候。

一、蘭人一件も一切片付キ、至而事情軽く聞へ大慶存候。蘭学衰微之端二ハ相成申間敷ヤト大に致懸念候処、安心之至候<sup>44</sup>。

年次はなく、ただ正月18日とのみ記す。小野精一は在坂研介宛とする<sup>45</sup>が誤解である。「蘭人一件」がシーボルト事件を指すことは喋々するまでもない。国外追放となったシーボルトの離日は文政12年7月23日であり、一応事件の終結を意味する出来事であった。よって研介書簡は文政12年11月1日、淡窓書簡が翌13年1月18日となる。また「当春ハ浪華出張の由」とあるからには、現段階ではまだ上坂しておらず、他所にいたことは自明である。後述の熊谷五右衛門宛書簡は同年3月半ばまでの研介滞関を実証しており、本信の送付先は下関であったと断言される。従って淡窓が門人20余が出来たことを慶賀した研介塾は、文政末に下関に誕生した生葺塾を指していると考えなければならない。

ところで研介の門人は相当数あったはずである。大坂では江馬元齡（大垣）<sup>46</sup>、福岡長安（熊本）<sup>47</sup>、豊田九阜（日出）<sup>48</sup>が確認される。在関期の門弟を書き残した資料はないが、先述の研介代診の一件では、坂本周鼎、河村貫之、藤山貫道という3人の弟子の名が上がり、岩国時代に力量ある門人たちが随従していたことが分かる<sup>49</sup>。筆頭門生の坂本周鼎は豊後日出の人、後に大坂平野町に開業、天保15年（嘉永2年）まで大坂医師番付の上位に掲載される流行家となった<sup>50</sup>。幕末に日出藩医として厚遇された勝田安石も一時研介に師事した<sup>51</sup>。

上記の日出三医はみな帆門で、帆足万里と勝田季鳳が研介の友人であった関係から入門であろう<sup>52</sup>。研介が代診に立てた3人の門弟が、早くから従学し、信頼をえていた点は確かで、下関時代に「忠門人」と称され、研介上坂に際し広島へ先行した弟子は彼らであった公算が強い。周鼎と貫道は上坂して齋藤良策（方策男）を訪ね、研介の近況を報じたが<sup>53</sup>、帰郷後は師の猜疑の対象となり<sup>54</sup>、師弟関係が険悪化、最終的には師のもとを去ったようである。

### (3) 下関における事績Ⅱ―著訳書の撰述

#### (a) 『岡常用方』自序の重要性

研介の著訳書は多数あったとされるが、散逸したものが多<sup>55</sup>。今日見ることができるのは全て自筆稿本として伝わる貴重なものばかりである。また『西洋灌腸録』『眼科精要』等は書名のみが確認されるいわゆる存目書であるが、このうち『岡常用方』については、不完全ながらも山口県立図書館に写本が所蔵されている。書体は研介とも、旧蔵者の吉田祥朔とも一致せず、いつ頃、誰の手によって筆写されたものか判らず、吉田がどうやって入手したかという経緯も示されていない。

冊子は19丁（半丁9行）の途中で不自然に終了し、残り31丁が白紙であるから、完本と見ることはできず、一部を書写したに過ぎない。処方は発表Ⅱ5方、壮神Ⅱ5方、利膈Ⅱ4方、健胃Ⅱ4方、瀉膽Ⅱ3方、掃腸Ⅱ2方、調宮Ⅱ2方、

達摩<sup>ニ</sup>2方の計27方が掲載されている。西洋薬は、加蜜列<sup>カミツレ</sup>、瓦刺蘇<sup>カサス</sup>、墨栗薩<sup>ムクリサ</sup>、若格実温<sup>シコジオン</sup>、撒爾非亜<sup>サルピア</sup>、珊篤里<sup>サントクリ</sup>、葛爾儒<sup>カルジュウ</sup>、麻屈涅私亜<sup>マクネシア</sup>、斯哥而宿業刺<sup>スコロ宿業刺</sup>、栗斃斯舍利<sup>リスベス</sup>、別<sup>アスベルシ</sup>、ラフダニユーム、サフラン等が見られ、音写漢字の大半にはルビが付されている。本文も「失荀児陪屈<sup>シケウエルポイク</sup>」、「聖京健<sup>シキョウケン</sup>」等の蘭語を交えて構成され、少しでも蘭方の術語に慣れさせようとする研介師の教育的配慮がうかがえる。また欄外には代用となる和漢の薬種が若干ながら注記されている。

冒頭には181字に及ぶ自序が置かれており、いまこれを訓読すると次のようになる。

文政己丑、余、赤関に寓し、諸々を延きて社を結び、以て医学を講じ、傍ら患者を診る。調剤の際、諸生、未だ東西を弁ぜざる者有り。亡羊迷惑して手を着ける所無し。乃ち余に常に用ふる所の方を集め、性功主治及び薬品去加の略を附し、諸を薬室に置かんことを請ふ。余是に於て此の編を撰次し、其の方は之を西書に本づき採り、問々古人配合の意を酌み、以て之を損益する者も亦之を載す。其の方名、或ひは旧を存し、或ひは之を改め、而して其の方を命ずるに或ひは性功を以てし、或ひは主功を身体諸部及び疾病に配する者は、専ら簡便を以て急と爲し、其の名に因つて其の用を識らしむるを要とするなり。若し夫れ方剤使用の妙と、薬味の去加、分兩増減の詳ともて、機に臨んで変に應ずれば、各々活法有つて、其の人を存せん。此の編、能く尽くす所に非ざるなり<sup>56</sup>。

研介の下関寄寓の年次及び医塾開設の事実は、これによつて初めて特定されるのである。

本書は現段階において近世下関で執筆が確認される唯一の蘭方書である。本書の存在は地方学術史上においてはすこぶる価値ある著作と評価される。だが内容は一般的蘭薬を主とする簡便な処方書であり、際立った特徴や配剤の独自性は見られず、あくまで門人教育を優先した初学者向けの基礎編といえる。その点からいうと、付載された自序のほうの方がより有益な医史上の情報をもたらしており、本体に勝る価値をもつといっても過言ではない。

以上の考察で『岡常用方』の下関誕生の真相が了解されたと思う。だがそのいっぽうで『生機論』の下関訳述説についてはやや論拠薄弱の感がある。そこで再び

この問題を取り上げ、今度は『生機論』本体に手がかりを求めつつ、慎重に分析を進めて行くこととする。

### (b) 『生機論』―自署「研海」の含意

従来の研究では、研介には初期の周東、発病後の耻庵、それに万松精舎の堂号があったとされるが、生菴の存在は知られていなかった。なお万松精舎は堂号ではなく、研介が寄寓した岩国の寺院名であることは前述の通りで、堂号は天造堂が正しいことを付言しておく。

ところが肝心の『生機論』には生菴を用いず、題辞には「研海愚者」と署名する。一部にこれを介字の誤りとする説もある<sup>57</sup>が、自筆ゆえ成立しない。前引の『中川涼斎詩藁』が「研海」<sup>、</sup>斎藤良策書簡も「研海先生」<sup>58</sup>とするから、「研介」と「研海」は併用されていたのである。筆者は両号が明確な意図のもとに使い分けられたと想定しており、これが訳述地を決定する有力な証拠となると見ている。

字音の上から「研」は「硯」と相通じ、ともに磨墨の滑石を指す。従つて「研海」は「硯海」に等しく、これを普通名詞として用いた場合、すずりて水を溜める窪んだ部位、すなわち墨池をいうことになる。ところが本邦では固有名詞としての用法があり、それは中世以来、詩歌の世界に関門海峡の雅称として定着したものであった。一般には「硯海」と表記するが、実際には「研海」も用いられていた。例えば橘文龍が広江殿峰に送った七絶には「研海の浜に薜草秀つ」とあり<sup>59</sup>、また幕末の中島棕隠『金帚集』(巻5)の「六月朔、再び赤関を過ぎり、広江大車の椋月楼に宿り、寓感を示す」(第2首)にも「聞くに飽きたり研海の旧書楼」との使用が確認される<sup>60</sup>。

『生機論』に「生菴」を用いなかった理由は、単に書名との重複を避けたためであろう。これを「研海」に代えたのは、通称と同音で、しかもそれが寄寓地下関の雅称であったという点に尽きる。研介の生涯にとつて下関は特別な意味をもつ。すなわち当地は長崎遊学後の最初の開業開塾の地であり、ここで誠実な門人と有力な支援者に恵まれたことが彼を蘭学者・蘭医家として成長させ、上坂への自信を与えることとなった。「研海」の号はこういった下関の人々と土地に対する愛着や謝恩の思いが投影された筆名であったといえよう。

高野長英との共訳『蘭説養生録』は日本初の西洋養生学書として名高く、また『生機論』も我が国で翻訳された生機論的生理学書の嚆矢として重視される。本書が下関で大半が書かれたと見る根拠は他にもある。題辞「生機論の首に題す」を書き下すと次のようになる。

生なる者は云ひ難し。而して言ふ者は知らざるなりと。西人は実測を喜び、造化の玄門に入り、万物の妙機を窺ふ。其の生理に於て為さざる所無し。余已に西説を修め、門生の為に之を云ふ。人必ず之を笑ひて、言ふ者は知らずと曰んか。余は乃ち曰ん、笑はれずんば則ち以て道を為むるに足らざるなりと。且らく之を鴻濛に問はん。

文政庚寅夏月 研海愚者岡研識<sup>61)</sup>

若くして『老子註』を著した研介らしく、文中には『老子』の字句が多用され、しかも老子に特有の逆説的論法を用いて、俗見に迎合せず、実証重視の姿勢を貫いて真理を探究すべきことを強い口調で訴えている。また「門生の為に之を云ふ」とあるので、生理学を門弟に講義していた事実も判明する。それがどこで行なわれたかは、『生機論』の署名「研海」が下関を指し、門人が同居した初の開塾地も当地であった点からすれば、講義地はおのずと下関の生葺塾であったと特定される。

すぐ後に続く「凡例六則」中の第一には、「西医の学、近世に至り、頗る其の精を極め、生機の説のごときも亦甚だ旧套を異にす。余、講習の次、衆説を取捨し、随つて之を筆し、且つ自製図を附し、蒙生をして先づ其の大概を知らしめんと欲す。是れ講論の本旨に於て実に千百中の一二を挙ぐるのみ。自余の諸説は継いで当に刻に授くべし」<sup>62)</sup>と見え、本書が初学者を対象に編次された教本であったと知られる。原装表紙に「未だ稿を定めざれば忠信無きの人に示すを許さず」<sup>63)</sup>と書かれている点は、本書が生葺塾に常置され、新医学修得に真摯に向き合う受講生たちに筆写を許し、それをテキストとして生理学の講義を行なったことを意味しよう。『生機論』は下関で入門した蘭学初心者を念頭において書かれたのであり、執筆意図は『岡常用方』と共通する。つまり両書は学生本位の立場で学問理解を第一とし、導入段階での適切な解説書、手引書の準備が効果的とする研介の教育観を具現化した著作だったのである。下関の生葺塾は塾主研介の医育への熱意と

優れた見識が学生を魅了し、初学に配慮された『岡常用方』と『生機論』を備えることで、将来有望な地方蘭学塾の雄として高く評価される存在となった。

文政12～13年3月中旬までの下関寄寓中、岡研介は西洋処方書『岡常用方』のみならず、本邦初の西洋生理学の翻訳書となる『生機論』の訳述にも取り組み、初稿を完成させていた。題辞は「夏月」とあるため、離関後の平生帰郷時に書かれたようである。なお天理本より一章一図多い写本の伝存を不可解とする意見もある<sup>64)</sup>が、これは凡例にいう通り、増補作業を経た上坂後の加筆本と推測される。

#### (4) 研介来関の背景——「利」と「縁」

##### (a) 近世医事史上における下関の特性

ここまでは主に研介の生涯における下関時代の意義を問い、生存形態の実相を解明した。本節では下関という外部環境との関係性に視点を移し、研介の当地開業・開塾の背景を「利」と「縁」をキーワードとして、地域特性と人的交渉の面から来関事情を考察する。その上で下関蘭学史上に研介の位置を考えたい。

まず「利」の方面から論及しよう。研介の来関は衝動的、偶発的行動ではなく、近世下関のもつ医史上の特性をふまえ、十分な情報と展望下に計画的に実行されたものであった。

下関は古来、海陸交通の要衝として衆人往還の地であった。さらに近世後期に商品経済が著しい発展を示し、輸送手段としての航路整備が進んでからはいつその経済的繁栄をとげ、商客や船舶関係の寄留者も激増した。当地は他の寄港地と異なり、内外航路の分岐点、本州・九州の境界という重要な地勢的条件を備え、従って長期滞在者も多く、保養拠点化が促進され、医家需要も高まりを見せた<sup>65)</sup>。海港下関が有した医事史上の第一の特性は、他所流入の新規開業医が収入をえやすい環境を備えていた点である。文政元年に来関開業した坪井信道は1年半で1,500人を診療、蓄金ができるとすぐ江戸に向かった<sup>66)</sup>が、この話は下関の対医家扶養力の優秀性を示し、後日の雄飛に必要な資金調達に短期間に実現可能な

港市であった事実を客観的に証明している。

信道の事例には、医事史上における下関の第二の特性が包含されていることも見逃せない。それは長崎遊学を終えた新進の蘭医や上昇志向の強い西国医家の多くが、下関を試行開業の地に定めた点である。彼らは京坂や江戸での本開業前に一度本州西端の商都で感觸をつかみ、職業人としての技量を磨いてから東上する手順をふむことがしばしばであった。下関は遊学・開業の資金捻出もでき、かつ実務的シミュレーションを行なうにも格好の規模と立地条件を備える都市とみなされていたのである。この点は下関が商品流通や商業上に果たした役割に酷似し、当地は医材という人的資源の一時的集荷地であって、これを各地に分配供給する中継基地としての機能を担ったといえる。下関寄寓をへて三都開業に転じた代表的蘭医に石原柳庵と尾崎秀民<sup>67</sup>)があり、坪井信道、山口行斎(上坂準備中急逝)、岡研介も同様である。このような国内でも類例のない下関の特殊な位置を意識せぬ医家はなく、研介もこの点をメリットと十分に承知して下関開業を決意したものと考えられる。

下関での蘭方開業の利点として、もうひとつ付け加えたいのは、当地では蘭方受容への抵抗がほとんど見られなかったという点である。これは18世紀後半に永富独嘯庵、香取太華という親蘭系の二大古方医が登場し<sup>68</sup>)、その影響下に早くから西洋医学受容の基盤が整備されたことに関係しようが、もっと古層の外来文化受容の歴史に目を向ける必要がある。

大内時代の下関は防長における大陸文化輸入の窓口として栄え、その頃から外来文化を歓迎する風潮が顕著であった。江戸時代も朝鮮通信使と蘭使の留宿地に指定され、また長崎修学者の往来寄宿も頻繁で、過去の進取的気質とあいまって、舶来の学術・文物を愛好する文化的土壌は十分に保持されていた。岡研介や山口行斎ら流寓蘭医が次々と順調に開業できたのは、この長い歴史のなかで培われた下関独特の開明性や外来文化に対する嗜好性が少なからず影響していると思われる。

しかし、研介の寄寓要因はこういった地域特性の問題だけで片づけられるものではない。実はここに下関のある有力親蘭家との予想もしなかった地縁的結合が指摘できるのであり、その関係性を排除して来関の動機を考察することは不可能に近い。これが筆者のいう「縁」の方面であり、むしろ「利」よりも優先度・影

響力の高い事情であったと考えられる。

### (b) 親蘭派大年寄佐甲家との縁類関係

下関は蘭使の宿泊地であり、歴代の使節は東西の本陣に交互に滞在するのを慣例とした。和蘭宿をつとめた両本陣は伊藤家と佐甲家で、ことに前者は親蘭家として有名であり、高野長英<sup>69</sup>)、戸塚静海<sup>70</sup>)も東帰の際に立ち寄っている。

文政9年、シーボルト参府時の宿所は佐甲家が担当した。22代当主・佐甲甚右衛門(宗敏、?—1843)は娘婿の清之進(宗勝、1798—1828)とともに歓迎に努めた。3年後の研介来関にあたり、重要なキーパーソンとなったのが、この佐甲宗勝である。

佐甲家は中世以来の旧家で、地役人であると同時に薩摩藩や加賀藩等の有力大名家の御用達として、当地の経済界に大きな影響力を持つ富商でもあった<sup>71</sup>)。宗敏には男子がなく、次女に婿を取って後嗣とした。これが宗勝であり、周防平生の井上軌周の次男であった<sup>72</sup>)。初め宗勝は落合忠寛の養子となっていたが不縁で実家に戻され、次いで佐甲家に迎えられた。これ以後、井上・佐甲の両家は急速に接近し、明治期まで強固な姻戚関係を維持した。

宗勝はシーボルト来関の翌々年(文政11年9月29日)、家督を相続せぬまま31歳で短逝、一子宗愛が嫡孫として祖父宗敏から23代当主の座を譲られた。宗愛の妻リウも井上家の出身(父宗勝の兄義辰の四女)であった。明治の当主伊三郎も義辰の長男信敬の三女チヨを娶る。つまり幕末維新の佐甲家は井上家の存在を抜きにして語ることができないのである。宗愛・リウ夫妻の代に井上の血統は佐甲を上回るが、伊三郎の代で完全に入れ替わる点はいよいよ驚愕に値する。当然ながら平生の実家は佐甲家政に影響力を行使し、両家は政治的、経済的に連携を深め、一蓮托生の関係となって家運興隆の方途を模索した。

井上氏の先祖はもと吉川家の重臣であったが、大野毛利(萩藩一門家老)創家に当り、庶流の信詮(祐庵)が聘せられて平生に移住した。これが平生井上家の初代となる。しかし次の信全はゆえあつて浪人下関に流寓して吉文字屋某(商家)の娘と結婚。16年後に平生に戻ったというから、下関と井上家のつながりは元文(宝暦時代)にまでさかのぼる。

佐甲宗勝の実父四代軌周は、柳井沖の領境争論に調停役をつとめ、開作事業を完遂させ、その勤功と往時家筋の儀により再度士分に取立てられた。以来、当主は扶持を賜り、岩国領堅ヶ浜新市裏町にあつて人材を輩出した。幕末に活躍した信厚は防長四陪臣のひとり秋良敦之助（萩藩寄組土浦氏家老）の女を娶り、維新後は村会議長、県会議員等を歴任、政治家として地方の発展に尽力、また佐甲家の親族代表の立場からよくこれをもり立てた<sup>73</sup>。長男岩太郎は平生の金融・経済界をリードし、三男禧之助も高名な地質学者として満州工科大学長の要職にあつた。このように井上家は平生の素封家、名士であり、佐甲家の縁組先としては、まず均衡の取れた家格といえた。

さてすでに何度か記したが、研介もまた平生新市の出身であつた。『雜記』には方々に親姻・縁者と思われる各家に関する記録が散見し、新市では弘津（平野屋）、坂（新屋）、井上（平生屋）、林（播磨屋）の四家と親密な関係が認められる<sup>74</sup>。このうち坂家は研介の母方の親族にあたる<sup>75</sup>。研介の姉タメは田布施の坂桶左衛門に嫁した<sup>76</sup>が、これも平生の坂氏と同族であろう。いっぽう井上軌周の弟清信は坂新蔵大江邦房の養子となつて澄房（軌任）と称した<sup>77</sup>。新市裏町の坂家の文化年間の当主が坂軌邦である点に照らせば、この坂氏は同じ家筋と判断され、岡家と井上家は坂家を介して縁戚関係にあつたことが証明できる。上掲の各家は新市裏町という在郷町でごく近隣に所在し、日常的交際が展開した地域共同体の構成員であつたといえる。知識階層に属した法眼岡家と富商井上家はともに士格をもち、医・商・文の三事を接点に信頼関係が築かれ、相互扶助の体制が確立していたと考えられる。

さらに注目すべきは、佐甲家の養子となつた井上宗勝が寛政10年、研介が11年の生まれであつたという点である。両者はわずか1歳差で、近所に竹馬の友として成長した可能性が高い。宗勝は文政11年9月に逝去し、研介はそれから半年もたたぬうちに来関した。しかもそこには旧友の忘れ形見が残されていた。この現実に接するとき、宗勝の死と研介の下関寄寓という2つの出来事は、不可分の関係にあつたと考えざるをえない。研介が旧友の早すぎる死を嘆き、宗愛に深い憐憫の情を抱いたことは察するに余りあり、進んで幼なじみの遺児育成に関わろうと誓つたろう。年少の宗愛は祖父宗敏の後見下に吏・商の実務を中心に学びつたと思われれるが、漢学もできた研介に祖父が経史の個人教授を要請したとし

ても何ら不思議はない。真相がどうであるにせよ、研介の来関はこの佐甲家との関係説明が大きな鍵を握る。

現在、両者の交渉をうかがうに足る新資料は発見できていない。ただ田中助一が紹介した萩の熊谷家に伝わる研介の手紙2通にわずかながら関連記事が見られ、これが幸いにも極めて資料的価値の高い内容を有している。

1点は文政10年と推定される8月28日付書簡であり、そこには次の一節がある。内容は長崎から蘭薬（マグネシア、ジキターリス等）を送つたが、シーボルト流の薬物が高騰して入手困難になつてから大切に使用せよと伝え、さらに「先便舎弟下関辻書状相託し候。中風説書等、相添候へ共、未相届候由、佐甲□は滞りは不仕候哉。併其後相届口候様も知不申候」<sup>78</sup>と述べ、ここに佐甲家が登場する。このとき研介は長崎にあつた。舎弟は岡数馬（泰純六男）、後の小内玄恭（大野毛利家侍医）である。書状その他を弟に託して下関まで届けさせたが、まだ到着していなければ佐甲家で荷が滞っている可能性があると指摘している。この内容によつて下関の佐甲家が研介に萩と長崎の交易品輸送の中継基地として利用されていたことが判明する。

もう1通はより重要な内容を含み、滞関中の研介と佐甲家との日常関係を明示する貴重な書状である。これも年次は不明であり、ただ2月27日とだけ記載する。このとき研介は荷作りの際に持て余したフラスコを鳳辺に恵贈しているが、上坂に向けての身辺整理もほぼ完了し、離関のときは刻々と迫つていた。

小子も来月四五日二槩発足必仕度候。併佐甲ノ小兒痲瘡ニて重候へば延引可仕候。薬物ハ珍敷もの大分得手申候。右一寸急便申上度、余は期後便之時候。恐惶謹言。カヤプーテー御申越被下候処、只今ハ長崎ハ切レニて七増も八増も仕候。行齋ニても五増ニは求め候よし<sup>79</sup>。

当初、下関出航は3月4、5日の予定であつた。本信は淡窓日記にある上坂の決意報告の話と併読すればよく合致し、3月離関の記述に照らすと、文政13年春に下関から届いた書簡であることは疑いのない所である。

この年、防長に痲瘡が流行、9月には前萩藩主毛利斉元の長男猷之進（後の敬親、12歳）も罹患した<sup>80</sup>。敬親は侍医団の手厚い治療で回復したが、佐甲家の子

供（宗勝の長女スガカ）は難症を示し、およそ助かる見込はなかった。にも関わらず、研介は待望の上坂を遅らせてまで眼前の幼い命に向き合うことを選んだ。それは報恩と同時に医師としての強い責任感・使命感に裏打ちされた行動であり、謹厳慎重と評される人柄<sup>81</sup>）をみごとに反映する。おそらく研介は故宗勝との縁関係から佐甲氏に招かれ、大年寄家の御抱蘭医として家庭医をつとめ、あわせて本陣付医師のごとき立場をも委任され、家人及び滞在士家の健康管理や疾病治療に携わったものと見られる。

また本信は同門の山口行齋との交流を明示する点からも重視すべき書信である。行齋は文政3年、長崎からの帰途、当地に立ち寄り、伊藤李之允の支援で開業、大いに繁盛して門弟多数を擁した<sup>82</sup>）が、在関中の研介との交渉は不明であった。しかし、この記述から蘭医としての情報交換が活発になされ、基本的に共存共栄の道を歩んでいたことが実証されよう。

研介の下関開業を実現させた最大の功労者は、以上の経緯から考えて大年寄の佐甲家であったと結論されるが、他に複数の協力者があつたことも否定できない。残念ながらその点を記した資料も発見できず、推論の域を出るものではないが、在関町医の竜虎として後に長府藩医に登用された福原伯亮（仙庵）と石井節哉（宗潤）が、何らかの形で関与していたことはまず間違いない。福原伯亮は当地から日田に遊学した最初の人物として知られ、下関宜園派の盟主的存在であった。また石井節哉は蘭方に深い関心を寄せ、戸塚静海、松本濤庵ら中央・地方の一流蘭医と親交を保ち、子息行蔵（信一、赤間関医学所第二代校長）を適塾に学ばせた在関親蘭派の有力医家であった。両者は研介が下関で開業・開塾するにあたり、協力を惜しまなかったと見られるが、前述の通り資料的裏づけが取れないため、従って現段階で実証できるのは、本節に述べた海港下関がもつ開業時の複数の利点と、研介と佐甲家が縁族であったという2点に限られる。これが研介に下関開業を決意させた最も大きな要因なのである。

### （c）下関蘭学史上における岡研介の位置

本節を終えるにあたり、蘭学者・蘭医家としての岡研介の在関意義を当地蘭学の史的展開のなかに確認しておきたい。「下関蘭学」は筆者の造語であるが、その

呼称が過剰な思い入れに根ざす誇張表現でないことは、各節に示した蘭学関連の多様な事象から容易に理解されるはずである。いまそれらを整理すると次のように概括でき、下関蘭学史における研介の位置もおのずとはつきりするかと思う。

下関蘭学の黎明は、香月系の後世方医学が凋落し、山脇・香川系の古方派医学が台頭する過程で訪れた。宝暦頃、長崎の蘭医・吉雄耕牛に学んだ永富独嘯庵は、積極的にオランダ医学の知識吸収に努めた先覚者であり、当地蘭学の始祖となった。また古医方を当地に広めたもうひとりの功労者・香取太華も馬関の医学改革の一翼を担い、蘭方にも深い理解を示した。以後、両人の一族や門弟（小石元俊、亀井南冥、小田清川、松岡道遠、藤左伸、香取文圭、香取純庵、古谷道庵等）からは漢蘭折衷及び蘭方専修の名医が輩出、長関医界に対する影響は幕末まで続した。独嘯庵没後の半世紀は、特筆すべき関連事項を見出せないが、この間にも蘭医学は注目の度合を増し、徐々に知識人層に支持を拡大していった。

下関蘭学が急激な発展を見せるのは、化政期に入ってからである。当地には全国各地から長崎遊学を志す医家が立ち寄り、これを支援する富商（小倉屋Ⅱ河野藤右衛門、伊予屋Ⅱ広江殿峰等）も現れ、また遊学後に当地で開業する蘭医（山口行齋、石原柳庵等）も増加、下関蘭学は空前の活況を呈するようになる。その発展に決定的影響を与えたのはシーボルトである。シーボルトは文政9年2月22日～3月1日までの滞関中、訪れた旧門人の研究論文を佐甲家で受領し、彼らの同伴した多数の患者を連日のように診察、最新の外科的治療を施した。その様子は見学の人々を驚かせ、弟子たちを強く啓発した。本件を通じて西洋医学への信頼は絶大なものとなり、下関地方に蘭学撰取の気運が醸成され、当地医家の蘭学志向は一挙に高まった<sup>83</sup>）。この蘭学熱の沸騰に呼応したのが研介である。下関における蘭学受容の地域的基盤の成熟は、新規開業や蘭学塾開設を促す大きな要因となった。

文政末の下関には2つの蘭医塾が並存した。しかも両塾ともに高い支持を受け、行齋塾は総計200名前後、研介の生葺塾は1年で約20名が入門し、当時の下関は西日本有数の蘭学修業地として賑わいを見せていたのである。しかし、文政13年春に研介が上坂のため離開した結果、生葺塾は閉鎖され、さらに天保3年には行齋も上坂準備中に急逝、医塾は自然消滅する運命をたどった。行齋のパトロン伊藤李之允が塾生と患者を放置できず、門弟中の適材を後継者にすえ、医塾の存

続を訴えて奔走したことが記録に残っているが、周旋は実を結ばなかったようである<sup>84)</sup>。

このように文政末々天保初にかけて、下関蘭学は極盛期を迎えた。活動成果からいえば、山口行斎、シーボルト、岡研介の三医が主導的役割を果たし、各々がこの期間において当地蘭学の充実―発展―完成の役割を分担したと解釈できる。研介の下関での活動は短期間ながら、生葺塾を主宰、医育と著作の両面に優れた成果を残し、下関蘭学の質的向上に寄与した。ことに医学教育における業績は顕著で、系統的教授法の導入、基礎医学の重視、初学者に対する入門期教育の工夫などは特筆され、厳格な塾規を掲げてこれを実践し、良医育成に情熱を注いだ点は高く評価されなければならない。研介学の遺風は辛うじて生葺塾の高弟・坂本周鼎、藤山貫道らに継承され、上坂した周鼎は緒方洪庵とも親交を結び、立派な流行医に成長した。以上の功業は独嘯庵に比肩しうるもので、研介は下関蘭学史上における中興の祖であったと結論づけられよう。

一時は順調に発展するかに見えた下関蘭学も、指導者の離脱や死去により天保初には早くも衰勢に転じた。その後は弘化頃に蘭学塾の存在が一件確認できるのと<sup>85)</sup>、久留米藩の蘭方移入に功績のあった田三畝が嘉永期に寄寓していた<sup>86)</sup>という他はさしたる事象もなく、以後、当地蘭学は長く退潮傾向が続く。再び脚光を浴びるのは、研介が離脱して30余年後、下関が攘夷・対幕戦の舞台となったときである。我が国初の洋式火砲による負傷者に官民蘭医は組織的に対処した。日本の近代軍陣医学、野戦外科は最前線の当地で幕を開け、急速的發展に至る第一歩を踏み出したのである。

## おわりに

冒頭にも述べたが、現在まで岡研介の下関開業に注目し、詳察を加えた論考は出されていない。なかには史実を疑問視する意見もあったかと思われるほど、関係辞典類の大半は本件を載せず、意図的に言及を避けた感すらある<sup>87)</sup>。しかし関連資料を綿密に検討した結果、当地で著訳書が執筆され、蘭学塾を主宰していた事実が判明し、これにより研介の生涯はもとより、ひいては日本医学史上におけ

る研介在関期の重要性が実証されたと思う。以下、各節で解明したことをふまえ、下関時代の研介の生活痕と業績の要点をまとめて見よう。

岡研介は文政12年初春(13年3月中旬までの約1年を下関で過ごした。その間、長崎に2度出かけた。初回は長崎奉行の召喚に応じたもので、取り調べの結果、禁書所持・譲渡の罪を問われ、吃度叱の処分を受けた。

下関では本関支配の最高責任者・中川清左衛門(鯉淵、涼斎)の知遇をえて開業を有利に運び、大年寄佐甲家からも手厚い庇護を受けた。現当主の実父・故佐甲宗勝は平生の井上家から養子に迎えられた人物であった。井上家は岡家と同じ新市裏町に屋敷を構える研介の母方の縁戚であり、1つ違いの研介と宗勝は竹馬の友であった可能性が高い。当主宗愛の妻も井上家から嫁ぎ、研介来関時の佐甲家は母方の縁族の血が濃厚に入り、研介とも遠縁関係にあった。佐甲家は自派蘭医として旧識の研介を招致、開業・開塾を助勢し、抱医に任じて本陣及び私邸の医務を統括させた。

寄寓中には弟子の懇請により『岡常用方』を著わし、『生機論』の訳述をも完成させた。他方、医育にも力を注ぎ、蘭学専門の生葺塾を主宰した。すでに寄寓開業していた同門の山口行斎の蘭医塾も盛況であったが、鳴滝塾で塾頭にのぼり、高野長英と才知伯仲した研介の生葺塾は下関初の本格的蘭学塾といつてよく、学業熱心な約20名の門弟が在籍した。講義は系統的、有機的に進められ、西洋医学、蘭語学はもとより生理学等の基礎・補助学問も重視された。これは当時の地方蘭学塾にあつては稀に見る進歩的教育システムであった。

以上のように下関における研介は、医育・研究の双方に顕著な業績をあげ、当地蘭学の発展に貢献した。下関蘭学は文政末に寄寓開業したひとりの著名蘭医・岡研介の活躍によって絶頂期に達したと導論されるのである。

## ― 注 ―

- 1) 横山健堂『人物研究と史論』「蘭学者岡研介」、東京…金港堂、1913、P 618—638
- 2) 呉秀三『岡研介』『医学及医政』、1924、11(5)…16—23
- 3) 田中助一『防長医学史』東京、聚海書林、1984復刻。P 186—

- 192、463—465
- 4) 三宅紹宣「蘭医学者岡研介の生涯とその思想」、『山口県地方史研究』1973  
29:20—27
- 5) 「岡研介子事蹟志料」(山口県立文書館蔵、吉田樟堂文庫106)。同冊所収の齋藤良策からの研介宛書簡に「去歲御発病の時氣二向候故少々ハ発動致候事も可有之と存居候。併格別錯乱二ハ不至るよし、先々安堵仕候」(9月27日付)とあつて年次を記さない。しかし同簡には頼山陽の「当月廿三日晩死去」の事実を伝えており、天保3年の発信と判明する。そこから逆算すれば発病は前年の10月頃となるであろう。
- 6) 岡研介自筆稿「雑記」(早稲田大学図書館、洋学文庫蔵) No 89。天保7年秋(歳暮まで岩国の姻戚水谷家に逗留、昌明館に主公等の出療治に赴いており少なくとも翌年は診療活動を認めてよいと思う。なお早大所蔵の研介関連資料はデータベース化を終え、全文の画像が一般公開されている。本論ではそれらからの引用に限って、PDFファイル番号を用いて該当箇所を示した。
- 7) 注5) 同。齋藤方策の岡泰安宛書簡に「此間、秋之書生御尋申候間、噂仕候。右之人も蘭学生二御座候処、上方へ参候とも決而蘭学ハするなトの御咄有之候様子申居候」(年次不明、2月21日付)とある。
- 8) 「雑記」No 89
- 9) 注2) 同17
- 10) 同上。18
- 11) 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』、東京:吐鳳堂、1926。再版(東洋文庫117。P 15)
- 12) 岡研介自筆稿「雑録」(早稲田大学図書館、洋学文庫蔵) No 103。また「雑記」No 39には「居家を以て業を售る。之を論ずれば、萩、赤関、大坂、岩国」との記載がある。
- 13) 日田郡教育会『増補淡窓全集』(中)、広瀬淡窓「欽斎日曆」巻3。京都:思文閣出版、1971復刻。P 394
- 14) 井上忠「武谷祐之著『南柯一夢』」、『九州文化史研究所紀要』1963。  
11:87
- 15) 「雑記」、No 27
- 16) 注13) 同。(上)。P 351
- 17) 森永種夫編『犯科帳』(8)、長崎:同刊行会、1960。P 9—10
- 18) 「雑記」No 100
- 19) 中川涼齋自筆稿「中川涼齋詩藁」、瘦筵第3。(下関市立長府図書館蔵)
- 20) 戸塚武比古「静海上府懷日記」、東京:影印私家版、1979。P 15
- 21) 下関文書館編『御当家御役人前帳』(史料叢書2)、下関:下関市立図書館、1971。P 92
- 22) 「広江秋水遺稿」(吉田樟堂文庫414)。「中川鯉淵老公の解綬を賀す。詩并びに序」
- 23) 広江家文書(吉田樟堂文庫415)。築地玄通、石井豊洲、劉梅泉等の書簡参照。
- 24) 青木一郎『坪井信道詩文及書翰集』、岐阜:岐阜県医師会、1975。P 98、119
- 25) 注22) 同。「行齋兄を悼む」(七絶)
- 26) 注1) 同。P 635
- 27) 三浦義臣『岩邑年代記』(8)、岩国徴古館。竹本照三編、1997。P 7(蔵元支配)、P 45(手廻組支配)
- 28) 「雑記」、No 92
- 29) 「雑録」、No 81
- 30) 注27) 同。P 29
- 31) 岡研介自筆稿「万松精舎読書」、「草稿」(早稲田大学図書館、洋学文庫蔵) No 5—9
- 32) 注27) 同(7)、1996。P 80
- 33) 岩国市史編纂委員会『岩国市史』(上)、岩国:岩国市役所、1970。P 649。万松庵は廃寺となったが、位置は岩国徴古館所蔵の「御城山平図」(天明末)及び「旧岩国城下図」(江戸末)で確認できる。
- 34) 「雑記」、No 33
- 35) 岡研介自筆稿。老子註(早稲田大学図書館、洋学文庫蔵) No 54
- 36) 「雑録」、No 81—85
- 37) 「雑記」、No 33
- 38) 岡研介自筆稿「天造堂漫筆」(早稲田大学図書館、洋学文庫蔵) No 6

- 39) 天理図書館善本叢書(和書之部) 編集委員会、天理図書館善本叢書(同) 80。  
『洋学者稿本集』、「生機論」、凡例第三則。東京・八木書店、1986。  
P 328—329
- 40) 岡研介自筆稿。周礼医師職鈔解(早稲田大学図書館。洋学文庫蔵)  
No 5、No 10—12  
41) 「雑録」、No 84  
42) 注13) 同。巻1。P 373
- 43) 下関市史編修委員会『下関市史』藩政と市制施行、下関市、2009。  
P 668
- 44) 長寿吉・小野精一編『広瀬淡窓旭莊書翰集』、東京・弘文堂、1943。P 43  
同上。P 45
- 46) 江馬文書研究会編『江馬家来簡集』、京都・思文閣出版、1984。P 51  
47) 注24) 同。P 42
- 48) 大塚富吉『帆足万里先生門下小伝』、大分県日田町教育委員会、1971。  
P 66
- 49) 注30) 同。本文は「岡研介門弟坂本周鼎(豊後日出人)、右、研介病氣保養中、療治向悉皆相頼置候間、代脈として御困ひ内出入差免被下候様願出、御免。但、右弟子河村貫之、藤山貫道、相応療治向も心得居候に付、横山内錦見御家中、えも代脈被差免被下候様申出、御免」となっている。
- 50) 中野操監修『大坂医師番付集成』、京都・思文閣出版、1985。20—26  
51) 注48) 同。P 32
- 52) 雑記 No 187
- 53) 注5) 同。
- 54) 雑記。No 177
- 55) 注3) 同。P 190
- 56) 筆録者不詳「岡常用方」(写本1冊。吉田樟堂文庫 1301)
- 57) 注2) 同。19
- 58) 注5) 同。
- 59) 注23) 同。詩序中にも「今偶然之を研海に得たり」とある。
- 60) 中島棕隠『金帚集』(第3冊)。大坂・秋田屋太右門等、1839。

- 61) 注39) 同。P 326
- 62) 同上。P 327
- 63) 同上。P 323
- 64) 同上。解題。P 22—23
- 65) 拙稿「高杉晋作の主治医石田精一について—変革期草医の「雅」と「侠」、『日本医史学雑誌』2009、55(4)・414
- 66) 注24) 同。「児安貞に示す」。P 326
- 67) 石原柳庵については「中川涼齋詩藁」や広江家関係文書、武元登々庵『行庵詩草』等、かなり文献上にその名が散見する上、柳庵の手になる墓碑が長陽地方に数種確認でき、文人としても重んぜられていた。尾崎秀民の下関寄寓は『日間瑣事備忘録』(巻80)で知られるが、事績は小林義忠「初代高山県知事梅村速水とその同志勤王の志士・尾崎秀民との出会い」(飛騨春秋 2003、509・17—21)に詳しい。
- 68) 拙稿「18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について」、『日本医史学雑誌』2008、54(1)・44—45及び拙稿「小石元俊の水軍術伝授とその周辺」、同誌2008、54(4)・330—331
- 69) 高野長英全集刊行会『高野長英全集』1巻、「客中案証」1・東京・同刊行会、1930。P 360
- 70) 注20) 同。P 10
- 71) 注43) 同。P 284
- 72) 堀哲三郎『郷土資料目録』3、「佐甲家系図」。下関市下関文書館、1970。P 11。なお佐甲家の持仏堂であった中山寺(臨濟宗)には宗勝の位牌が確認される。法名、没年は文献に記載された通りであるが、それ以外の追加情報は得られていない。
- 73) 井上家に関する唯一の資料が「平生町裏町井上家井上家系図」(平生町立図書館蔵、1971原本複写)である。全15丁の内容は詳細であり、資料的価値が高い。最も新しい年次は禧之助の没年(昭和22年2月26日)である。またシーボルト参府時、本陣佐甲家にあつた宿札を同家が所蔵していたが昭和49年に廃棄されたと付言する。墓所は岡家と同じ真覚寺(真宗本願寺派)である。本堂裏手に井上家累代墓(昭和30年建立)、井上静女(信厚女、明治10年)、

被葬者不明の平生屋（安永8年）と刻する3基が確認されるが、長く参詣が絶えているように見受けられた。明治期の信厚は佐甲家の「家屋地番別作り付及坪数目録及図面」（明治29年、長府図書館蔵、佐甲家文書②—4）にも捺印している。

74) 「雑記」、No 2、20、22、49、75、94、147、180などに関連記事、過去帳抜書等が散見する。

75) 「雑記」、No 180

76) 平生図書館編「改訂岡家略系譜」（稿本）、1972。

77) 「雑記」、No 147

78) 田中助一「蘭学者岡研介および高野長英伝の補遺—特に長州（萩）藩御用商人熊谷五右衛門との関係について」、「蘭学資料研究会研究報告」1963、152・15

79) 同上。22

80) 注3) 同。「防長医事年表」、P 34

81) 注2) 同。16—17

82) 庄内藩士の友人・池田玄斎の『弘采録』（自筆稿本、酒田市立光丘文庫蔵）には「門人も百人余ありて」（第45冊）、「門弟も二百人計ありしとぞ」（第49冊）、「今は門人百五六十人もありて」（第65冊）と一定せぬが、ざっと百〜二百人と見積もって支障はあるまい。

83) 注43) 同。P 721—723

84) 注82) 同。第49冊。

85) 山田家文書（下関市立長府図書館蔵）『山田蘭斎草稿』、「横白杵先生（長府藩儒・白杵横波）の蘭を馬関に学ぶを送る」

86) 広瀬旭荘『日間瑣事備忘録』、巻80。嘉永4年10月7日。多治比郁夫編『広瀬旭荘全集』日記編4。京都・思文閣出版、1984。P 383。なお詳細については、拙稿「吉田有秋の継父田三畝に関する考察—長崎・久留米・下関での足跡を中心として」、「医譚」2010、92を参照されたい。

87) 参考図書として利用頻度の高い『国史大辞典』、『日本人名大辞典』、『国書人名辞典』、『日本洋学人名事典』の岡研介の条には下関での寄寓開業の記載がない。

## 廣瀬淡窓における自省と養生について

—『自新録』『再新録』を中心に—

深町 浩一郎

### はじめに

廣瀬淡窓（天明二年（一七八二）—安政三年（一八五六））は、近世最大規模の私塾「咸宜園」を主宰した教育者として広く知られている。二十四歳で開塾以来、約五十年間塾教育に携わったが、この当時、他の私塾はおおむね開塾者一代限りの小規模で比較的短期間のものが多かったが、「咸宜園」は以後も養子や門人に引き継がれ明治三十年まで約九十年間存続し、門人も北は津軽から南は薩摩まで全国六十六力国から集り、門人数も入門簿上では約四千八百名だが実数は五千名を大きく超えていたといわれる。このような大規模かつ全国規模の私塾となったのは、淡窓が永年独自に工夫を重ねた「月旦評」「三奪法」「職任制」などの整った教育システムが確立され、淡窓および後継者が徹底した教育指導に努力したことにあつた。

また、淡窓は江戸後期に菅茶山、頼山陽と並ぶ三大漢詩人とされる詩人で、その『遠思樓詩鈔』は大坂等ではこの二人を凌ぐ人気を博したといわれている。

さらに、淡窓は学者として、『約言』『析玄』『義府』などの思想を論じた書、『迂言』『論語三言解』などの経世論の書など多くの著作を著し、中国思想の根底にあるものを「天」として捉えた独自の「敬天思想」を唱えた儒学者であつた。

淡窓は、温厚篤実で謹厳高潔な人格の人柄であつたと評されている。つねに自省して修養に努力し、健康に対する養生を怠らなかつた人で、その善行の具体的実践の記録である『萬善簿』を残した徳行家であつた。実は、こうした人格と思想の形成には、淡窓が非常に病弱な体質で常に病気に悩んだ人であつたことが関係している。

その淡窓の自省と修養および養生の実践について、淡窓の生涯と病歴をたどりながら、自戒自省の思いを記した『自新録』『再新録』を中心に淡窓自身の述べた反省の文章を引用しながら明らかにしてみたい。

### 第一節 淡窓の病気の生涯

淡窓は七十五年の生涯において、自身の病弱な体質のため、一生を闘病生活に終始した人である。その『日記』を見ると病気の記事がいたるところに記され、また、そのために身体を養生するべき反省を述べた記事がしばしば見えている。淡窓が如何に病気に苦しんだかは、自身が『懷旧樓筆記』の中で「三大厄」（１）と呼んでいる十九歳・二十六歳・四十四歳の三度も死を覚悟したほどの大病に遭つた上に重い病にしばしば遭つていなくても十分に分かるだけではなく、『日記』に夥しく記述されているように、持病の胸部疾患・胃腸病・腎臓病・眼疾などで発熱・吐き気・発汗・悪寒・腫れ物・便痛・尿道閉塞・眼痛・不眠などの苦痛をいつも感じ、体調が悪くて床に臥せることがたびたびであつたことを見ても明らかであろう。ある学者が述べるところによれば、「淡窓の生涯は病気の連続であり、七十五年の三分の二、すなわち五十年間は病気および睡眠のために寢床の上で費やされた」と見てよいのではあるまいか」（２）と述べているように、我々一般人が生涯の三分の一を睡眠のために寢床で過ごすのに比べ、淡窓はその実に二倍に当る三分の二を寢床の上で過した人であつた。逆にいえば、生涯で、健康な一般人に比べて実質的には約半分の活動の時間しか持ち得なかつた人であつたのである。遠方への長期の旅行は無理なため、淡窓が旅行した土地もほぼ北部九州のせいまい範囲に限られ、ほとんどの生涯を日田の地で過ごしている。

そうであるのに、三つの業績、つまり私塾「咸宜園」を主宰した教育者として、また江戸後期三大詩人の一人と称される漢詩人として、さらに独自の敬天思想を唱えた儒学者として、それぞれに大きな業績を遺した人であつたのである。その三つの業績は、健康人であってもその一つとして成し得ないほどの、いずれもが一流といえる大きな業績である。同時代の淡窓の評価としても、六十一歳のときに幕府から「永世苗字帯刀」の恩命を受けていることから相当に高かつたことが納得できるのである。

このことは、淡窓が地道に努力を重ね、常に真摯に自己の生活に反省を加えて修養に努め、また常に自分の身体の養生に気を配っていたために可能となつたことである。その実践の集大成が、晩年の記録である『萬善簿』の善行の実践と

いえるであろう。そして、身体の養生の結果として、当時としては長命である七十五歳までの長寿を保ったのである。思うに、淡窓の偉大さの見るべきところは、遺されたその大きな業績によつてよりも、病氣という大きなハンディに一生涯苦しみながらも、それを乗り越えてゆく克己的・求道的ともいえるたゆまぬ精進努力の生き方にこそあったといえよう。まさに、それこそがわれわれに大きな感銘を与えるのであつて、我々が淡窓から学ぶべきものは、その自省と修養、そして養生に努めたその生涯にあつたと思ふ。

その自省と実践の経緯については、自身の生き方を深く反省した自戒の書である『自新録』および『再新録』、自叙伝『懐旧樓筆記』の記述、淡窓の『日記』に見える「宥座語（座右銘）」などと自身が呼んでいる言葉、などによく述べられている。そこに記されている淡窓の反省の言葉や戒めの言葉は、もちろん淡窓の病歴や経験に基づく個人的な思いのものだが、淡窓の深い自省と思索によるもので、私たちの心にも共感を与え、私たちにとつても大きな教訓の言葉となるものである。なお、『自新録』『再新録』および「宥座語」は漢文で書かれており、これまであまり紹介がされていなかったものである。

## 第二節 淡窓の自省・養生の契機

### 一 亀井塾からの帰郷―『陰騭録』との出会い

淡窓は福岡の亀井塾で学んでいた寛政十一年の冬、十八歳のとき、重病に罹り意思に反し退塾帰郷せざるを得なくなる。『懐旧樓筆記』によると「二三年来、病多し。此の年の冬に至つて稍く甚し。一身熱を生じ潮熱の症なり。自汗盗汗あり、其の症勞瘵（肺結核）に似たり。是に於いて心中恐れを生ず」（3）という状態となり周囲の人々から保養を勧められたため、十二月上旬日田に帰郷したが、これが終に塾からの大帰となったのである。「十六の春より先生の塾に入り、是に至つて三年、終に大帰せり。素志は五六年も彼地に留まり、其の後は四方に漫遊せんと思ひしに、筑の逗留も実は二年に満たず。其の後遂に四方の事なし。歎息するに余りあり」（4）と述べるように、亀井塾で学んだ後、将来は京大坂・江戸などへも遊学してさらに飛躍したいとの望みであつたのが、やむなく帰郷し日田で療養せざるを得なくなったのである。

淡窓は帰郷の前、博多で「已に大病のきざしあり。心中に甚だ恐れを抱」いて、和訳の袁了凡著『陰騭録』一部を買い求めて読み、「善事を為して天助を祈らんと」思つたことを述べている。（5）翌年、十九歳の正月に作つた漢詩には「人生の天寿定めて何に因る、須らく識るべし皇天は善人に祥するを、案上一編の陰騭録、年命を祈つて千春を保つことを要む」（6）と詠んでいる。のちに『自新録』を著したときの記事には「初め余十八歳の時、袁了凡が『陰騭録』の旨に因つて一萬善を行はんと誓へり。然れども其の事果さず。其の他の行事も亦悔ゆべき事多し」（7）であつたと述べている。

博多にいた十八歳の頃、淡窓は袁了凡著『陰騭録』を読み、運命は努力によつて自分で立て直すことが出来ることを知つて、そこに記されている功過格（反省の資料とするため、自分の行為の善事の数から悪事の数を除して記すもの）を實踐して一萬の善事をなそうと誓つたことがわかる。つまり、善事をなし徳を積んで病弱な自分の運命を変えたいと願ひ、天は善を祥するので長寿となるように天の助けを祈つたのである。淡窓の『萬善簿』の原点は『陰騭録』にあつたといえよう。さらには、のちに淡窓が唱える「敬天思想」の根底となるものであつたといえるであろう。

### 二 養生生活―佛教・老子への関心

日田に帰り療養中の十九歳の淡窓は、この年（寛政十二年）二月に症状が極めて悪化した。医師の倉重湊の治療により一命をとり留め、五月頃になつて漸く病床を離れることができた。以後数年間は専ら療養生活を送ることとなつた。

十九歳から二十歳のとき、淡窓は仏教と老子の書に深い興味を覚えていた。仏教については、日田に来訪した高名の加持僧・豪潮律師の説教を聞きに行き少々解りはじめたと述べ、仏教書『楞嚴經』を借りて読んで「楞嚴を読むに至つて、始めて佛教の高大を窮め精微を尽すことを知れり。此に於て軽悔の心やみて尊崇の念起れり」（8）と記している。また、老子については「秋風庵に在りし『老子国字解』を取りて数遍読みたり。此れより老子の学を好めり」（9）と述べている。とくに老子の思想については、『夜雨寮筆記』に「予、少きより多病なるを以て養生に汲々たり。老子は仙家の祖たるにより、養生の訣を得んが為に此の書に心を留めたり。因て其の旨に於て頗る得る所あるを覚ゆ」（10）と答えているように、「老

子』の書を道教の説く不老長寿などの養生の心得の書とみて関心を抱いたものと思われる。ちなみに『陰陽録』は、雲谷禪師の説く立命の教えによって自己の運命を開いたということを記した書物であり、因果応報などの佛教の思想が大きく含まれているものである。

二十二歳のとき、享和三年閏正月、「発願文」「重作誓願文」(11)を作つて病苦離脱のために仏の救いを願つており、この頃は佛教に専ら熱心であつたと思われる。内容は、弟子簡(淡窓の名)は悪業のために重病を得て永く苦患を受けているので、明日より閉門し物欲を絶ち葷肉を食さず信心依向して「真言十万遍もしくは二十万遍を持誦」し心に至り発願するので、大聖の慈悲で諸の障除き、病苦を離れ安穩を享けるなどの大願を授受することを願うとしている。

この二十二歳の享和三年の五月末に、淡窓は流行の麻疹に罹り病勢は猛烈で苦惱が強くまた小便閉塞で危険に瀕した。この間、淡窓は閉居して人との交りを選じたので父母の愁きは甚だしく、その時、帰郷以来ずっと看病に従事していた二歳下の妹安利(秋子)は、その父母の愁嘆を見るに忍びず兄の病患を救おうと、ついに「兄の命に代らんことを佛に誓う」大誓願を発し尼になることを願うのである。その事は豪潮律師の知るところとなり、のち安利は、豪潮律師をたより、京都に赴いて官女・風早局に任せ、京都において熱病に罹り二十二歳で歿したのであるが、淡窓は「彼が命に代はらんと誓ひしことあれば、此の度の死も予が為にせし様に思はれて、其の痛み骨髓に徹せり」(12)「終に妹をして予に代り身を捨てしむるに至る。これ誰が罪ぞや。嗚呼、予が髪を抜いて予が罪を数へんに、髪は尽くることありとも罪は尽くることあらじ」(13)と非常に悔恨を述べている。淡窓はこれ以後、秋子の法事を廣瀬本家ではなく、淡窓自身の祀り事として行なっている。

### 三 開塾の決意

文化元年、淡窓二十三歳、この年の冬、十九歳のときの大病を救つてくれた命の恩人の医師・倉重湊の忠言によつて開塾を決意する。その経緯(14)は、倉重湊を「其の人となりを見るに、智術ありて計策多し。共に身事を計るべき者なりと思へり。因つて一通の書を裁して彼に贈り其の裁断を請へり」そして、その手紙の大意は「年来鬱々として日を送るのみなり。願はくば高明某が為に一の良策

を施したまへ。若し某が身計既に定まりなば、心も亦た止まる所を得て定まるべし。然らば宿痾も亦た年を追つて治すべしと思はる」というものであつたが、数日経つても何の返事もないので訪ねていくと、倉重はその手紙を地に投げつけ冷笑して「余已に熟読した」が、君の手紙は一言で済むことを百回も繰り返して怨むが如く訴えるが如く愚痴つている。私の考えでは「足下の身事、已に天の定むる所あり。只だ一の道ありて傍蹊岐路の迷ふべき無し」それは、若いころから学問で知られた君には儒者の道以外にはない。それを今に至つて儒者では生計できないとして、医者や商人になろうかと迷つているが、それは世間の物笑いとなる。なんとという恥知らずだ。「儒と為つて活計に窮せば何ぞ飢えて死せざるや」然るに、日田は儒業を立つべき地に非ずと云ふ。是れ、日田の風土悪しきに非ず、足下の教授の道を尽さざるが故なり」。このように言つても君は、所詮儒者は貧しきもので都会に居ても貧をまぬがれず、この僻陋の地に居てはなおさらで、妻子をも養はず父母親戚の助けを仰ぐに至ることとなるのは恥づべきことであると思ふだろう。しかし「今日より粉骨碎身して身計を営み、力足らざるに及んで父母の助をかることは、誰か之を咎むる者あらんや」「足下当時一事を勤めず悠悠忽々として日を送ること、第一父母に対して不孝之れより甚しきはなし。若し余が言を是とせば、今日より改めて門人の教授を事とすべし」との、実に懇切で核心を衝いた忠言だったのである。この倉重湊の言葉は淡窓の心にしみ、霧が晴れるように迷いから覚め「此に於て幡然として往日の非を悔い、湊が忠言を拜謝して、是より改励して教授の業に心を専にすべき由を湊に答へたり」そして明春に至つて早速開塾すべきにことに決め、その志を父母に告げたのである。

文化二年、淡窓二十四歳の三月、豆田町長福寺学寮を借りて転居し塾を開塾した。このとき塾生はわずか二人、三人で飯を炊き三人で勉強する生活であつた。しかし、六月になり学寮が旅僧の宿舎となつたため、廣瀬家南家の土蔵で講義することとなり、八月には豆田町二丁目の大阪屋林左衛門の家を借りて転居し、「成章舎」と名づけた。翌年、五月の梅雨の季節になると、そこは湿気が多く狭いところで勉強に不便であるため、廣瀬家に帰り南家に居住し、講義は土蔵で行つた。

文化四年、淡窓二十六歳、五月に、塾を支援してくれていた商家の伊予屋義七が土地や資金を提供してくれ、豆田町東裏町に新塾を新築し、六月に塾生十余人とともに居住した。新塾を「桂林園」と名づけた。この塾の新築については、伊

予屋義七ほかその親族や二十余人の塾生等が助力したが、淡窓はその労苦について深く感謝している。

この年（文化四年）の十一月上旬、淡窓は流行病に罹り実家で養生したが、中旬より病がいよいよ重くなり塾を一時閉塾した。「此の病、庚申（十九歳）の大病の以後の一大厄なり」と述べる、三大厄の一つとする大病である。翌年一月にはぼ治ったが、翌年四月に至りようやく塾を再開した。この後、淡窓は病気がちで、塾生は「桂林園」においたまま、実家の廣瀬家から毎日「桂林園」に向いて講義を行うこととなり、この往来生活が以後約十数年続くこととなる。

#### 四 眼疾の治療と養生

文化六年、淡窓二十八歳のとき、眼疾がひどくなり五月と九月に福岡須恵の著名な眼科医・田原養伯のところへ治療に赴いている。『夜雨寮筆記』によれば、田原医師の診察は「足下、天性虚弱にして眼力も常人に比すれば甚だ薄し。然るに之を用ふることは人に数倍せり。是れ疾を生ずる所以なり。之を治せんとならば（中略）唯眼力を節約して用ふるに在り。若し之を惜しんで用ふること少なくば老年までも保つべし。然らざれば眼精必ず寿命に先つて尽き、中年以後は失明に及ぶべし」（15）というものであった。学者としての業は広範にして精緻な読書量こそがその基盤となるものなので、これから自分の勤学に努めて塾の教育に邁進していこうとしていた淡窓にとって、その基礎である読書を制限され、しかも失明の懼れまでも診断されたことは「哀歎頻りにして是が為に寢食を廃せり」というような非常な歎きであった。この眼疾は淡窓の日常生活で「此の病を得しより、唐本をよむことを得ず、細字をかくことを得ず、燈下に見ることを得ず、其の他眼力を用ふること少しく度に過ぐれば忽ち祟りをなせり。是を以て、半生の学業依然として進むことを得ず。是れ天の予を限るなり。嗚呼、悲しいかな」（16）と述べるように生涯において大きな影響を及ぼす障碍となったのである。しかし、淡窓は悩んだ末に、今まで十数年の学問知識に工夫を加え、出来得る限りでの読書に勤めればよいのだと思い直し「是より後、再び註解を見ること無く、又雑書を博覧すること無く、唯、本文を熟読し、其の他は瞑目静坐の中に工夫を用い、書を点検することなし」（17）という、本文のみ熟読して細かい註釈は見ない「本文主義」ともいべき学問態度を取ったのである。この態度は却って

「予固陋なりと雖も、瞑目静坐の中に於て自から了悟を得たりと思ふこと多く」（18）「道の実用を味ふこと」を得るといふ結果となつて、細かい註解や訓詁考証に惑わされることなく直ちに聖賢の説く道の体得に至り得ることとなり、淡窓独自の「敬天思想」に結実することとなつたといえるのである。このため、淡窓は医師の戒めを守り「予此の病あるを以て撰養頗る慎めり。飲食情欲常に節約を加へたり。保生の道に於ては得る処少なからず。是れ造物者の乗除なるべし」（19）と述べるように、非常な養生に努力したのであり、遂にはその眼疾が淡窓の生を保たせる結果となつたとしていのである。

#### 第二節 宥座語の作成

##### 一 日記の開始―「宥座語」

淡窓は文化十年、三十二歳の八月二十三日から、『日記』（20）を記し始めた。その理由について「老年に至り往事を追思するにたよりありて老を慰むるの一助と為るべし。又、其の内には子孫の心得と成すべき事も有るべし」と思ったからだとして記しているが、毎日日記をつけることによつて自身の反省と修養のための拠り所としていたものとも思われる。この日記は「固より懶惰にして煩に堪へざる性質なれば、とても詳なる事は行届かずと思ふより、至つて簡略にせり」（21）とするように、簡単な漢文体で記されており、この後、亡くなる約八ヶ月前の七十五歳の安政三年二月十一日まで自筆で書き続けられている（但し、四十五〜四十六歳の二年間は病気のため中断）。

この後、文化十一年、三十三歳のとき、八月下旬より風邪で悪寒発熱が続き「頗る庚申の年（十九歳）の大病に類せり」という病状で「此の病、二十六の歳、疫を病んでより以後の一厄なり」というものであったが「半月余を歴て平癒を得」（22）ている。『日記』には八月十八日から九月十一日まで記入がなく、九月十二日の条に「嗚呼、予自ら撰養せず、以てこの阻を胎す。自ら苦しみ、人を苦しめ、是に於て甚だしと為す。庶くは後來を慎み、以て前愆を補ふ」（23）とある。

初期の頃の『日記』の中に、自身の反省と養生のための戒めの「宥座語（座右に置いて自らの戒めとする言葉。座右の銘）」（原漢文）を好んで作っている箇所が見られるので、『日記』の記事を抜き書きして紹介する（原漢文。読み下し文

と簡単な訳をつけた)。それらは、座右銘と名づけられているように、我々にとつても教訓となりうる言葉である。

○文化十年九月十三日(32歳)「宥座語を作る、曰く、知は天を知るより先なるは莫く、仁は人を濟ふより大なるは莫く、勇は己に克つより切なるは莫し」

(儒教で、知・仁・勇は三徳として尊ばれているものであり)、実践として、知は天を知ること、仁は人を濟うこと、勇は己に克つことが最も大事なことである。

○同年十一月七日(32歳)「宥座語を作る、曰く、老曰く、人の力を用いよと、孟曰く、人とともに善を為せと、故に自ら用うる者は勞して功小なく、人を用うる者は逸して功大なり」

老子は人の力を用いること、孟子は人と共に善行を為すことを教えている。それで、自分のみで行なう者は苦勞が多くて効果は少なく、人を使って行なう者はすぐれて成功が大きい。

○同年十二月一日(32歳)「宥座語を作る、曰く、其の心を樂しみて憂うる勿れ、以て今適を取れ、焉んぞ我が死の明日ならざるを知らんや。其の身を勤めて惰る勿れ、以て後凶を成せ、焉んぞ我が生の百年ならざるを知らんや」

心を樂しんで憂えず今にふさわしいことを行なえ、自分の死が明日ではないとどうして知ることができようか。身は勤めて惰ることなく、今後のほかりごとをなせ、自分の生命が百年もないことをどうして知ることができようか。

○文化十一年正月六日(33歳)「宥座語を作る、曰く、事は以て外を治め、理は以て中を和し、命を知りて以て其の私を去れ(中略)養生三訣を作る、曰く、動作を多くし、飲食を省き、思慮を滅す」

自分の仕事をもって対外的によく営み、道理をもって偏りなく調和させ、使命を自覚して自己中心的な心をなくせ。(中略)(養生)養生の三つの秘訣を作った、動作を多くし、飲食を少なくし、思慮を絶つことである。

○同年正月二十三日(33歳)「宥座語を作る、曰く、事は予めするに如くは莫し、思は再びするに如くは莫し。予めすれば則ち過ち寡く、再びすれば則ち悔い寡し」

仕事は前もって備えるに及ぶものは無い。思考は再度行なうに及ぶものは無

い。あらかじめ備えれば過ちが少なく、再度行なえば悔いることが少ない。○同年十一月十三日(33歳)「宥座語を作る、曰く、人の恵みを受くる勿れ、受くれば必ず速かに報ひよ」

他人の恵みを受けるな、受ければ必ず速やかに恵みを返しなさい。○同年十一月十九日(33歳)「武侯の語を以て座右銘と為す。淡泊に非ざれば以て志を明かにする無し、寧靜に非ざれば以て遠きを致す無し」

武侯(諸葛亮)の言葉をもって座右の銘とする。心があつさりして無欲でなければ、自分の志望をはっきりさせることができない、落ち着いて心静かであれば、深遠なところに至ることができない。

○文化十二年正月二日(34歳)「勤学、力行、養生の三訣を作る、礼を知るを学と為し、礼を行うを行と為し、礼を以て欲を制するを養生と為す」

学を勤める、行いを努める、生を養うための三つの秘訣を作った。礼儀を知ること学とし、礼儀を行なうことを行とし、礼儀でもって欲をおさえることを養生とする。

○同年八月十一日(34歳)「宥座四訣を作る、一に曰く、生を養う、二に曰く、事を勤む、三に曰く、礼を履む、四に曰く、仁に依る」

四つの秘訣を作った。一つは生命を養う、二つは仕事を勤める、三つは礼儀を実行する、四つは仁(思いやりの心)にもとづき従う。

○文化十三年四月二十七日(35歳)「五事の工夫を作る、飲食を減ず、情欲を絶つ、薬餌を務む、読誦を省く、隱徳を行ふ。眼疾の為の戒なり」

五つの行動の工夫を作る。飲食を減らす、情欲を絶やす、薬になる食事に努める、声を出して読むことを省く、隠れた徳行を行なう。これは眼疾のための戒めである。

○同年七月十四日(35歳)「持敬の説を作る。丹書に、敬、怠に勝てば吉なり、怠、敬に勝てば凶なりと。怠は怠慢なり。今敬を以て対言すれば、則ち敬の字は勤慎の二義を兼ねるなり。勤は以て事を濟ひ、慎は以て心を治む。持敬の義なり」

治める。敬を保持するという意である。

なお、『日記』をみると、この時期に善行の記録を実践したことが数ヶ所だが記されている。文化十一年、三十三歳、八月二十三日の条に、「功一百を記す。功過格を録すことを六月十日より始む、此に至て始めて一百に満つ」（24）とあって、約八十日で百の善行を行っており、功過格の記録を實踐していたことがわかる。また、文政四年、四十歳、二月三日から六月四日までの条（25）には、所々に本文の末尾に括弧で（○○○殺を戒める）（○○○善に導く）（○○○財を捨つ）（●殺）（●怠る）などの記入があり、『日記』に実践の記録をしていたことがわかる。しかし、『日記』の他の箇所には見られず、これはほとんど続かなかったものと思われる。（本格的な実践記録は、五十四歳の『萬善簿』からである）

また、文化十二年、三十四歳、二月六日には『報恩説』を作っている。「其の大意、此の身、天地の大恩をうけたり。務めて恩を報ずるを以て志とすべし。一切の富貴壽命等の事、固く願望を止むべし。若し之を願はば、天地の恩を忘るるなりと云ふことを述べたり」（26）と記している。

この後、四十歳以降も、「宥座語（座右銘）」などの言葉が出ている箇所を引用して紹介する。

○文政五年八月十五日（41歳）「宥座語を作る、曰く、小勇は事を習うに在り、大勇は命を安んずるに在り。動は則ち小を養ひ、静は則ち大を養ふ。小を養ふは身に在り、大を養ふは心に在り（中略）夜起きて身を以て道に殉ずるの工夫を得る。従来の工夫、身の為め、道の為め、名の為め、利の為めにす。或は三或は五、紛然として対峙す。是に至りて断乎として以為らく、唯だ道の為にするのみと。則ち他の數者は招かずして至る。至らざる者は天なり」

小さな勇氣は物事によく慣れることにある、大きな勇氣は運命に安んじることにある、動くことは小さなことを養うが、それは身体にもとづき、静かであることは大きなことを養うが、それは心にもとづく。（中略）夜中に起きて、自分の身を捨てて道を守る良い考えを得た。従来のは、身のために、道のために、名のために、利のために行なっていたので、あるいは三あるいは五となつて乱れ紛れて対立していた。ここできつぱりと覚悟したことは、た

だひたすら道のために行なうだけであると。すなわち、他のものはこちらが招かなくても到達する。達しえないものは天である。

○文政五年十二月八日（41歳）「宥座語を作る、曰く、功行を積累せば、造化を挽回す」

善い行為を積み重ねていけば、自然の働きを引きもどせる

○文政七年正月二十日（43歳）「治疾六術を定む、一に服薬、二に節食、三に労体、四に省思、五に折神、六に修徳、六者の次第は粗より精に入るなり」

病気を治療する六術を定めた。一に薬を服用する、二に食事を節制する、三に身体を働かせる、四に思慮を少なくする、五に神に祈る、六に徳行を修める、六つのものの順序は、粗略なものから精細なものに入っていく。

○文政七年三月八日（43歳）「三事を為すに三門を開く。養生・勤業・修徳の三者は之を勉めること久し、既に十年を経て未だ功成ること有らず、蓋し其の門を得ざるなり。今、三門を開き此れに由りて入る、養生は減食に由りて入る、勤業は不息に由りて入る、修徳は不妄語に由りて入る。減食は一日にて功ありて十日にして小成し百日にして大成す、不息は三日にて功ありて一月にして小成し一年にして大成す、不妄語は一月にて功ありて一年にして小成し十年にして大成す。減食は則ち穀の腹に滞らず、不息は則ち事の身に滞らず、不妄語は則ち理の心に滞らず。三滞尽く消ゆれば、則ち坡公の謂ふ所の、身に疾なく心に憂いなきは人生の至願に其れ庶幾からんか」

三つのことを行なうのに、三つの門口を開く。養生・勤業・修徳の三つのことに努力すること久しいが、はやくも十年が経つのにまだ成功していない。たぶんその入り口の門が分からないのである。今、三つの門口を開いてここから入る。養生は減食（食を減すること）の門によって入る、勤業は不息（やまず続けること）の門によって入る、修徳は不妄語（いつわりを言わないこと）の門によって入る。減食は一日で効果があり十日で小成し百日で大成する、不息は三日で効果があり一月で小成し一年で大成する、不妄語は一月で効果があり一年で小成し十年で大成する。減食すれば穀物が腹の中に滞らない、不息であれば行う事が身の周りに滞らない、不妄語であれば道理が心に滞らない。三つの滞りが尽く消えれば、これはすなわち蘇東坡の言うところの、身に病疾なく心に憂いなきことは人生のこのうえもない願い、に近い

であろうか。

○文政十三年九月十六日(49歳)「夜、新宅に静坐し心に省みる所有り、予、挽回造化を作りて年有り、時に作し時に歇めて未だ成功を見ず、蓋し私欲が障を為すなり、是に至りて奮勵し、格法の学に従事し、人欲を滅して天理に純なるを以て歸と為さんと欲す、庶わくは上蒼眷佑し以て其の志を遂げんことを」

夜に新宅に静坐して心に反省するところがあつた。私は「造化を挽回する」ということを行なつて数年経つたが、時に行ない時にやめていまだに成功を見ていない。たぶん、私欲が障害となつていたのである。ここに至り奮い立つて勵み、道理をただす学問に従事して、人欲を滅ぼして天理にすなおになつてに帰服しようと思う。願うところは、上蒼(天)の情けある佑けをいただいて、その志を遂げていきたい。

○天保三年三月二日(51歳)「疾愈へざるを以て六事を翹む。一に服薬、二に減食、三に作善、四に散憂、五に禱神、六に理事」

病気がよくならないので六事を始めた。一は薬を飲む、二は食を減らす、三は善を為す、四は憂いをなくす、五に神に祈る、五に物事を処理する、である。○天保八年二月九日(56歳)「眼疾、益々甚だし。四忽を作る。煖を過すこと勿れ、煖を過せば眼を害す。飽を過すこと勿れ、飽を過せば氣を塞ぐ。厚味を食すること勿れ、厚味は瘡を醸す。名利を營むこと勿れ、名利は命を促す」

眼病がいよいよひどくなつた。四忽(四つのはならないこと)を作つた。暖かさを過ぎるな、暖かすぎると眼を痛める。食べ過ぎるな、食べ過ぎると氣持ちが塞がる。濃厚な味を食べるな、濃い味は腫れ物を生じさせる。名譽利益をはかるな、名利の思ひは寿命をせきたて短くする。

○弘化四年正月九日(66歳)「宥座語を作る、曰く、飲食を節して以て身を養ふ、名利を捨てて以て心を養ふ」

飲食を節約して身体を養う、名譽利益を捨てて心を養う。

## 二 「咸宜園」への移転—本格的な塾の開始

文化十四年、三十六歳の二月、淡窓は郊外の堀田村に塾を移転し、住居も新築して移つた。すなわち「咸宜園」の開塾である。その経緯は、淡窓が「余常に

市中を去りて村落に閑居するの志在りしかども、荏苒として果たさず」(27)と、以前から郊外の静かな環境で生活することを望んでおり、二年前の文化十二年、三十四歳の秋冬の頃、堀田村の伯父母の住む秋風庵の西面の地に住居を設けて桂林園の塾舎もその傍らに移そうと決意し、その畠八畝二十歩を購入していたのであつたが、この年限町に大火災があつて地元の大工が備えず、翌年には土地の方角を忌むことがあつて延びていたのであつた。そしてこの年になり、ようやく念願が果たせたのである。塾舎は主に桂林園の用材を解体して移築した。淡窓は、二月二十三日に堀田村咸宜園内に新築の西家に転居し、二月二十八日に塾が完成した。以後淡窓はこの咸宜園の地で七十五歳の逝去まで生涯を過した。

堀田村の秋風庵の隣接地に移転したのは、「余幼くして伯父母に養はれ庵中にあること五年なり。故に其の傍に卜居して伯父母の膝下に趨陪看侍して、以て幼時養育の萬一を報ぜんとす」(28)とし、伯父母の月化夫妻の傍らにいて幼児からの養育の恩に報いたいと思つていたのであつた。また、塾舎も移築したのは、病氣のために実家から塾舎に向き、塾生と生活を共にしていないため指導が行き届かず「塾生の行事に於て耳目行届かざる事多し。是を以て規律嚴ならず。遊惰の徒常に慣焉として自ら恣にせり。予其の弊を知ると雖も身己に婚を成せり。塾生と同居すべからず。一室を塾の側に築かんとするに、親戚不同意の人多し。因つて荏苒として果たさず」(29)と述べ、塾の規律が乱れがちであつたことを反省していたためである。

## 第三節 『自新録』

### 一 『自新録』上篇

淡窓四十三歳、文政七年、この年は厄年に当ることもあつて忌諱の思ひを『懷旧樓筆記』では「正月二十三日、初め予十九歳の時、庚申の正月二十三日に當つて発病し、後は至つて危篤に及び、生涯の一大病たりし(中略)庚申より二十五年なり。俗説に死喪凶変の事多く年忌によると云ふ、其の言往々微あり。予去年より既に此の事を以て畏れとし、諸事戒慎を加へたり。此の日に至り身体安康にして微恙なし」(30)と述べている。そこで、これまでの自己の行為を反省しこれからの行いを改めて新たにする志を述べるため、三月十九日に『自新録』を著した。

『懐旧樓筆記』では「三月十九日、著す所の『自新録』脱稿せり、凡そ二千八百余言なり。四月（十九日）に至って続編（下編）成る、字数大抵相同じ。初め余十八歳の時、袁了凡が『陰騭録』の旨に因って一萬善を行はんと誓へり。然れども其の事果さず。其の他行事も亦た悔ゆべき事多し。故に、斯に至って改勵の志を發す。且つ、今年は厄年に当れり。故に行事を修して天災を消せんことを默禱せり」（31）と述べ、『日記』の三月十九日の条には「自新録脱稿、凡そ二千八百言余。予、改勵の志有りて、其の行なくて久し。今より以後、庶はくば其の言を踐まん。今、此の書を以て証と為し、朝夕披覽し、造次にも忘れず、若し猶能はざれば、則ち生涯已めん」（32）と切実な決意を記している。

『自新録』（33）は自省自戒の著述であり、その言葉が漢文で簡条書き的に次々と述べられているものである。内容の大略は、自分の今までの柔弱な態度を改め、もっと積極的な態度を養い、剛い勇氣をもって人としての道を実践したいとの意を述べるものである。

最初の条は、自分の性情を述べ、これからは儒教の教えに服していく決意を述べたものである。「予が性は柔懦なり。弱冠の時に当り、老氏の書を読み其の柔を致し静を守るの術を觀て、大いに好む所に符す。是に於て二十年來の行事、皆此の中より来る。（中略）伯陽の術は剛を以て柔を用ふるにあり。予、乃ち柔を以て柔を用ふ、失する所以なり」と述べ、自分の性質は本来氣が弱く臆病であり、二十歳の時に讀んだ『老子』に書いてある「柔」によって静を保つ方法が好みに合っていて二十年來の行動はこれによつてきたが、実は「伯陽（老子）」の説の本質は「剛」によつて「柔」を用いるところにあつたのであり、自分が「柔」をもつて「柔」を用いてきたのが大きな誤りであつたとし、これからは「剛」を心がけるため「今より以後、務めて聖教に服し、剛柔動靜、唯だ義に之れ比しめば、猶ほ大過なかるべし」として、つとめて「聖教（儒教）」に従つて行動を律し、ただ義に親しんで修養を重ねていけば大きな誤りはおこさないだろうとする。ここに述べているように、本来「老子」の思想は淡窓の好みに合うものであつたが、この時期から老莊思想的態度を改め、従来學んできた儒教思想的態度を重んずるようになったといえよう。つまり、「老子」的な柔弱な性質を去つて、「儒教」的な剛強な性格に改めることを決意したのである。

以下、上篇について、反省、修養、養生について述べた主な箇所（原漢文）を

書き下し文で掲げることとする。（約三分の二強の条を、便宜的に表題をつけ分類した。）

### ① 性格の欠点について

○「余に三疾あり。曰く、懶惰、曰く、畏怯、曰く、鄙吝、三者は同じく出でて名を異にす。若し、其の一を攻破せば、則ち二者は自ら破れん」 自分の欠点を「懶惰（めんどろくさがつてなまける）」「畏怯（おじけておそれる）」「鄙吝（心がいやしくてものおしみする）」の三つだとし、その根源は同じなのでそのうちの一つを無くせば他の二つのものも無くなるとする。

○「纔に小利害に逢ひ、心動もすれば悸を生ず。子曰く、内に省みて疚しからざれば夫れ何をか憂へ何をか懼れんと。孟子の氣を養ふ説は焉れに本づく。及ぶ能はずと雖も、當に此れを以て務めと為すべし」 論語・顔淵篇にある言葉「君子は憂えず懼れず」や孟子の言葉「浩然の氣を養う」を実践しようとする心境を述べるものである。

○「剛を摧きて柔と為すは易く、柔を鍊つて剛と為すは難し。柔を鍊るの道は難事を習ふに在り。（中略）日に恐る可く憍く可き事を以て、日に相切磨すれば、則ち心胆自ら壯に、勇氣自ら生ず（後略）」 剛の性格であれば柔の性格となるのは容易いけれど逆は難しい。自分は柔の性格なので、剛の性格になるには難しい事業に取り組むことであり、それに日頃から努力すれば、胆力も勇氣も生じるとするのである。

### ② 老子の批判

○「知者の言はざるは其の知に晦き所以なり。愚者の言はざるも亦其の愚に晦き所以なり。道德の宗旨、常人より之を學べば、唯だ是れ拙を藏するの具のみ」

『道德經（老子）』の言葉「知る者は言はず、言ふ者は知らず」の主旨を、普通の人が學んで単に「言はず」を実行すればまずい結果となることを述べ、「老子」を批判するのである。

○「孝友忠信は人々の大節、（中略）節を執ること堅からざれば則ち徳流る。夙昔、邪説に蠱ふ所と為り、虚無因循を以て意と為す。其の四者に於けるは汎乎たり澹乎たり（後略）請ふ、今日より之を勉めん」 今日からは「儒教」の説く孝友忠信などの徳を堅く守つて、これまでの虚無因循などの「老子」的行為を廢することを述べている。「老子」について、昔日に邪説に惑つたと厳しい言葉つかいをし

ている。

○「素より、物の先と為らずの説を喜び、他人の事に於て一も問ふ所なし。若し来りて請ふ有らば、則ち拒み違はず、殆ど身事を敗るもの数ばなり。今より以後、苟しくも人に益有れば、必ずしも其の請ふを待たずして之を為さん。其の請ふ有るに及んでは、当に是非利害を詳らかにして以て之に従事すべし。」 以前は『老子』にある「敢へて天下の先と為らず」という消極的態度をとって、人の請いを拒まなかつたため自分の身を損なうことが多かつたことを反省し、今後は請われずとも人に益あれば行ない、請われればよくその是非利害を検討して応じるといふ積極的態度でいくことを述べる。

### ③ 修養について

○「(前略) 凡そ人來りて事を謀らば、必ず速答すること勿れ。尋思一夕、其の是非を審らかにし、若し夫れ大事ならば、諸れを親戚に詢ひ、諸れを卜筮に咨り、而る後之を断す。既に之を断じて後、復た思ふ勿れ、復た謀る勿れ。(後略)」  
人との謀り事には速答せず、よく尋思して決断し、それ以後は迷わないことをいふ。

○「寧ろ人情に失するも小利を捨てざるは賈豎の剛なり。寧ろ大事を誤るも人情に傷らざるは婦人の仁なり。故に、至者は剛なるかと疑はれ、至弱は仁なるかと疑はる」 ややもすると、商人が人情を捨ててもわずかな利益も無視しないのは剛さであり、婦人が大事を誤つても人情を大切にするのは仁(思いやり)であるとされるので、各齋に徹するのは剛であり弱過ぎるのは仁だと思われがちだが、そのような極端なことは非であるとする。老子流の各と弱を廢して、真の剛と仁を實踐する上での心がけであろう。

○「君子は公に奉じ、小人は身に當む。義に喻り、利に喻るは、勢ひ然らざる能はず。但だ、我輩平日講習する所のものは何物ぞや。若し仕へざるの故を以て卑劣の念を存せば、独り黄卷中の人に愧ぢざらんや」 君子とは公に奉じて義に通じている人だが、自分は公に仕えず自由気儘な身である。そのため、もし卑劣な思いを抱けば日ごろ教授している書物の中の君子に愧ずべきことであると反省するのである。

○「神に謁し鬼に奉じ、生を賈し死を弔ふは、人生の常事にして、夷狄に之くと雖も棄つ可からざるなり。予、懶慢自遂にして人事を曠廢する者を觀るに、其の

家を破らざれば、則ち其の身を夭す。殷鑑遠からず。寒心をなすべし」 淡窓が日ごろから諸神を拝み先祖を祭り、生誕を喜び死を弔っていたことは、その日記を読めばよく分かるのであるが、怠惰で勝手気ままなため、そのような人として為すべき事を空しく廢する人が家を潰すか早死にするかしているのを觀ているので、そのような失敗の例を戒めて慎みたいとする。

### ④ 応接・交友について

○「人請求する有りて、固く拒むに忍びず。往々諾して果さず。若し其の人に逢はば、之が為に赧然たり。伝に曰く、其の諾責有らんよりは寧ろ己に怨み有れと。又曰く、華にして実ならざるは、怨みの聚る所なりと」 自分の柔儒の性格のため人の請いを拒むことができず、約束が果たせずに恥ずかしい思いをしているので、怨みを買つても最初からことわつて承諾しないほうがよいことをいふ。

○「人に接するの際、尤も宜しきを得ることを要す。苟しくも礼に中らざれば、恭敬これ傲慢と其の失は一なり」 人との応対では宜しきを得ることが必要だが、そこに礼の心を欠けば、恭しい態度も傲慢な態度と同じく失当であるとする。応対に礼の心をもつべきことを言っている。

○「人の賢不肖は学と無学とに在らざるなり。我の友を取るに未だかつて此れを以て限りと為さず。人の難に急なる者の如きは固より論を待たず。言に信ある者、剛にして能く断する者、世事に老けたる者、一芸に長ずる者は、皆我が益友なり。(後略)」 友として、学の有る無しなどの外面的なものに拘らずに交流すること述べている。人の非難ばかりする人は論外だが、言葉が信用できる人、心が剛くて決断力に富む人、世事に長けた人、一芸に秀でた人が、自分の益友だとしている。淡窓もこのような人を理想として目指していたものと思われる。

○「妬心深き者は内に争ひを生じ易く、与に交を結ぶべからず。又、与に事を謀るべからず」 嫉妬心の強い人は外には表さないが、内部では争いごとを生じやすいので、そのような人と交を結んだり事を相談してはならないと戒めているのである。

### ⑤ 養生の方法

○「養生の方は、事を省くに在り。事を省くの方は、欲を寡くするに在り。欲は事の由りて生ずる所、其の欲を塞がずして其の事を省く、故に、身静かに心動くの害有り」 養生の方法は行う事を省くことだが、それには欲を少なくする必要

がある。欲望は事の生じる原因なので、その欲望を塞がずに事だけ省けば、身体は静かで心が動揺するという弊害が生じる。養生の道の根本は、欲を少なくすることにあることを述べている。

○「予、多病を憂へて以て人に問ふ。人曰く、百事を放下して蕩焉として自肆すれば、則ち病は自ら癒えんと。此れ至言なり。然れども、我が能くする所に非ず。其の人に度らずして言ふは、忠告有りて善導は未だし」　すべてを捨て去りのびのびと恣にすれば病気は自ずと癒えるだろうという忠告は、有り難い言葉だが、自分には日常の勉強・教育の勤めがあつてとても実行できないことであることを述べる。淡窓にとつては、日常の生活や仕事を勤勉に務めることが養生および修養であつたのである。

○「二年来、昼間には想多く、夜間には夢多し。精神擾々として、動悸已まず。此の病至つて深く、速かに治すべからず。若し、其の源を窮むれば、凝滞より生ぜり。今、三事を建つ。曰く、食を減ず、曰く、事を勤む、曰く、誠を用ふ。食を減ずれば則ち穀は腹に滞らず、事を勤むれば則ち事は身に滞らず、誠を用ふれば則ち理は心に滞らず。三滞既に消ゆれば、病自ら抜けん」　淡窓が如何に養生に努めたかは、その日記の記事に散見されるが、ここでも精神の不安定を心身の滞りとして、そのため「食を減ず」「事を勤む」「誠を用ふ」ることを自戒している。

○「一日三飯、一飯一合、此れを過ぎて以往は、害有りて益無し。酒は飲むべからず、極めて停滞し易し。饘飩糖飴は、最も食すべからず」　淡窓は、健康上において最も「過食」を戒めて用心していることが分かる。また、酒と甘いものも避けるべきだとする。

### ⑥諸事の心得

○「疾病の方に困しき時は、世間一切の毀譽得失、皆心に関せず。其の小間あるに及んでは、百端鋒生ず。人心の變じ易きこと此の如し。若し、病時の心を以て平日の心と為さば、道を違ふこと遠からず」　病気に苦しむ時の世事に一切関与しない心を、日常生活でも心得れば道を誤らないだろうとするのである。

○「家の事あるは、猶ほ田の草あるが如し。務めて之を芟除し、滋蔓せしむること勿れ。故に、事の省くべきは之を省き、省くべからざるは勤めて之を行ひ、少しも停留すること勿れ。(後略)」　家事雑用は草の生えるように次々と生じるので、無用の事は務めてこれを省くこと、また、必要な事は速やかに行なうことを

いつている。

### ⑦詩文の道について

○「詩文を作る時、食らへども味を知らず、寝ぬれども席に安んぜざるは、是れ其の常なり。今四十を過ぎて精力転た衰ふ。顧みるに雕蟲の小技にて、身を以て焉に殉ずるに至らざれば可なり」　淡窓は、詩文を作ることに没頭したが、精力の衰え始めた今からは、あまりそればかりに精力を費やさないようにすることを述べる。

○「詩文の道、主意先づ定るは是れ天授なり。辞を以て之を飾るは、人力に存す。若し其の辞を巧にせんと欲して其の意を改めば、展転推移して何ぞ期の極まること有らん。思の苦しむ所以なり。是を之れ人を以て天を滅すと謂ふ。殃を招くの道なり」　詩文においては、先ず感動感興などによつて主意が定まるのは天授であるので、表現を巧みにしようとしたらずらに辞句を飾り立てその主意を損なうのは、最も大きい誤りであることを戒めているのである。

### ⑧実践の決意

○「身上の事は、唯だ此の三件のみ。曰く、業を勤む、曰く、生を養ふ、曰く、徳を修む。今、一昼夜を分ちて十と為し、五分は業を勤め、二分は逍遙し、三分は睡寢とす。逍遙、睡寢は即ち養生なり。唯だ徳は形無し。二者の理に当たり、徳を外に求めず。此れ、為し難きの課に非ず」　淡窓は、日常の行為を「勤業」「養生」「修徳」の三つの行為に分け、一日の半分(12時間)は「勤業」つまり学業・教授・詩作などや、家事・応接・日常雑務などに費やし、十分の二(約5時間)は散策・運動、十分の三(約7時間)は睡眠に費やすが、これらは「養生」であるとする。「修徳」については形として表わせないが、「勤業」「養生」の二者を「理に当たる」ように心掛けることがすなわち「修徳」であり、この実行は難しいことではないとする。つまりは、日常生活における行動を全て「修徳」であるように行ふすることとなり、それを実践しようするのである。

○「語に曰く、為さざれば何ぞ成らん、行かざれば何ぞ至らんと。故に、千日之を言ひて、一日之を行なふに如かず」　言うよりも実行こそが大事なことを戒め、この著述で言つたことのこれからの実践を決意しているのである。

## 二 『自新録』下篇

『自新録』の下篇に移り、その内容を見てみる。下篇は、上篇を書いた約一カ月後に「自新録成り、既にして意の足らざる所有り。更に数十条を草し、前に著す所に配して上下篇と為す」とし追加したものである。

まづ最初に、自分の八歳から塾を経営してきたこれまでの学業の経緯を述べ、今日あるのは「父と師との力」によって起こり「門生より扶持せらるる」ことよってしているとす。しかしながら、自分の本当の志とは異なっている真情を述べる。それは「二十年来の事業、若し戸を閉じて書を読み、或は四方に遊学するは上策なり。帷を降して教授するは中策なり。既に己の為にせず亦た人の為にもせざるは下策なり。所謂門生の扶持する所と為るは、豈に真に計を得たりと為さんや。今にして上策に出でんと欲するも、勢不可なり。悲しいかな」と述べることく、淡窓の志は、機会があれば京都・大坂・江戸など諸国に遊学して、静かに学問に専念したいというものであったのである。しかし、今となっては、自分の健康や周囲の事情で、その行動には向かえないことを悲しむのである。

### ① 詩作への偏りの反省

この次に、自分の学業が「詩」に偏向し過ぎていたことや、中途半端であったことなどを次々と反省している。

○「十五六歳以前、経を講じ、史を読み、文を属し、詩を賦す、業は専らとする所無し。既にして意は詩に属す。是に於て経史を治めず、文章を作らず。一生の失路、実に此れより始まる」

○「博覧多通は学の基なり。先づその基を立ちて、而る後、識見が生じ、議論が立ち、文章が成る。詩を賦するは乃ち文章の余事のみ。従来の為す所事々転倒するは、名を成すに急にして実を務むるに略なるの過なり」

○「書を読み万巻を破らば、筆を下すに神あるが如し。此れ学の詩を助くるなり。予乃ち詩を以て学を廢す。且つ、詩を学ぶには、日に課を建て月に程を設けて半生の力を費やさば、必ず成る所有り。予乃ち時に作り時に歇め、三十年作る所は僅々のみ。是等、又失中の失なり」

これらの反省の言葉は、そのまま受け取るべきではなく、淡窓が若年のころから実に詩作に没頭し、数々の名詩を作っていることを見ただけで分かるように、謙遜に過ぎる言葉であって、むしろ深い自省を述べたものと取るべきであろう。

また、詩以外の、経史や文章も、亀井塾の学業以来しつかりと学んでいることは、塾生との問答や教授の内容に表れているし、淡窓の多くの著作を読むだけで分かるのである。

### ② 性格の欠点

○「予の三疾、之を攻破せんと欲せば、宜しく懶惰より始むべし。他の二者は心に在り、細かにして見ること難し。功を用ふるも亦急に就き難し。懶惰は行事の上に在り。若し一分を減じ得ば、一分の成事有り。其の功、見ること易く、既に此の関を破れば、敵全く制すべし」 自分の三疾のうち、畏怯・鄙吝は心の中にあって細かく見えないが、懶惰は行為の上にあつてその改善の効果も見やすいので、この懶惰の性格の攻略から実践すべきだとする。

○「幼時疾少く、十五六以後疾多し。二十五六にして減じ、四十を過ぎて復た生ず。其の初めは、懶惰自適にして嗜欲を節せざるに由る。其の後は、世事外を攻め、思慮内に結ぶに由る。当に其の由る所に随つて之を治むべし」 二十歳前後の病患の原因は、懶惰で心のままに行動して自分の飲食の欲望を節制しなかつたことであり、四十過ぎの病患の原因は、外では世俗の仕事と苦闘し、内では思い悩むことであつたので、それらの原因となつているものを治めていくべきことを述べる。

○「喜怒哀楽は、宜しく滞りて内に在るべからず。予、四者に於て外は恬澹なるが如く、内は実は鬱結す。多病なる所以なり。試みに世間の寿康の人を観るに、率ね皆、樂しめば則ち笑い、哀しめば則ち泣く者のみ。古人、歌舞を以て樂しみを導き、哭泣して哀しみを導くも亦た是に由るなり。故に太上は情を忘る、其の次は発散するに如くは莫し」 喜怒哀楽の感情は、内に籠つてしまうとよくない。自分の喜怒哀楽は、表情は外目にはあつさりしているようだが、内部では実は気が塞がっている。世間の長寿健康な人を観ると、みな表情が素直で、樂しめば笑い哀しめば泣いている。したがって、最上の行いは、感情にとらわれないことだが、その次は感情を発散してしまうことだとする。

### ③ 修養について

○「人の説話を聴きて心毎に他事の上在り、既に茫然として記憶する所無し。所謂、心焉に在らざれば聴けども聞こえざるものにして、其の膠々擾々たる所以なり。蓋し、中に主なきが故なり。主有れば則ち定まる」 人の話も、常に

心が他の事にあつて、漠然として記憶がみだれていることがあるのは、心の中に主体が存在しないからであるとする。主体を持つというのは、心を散らさないで専ら一つのこと注ぐことだとして、続く次の条で宋学のいう「主一無適」という態度を語っている。

○「書生の政を為すこと、俗吏に及ばざるは、猶ほ医師の方書を研究するも、其の疾を治するに至りては草医に劣るが如し。大抵、理を窮むること太だ精しく、心を用ふること太だ密なる者は、事を行ふに必ず活動せず。氣に任せて敢行するの得たりと為すに如かず。故に、大事を作すは、膽を以て主と為し、識は之に次ぐ」

今日の儒学を学ぶ者は、政治の実務においては俗な役人に及ばない。理論の追究ばかりに努め励み、心を働かせるのにこまかい者は、大抵が実行すべきときに必ず活動できない。これは、心任せに無理に実行して成果を上げるのに及ばない。故に、大事を行なうには、胆が据わっていることが主で、知識は二次的なことであるとする。淡窓が、知識よりも精神を重視し、大事を為すために大胆に行動したいと考えていたと思われる。

○「世人、毎に己の長を以て人の短に較ぶ、曰く、我能く此の如し、彼却て此の如くあらずと。傍人より之を觀るに、(中略) 釈氏の所謂我慢是なり。平生極めて此の失有り。父母子弟に於ても亦た然り。近く其の非を覺り之を口に緘するも、而も其の念自若たり。此の念除かざれば、親に事えて豫を底す能はず、人に教へて悦び服せしむる能はず」

淡窓は、日ごろ自分の才能を自慢しがちなことを反省して、これは佛教でいうところの「我慢(自分の才能を誇って他人をあなどる態度)」だとし、近頃これを覺つて言葉を慎んでいるが、その心理は元のままなので、これを除かなければ親を喜ばせることもできないし、門人を悦んで従わせることもできないとする。淡窓が人に自慢した態度を示したことはそんなには無いと思われ、あくまで心の中の思いを語つたものであろう。

○「心に無用の理を思はず、口に無用の言を吐かず、身に無用の事を為さず、生を養ひ、業を勤むる、皆此れを以て要と為す。然りと雖も、事に臨んで選択して却て思慮を費す。此れ平日に心を用ふるに在るのみ」

心で無理な道理は考えず、口に無用の言葉を言わず、身に無用のことを為さずに、生命を養い、事業を勤めることが要諦であるが、その事に臨んだときに迷つて却つて思考が増えてしまふ。平日からしっかりと心をコントロールすべきことを述べる。

#### ④交友・応接について

○「昆弟親戚は、固より当に賢愚を論ぜずして之を厚くすべし。其の他は、交を扱ふに如くは莫し。事無ければ則ち其の切磋を資けて、以て徳を進むべし。事有れば則ち其の謀慮を藉りて、以て功を成すべし。乃ち我が友なり。(後略)」

交友の大切さを述べている。兄弟親戚はその賢愚に関わらず厚い交わりをするべきで、他人についても友を選んで誰とでも交際するのがよいとする。何事が無くても互いに学問の向上に努めて徳を研ぎ、何事か有ればその知恵・智謀を借りて成功にもつていくことができるのが、自分の友人であるという。

○「平生の大過は、自ら用ふるに在り。上は経訓に服せず、下は師友に従はず、其の人の言を聞きて、毎に以て迂と為し疎と為し粗と為し浅と為す。別に捷なるもの、密なるもの、精しきもの、深きものを求め、心を苦しめ思ひを焦がすこと、以て自ら致すなり。既にして之を顧み、何ぞ嘗て古人、老成を与するの見に出んや。古に曰く、問ふことを好めば則ち裕かなり、自ら用ふれば則ち小なりと。又曰く、知を好んで学を好まざれば其の蔽や蕩なりと。又曰く、思ひて学ばざれば則ち殆しと。此の三志は予の謂なり」

自分の日頃の大きな誤りは、「自用」つまり、自分の才知をたのんであらゆる事を自分ひとりの考えで処理することであるとする。経書や師友の教えに従わずに、それをつまらない考えとして、もつと精妙で深遠なものを求めて自ら苦慮してきた。これを顧みると、古人の言葉にあつて、書経の「他人に問えばゆたかになるが、自分だけの考えで行なえば成し遂げられない」や、論語にある「知識を好んでも学問を好まなければ、その害としてとりとめなくなる」を考へても学ばなければ危険である」という三つの語は全く自分のことを言っているとする。淡窓は、自分だけの考えで行なうことを反省し、経書や師友の教えを学ぶ大切さを述べたのである。

○「素と眼疾有りて、夜学ぶ能はず。一切の課程、皆昼間に在り。而も毎に応接に妨げらるる所と為り、課を終ふる能はず。皆白眼もて人を視るは、我が忍びざる所にして、彼も亦た未だ始めより其の害の此に至るを慮らざるなり。願ふ所は、惜陰の誠、人心に通じ、我人を絶たずして人我を絶たば、則ち大幸なり」

眼疾のため夜は学問ができなくて、すべての仕事は皆昼間にやらざるを得ないのに、人との応接に時間を取られてそれを終えることができない。私が人を冷淡な目つきで見るのは、私の忍びないところであるが、その人も始めから私の仕事をそれ

だけ妨げているのを慮ることができないのである。そこで願うのは、時間を惜しむ誠意が人に通じ、私から断らずに人から断ることとなれば幸いであると述べる。

#### ⑤自分の今後について

○「書を見ること一日に二十葉、十年積めば七万二千葉を得べし。文を作ること一日に百言、十年積めば三十六万言を得べし。詩を作ること両日に一首、十年積めば千八百首を得べし。東坡曰く、徐々に之を為せば十年の後何事か立たざらんと。真に格言なり。但だ我が疾病日に加はり、氣力日に減ず。是の如き軽任、恐らくは亦た負荷し得ず」 読書も作文も詩作も、継続して少しずつ実行していけば、十年経てば相当のものになる。しかしながら、このような軽易なことも、自分は日々に病気が高じ日々に氣力が衰えているので務めが果たせないだろうとする。

○「弱齢にして多病、足跡未だ嘗て海を踏んで東せざるなり。洛撰江都に神游すること久し。去年出でず、今年行かず、日月益々蹙りて腰脚転た衰ふ。此の事の成否、五六年の中に在り。若し五十を過ぎなば則ち望み絶えん」 淡窓は病弱であつたため思うような旅ができず、本州方面、とくに京都・大坂・江戸へは心に思つて遊ぶだけであつた。このごろは月日が迫り、足腰も弱るばかりで、旅行できるのはこの五、六年の内、五十歳を超えるとその望みも無くなると考えたのである。しかし実際は、五十六歳のときに尿道閉塞の手術を行い成功し、六十四歳頃までやや健康に恵まれたため、六十歳のときに旭荘の大坂行を下関まで見送り、始めて本州を踏む宿願を果たしている。この時期、大村、長崎、府内（大分）へも招聘に応じて旅行している。しかし、淡窓の生涯の旅行範囲は、本州は唯一下関のみで、北部九州内の範囲に限られたのである。

○「嘗て衰了凡の陰隲録の意に倣ひ、一万善を為さんことを誓ひ、而も終に果さず。心常に耿耿たり。今、当に之を遂行すべし。然れども日曆に事を記すは、実に煩に堪へず。彊めて善を為すのみ」 十八歳のころ衰了凡の『陰隲録』を読んできて以来、自分もそれに倣い一万善を実行しようとしたが、これまで果たせていないので、心が安らかではない。そこで、今からこれを遂行しようとした。しかし、毎日記録するのは煩雑に耐えないので、それはせず、努めて善行を実践するのみであると述べる。このち、十一年後の『再新録』では、やはり実行できなかったことを反省する結果となつてはいるが、そのときには、まさにこの記録を嫌つ

て怠つたことがその原因であつたと反省し、『萬善簿』の記録を始めるのである。

○「予門生をして、毎月読む所の書若干巻、作る所の文若干言を録せしめて、之を籍に載せ、以て勤惰を考ふ。今よりして後、予も亦た是の如くし、内は以て自ら勉め、外は門生を勉めしむ。甲申の三月より始む」 門生に、毎月読んだ書物の数巻、作つた文章の幾らかを記録させ、これを帳簿に載せてその励みと怠りの状況を考課している。私も、今後門生に課していることを自分にも課し、内にあつては自分も勉勵し、外では門生を勉勵させるよう努力しよう。これは甲申の年（文政七年）三月から開始する、と決意を述べて終つてはいる。

#### 第四節 『約言』の執筆と大病

##### 一 『約言』

文政八年、淡窓四十四歳のとき、四月五日、『約言』の初稿となる『敬天説』を脱稿している。これはのち、四十五歳のとき改稿して『約言』と改称され、四十七歳のとき更に改稿して『改稿・約言』としており、また『約言或門（漢文）』『約言或門（和文）』という問答形式の解説的著作も著しており、淡窓が最も精力を注いだ主著とされるものである。ただ、淡窓はまだ手を加えて改稿しようとしていたためか、生前には出版されていない。この時期は、淡窓は老子などの他の思想を廃し、儒教思想の探求に没頭していたといえる。

『約言』（34）は、儒教の經典の六經（詩經・書經・礼經・樂經・易經・春秋）について探求したもので、「六經の旨、一言にて尽すべし、敬天これなり」として儒教經典の述べている趣旨は「天」の思想であり、その「天」を敬い畏れ、その教えるところの「善」を実践することが人の道であることを精しく述べたものである。「天」とは宇宙万物の主宰者であり人間にとって不可知の存在であるが、すべてを知るものである。「天は善に福し、悪に禍ひす」として、善の行為をすればよいことがあり悪の行為にはむくいがあるという禍福応報論を展開している。最終的には、「敬天の旨、天命を樂しむを以て主となす」として、天の命するところに安んじて樂しむことであるとしている。この思想は、淡窓のこれまでの修養の経験と実践、さらに『陰隲録』にある禍福応報の考えが基礎になつて、深い思索を通してたどりついた結論とも言えるもので、いわば淡窓の信条ともなつ

たものである。ここで説かれる「善」の行為が『萬善簿』の実践である。

## 二 生涯最大の大病

文政八年、淡窓四十四歳に、生涯最大の大病を患う。八月頃からだんだん病が悪くなり十二月に急に悪化した。尖圭コンデロームという病気であったといわれるが、周りのほとんどの人が今回は助からないと思つたほどの病状で、これ以後毎年尿道閉塞などの病に悩まされることとなつていく。『懐旧樓筆記』には「余、生来三大厄あり。一は十九歳のときの疝の患なり、二は二十六歳の時の疫症なり。三は此の度の病なり。三つの内、今般最も重し。その余患十余年を歴て猶ほ患をなせり。誠に生涯の一大劫なり。此般は世人も必ず死せんと思へり。然るに天幸ありて免るることを得たり。若し、此の時に死せば、一生の事業成就する所の半に及ぶこと能はず。死後又一人の知る者もなかるべし。嗚呼、天地神明佑護の恩、親戚朋友看侍の力、豈に少しも忘るべけんや。是より以後は再生の身なり。務めて功德を修し、上は天地神明の恩を報じ、下は親戚世人の力に報ずることを思はずんばあるべからず」(35)とあり、幸いに平癒した後、天地神明の恩、親戚朋友の恩に感謝し修養の決意を新たにしたのである。翌年の春には病状が落ち着き、それ以後は病床で過して療養に勤めたが、翌年文政九年・翌々年文政十年の二年間に亘り『日記』を書くのを中断している程の苦しい病状であった。

## 三 謙吉への塾政の移譲

天保元年、四十九歳、閏三月五日、嗣子の謙吉(旭莊)に塾政を譲ることが決まった。このとき謙吉は二十四歳で、すでに宇佐の浮殿で塾を開いたり、対馬藩田代領(鳥栖)の藩校東明館で淡窓の代理として講義を執っていたりして、塾の責任者としての任には十分の資格があったが、本人に遠遊の志があつてなかなか決まらなかつたものであつた。八月に、淡窓は謙吉に塾経営の精神や廣瀬家の事を、自分の経験と反省自戒を込めて書きしるした『謙吉へ申し聞かせ候事』(36)という書を与えた。十二か条に亘つて懇切丁寧に記されたもので、文末に謙吉本人のほか兄弟の請書と父親の奥書きを連署で取つてあり、重大な文書として取り扱つたことが知られる。

塾の教授のことについては、「教授の儀は二十年来心を砕き候につき、手覚え候

処も之有り、門下も他方よりは繁盛に候(中略)凡そ席序の法、分職の法、課程の法、試業の法、一切の規約等、何れも二十年来の工夫を以て或いは増減し或いは改革致し置き候」と、これまで二十年来のこまかい工夫で、塾生も増えて繁盛しているが、「心の用い方親切に之無く候ては行き届き申さず候」「我等其の方は門人の力を以て妻子を養ひ候得ば、第一の天職なり。努々粗略に存す可からず」と、塾生の教育指導には十分に心を用いることを戒め、「教化を先にして賞罰を後にし、口を以て教へず身を以て教へ、月日を経て自然と人の化する様に致す可く候」と、身を以て懇切に教導していくことを論じている。塾生の扱い方については、「凡そ諸生は皆少年英気の徒にて桀驁にして制し難いので「凡そ悪事の出来るべき根源を推窮して其の処に嚴禁を設けて之を制す」るため規則を設けてこれに従わせるのだが、「さて禁を嚴にするからは、禁外の事は如何様に致し候ても一切差し許し置き候、是は一弛一弛の道理なり」と寛大な心が必要なことも教えている。そして、自分のこれまでの反省について「幼少より心得違ひの筋多く、近年に及び追々に改め後候段、著述の自新録に申し置き」しているが、その大事な点を録せばとして、「第一は、父母に孝順ならざる事なり。病身は天災と申す内、兼ての保養行き届かざるより起り候得ば、不孝の罪遁れ難く候。(中略)二は、兄弟親族の為に力を尽さず、是は懶惰より起り、(中略)第三には、朋友の諫めを用ひず、(中略)此の三は我等が懺悔話なり。今日に至りては自新の志切なりと雖も最早精尽き力衰て奮励の勢なく、動もすれば故態を生ず。且つ往事は悔ても歸らぬ事多し。一たび其の事を思ひ出せば食に当りても箸を擲ち、中夜にも起きて膺を打ち落涙袖を湿すのみなり」と、これまでの過ちを深く悔いていることを述べている。

なお、廣瀬家の家訓について「祖父の御訓に、心は高く身は卑くすべしと仰せ被れ候由、大人より毎々承り候。誠に金言と申す内、我等其の方の為には別しての切なる語に候得ば、終身服膺致す可く候」と紹介しているが、これは今も「心高身低」の家訓として知られている。また、廣瀬家の家法として「慈悲仁恕を専らにして刻薄の行なく親戚を親み下人貧者を恵み殺生を戒る可く候」「恭儉を主として衣食住に奢らず人の高席を望まぬ可く候」などをあげ「是は御家法の他に勝れたる処にて子孫長久の基なれば子々孫々永久に忘却致す可からざる可く候」としている。これも、今日までの廣瀬家繁栄の基礎となつた教訓であろう。

十二月五日、謙吉に家塾を継がせるため退隱を実行した。「是の日吉辰たるを以

て、予夫妻西家より新築の書齋に遷り、謙吉講堂より西家にうつる。予は妻をして炊かしめ、婢は西家に留めて謙吉に役せしむ。(中略) 伝家録二巻を撰して謙吉に与へたり。此の日よりして塾中政令、皆謙吉に属せり。然れども書を講じ詩文稿を冊り月旦評を作るとは、大抵予が手より之をなせり。明年元旦以後入門する者を以て謙吉が弟子と定めたり(37)と述べている。「伝家録」とは「謙吉へ申し聞かせ候事」の書である。

## 第五節 『再新録』―万善簿の開始

天保六年八月二日、淡窓が五十四歳のとき、再び自省の書である『再新録』(38)を著して、再度の善行の実践を決意している。この時期、淡窓にはさまざまな心を痛ましめる事件が生じていた。天保元年、淡窓四十九歳のときに塾政を嗣子の謙吉(旭狂)に譲り退隠したが、塩谷郡代の意に添わなかったためか謙吉とは尽く対立し、翌天保二年から郡代の塾への圧力・干渉いわゆる「官府の難」が起り、「月旦評」の作り直しや「都講」任命の強制などが引き続いていたことや、天保四年、五十二歳、九月から十一月まで、四十四歳の大病以来の大患(このとき「死を慮るの心」が起り、快方に向かった病床で『遠思楼詩抄』の編纂を思い立っている)に苦しみ、天保五年、淡窓五十三歳のときには父三郎右衛門(桃秋)が八十四歳で亡くなり、同年にまた最愛の高弟・中島子玉が三十四歳で亡くなり、またこの天保六年閏七月十一日には、孫娘(謙吉の長女)ヨミが一歳六ヶ月で亡くなったのである。

このことについては、『懐旧楼筆記』に「八月二日、再新録一卷脱稿せり。初め前月九日に当り孫女の疾、極めて重し。予退隠以来、憂戚の事重り至り際限あることなし。此の後、如何なるべきや、憂歎の余り心の置くべき所なし。因つて又祖先の位前に至り一筮を設けたり。(中略)予ここにおいて以爲へらく、運数已に尽きたり。祖先も亦た力に及びたまはず。此の上は、憂歎益なし。如かず、聖人朝に聞き夕に死すの訓を奉じて一日にても道を行はんにはと。其の日より断然として自新の志を發せり。十二年前、四十三歳の時、自新録を撰す。然れども其の言をふむこと能はず。故に再び改励を加へ、其の旨を述べて再新録とす。筮後三日(七月十一日)、孫女歿せり。これ(易筮の)漣如の象に応ずるなるべし。時に

憂戚甚しと雖も本志巽然として動かず。此の時より功過格を立て、日間の行事を記し、一万善を成就せんことを誓ひたり(39)と述べられている。たび重なる憂苦の事があつて、孫娘の生死を易筮で占った日(七月九日)に、これまでの自分の行為を再び反省し新たな志を立てたのであり、ついに孫娘のなくなった翌日(七月十二日)から起稿しそれを『再新録』として八月二日に脱稿したのである。

同時に、孫娘のことを易筮で占った日(七月九日)より一万善をめざし『萬善簿』の功過格の記録を始めている。この『萬善簿』の開始には、孫娘の病気が非常に大きな動機を与えているのである。『日記』には、七月六日から十日まで「憂」の一字だけの記入、病没した十一日から十八日までは「哀」の一字だけの記入であり、十九日の記事には「哀いかな。嗚呼、斬衰の袂未だ乾くに及ばざるに、又悲痛に遭ふ。何ぞ天、過を悔ゆるの緩やかなるや。往事を追念して焦心裂腸す。蓋し亦た念ずる勿れ(40)とあり、父の死での喪服の袂も乾かないのにまた孫娘の病死という悲運に遭つたが、天は何ぞ過ちを悔いるのが遅いのであろうかと、悲痛な心中を記している。その後も二十七日まで日記の冒頭に「哀」の字を記している。『再新録』については、『醒斎日曆』の八月二日「再新録脱稿」の脚注に「前月十二日を以て草を起し、此に至て略ぼ成る。更に他日待つて修飾潤色し、以て人に示す可きのみ。此の書の作は、本、憂に遭ひ且つ畏れ有る為に作る。必ず其の言を踐まば則ち善書と為る。否ならば則ち徒に筆墨を費やすのみ。能く踐むと否と、萬善簿を待ちて之を驗す。然らば則ち此の書、之を萬善簿の序引と謂ふも可なり(41)として、『再新録』は『萬善簿』の手引きの役割をなすものとしている。

まず、冒頭の条に「予、嘗て自新録の作有り。今其の未だ及ばざる所を補ふ。名づけて再新録と曰ふ」とあり、次に一万善の実践についての思いを述べる。「自新録に曰く、嘗て哀了凡の陰隲録の意に倣ひ、一万善を作さんことを誓ひ、而も終に果さず。心常に耿耿たり。今、当に之を遂行すべし。然れども日曆に事を記すは、実に煩に堪へず。強めて善を為すのみ、と。予の言、此の如し。而して所謂強いて善を為すもの、終に成功なきは、乃ち日曆に事を記せざるを以てなり。故に、今時乙未閏七月九日を以て日曆を編み、行事の功過を具に此に載せ、月にして計り歳にして考へ、必ず一萬の数を充さん。疾病事故有りと雖も、敢へて怠廢せず。昊天后土、実に此の言を聞け」四十三歳のときに著した『自新録』では

『陰陽録』に倣つて百万善の実践をめざしたがついに果たせなかつた。それは、日々自分の行為を記録するのは煩雑に耐えないため、記録するまでもなく善行を實踐すればよいのだと考えていたためであつた。淡窓は、これを深く反省し、煩雑でも記録を行なわなくては達成できないことを痛感したのである。そこで、この年の閏七月九日から毎日記録することを決意して、あらためて一万善の實踐を開始したのである。

『再新録』は、自分のこれまでの反省とこれからの志を、漢文で箇条書きに次々と述べたものであるが、主な箇所(原漢文)を書き下し文で抄出してみる。(約三分の二強の条を、便宜的に表題をつけ分類した)

### ①前録の誤りについで

○「前録に、懶惰、畏怯、鄙吝を以て三疾と為す。又、懶惰を改むるを以て著力の処と為す。其れ言に似たり。然れども三疾終に一改無し。是れ未だ病症の本末有るを察せざるなり。三疾は鄙吝を以て本となす。此の心、根と為れば、則ち義を見ても為さず。懶惰、畏怯、皆此の中より來たる。夫れ、懶惰に克つに精進を以てし、畏怯に克つに勇猛を以てし、鄙吝に克つに慈仁を以てするは、是れ対治の法なり。但し、人君の道は仁に止り、而る後、智勇の士を以て之が輔と為す。心も亦然り、慈仁を主と為し、而る後、勇猛精進し、始めて之が用を為す。旧來の為す所、本末倒置す。(後略)」 懶惰・畏怯・鄙吝の三疾について、『自新録』では懶惰を改めることを最も重視していたが、それは本末を転倒していたと反省し、慈仁の心でもつてする鄙吝の克服こそを基本とすべきことを述べている。淡窓は、慈仁の實踐を重視するのである。

○「前録の首に、老子を誤読して柔弱に失するを以て言と為す。是も亦其の末を認むるなり。伯陽の学は、楊朱の為我の祖、柔弱は用を為し、専ら自私自利に由りて來る者なり。苟しくも其の私を去れば柔と雖も必ず剛、弱と雖も必ず強なり。聖人云く、仁者は必ず勇有りと。力を仁に用ふれば、安んぞ其れ終に貴育と為らざるを知らんや」 『自新録』で老子の「柔弱」が自分の失敗の原因であつたとしたが、実は柔弱は有用であつて、私利によつて自己中心的な行動となるものであつて、私利を去れば柔弱も剛強となるし、仁を心がければ勇者ともなるとする。

### ②慈愛の心

○「慈愛の心は人皆之れ有り。而も利心一たび動けば、則ち慈を割き愛を捨て恩

を忘れ義に背き、至らざる所為し。(中略)大抵、利心奢と為り勉強して善を行へば、則ち一切の為す所、皆我が心に忤逆すること、猶ほ、連の口に苦きがごとし。慈心主と為れば則ち善事の心に順ふこと、猶ほ、餡糖の口に甘きがごとし。古人云く、善を為すこと最も樂しと。又云く、善を為して心樂しまざるは真善に非ざるなりと。慈心内に主となるに非ざれば、此の言の味有るを知らざるなり」 利の心を離れて、慈の心を主とすべきことを述べ、慈の心で行なう善の實踐は心を樂しませるものであるとする。

○「善事を行はんと欲して、而も慈念動かざれば、須らく仮に人を悦ばすの事を行なふべし。彼悦んで我を愛せば、則ち我の愛念も亦随つて生ず。(後略)」 善の實踐を行うのに慈愛の心が起きないときは、とにかく人の喜ぶ事を行なうべきだとする。

○「聖人の徳、無我を以て体と為し、人を愛するを用と為す。人を愛するは、骨肉より始む。骨肉の愛を厚くするには、須らく無常の二字を以て自ら觀るべし。夫れ、生者必ず滅し会者必ず離れ、今日歡会するも明日は必し難し。則ち恩愛の念、自ら已む能はず。是の若くならば、則ち一旦永訣するも、亦悔ゆ可き無し。会う時歡を尽くし、離るる時命に安んずるは、此れ兩得と為す。会ふて歡を尽さず、離れて哀傷に過ぐるは、此れ兩失と為す。或ひは云ふ、無常は佛家の語、儒生の言うべき所に非ずと。殊に知らず、天命常無しと、屢々詩書に見ゆるを。(中略)無常の義、大なる哉」 儒教の徳は、無我をその本体とし、人を愛することをはたらきとするが、人を愛するのは肉親への愛から始まる。それには、佛教で言う「無常」に立脚すべきとする。生者は必ず滅し、会者は必ず別れるという無常觀は、肉親への愛、他人への愛の根底にあるもので、儒教にも「天命常無し」などとして見えているとする。淡窓が佛教にも親しんでいたことは、墓誌銘の「文玄先生の碑」の文に「傍ら佛老を喜ぶ、世、稱して通儒と曰ふ」と述べていることから知られる。父親や孫娘を亡くした時期なので、いっそう「無常の義、大なるかな」と嘆じているのであろう。

### ③教育について

○「人材を教育するは、善の大なるものなり。従前の事業は専ら此に在り。而して之を善と謂はざるは、自私自利の意を以て主と為せばなり。今、退隱して家を伝ふ。教育も亦た門戸の計に關せず。則ち、先づ私利の念を去つて可なり。此の

念既に除けば、終日為す所、孰れか人を利し物を済ふの事に非ざらんや。万善の成る日を数へて待つべきなり」 人材教育は大きな善の行為であるが、自私自利の考えで行なえば善とは言えず、謙吉（旭莊）に塾政を譲つて退隠した今からは経営などの生計に関わらないので、私利の考えを去れることとなるので、毎日の教育行為が人のためになり物事を救済する行為であり、一万善の達成が期待できることを言っているのである。

○「月旦評を作りて門人を誘掖す。是れ、門下の盛なる所以なり。然れども、亦た其の弊少なからず。諸生の課程、外を務めて内を廢し、名を取りて実を捨つ。今之を矯めんと欲するも、三十年の旧習、遽かに変ずべからず。須らく善巧なる方便にて之を誘ひ、以て虚名の地を離れて実践の域に入らしむべし。此の工夫も亦た容易に非ず」 月旦評こそ咸宜園教育の最大の特色であり、淡窓が最も意を注いで作り、工夫を加え改定してきたものである。旅行や出張などで長期に留守にする場合にも、この月旦評だけは旅行先にわざわざ取り寄せて自分で評価作成していたほどのもので、いかに淡窓が重要視していたかが分かる。月旦評については、『夜雨寮筆記』に「余は其処に心を用ひたり。諸子の知れる如く、月旦評を設けて其の勤惰を明かにし、勤むる者は上に擢んで、惰る者は下に抑へ、榮辱を分ちて、惰夫と雖も一度我門に入れば勉励の心を生ぜしむ。（中略）才も不才も皆少しく成す所あり。是余が区々天職を奉じて素餐の責を免るるの本意なり。今は余が学徒、四方に於て業を講じ、弟子を誘引するもの多し。其の教法大抵余が為る所に倣へり。又、余が門人に非ざる者も、余が塾風を伝え聞きて模擬して是をするもの多し」と、その目的と効果と影響を語っている。しかし、その弊害もまたよく認識しており、「外を務めて内を廢し、名を取りて実を捨つ」という短所を生じやすいこと、つまり内面の修養勉強よりも外面の体裁を求め、実質の学力よりも形式的な名声を取るような傾向に悩んでいるが、これは今日のテスト評価中心の学校教育の弊害でもある。そこで淡窓は、これを改めるため、巧みな方法を工夫しようとするもすぐにはできないことを嘆いているのである。この後も、天保十一年、淡窓五十九歳、には「真権の法」をつくるなど月旦評の改善に取り組み、塾生の着実な勉学実践の工夫に努力するのである。

#### ④ 対応について

○「朋友門人遠方より信を通ずるは、極めて是れ厚意、而して之が報を為さず。

謂へらく、報ずると報ぜざると彼に於いて何の損益する所ぞと。殊に知らず、彼厚を以て来るに、我薄を以て往けば、則ち彼の意沮まる。是れ人の善を沮むなり。我毎に天道の報応を以て説を立つ。而して、人の善を我に施す者に報ぜず、能く人をして我が説を信ぜしめんや。今より以往、来書報ぜざるもの、宜しく一月を停留するを以て一過と為すべし。賓客衆多、応対に困しむも、亦た須らく此の意を以て之に処すべし」 淡窓は、多くの来客の応対や書信の返答に困惑していたようで、頼み事にいちいち答えるのを煩わしく思い、その返事が何の役に立つのかとして対応をしないことがあったとする。しかし、それは人の厚意を軽んじて人の善行を阻むことであり、まして禍福応報の説を立てる者としてはそぐわない行為だとして、これらの来客に一ヶ月以上返事しない場合は、萬善簿の一過に数えるとするのである。来客の応対も、また同じだとする。

○「一言を発するにも、須らく思ふべし、是の如く説けば是れ忠信なるか、是の如く説けば是れ忠信ならざるかと。一事を行なふにも、須らく思ふべし、是の如く做せば是れ篤敬なるか、是の如く做せば是れ篤敬ならざるかと。方に夫子の子張に告ぐるの旨に愜ふべし」 論語（衛霊公編）の孔子の言葉「言は忠信、行は篤敬」つまり、言葉にまごころがあり行いがねんごろであることを、人との応対で心掛けることを述べている。

#### ⑤ 善行の実践

○「余、素より殺を惡む。然れども、猶ほ卵を破り蛤を煮るの事有り。雞を割き鯉を膾にする若きは、之を家に於て行なはず。而して人此れを以て我に饗せば、則ち受けて辞せず。今より以後、須らく之を禁絶すべし」 殺生は悪行であるが、今までは、卵や蛤を食べ、鶏や鯉も人からもらえば食べていたのを、今後は禁ずる旨を述べているのである。

○「善の為さざるを得ざるものは、之を為すや難し。（中略）善の必ずしも為さざるものは、之を為すや易し。（中略）世人難きを避けて易きに就く。勢いの必至なり。今、須らく難きものを以て避けず、易きものも忽ちにせざるを意とすべし」 生魚を放ち人に施すなどは易しいことで、君に忠に父に孝を尽すなどは難しいことだが、難しいことも避けず易しいこともゆるがせにしないことを決意するのである。○「死を畏るるの念、禍を避くるの念、財を愛するの念、名を求めるの念、己を是とし人を非とするの念、往を悔ひ来を慮るの念、懂々として胸中に往来す。

前録に所謂、昼間に想多く夜間に夢多きは、實に是が為なり。今、須らく一切を掃除して、之を命に歸し、而して善事を行ふを以て念と為すべし。試みに論語の一句を以て之を蔽へば、曰く、仁者は憂へずと『自新録』で述べていた「昼間に想多く夜間に夢多し」という状態は、死を畏れる心、禍いを避ける心、財を惜しむ心、名声を求めめる心、人を誤りとし自分を正しいとする心、過去を悔い未来を心配する心などの雑念が、絶え間なく胸に浮かぶためであるので、今からこれを総て除去して、天命に歸し、善行を実践する心を起こすべきことを言う。論語の言葉で言えば、「仁者は憂えず」つまり、私欲を捨て天命に従って行動する仁者は憂いをいだくことはないという心境であるとする。

○「老年の工夫は、少壮と同じからず。(中略) 老年は則ち先づ諸念を除き、淡泊を自ら養ふべし。善事に至りては、力めて及ばざる所は必ずしも強めざるも可なり」 老年になれば工夫を加えることとなるが、まづ諸雑念を除いて淡泊な心を養い、努力して及ばなければ善事も強いて行なわなくてもよいとする。

#### ⑥ 修養について

○「人、中年の後に当たり、血氣衰枯を以て疾を得る。治方は宜しく先づ滋味を薄くし、情欲を絶ち、而る後、參耆の劑を以て之を補ふべし。心を治するも亦た然り。今日の務め、天命を樂しみて名利を忘るる、是れ滋味を薄くし情欲を絶つなり。慈愛の念を蓄ふ、是れ參耆の劑なり」 中年以降は血氣が衰え病気になるが、治療方策としては、まづ食事の滋味を薄くし情欲を絶つて、精力をつける薬を補うのがよい。心の治療も同じく、毎日の務めを名利を忘れ天命を樂しんで行なうことと、それを補うのに、慈愛の心を蓄えることだとする。

○「諸の逆境に遭ふては、須らく此の想を作すべし。我、責を天に負ふこと、本、数万券有り、今、天実に責を収むるなりと。我若し怡然として聴受すれば、則ち天必ず其の軽重多少に随つて其の券を焼かん。(中略) 然らば則ち逆境の来るや、是れ我が罪罟を脱するの期、稍や近きなり。喜ぶべくして悪むべからざるなり」

逆境は、天に自分の罪の責めの数万の証文があつて、喜んで受容すれば天の収めるところとなり、その程度に応じてその証文を焼いて減らしてくれることと考へれば、逆境の来ることは、自分の罪を脱する好機が近づいたことであり、喜ぶべきこととなるとする。

#### ⑦ 萬善簿の記録について

○「不平の事に逢ひ、怒心内に動くは一過なり。言色に見はるるは二過なり。行事に表はるるは三過なり」 不満の事があつた場合、萬善簿の悪行の数を、怒りの心が動くのを一過、言葉などに表れるのは二過、行動に表れるのは三過であるとする。

○「從來、過を改むるに、唯だ事上に従つて改め、心上に従つて改めず。謂へらく、心上の工夫は、上根の器に非ざれば能はずと。卑劣の念が内に存すれば、畢竟事も亦た改まらず、心も亦た改まらず。今断然、心上に就いて工夫を下さん。若し一念の不正、心中に動くこと有らば、必ず諸れを籍に記し、以て過惡の数に充てん。善念も亦た然り」 淡窓の『萬善簿』が単に善惡の行為を記録しているだけでなく、心理上の思考も記録していることは、それだけ真摯に自省して取り組んでいたことを示している。過ちを改めるためには、行動を改めるだけでは不十分で、心こそ改めねばならないとして、その心上の工夫をするため、不正の心は必ず記録することとしたのである。

#### ⑧ これまでの態度の反省

○「我が族、今郷閭の重んずる所と為り、頗る炎々の象有り。若し、時勢一変せば、則ち今日の遇は保つべからざるなり。予め善事を行ひて、以て後の福を祈れば可なり。之を要するに、謙虚愷損し、人を先に己を後にするを以て本と為すべし。若し、高きに因りて呼ぶの勢を恃んで心力を費やさざれば、小々の善事を行ふも、恐らくは車火勺水、相及ばざるなり」 今、廣瀬家が日田の地で繁栄しているが、時勢が一変すればその運も保つことはできず、努力を怠れば、少々のことでは衰退は逃れ得ない。そこで、予め善行を行なつて後の福運を祈るのがよいだろう。それは、謙虚でへりくだり、自分から退いて人を立てる態度をもつて根本とすることだとする。これは「禍福応報」の考えであり、また「老子」の説く謙虚で控えめな行為であつて、ここで儒教流の積極的な剛い態度を少し改めたものとみられる。

○「幼時、物氏の説を狂聞し、志は經濟文章に在り。正心修身は、諸を高閣に束ねて稍や長し。而して老子の専ら收斂自了を務むるを喜び、而して濟物の念亡ぶ。是れ我が一生の失脚する処、抑も伯陽、孔子は畏るる所、物氏も亦た一世の豪傑、唯だ我之を學びて方を失するのみ。咎を古人に歸すべからざるなり。(後略)」

これは自分の思想遍歴の反省を述べたもので、若いとき亀井塾で徂徠学を学び、経世済民の志と文章に興味があつて、長い間自分の修養については顧みなかったが、病気で帰郷して以来老子の学を好んで自分の養生に関心が行つて経世済民の心はなくなつてしまつた。これはどちらも偏つた態度で、自分の一生の失敗であつた。言うまでもなく、伯陽（老子）も孔子も尊敬すべき賢人であり、荻生徂徠も学問の世界を風靡した豪傑であつて、自分がその学問の学ぶ方法を誤つただけであり、古人に責任はないと述べている。孔子（儒教思想）も老子（老荘思想）もどちらも重要な思想であり、徂徠（古文辞学）も尊重すべきであるとするのである。ここで『再新録』を終つてゐる。

## 第六節 『萬善簿』

天保六年、淡窓は五十四歳のとき、『再新録』を著して再度の善行の実践を決意した。そのとき、四十三歳の時の『自新録』では、毎日自分の行為を記録するのは煩雜に耐えないためにかく善行を実践すればよいのだと考えていたためであつたと深く反省し、煩雜でも記録を行なわなくては達成できないことを痛感したのである。そこで、孫娘のことを易筮で占つた日の閏七月九日から毎日記録することを決意して、あらためて一万善の功過格の実践を開始したのである。

その方法は、善（功）を○、悪（過）を●で、その行為の軽重の程度による数量によつて記入して、月末に○と●の数を差し引きして集計し、それを通計して一万善をめざすものである。一例を挙げれば、善（○）は、勸人為善、用意教人、骨肉用恩、捨財利人、周旋人事、忠告、放生、善念などであり、悪（●）は、殺生、怒言、過食得疾、慳財、怒心、妄想などである。

『萬善簿』は、「敬怠考」と「義欲考」の二通りの構成となつてゐる。「敬怠考」は、善を勤める積極面の修養を意味し、「義欲考」は悪を制する消極面の修養を意味するもので、積極的行為と消極的行為の二つを分けて実践してゐたことが分かるのである。これは『六橋記聞』巻五に「敬は善を勤むるなり、怠は則ち惰なり。義は悪を制するなり、欲は則ち縦なり。予、亦た丹書の二十字を以て座右の銘と為す」とあり、『小学』の丹書の「敬、怠に勝てば吉なり。怠、敬に勝てば滅ぶ。義、欲に勝てば従う。欲、義に勝てば凶なり」という二十字の言葉に基づいてゐるのである。座右銘としたこの言葉と、『小学』にある「善、小なるを以て為さざるこ

と勿れ。悪、小なるを以て之を為すこと勿れ」の言葉は、『萬善簿』の毎月の表示の下に書き添えていて、つねに意識して実践したのである。小さな善でも積極的に行ない、小さな悪でもけつして行なわないという心掛けは、平凡なものに違いないが、この積み重ねが一万善を達成することとなつたのである。

『萬善簿』は、これより十二年七ヵ月後の嘉永元年一月六十七歳のときに一万善が達成されている。また、引き続き七十三歳まで記録を続け、六年七ヶ月で六千余を記録している。

現存する『萬善簿』では、淡窓が詩文稿、書簡控、雑録綴、米銭出納控などの余白に記録していて、廣瀬家の倉庫の奥深くしまいこまれていたものを、廣瀬家九代の貞治氏が発見し年次月日順に整理し製本したものである。淡窓は、あくまで自分自身の記録として余つた用紙に記入したのであり、人に見せようとしたものでは無いことが分かるのである。

## 第七節 『析玄』『義府』の執筆

### 一 『析玄』——『老子』の探求

淡窓は、『再新録』を著した翌年、天保七年五十五歳のとき『析玄』（42）を起稿し、天保九年五十七歳のとき脱稿している。これは、玄の哲学といわれる『老子』の書を解釈したものであり、この時期には再び『老子』の思想に戻つてゐるといえるものである。その結論は、「老子の旨、制数の二字に帰する」として「制数論」を説くもので、「数」とは形ある者の逃れ得ぬ必然の定めのこと、天地の自然界の現象は制することはできないが、人の運命は「無の用たる、数を制するの道なり」として「無」の実践で制することができるものである。「無」の実践とは、無欲で謙虚、儉約で富を分ち、質素に生活するといったものであるとする。

最後には「孔子（儒教思想）」と「老子（老荘思想）」の関係は、表裏のもので補完し合う関係であるとしている。この点が、これまで老子を好みながらも儒教を重んじようとするため、それを除こうとしていた態度が、それを超えて統合していこうとする態度に変わったものと捉えることができよう。淡窓が自分の学を

『文玄先生の碑』のなかで「其の学は大観を主とし、人と同異を争はず、旁ら佛老を喜ぶ、世称して通儒と曰ふ」と述べることに合致するのである。

## 二 『義府』―「易」の探求

淡窓は、天保十二年六十歳のとき『義府』(43)を脱稿した。『約言』『析玄』と並び「三説」と呼ばれる淡窓の主著である。これは、『易経』に基づき陰陽の理とその窮理論を展開したもので、「万物の理、必ず対ありて独りなるは無し」とし「天地、物を生ず、唯だ陰陽あり。二者位を得るを善と為し、位を失ふを悪と為す。得失は人に在りて、天地与らざるなり」として、あらゆるものには陰と陽があるので、その陰陽のバランスをとって並行させていくことが、すなわち人としての善の実践であると説くものである。そして、「物に在るを理と為し、物に処するを義と為す。理は天より出づ、義は我に由りて立つ」とし、「陰陽の理」は天より出た一定不変のもの、その物事に正しく対処することが「義」であるが、時と処でその対処の仕方が異なるものなので、「理」に通達して時処位をうまく活かしていく「義」の実践が大切であることを述べる。『約言』での敬天を主とし、『析玄』で数を制し、『義府』で義の実践を説くことで、その思索のまとめとしたものとみることができよう。『約言』『析玄』を経て、その思索のまとめとしたものが『義府』であるとみることができよう。

## 結 語

淡窓の一生は、病気に苦しみ、それを乗り越えるべく苦闘してきた生涯であったといえる。病弱なため、三大厄といわれる大病のほか、いつも何かの病気に苦しみ、さらには眼疾で読書などを制限しなければならぬ状態に悩んだ一生であった。一般的に、病弱な人の性質として、心が鬱屈し気も萎縮し、物事に働く倦みややすく、神経質になって憂え怒るようになり、ついには人を恨み、天をも怨むようになる傾向があるとされるが、淡窓も亀井塾から帰郷後の養生生活では、当然にそのような状態にあったものと思われ、自分の性質の三疾として懶惰・畏怯・鄙吝をあげて深く反省しているところであるが、淡窓はそのような状況をたゆまぬ努力と修養によってよく克服しえたのであった。それには、淡窓の賢く素直で誠実な性格が与っているが、淡窓が育った環境つまり廣瀬家の家風や、周り

の先輩恩師の影響も根底にあったものと思われる。廣瀬家は、敬神崇祖の念に厚く神社仏閣に詣でる敬虔な心、貧者に施す慈愛の精神に富む家柄であった。また、倉重湊のような忠言を行なってくれる恩人の導きが大きかったと思われる。『日記』をみると、淡窓も何事かあればよく大原八幡宮や稲荷社に参詣し無事安全を祈願しているし、毎年元日には「大神、聖像、歳神、諸神、祖先を拝す」ことを欠かさず行なっているほか、心配事があれば易筮で占い、また真言の咒を誦えたりしており、敬虔な性格であったことが分かる。このような素直で敬虔な心が、陥りがちな痛ましい状況を克服しえたのであり、「天を敬する」淡窓の思想にも結び着いたものと思われる。

塾を開き子弟の教育を自分の「天職」としてからは、つねに自分の行為を謙虚に反省して、過ちは正し、その改心の工夫を怠らなかつたのであった。淡窓の著作、なかでも『自新録』『再新録』はその自省自戒の著作であり、『日記』『懐旧楼筆記』にはその心情を隠さずに述べた箇所が多い。その自省と養生の集大成とも言えるものが『萬善簿』の実践であった。その実践とは、「天」の教えるところの善の行為を行なうことである。そこに見られる真摯で勤勉誠実に努力した姿こそ淡窓の偉大な人格の証しである。

その原点は若いころに読んだ『陰陽録』にあった。それに倣って真摯にその実行を幾度も試みているが、なかなか遂行できないことに悩み、晩年の五十四歳に至つてようやく実践の記録に取り組み、ついに達成を見たのである。その思想的な経緯では、儒教思想ばかりでなく老子の思想や仏教思想が影響も大きく、それに心を惹かれたり嫌厭したりして迷いながらも、深い思索を重ねていき、結果としていわばすべてを統合したものととして、淡窓の独自の「敬天思想」に結実させたといえるのである。その「敬天」の実践こそが『萬善簿』の実行となったのである。

(日田市咸宜園教育研究センター 研究員 深町浩一郎)

淡窓の事跡と病歴

西暦	元号	年齢	事跡
一七八二	天明二	1	四月十一日、豆田魚町の商家・広瀬家の長男として出生
一七九七	寛政九	16	一月、福岡の亀井塾に入門
一七九九	〃十一	18	十二月、病気のため亀井塾を去り日田に帰郷。このころ、「和語陰陽録」を読む
一八〇〇	〃十二	19	一二月、病状が極めて悪化（三大厄の一つ）倉重湊の治療を受ける
一八〇一	享和元	20	このころ、「老子国字解」を読む。このころ、「楞嚴経」を覧る
一八〇三	〃三	22	六月ころ、妹アリ（二十歳）兄の命に代らんと大誓願を仏に誓う
一八〇四	文化元	23	冬、倉重湊に相談し、その忠言により開塾を決意する
一八〇五	〃二	24	三月、豆田町長福寺学寮を借りて開塾
一八〇七	〃四	26	七月、妹アリ（秋子）京都で病没 八月、塾を転居して「成章舎」と名づける。「月日評」を始める 六月、豆田裏町に「桂林園」を建て移転 十一月、流行病に罹り重症（三大厄の一つ）
一八〇九	〃六	28	五月、福岡須恵に赴き、眼疾の治療を受ける
一八一三	〃十	32	八月、「日記」を記し始める
一八一七	〃十四	36	二月、堀田村秋風庵隣地に塾を移築、「咸宜園」と称す
一八二四	文政七	43	三月、「自新録」脱稿
一八二五	〃八	44	秋頃より大病（三大厄の一つ、最も重いもの）
一八二八	〃十一	47	五月、「約言」脱稿
一八三〇	天保元	49	閏三月、塾政を謙吉に譲る。八月、「申聞書」を与える
一八三五	〃六	54	七月、「万善簿」を開始する。八月、「再新録」脱稿
一八三八	〃九	57	十月、「析玄」脱稿
一八四一	〃十二	60	十一月、「義府」脱稿
一八四九	嘉永元	67	一月、「万善簿」一万善達成
一八五六	安政三	75	十一月一日、病没、長生園に葬られる

【註】

- 1 日田郡教育会編『増補淡窓全集』（思文閣 1971年）上巻「懐旧楼筆記」巻二十五 315頁（以下、『全集』と略記する）
- 「余、生来三大厄あり。一は十九歳の時の疝の患なり。二は二十六歳の時の疫症なり。三は此の度（四十四歳）の病なり」
- 2 古川哲史『廣瀬淡窓』（思文閣 1972年）29頁
- 3 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻八 94頁
- 4 『全集』 同 94頁
- 5 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻八 101頁 このとき買い求めて読んだのは『和語陰陽録』（無名道人（日召）訳 安永六年）である。
- 6 『全集』 同 101頁
- 7 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻二十三 299頁 『陰陽録』は、中国・明代の浙江省の人・袁了凡が自分の子のために書いた教訓の書である。「陰陽」とは陰徳の意味である。内容は、「立命の学」編で、了凡は自分の生涯を述べ、少年の頃に孔老人が占ってくれた自分の運命が尽く的中したので宿命論に陥っていたが、後に雲谷禪師に会い運命は自分から造りだすものであるという「立命」の説を教えられ、それ以降、功過格による善の実践に勤めて自己の運命を開拓することとなったことを記している。「謙虚利中」編および「積善」編で、謙虚で益を受けた人の例、善事を行なって善い報いを受けた人の例を数々あげてそれを証している。「改過」編で、心の工夫で過ちを改めることを説いている。「功過格」編で、雲谷禪師の示した功（善行）と過（悪行）の基準を簡条書きでそれぞれ五十条記している。
- 8 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻九 111頁
- 9 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻九 112頁
- 10 『全集』上巻「夜雨寮筆記」巻三 35頁
- 11 『全集』中巻「発願文」「重作誓願文」 1頁・2頁
- 12 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻十一 133頁
- 13 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻十 121頁
- 14 『全集』上巻「懐旧楼筆記」巻十 以下の引用は、125頁〜128頁

- 15 『全集』上巻「夜雨寮筆記」巻二 16頁
- 16 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十三 162頁
- 17 『全集』上巻「夜雨寮筆記」巻二 16頁
- 18 『全集』同 17頁
- 19 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十三 162頁
- 20 『日記』は「淡窓日記」「遠思樓日記」「欽齋日曆」「醒齋日曆」「進修録」「再修録」「甲寅新曆」の七編よりなっているが、すべて『日記』と記す。
- 21 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十五 185頁
- 22 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十六 195頁
- 23 『全集』中巻「淡窓日記」巻三 30頁
- 24 『全集』同 28頁
- 25 『全集』中巻「淡窓日記」巻十六 214頁、223頁
- 26 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十六 197頁
- 27 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十六 202頁
- 28 『全集』同 巻八 202頁
- 29 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻十七 213頁
- 30 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻二十三 297頁
- 31 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻二十三 299頁
- 32 『全集』中巻「遠思樓日記」巻三 309頁
- 33 『自新録』は、『全集』上巻に集録されている(原漢文)。
- 34 『約言』は、『全集』中巻に集録されている(原漢文)
- 35 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻二十五 315頁
- 36 『謙古に申聞候事』は、『全集』中巻に集録されている。
- 37 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻二十九 382頁
- 38 『再新録』は、『全集』上巻に集録されている。(原漢文)
- 39 『全集』上巻「懷旧樓筆記」巻三十五 461頁
- 40 『全集』下巻「醒齋日曆」巻十上 580頁
- 41 『全集』下巻「醒齋日曆」巻十上 581頁
- 42 『析玄』は、『全集』中巻に集録されている。(原漢文)
- 43 『義府』は、『全集』中巻に集録されている。(原漢文)

## 史料紹介 廣瀨家所蔵の「凶禮記」について(上)

吉田 博嗣  
園田 大

はじめに

平成二五年三月二七日、これまで国の史跡として指定されていた「廣瀨淡窓墓」(昭和二三年一月一四日指定)に廣瀨淡窓旧宅などが加わり追加指定されるとともに、「廣瀨淡窓旧宅及び墓」として、その名称も併せて変更された。

廣瀨淡窓は、江戸時代後期に教育者、漢詩人そして儒学者として活躍した豊後日田を代表する先哲の一人である。

廣瀨家の祖は、甲斐国の武田信玄の家臣であった廣瀨郷左衛門の弟將監正直であったとされるが、後に筑前国博多を経て、延宝元年(一六七三)に日田へ移り住んだ。豆田町では博多屋廣瀨家として居を構え、第五世三郎右衛門の長男として、淡窓は天明二年(一七八二)に生まれた。

淡窓は幼少より学問をよく好み、青年期に松下西洋や亀井南冥などに師事した後、二四歳のときに日田郡豆田町の長福寺学寮で塾を創めている。

その後は、成章舎や桂林園など場所や塾名を変えながら、文化一四年(一八一七)に豆田町南側の濠田村(現淡窓二丁目)で私塾「咸宜園」を開設した。淡窓や咸宜園門下生の活躍は多著に明るく、ここでは特に字数を割かないが、私塾咸宜園は江戸時代後期における漢学塾として発展し、明治三〇年の閉塾まで入門した門下生の数は、名前が判明したものだけでも四八〇〇名に及ぶ国内最大規模の私塾であった。

淡窓は安政三年(一八五六)一月一日に七五年の生涯を閉じたが、その亡骸は家族や門下生たちによって見送られ、咸宜園の北側約二〇〇mほどの中城村(現中城町)に葬られた。墓所の造営に関して、淡窓は生前からその場所を選定していたことが知られ、その名称を「長生園」と呼称し、磔域周辺には植栽を整備するなど、自らの命運尽きる日を迎えるにあたって肅々とその準備を進めていた。また、墓誌銘も生前に自らが撰じたことが知られている。

「長生園」には、淡窓の室ナナを始めとして、弟の旭荘や養嗣子の林外、義子の

青郵とその子濠田など廣瀨姓を持つ咸宜園の塾主とその家族など全一三名(表1)の墓標が建っている。

これまで、廣瀨淡窓墓や長生園に関する本格的な調査研究の機会はなかったが、今回の追加指定に先んじて実施された廣瀨淡窓旧宅の調査書『廣瀨淡窓の生家・廣瀨家の歴史と業績』には、旧宅だけでなく、長生園墓所の概要や墓石の特徴、また廣瀨家菩提寺の大超寺の調査に至るまで幅広い調査の成果が盛り込まれた。

今回は、先の報告書でも引用された淡窓ほかの葬送記録「凶禮記」(全三巻)について史料紹介を行う。本史料は、『増補淡窓全集』(思文閣)にも巻一を中心にその一部が翻刻されていたが、全体が掲載されるには至らなかった。追加指定を機に、史料の全容を明らかとするものである。

廣瀨家の史料以外で長生園について記された記録としては、日田を訪問した森鷗外の『小倉日記』に詳しい。筆者は実見する機会を得ていないが、「小倉日記附録一、二」には「廣瀨淡窓碑」の碑文のほか、日田に所在する石碑の図面などが数点記録されている事も分かった。当時の鷗外は、九州小倉の第一二師団軍医部長をしており、名前も林太郎としていた。訪問の目的は管内の徴兵検査のためで、大分を経て日田に入ってきている。日田では、明治三三年六月五日から七日まで滞在しているが、その間、廣瀨三右衛門宅を訪問し、その子で寅太郎なる人物が長生園や咸宜園などを案内した。三右衛門は廣瀨淡窓の弟棟園の孫にあたる人物で、長生園の側に居を構えていたとされる。以下、該当部分の日記を紹介する。



写真1 長生園正面入口(南側より)



写真2 長生園墓所の全景

明治三三年六月五日の条

「五日。雨を聽いて褥を出づ。人力車を傭ひて、大太郎嶺を踰え、隈に至る。山田精一の家に投ず。徴兵官安藤照等及郡長出<sup>いで</sup>事至る。午餐後豆田なる廣瀨三右衛門の家を訪う。三右衛門兒寅太郎をして予を導いて廣瀨氏の塋域の到らしむ。塋域は豆田の街より東に入ること數十歩の處に在り城内墓十二碑一あり。門に入りて右すれば、先ず青村の墓あり。表に文通廣瀨先生之墓と題し、右側に刻して曰はく。先生諱範治、字世叔、号青村、明治十七年二月三日卒、年六十六、葬于東京青山。次に旭莊の妻の墓あり。表に婉順院靜譽慈貞大姉と題し、背に刻して曰はく。廣瀨謙吉妻、合原氏、天保甲辰十二月十日歿於江戸、葬小石川傳通院内見樹院、此其理髮處。次に旭莊の墓あり。表に文敏廣瀨先生之墓と題す。次に林外の墓あり。表に文靖廣瀨先生之墓と題す。次に淡窓の墓あり。表に文玄廣瀨先生之墓と題し、右側に刻して曰はく。安政三歲次丙辰十一月朔午時卒。是を塋域の中とす。次に淡窓の妻の墓あり。表に淳徽大姉之墓と題し、右側に刻して曰く。大姉諱奈奈、合原氏、文玄先生之配、以元治二年乙丑二月二日卒、年七十六。次に林外の妻の墓あり。表に貞感吉瀨氏之墓と題し、右側に刻して曰はく。吉瀨氏名徳、廣瀨林外先生妻、明治十四年五月十三日卒、年三十九、法諡曰貞感院如月大姉。次に青村の妻の墓あり。表に貞間合原氏之墓と題し、右側に刻して曰はく。合原氏諱佐玖、廣瀨範治妻、安政五年戊午二月九日卒、年二十六。此より以下夭折男女三人の墓あり。其一是表に桂芳童女と題し、右側に刻して曰はく。童女名加茂、廣瀨範治第二女、安政六年己未八月六日卒、年八。其二是表に紫雲童女と題し、右側に刻して曰はく。三歳于元治二年乙丑四月十一日、孝次女、名約。其三是表に靖共童子と題し、右側に刻して曰はく。廣瀨欽一郎、孝長子、明治二年己巳八月十九日歿、年三。最も門に近き處に碑あり。篆額して文玄先生之碑と曰ふ。刻する所の銘は淡窓の自ら撰む所なり。塋域の前素と小亭あり。長生園と匾す。今これを毀つと云ふ。寅太郎の曰はく。淡窓平生木魚の音を忌む。故にその歿するや、大超寺の僧をして葬事を司らしめ、別に塋域を此に下せしなり淡窓の家は街を挟みて立つ。所謂東家西家はなり。東家は即ち塾址にして、塋域を距ること遠からず。今木竹數十株、草屋數軒あり。

その西北隅に白壁の倉あるは宜園の遺書を藏する處なり。近年諫山東作といふものあり。菽村と號す。私塾を此に開き、兼ねて書倉のことを管す。今已に亡し。西家は嘗て林外等の住める處にして、現に郡役所たり。淡窓は商家の長子なり。二子久兵衛宗家を嗣ぐ。三子三右衛門は今の三右衛門の先なり。四子彌六は大分なる辛嶋氏に養はる。五子は旭莊なり。淡窓の父の長女は淡窓に次いで生れき。淡窓の病むや、佛に禱りて自ら代らんと欲し、又病痊ゆるに及びて、髪を剃らんと欲す。果さず。僧豪潮これを其内新王家に薦む。後尼となりて京師に歿す。墓は三條裏寺町稱名寺に在り。貫名海屋これが爲めに誌銘を作る。二女は玖珠郡の醫麻生彦國に嫁す。旭莊は摂津國茶臼山なる邦福寺内雲水寺に葬る。今雲水といふ精進料理店ある處なり。淡窓の婦家合原氏は現に豆田の最舊家たりと云ふ。墓を拝し畢りて三右衛門の家に至る。(後略)』

『鷗外全集』第三十五卷より(岩波書店一九七五)

#### 〔付記〕

今回の史料掲載ならびに翻刻にあたっては、公益財団法人廣瀨資料館の協力を得て実現した。末尾ながら、廣瀨貞雄理事長、原田俊隆館長に感謝の意を申し上げる次第である。また、森鷗外の記事については、北九州森鷗外記念会理事の養父克彦氏の助言をいただいた。そのほか、原文解読では古文書サポーターの橋本千和子さん、松井公男さん、藤波則子さんの協力を得た。

#### 〔凡例〕

- 1 「凶禮記」巻一を翻刻するにあたって、以下の諸点について原文を変更し作業を進めた。  
史料については、原則、原文のままとしたが、紙幅や掲載の都合上、行数や余白の大小を改めるなどした。
- 2 原文では文字の大きさが其々異なっているが、項目・本文・ただし書き(二行文)など概ね三種に分けることができたため、フォントの大きさを三つに分けて表した。
- 3 判読できない文字は□で示した。
- 4 文中には必要に応じて( )で補足した箇所がある。



写真4 絵ハガキ「淡窓先生と長生園」(大正2年作成)



写真5 昭和11年以前の長生園古写真(「咸宜園写真帖」より)



写真3 「文玄廣瀬先生之墓」(長生園内)

No.	法号・諡号他	墓主	没年代		享年	没地	埋葬地		備考
							本葬墓	供養墓	
1	文玄廣瀬先生之墓	廣瀬 淡窓	安政3年11月1日	1856	75	日田	長生園	—	「凶禮記」に記載あり。
2	文靖廣瀬先生之墓	廣瀬 林外	明治7年5月14日	1875	39	東京	多磨霊園	長生園	No.1. 淡窓の養嗣子。小石川伝通院境内見樹院→青山墓地→多磨霊園(改葬)
3	文敏廣瀬先生之墓	廣瀬 旭莊	文久3年8月17日	1863	57	池田	邦福寺(統国寺)	長生園	大坂池田没。邦福寺(後に統国寺)に葬る
4	婉順院静善慈貞大姉墓	廣瀬 松	弘化元年12月10日	1844	29	江戸	多磨霊園	長生園	No.3. 旭莊の妻 小石川伝通院境内見樹院→多磨霊園(改葬) 小石川伝通院境内見樹院→日田大超寺(分葬) →長生園
5	文通廣瀬先生之墓	廣瀬 青邨	明治17年2月3日	1884	66	東京	多磨霊園	長生園	No.1. 淡窓の義子。青山墓地→多磨霊園(改葬)
6	文圓廣瀬先生之墓	廣瀬 濠田	大正3年4月15日	1914	62	東京	長生園	—	No.5. 青邨の長男。墓標は大正7年建立
7	廣瀬芳子之墓	廣瀬 芳子	明治44年□□19日	1911	—	日田	長生園	—	No.6. 濠田の四女
8	淳微大姉之墓	廣瀬 ナナ	元治2年2月2日	1865	76	日田	長生園	—	No.1. 淡窓の妻。「凶禮記」に記載あり。
9	貞感吉瀬氏之墓	廣瀬 徳	明治14年5月13日	1881	39	不詳	多磨霊園	長生園	No.2. 林外の妻。夫婦合葬(青山墓地→多磨霊園へ改葬)
10	貞間合原氏之墓	廣瀬 佐玖	安政5年2月9日	1858	26	日田	長生園	—	No.5. 青邨の妻。後妻ノブは多磨霊園。「凶禮記」に記載あり。
11	桂芳童女	廣瀬 加茂	安政6年1月6日	1859	8	日田	長生園	—	「凶禮記」に記載あり。
12	汰霊童女	廣瀬 約	元治2年4月11日	1865	3	不詳	長生園	—	No.2. 林外の二女。森鷗外の「小倉日記」では紫雲童女と記す。
13	靖共童子	廣瀬 欽一郎	明治2年8月19日	1869	3	不詳	長生園	—	No.2. 林外の長男

表1 長生園の墓標一覧

凶禮記 卷一 (表題)

湯灌人名

北堂 範治 孝之助 源兵衛 吾八郎 丑六  
豐助 常太郎 庸造 護一 蘭畦 阿策  
阿初 阿壹 阿梅

殉具

淡窓六種 名字印二顆 木雙刀 鬚齒  
白木棉蒲團二枚 同綿服 襦袢 木枕 綿枕  
帶 禪襪

訃音

官府相澤氏二届候文言

求馬儀病氣之處養生不相叶今日九ツ時死去  
仕候此段御届奉申上候已上

十一月朔日

廣瀬範治判

當名ナシ

右者岡野善作元官吏當時在塾を以內伺いたし候処  
右之通指圖有之

親族爲知文言不同

朔日

旭莊公 南陔公以上二使 秋雄公 麻生氏已上二使  
合原藝州 東光寺 山崎屋已上二使 矢野徳四郎  
久保慶兵衛 辛嶋政右衛門 以上二使

塾生その他方へ爲知

朔日

久留米 使貞次郎淳吾 柳川 使元格祖柏 肥前 使源一郎宗珉

豊前 使格之助薰次 玖珠 使來正甫

都講板野儀造名前ヲ以他方ニ爲知 三日

淡窓先生今春患中風以本月朔卒敢訃請爲

報之於同門諸君

豊後

矢田淳 妙正寺 帆足庸平 万徳寺 田能村太乙  
月海 久保敬徳 末延良策 仙溪 松雲寺

豊前

正行寺 西元令 堀鐵次郎 村上彦左衛門 正應坊 永明院

筑後

山本保 法眼孚嶺 菅原七三郎 重富健助 野口常三郎 筑山文哉  
再歡 過能周藏 大解 樺島哲藏

筑前

兼吉 戸原陽甫 杉全謙卿 桑野廉成 桂大來 秋重眞卿  
大賀甚之丞 三原一郎 坂巻浪太郎 武谷棕亭 龜井鐵次郎  
廣瀬五兵衛 佐谷虎吉郎 深江威一郎 林脩元 久門元登

肥前

韓介石 木村揆一郎 木村常三郎 櫻本常太郎 蒲池文策  
一ノ瀬才八郎 橋口奥左衛門 田中豊吉 澁谷彦助 堀柳庵  
牟田逸馬 田尻文静 馬野讓 木ノ下謙一 一道  
僧岳 松永金藏 本田邦五郎 大塚蘆庵 阿部脩省  
山本清太郎 春禎助 眞中麟兮 長川貞重 渡邊轍  
加峯大健 佐藤謙太郎 岡田大五郎 岡本道雲 來司圭太郎

筑丸松軒 直川文英 品川正吉 原口壯藏 法運  
荒木橋齋 青木文藏 平田清三郎 緒方一郎 許斐脩三

肥後

深水千里 吉田洞雪 木村又三郎 橋本龍雲 江間眞五右衛門

日向

中尾時太郎 南村猶助 内田耕介 日高元敬 石黒牧右衛門  
上田主計 山室綱一郎 河野養貞

伊豫

曹溪院 鎌田元閑 近藤杏仙

長州

福田周作 小山秀三郎 河野龜太郎 南條薰一郎 柳宗仙  
古谷秀平 福原仙庵 香取純庵 宮原幸安 國島俊藏  
立野宗甫

防州

大田量平 牧庸藏 鹽谷雲平 南方原藏  
小河内關之進 岡德太郎 西鶴太郎 長野右門 坂卷道達  
武井平藏

藝州

末田直馬 梅園元亭 來眞

備中

石坂曲禮 伊丹蕙畝

備前

額田靨太郎

攝州

安國彦堂

京都

浩然 承劭 承法 土屋直藏 劉石舟 三郎

播州

河野俊造 宗像三策

美濃

大夢 青木益太郎

因州

木下文庵

江戸

高橋良三郎

津島

唐坊莊之助

明六日正八ツ時於下道南 葬式順次如左

第一 正八ツ時靈柩出門之事

此時導師諷經寺塾諷經僧

御代參官府諸公既ニ着席

第二 護後之次親戚從行之事

第三 親戚婦女從行之事

第四 旧門生從行之事

第五 一同着席之事

第六 司儀護一和達巡察之事

第七 司賓儀造太郎兵衛ノ會葬之者一同順次ニ挨拶之事

第八 引續司賓ノ導師從僧江焼香會釋之事

第九 諸寺院一同續經始ル事

第十 親戚焼香前司賓兩人導師江會釋之事

第十一 親戚十餘人順次焼香之事

但 棺前焼香者親戚

御代參官府司儀司賓司儀佐ニ相限候事

第十二 司賓御代參ニ焼香挨拶之事

但 新規之香几一ツ持出候事

第十三 諸縁者焼香之事

第十四 司賓司儀司儀佐焼香之事

第十五 一同焼香終を待て司賓ノ導師從僧ニ

會釋之事

第十六 司賓ノ順次退出挨拶之事

第十七 導師退出

第十八 諸寺院退出

第十九 在塾繙徒退出

第廿 官府諸公退出

第廿一 遠方相識退出

第廿二 兩町村方退出

第廿三 兩町女中退出

第廿四 退柩

第廿五 親戚并窆穿之者のミ墓所ニ留る事

第廿六 盈坎之事

第廿七 位牌安置之事

右須知

十一月五日

司儀

# 行列圖

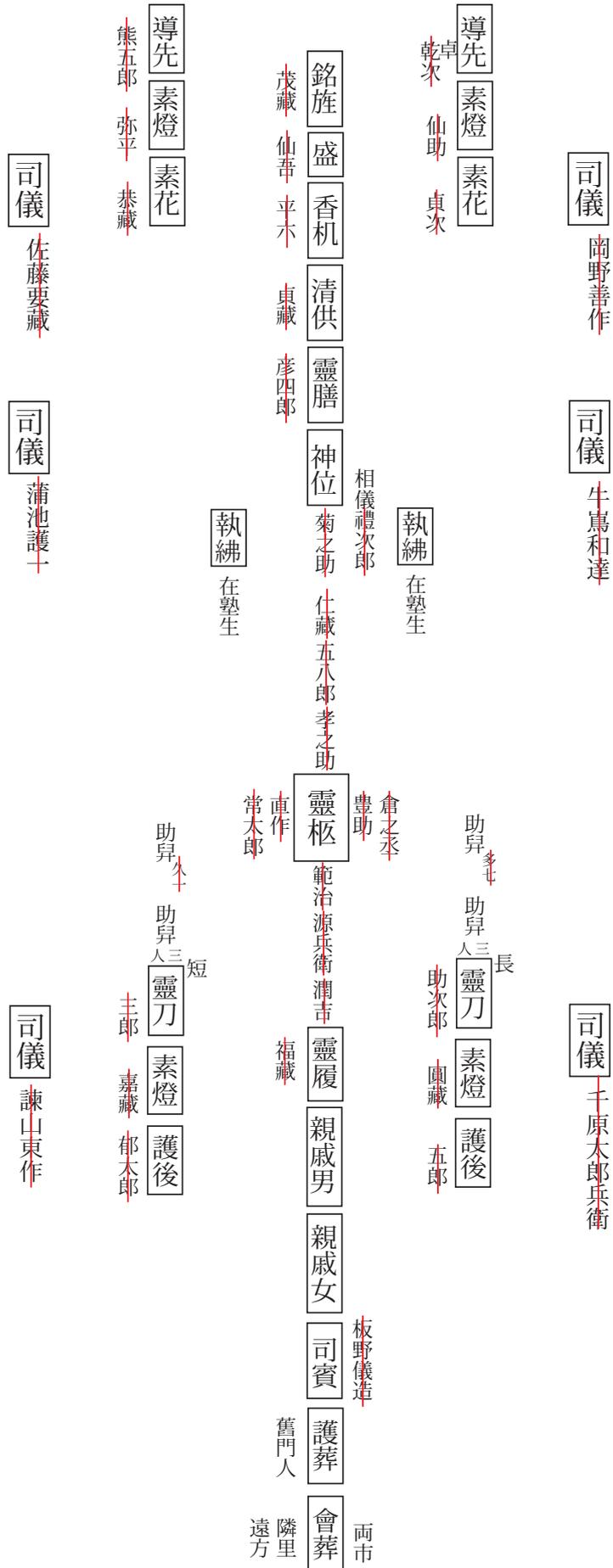


図1 行列圖（「凶禮記」より作図）

（注）原図ではタテ線は朱書き

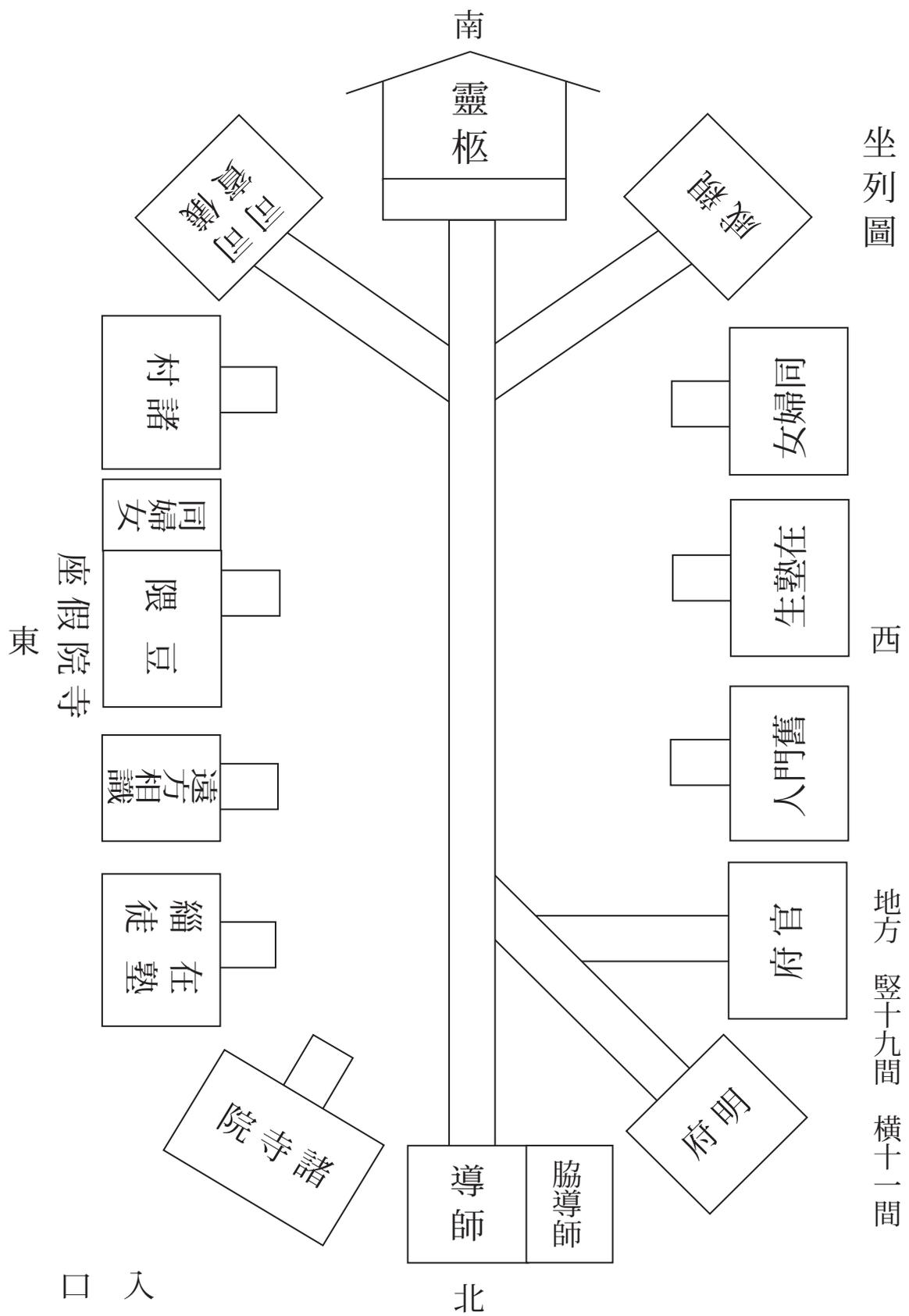


図2 座列図（「凶禮記」より作図）

表札

明府 御代參 官府 御陳屋

親戚 親類 親戚婦女 親類女中

舊門人 旧門生 在塾生 門人

司儀 同上 遠方相識 同上

司賓 導師 御導師 諸寺院 御寺方

在塾緇徒 同上 豆隈 両町

諸邸 村々 豆隈婦女 両町女中方

執紼順次右方

謙之助 務 元五郎 謙造 昌平

格之助 誠甫 太仲 元良 元英 見仲

安宅 隆造 吉民 文太郎 簡市

端吾 良哉 文治 薰二 右橋 政太郎

軒會 芳吉 壽一郎 虎之助 與五助

元次 震二 〳二十九人

執紼順次左方

春堂 泰雲 薰 養哲 良平 淳吾

省吾 感二 脩八郎 来 一太郎 榮三

貞二郎 清順 文作 雷吉 文明 祥哉

文哉 静哉 俊三 謙治 春杏 宗古

為之丞 道元 見岳 源一郎 元格

〳二十九人

以上執紼右先導 震二

同 左先導 元格

執紼人員左右合 五十六人

右組燒香順次

健之助 務 元五郎 謙造 昌平 格之助

五郎 誠甫 太仲 元龍 元英 見仲

安宅 仙吾 定造 隆藏 世民 文太郎

簡一 端吾 良哉 文治 薰二 右橋

政太郎 平六 軒會 茂造 敬市 芳吉

壽一郎 虎之助 與五助 元次 道元 震二

以上三十六人

出役

仙吾 茂三 平六 定三 五郎

敬市

左組燒香順次

春堂 退雲 卓治 薰 貞治 養哲

良平 順吾 省吾 感次 修八郎 来

恭造 一太郎 亘 榮造 禮二郎 貞二郎

清純 文作 雷吉 文明 祥哉 文哉

彦四郎 静齋 熊五郎 俊造 健治 春杏

宗古 為之丞 郁太郎 元格 見岳 源一郎

以上三十六人

出役

卓尔 熊五郎 貞司 恭造 郁太郎

彦四郎 禮二郎 亘

燒香人員左右合 七十二人

護葬 舊門人

諫山安民 和田一平 井上徳二 恒遠頼母 長南梁  
村上愼治 相良文敬 孔井萊藏 井上榮 田代文同  
諫山雍叔 米谷辰次郎 吉富龜次郎 秋吉崎太郎 吉松基  
渡邊方策 吉武久六 弓場源吾 草野業作 麻生文太郎

焼香順次亦如此

葬式延引二付先歸者 但 棺前焼香

園田保 石井瀧治 内山謙吾 佐野文同 秦敬之  
釋深諦 中山元琳 江上興太郎 松浦郁次郎 佐藤周治

後葬期而至者

山中泰藏 豊田鵬策 山鹿春汀 倉富八兵衛

使者

辛嶋丈庵 玉井養純 佐野東庵

寺院

導師

大超寺鞠譽方丈 從僧四人

副導師

龍泉寺 從僧一人

諸寺院

岳林寺 伴僧二人 願正寺 伴僧一人 長福寺 伴僧一人  
浄満寺 伴僧一人 照蓮寺 伴僧一人 長善寺 伴僧二人  
廣圓寺 代眞蓮坊 伴僧二人 不遠寺 護願寺  
藥師堂 長福寺 西光寺代 伴僧一人

在塾緇徒

徳令 遠来旧門人 五岳 旧門人 蘭畦 徳惠 堯珉

教順 惠辨 賢誠 等觀 祖柏 宗典

正吟 進糧 覺淵 唯順 圓海 猶龍 泰然

禪龍 文章 宗珉 墨水 禪達 雲洞

法雷 玉峰 禪遊 弘宣 倫徴 祖梅  
麟兮 元輔 圓順

棺前焼香

同姓

範治 孝之助 久兵衛 弥六 源兵衛 五八郎  
潤吉 仁藏 七三郎

官府

御代叅 勝田儀右衛門

相澤時之進 山崎信太郎 佐藤庸造 壇喜八郎

吉田己之助 紅林太郎菊 勝田儀右衛門

戚族

東光寺密乘 合原丑六 麻生豊助 同眞作

同常太郎 辛嶋勝藏 同庫之丞 古後要右衛門

同助七 矢野徳四郎 合原掃部 俵屋藤四郎

高田屋利右衛門 濱田屋藤助 魚屋栄藏 田嶋彈助

長野文岱

司儀

岡野善作 千原太郎兵衛 諫山東作 蒲池護一

牛寫和達

司賓

板野儀造

副司賓

田邊元春 稲員渙度 財津脩三

各所焼香 親戚婦女

北堂 策 常棣園北堂 吉 邦 加 茂 菊

由伊 丑六妻 友二郎妻 利右衛門妻 藤六妻

遠方相識

木下逸雲 荒木安益 武石道一 行徳元遂 代悴

豆隈著姓

中村豊作 三松寛右衛門 千原欣右衛門 草野忠右衛門  
 千原幸右衛門 伊豫屋傳七 油屋百右衛門 油屋忠三郎  
 酢屋勘三郎

日隈彦三郎 山田半四郎 山田爲右衛門 山田小三郎

山田作兵衛 森健助 森仁<sup>甚左</sup>左衛門 森藤右衛門

鍋屋利兵衛 塩屋平右衛門 今津屋八右兵衛 大阪屋霞城

中津屋兵右衛門 中津屋源兵衛 合屋忠兵衛

周旋人

魚屋弥八 刀屋國助 加賀屋長次郎 丸屋新吉



図3 墓所図

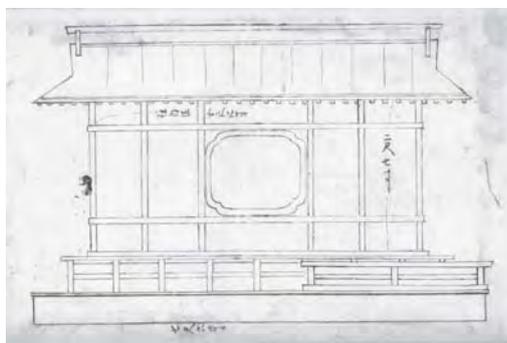


写真6 靈柩側面図



写真7 靈柩正面図

朔日夜伽

中村後室 児玉元龍 草野元秀 園田茂三郎 富嶋玄臺

伏見屋幸吉 千原欣右衛門 田嶋徳三郎 草野忠右衛門 三松寛右衛門代

日隈彦三郎 丸屋与次兵衛 京屋小三郎 草野良作 千原幸右衛門

嶋屋勘吉 三隈山万次 伊豫屋傳七 諫山東作 塩屋平右衛門

魚屋助七 油屋百右衛門 蒲池護一 僧五岳 丑六妻

利右衛門妻 阿豊 松本屋百次郎 田邊元春 仙助<sup>村</sup> 儀平<sup>同</sup>

濱田屋藤助 魚屋榮藏 田嶋鐵三郎 長善寺弟子一人誦經

浄満寺弟子一人誦經 稲員渙度 魚屋弥八 佐藤庸藏 千原太郎兵衛

夜伽献立

平 カブ 豆  
 椎茸 飯  
 小皿 煮豆

塾生百餘人 饅頭八百五十余

二日夜伽

俵屋幸太郎 俵屋藤四郎妻 榎屋丈右衛門 眞蓮坊 草野宗十郎  
伏見屋嘉左衛門弟 中村豊作 中嶋屋忠平 塩屋平右衛門弟 伊豫屋儀七  
油屋忠助 油屋忠三郎 油屋百右衛門 濱田屋藤助 榎屋茂七  
刀屋國助 俵屋藤四郎 田嶋彈助 魚屋榮藏 諫山東作  
田嶋鐵三郎 願正寺 五岳 平五郎妻 相良文敬 竹内元泉  
草野良作 夜食献立

三日夜伽

孔井萊藏 井上栄 秦敬之 石井瀧治 諫山雍叔  
秋吉崎太郎 合屋才藏 内山謙吾 麻生文太郎 行徳元遂  
合原掃部 矢野徳四郎 大黒屋金兵衛 長野文岱 眞蓮坊  
田代玄同 五岳 渙度以下學生 儀造 謙之助 得惠 二元五郎  
務 和達 卓次 堯珉 教順

四日夜伽

佐野文同 中村元琳 佐藤周治 江上興太郎 山口太仲  
櫻木五郎 諫山薫 麻生常太郎 高田屋利右衛門 松浦郁次郎  
四日饗膳  
恒遠頼母 長南梁 園田保 弓場源吾  
井上徳次向座 右心遠處 (心遠處は招隠洞の一室)  
村上愼治 孔井萊藏 田代玄同 米谷辰次郎  
吉富龜次郎 秋吉崎太郎 佐野文同 諫山雍叔  
吉松基 中山元琳 江上興太郎 吉武久六  
渡邊方策 佐藤周次 松浦郁次郎 右講堂

献立

酢和會  
皿 揚豆腐 大根 汁 (芋かぶ) (ツト豆腐)  
にん志ん 香ノ物 飯 菓子 臍饅頭  
坪 いとこ煮 飯 五ツ

平

揚豆腐 山芋 椎茸 蓮根 青み

七日饗膳

大超寺方丈 同從僧六人 南陔公 秋雄公  
東光寺 矢野徳四郎 同供 源兵衛 吾八郎  
豐助 勝藏 庫之丞 潤吉 七三郎  
常太郎 直作作藏 敬一 壽一郎 和氣之使  
徳令前夜饗之 山中泰藏 和田一平 右春秋園 (秋風庵)  
献立 同前

村方

辦藏 仙助 儀平 おねい代 嘉藏 茂平 友吉  
圓藏 五郎兵衛 七三郎 多七 忠左衛門 庄三郎 喜平  
伊三郎 多作 又兵衛 吉兵衛三又 吉兵衛中城 百藏 喜市  
善作 甚六 茂吉 伊平 爲六 利平 お琴 お時  
おせい お伊勢 釜屋ばば とみ ゆみ まさ 茂七 長作  
八作 磯吉 久市 七三郎内 筑圓下男 弥平 市右衛門  
末吉 専助 永作 重吉 丹吾 茂市 平五郎妻  
三苦虎之助 旧門生 右講堂  
献立 同前但シ饅頭三ツ

諸職人

種吉 彦兵衛 益吉 庄平 永藏 善作

九三郎 仁平 磯吉 平吉 廣吉 茂十  
米吉 十七吉 又左衛門 惣七 重作 義市  
潤三郎 半右衛門 伊勢次 市次 幸平  
右講堂 献立 同前

八日饗膳

内外塾繙徒三十人 名前焼香ノ部ニ有

丑六 藤四郎同門 利右衛門同門 源兵衛門 常棣園北堂  
阿吉 友次郎内 勝次 阿廣 阿ゆい 用松勇藏  
岡野善作 蒲池護一 財津修三 板野儀三 牛島和達  
千原太郎兵衛 田邊元春 諫山東作 五岳 蘭畦 右橘  
魚屋弥八 同榮藏 同助七 豊田方策 山鹿俊亨  
福田泰雲 茂七 兵右衛門 仙平 お梅 右春秋園

九日饗膳

在塾人員七十一人 名前焼香ノ部ニアリ

渙度 八兵衛 浄満寺圓信伴僧一人 園田茂三郎 五郎兵衛  
圓藏 疊屋 右春秋園

十日供膳

大超寺二僧 和尚有病大然來 重富鼎 玉井養純  
秋雄公 七三郎 丑六

献立

皿 カミアへ 飛竜頭  
香ノ物 ナバ 千人参  
汁 カフ チキリ  
平皿 平茸  
葛 青み  
栗 やきふ  
坪 夕顔 飯  
秋月ノリ

十一日供膳

中村豊作 三松寛右衛門 草野忠右衛門 諫山安民  
千原欣右衛門 伊豫屋儀七 相良文敬 榎屋源吾  
千原幸右衛門 油屋百右衛門 油屋忠三郎 丸屋新吉  
刀屋國助 加賀屋長二郎 富島玄泰 伏見屋孝一  
原連 原健作 諫山福七郎 松本屋百二郎  
三上卯太郎 才田作左衛門 才田武三郎 木下逸雲  
荒木闇益 森廣次 松本屋丹吾 矢野丑之助 熊谷仁一郎  
日隈彦三郎 山田半四郎 山田助九郎 山田爲右衛門  
山田小三郎 山田作兵衛 森謙助 鍋屋利平  
鹽屋平右衛門 草野元秀 丸屋與次兵衛 濱田屋藤助  
霞城 竹田治郎兵衛 魚屋清助 魚屋太八  
○丸屋與次兵衛 一宮慎齋 六道寺 六度寺家來  
内山田玄節 釋東岳 源兵衛

献立如昨

十二日供膳

森伊左衛門 森藤右衛門 森良藏 菊池友彦  
財津廣吉 児玉玄齡 油屋忠助 酢屋勘五郎  
酢屋佐左衛門 和泉屋助二郎 平野屋平二郎 大黒屋金兵衛  
俵屋藤吉 上手訓左衛門 瀧屋灌次

献立如昨

十三日供膳

佐藤庸造 丑六 友次郎 善兵衛 藤四郎妻  
和達 卓尔 蘭畦 祖柏 徳正寺  
献立 蕎麦 茶飯 汁豆腐椎茸

十四日供膳

日野文五郎 五岳

雜記

一朔より五日之夜ニ至迄毎夕方丈入來誦經

但磬のミ相用候事

一臨葬導師柩前誦經畢直ニ葬所ニ

赴き途上先導ハ不致此日モ磬のミ相用

他之鳴物一切不相用事

一柩前之花唯牡丹ニ瓶一對ナリ其他紙花蛇

腹天蓋六道大炬等之もの一切不相用事

一素燈四箇ハ大炬ノ代也 清供 富士石先生平日愛玩

ハ紙花ノ代也

一白木之臺三方ニ似タルモノニ貳升餘之糕 鏡糕三ツヲ重ルを盛團子之代トス

一銘旌ハ白絹一幅四尺を用千原太郎兵衛書之

淡窓廣瀨先生之柩と記す

一門人相謀私ニ諷して端靖先生とす

法號之代ニ位牌ニ記す 鞠譽方丈眼疾

ニ付五岳師ニ請て記之

一夜中常念佛を斷ル事

以上之數件皆大超寺ニ談ジ同寺

承允之上如是執計者也

一範孝喪服ハ白之晒布を淺黄 水色ナリニ染

袴ニ製シ白木綿之單物を上張ニいたし

大小之柄ニハ晒木綿ニテ包候事

一燒香之節導師ニ會釋不致事

但シ司儀最初ニ香爐之火を改其上導師ニ

一礼して燒香始ル蓋司儀惣名代之意也

一御代參着席之場ニハ疊ニ枚ニ毛氈を敷

官府諸公ニハ唯疊三枚を敷のミ其他ハ

荷筵貳百枚餘を用燒香往返 中央導師通ヒ道也

之處ニハ荷筵之上ニシジミの上敷を用

一柩屋之上ハ茅筵六枚を用檐端ニ晒木綿

ノ一幅幕を用 但シ小晒一反反

一緋ハ晒木綿三ツ割三反を用

一司賓より之口上如左

御代參エ 御參香難有奉存

官府諸公 御參詣難有

諸寺院 御諷經辱

在塾緇徒 同上

兩町及村々 御參詣辱

舊門生 遠方御苦勞

在塾生 一同御苦勞

一導師引導之文ニ曰

端靖居士居士天下大儒妙玄

權詮都自得了我又何云開則

儒佛殊道闔則唯是真如無

極大道看他目擊

一東作 太郎兵衛 儀ニを官府ニ差出シ昨日會

葬之謝を述しむ葬之翌日也

一燒香几極小ニ付塾之書案十二脚を用

晒木綿を二幅綴リ上を蔽候事

以上が「凶禮記」卷一に記載された全容である。

資料紹介 西村天囚著「亀門の二廣」(上) 廣瀬淡窓編

溝田 直己

はじめに

今から一〇六年前の明治四一年(一九〇八)一月一日、大阪朝日新聞紙上において、「亀門の二廣」と題した記事が四七回にわたって連載された。この記事は大阪朝日の記者であった西村天囚が、廣瀬淡窓・旭荘が残した多くの書物を調査すると共に、当時の廣瀬家当主であった廣瀬貞治氏や廣瀬淡窓・旭荘兄弟や咸宜園のことを知る人々から聞き取り調査(口碑)をもとに書かれたものである。

以前より淡窓や旭荘、咸宜園の研究を行う上で、この「亀門の二廣」は重要な先行研究として知られており、咸宜園研究の嚆矢となるものである。また現在では伝わらない淡窓・旭荘、咸宜園についてのエピソードを語ることでできる人々からの声を拾っており古文書等の歴史資料では知ることのできない逸話が収載されている。

大正四年(一九一五)十一月、大正天皇の即位の際、淡窓は育英の功で正五位を追贈され、大正一四年(一九二五)には日田郡教育会から『淡窓全集』が出版される。その全集の中には「淡窓先生小伝」という短い淡窓の評伝が書かれているが、天囚の「亀門の二広」と同じ文章が散見される。『淡窓全集』出版にあたって、淡窓の残した多くの史料の編纂の担当をした高取益多(悦堂)ら編纂・調査委員らに、「亀門の二廣」が与えた影響はすくなくないと思われる。

このように『淡窓全集』や後世の咸宜園研究に影響を与えた「亀門の二廣」ではあるが、明治四一年の新聞紙上における連載記事ということ、また一つの出版物としてまとめられたものではないため、現在その本文を見ようとすることは困難なことである。実際、筆者もこれまで「亀門の二廣」の存在を知ってはいても手にとって見る機会はなかった。

ところが、展示業務の関係で財団法人廣瀬資料館(平成二五年度より公益財団法人に認定)において調査を行わせていただいた際、偶然にもこの「亀門の二廣」

のスクラップブックを廣瀬資料館において発見した。このスクラップブックは、厚紙で表紙・裏表紙を整え、連載記事を切り抜き整理したものであり、「亀門の二廣」連載全四七回分の目次が墨書したものが付されている。また表紙裏には、大阪朝日新聞社からのハガキも貼り付けられており、当時の廣瀬家当主である貞治氏に宛てたものであり、このスクラップブックも貞治氏の整理によるものと推測される。貞治氏の筆と思われる表紙には左記のように、

明治四十一年一月

(印) 廣瀬氏本家

大阪朝日新聞掲載

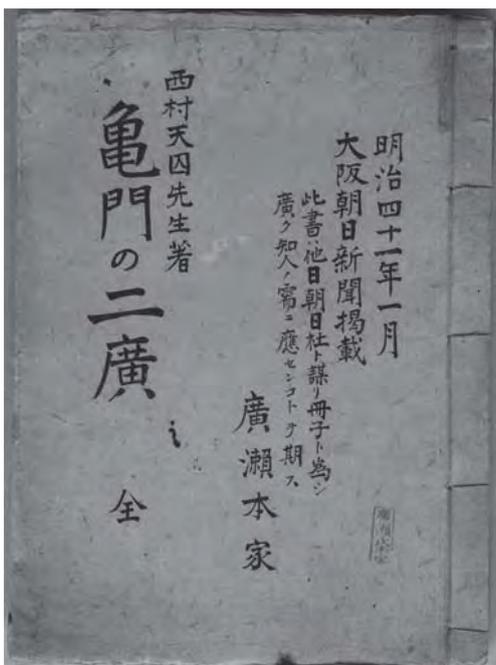
此書ハ他日朝日社ト謀リ冊子ト為シ

廣ク知人ノ需ニ應センコトヲ期ス

廣瀬 本家

西村天囚先生著

亀門の二廣 全



「亀門の二廣」スクラップブック

(公益財団法人廣瀬資料館所蔵)

とあり、廣瀨本家として多くの人の目に触れることを望み、後世に託したものである。貞治氏は廣瀨宗家八世七三郎の二男で、長男豊太郎夭折のため、七三郎死去を受けて、宗家九世となった（註1）。貞治氏は宗家を継いだのち、淡窓・旭荘その他廣瀨宗家の遺著遺墨類の収集・整理・分類を行い、その保全に努めた。現在、膨大な咸宜園や廣瀨宗家関係史料が伝わり、日田の近世や咸宜園について我々が知ることができるのは、貞治氏の功績が大きいところである。また貞治氏は、廣瀨家の先哲の顕彰にも努め、前述の『淡窓全集』の出版等や各種印刷物を刊行して先祖の顕彰に努めた人物でもある。

明治四一年から一〇六年経った現在、「亀門の二廣」は未だ貞治氏の望んだような多くの人の利用に供する形にはなっておらず、また研究者にとつてもその文章を閲覧するのは難しい状態である。

そこで本稿では、廣瀨資料館が所蔵する「亀門の二廣」のスクラップブックを底本として、資料紹介するとともに今回は、連載全四七回のうち、序論一回と廣瀨淡窓について書かれた二一回分の計二二回分について全文翻刻を行うものである。残りの廣瀨旭荘について書かれた二五回分については、次号の研究紀要において掲載する予定である。



廣瀨貞治氏宛のはがき 差出：大阪朝日新聞社  
「亀門の二廣」スクラップブック表紙裏添付

一西村天因について

まず「亀門の二廣」を著わした西村天因について、多くの先行研究によりながら、その生涯について述べたい（註2）。

西村天因は、明治大正時代の新聞記者、小説家、漢学者である。天因は慶応元年（一八六五）七月二三日、鹿児島種子島西之表市大園に生れ、名を時彦<sup>ときひこ</sup>、天因は号で、別号に子駿・紫俊・革不除軒・此予宅・小天地閣・猗劍があり、晩年は硯園と号した。

薩摩藩の支藩・種子島家の上士である父・西村城之助時樹と母・浅子の長男として生まれ、慶応三年（一八六七）七月、天因が三歳の時に父・時樹が二六歳で亡くなった。時樹は江戸に出て、塩谷岩陰門で儒学を修め、その同学には、重野成齊があり、並んでその逸材を認められていたという。父方の西村家、母方の平山家は多くの儒学者を輩出しており、父を亡くした天因も六歳の頃から、父の友人であった郷儒前田豊山に漢学を学び、外祖母に和歌などを教えられた。明治九年（一八六七）、一〇歳にして藩校種子島学校に入学した。

明治十三年（一八八〇）、一五歳の時に上京して、父と同学であった重野成齊宅に寄寓してその内弟子となり、宋学を修めるかたわら島田篁村（重礼）の双桂精舎に入つて、経学を学んだ。明治十六年（一八八三）九月、天因が一八歳の時に、東京大学文学部に新設された古典講習科の第一回官費生となり、学業の傍ら文芸活動に勤しみ、「邵青門文鈔」四冊（明一六刊）を刊行するなどしたが、私生活では浄瑠璃や寄席などに足しげく通い、酒色に耽るなど放蕩三昧な生活が続いたという。

明治二〇年（一八八七）、官費制度廃止のため学資に困窮し、天因は東京大学を退学した。この年五月、小説「屑屋の籠」前篇を出版し名声を得て、その後小説を次々と発表するが、豪放な遊びが高じ、生活に窮した挙句、同二一年（一八八七）、夜逃げ同然で東京から京都に逃れた。

同年、滋賀県知事井弘にその才識を買われ、大津の『さざなみ新聞』に記者として入社、翌年明治二二年（一八八九）六月、大阪朝日新聞社が高度な政治新聞をめざして創刊した「大阪公論」の記者となるも、同紙廃刊のため『大阪朝日新聞』の編集局に移籍している。

天因は新聞記者の傍ら、関西文壇の不振を挽回するために浪花文学会を結成し、その機関誌として「なにはがた」を創刊するなど、文芸活動にも励んでいた。

天因を新聞記者として名を馳せたのが、明治二十六年（一八九三）四月、シベリア単騎横断した福島安正中佐を取材して、連載した「単騎遠征録」連載一二〇回であり、大阪朝日新聞社において確固とした地位を占めていくことになる。その後も同年二十七年の日清戦争に従軍、同年三〇年の春には清国に派遣され、日清戦争後、急激に高まった排日感情を緩和するため、その急先鋒であった張之洞と会見する使命を担って渡清し、立派にその成果を挙げたという。それから明治三三年から二年間清国に留学して、南京に滞在する。清国滞在中には「南京通信」（同六月〜八月）、「上海来簡」（同九月）、「杭州紀行」（同九月〜一〇月）などの通信を「大阪朝日」に送っている。この二年間の清国留学を境に、若い頃の天因とは異なり、儒学者と相応しい謹厳重厚な人格となり、漢学の研究に精進するようになったという。

明治三十八年（一九〇五）頃から、漢学研究目的の取材旅行を行うようになり、その成果が『大阪朝日新聞』紙上で掲載される。四国の旅を「南国記」（明治三十九年九月七日〜一〇月一四日）では、柴野栗山、平賀源内、井上通女の遺業をしのび、九州の大分地方を訪ねた「豊後路」（明治三十九年十一月七日〜十二月二日）では、帆足万里、三浦梅園、協蘭室（愚山）の事蹟を探り、福岡・佐賀の諸所を遍歴した「九州巡礼」（明治四〇年六月二六日〜八月六日）では、亀井南冥・昭陽父子を始めとするその門下の儒者たちの旧跡を訪ね、またその遺書逸聞を求めめるなどなどしている（註3）。これらの取材旅行の成果が「学界の偉人」（明治四〇年三月一二日〜四月一九日）、「異彩ある学者」（明治四〇年一〇月二九日〜十一月一二日）、「亀門の三女傑」（明治四〇年十一月二三日〜十二月二日）、そして今回、資料紹介をする「亀門の二廣」に至る。

大正三年（一九一四）、天因は「大阪朝日」の名目上の編輯顧問となり、同八年（一九一九）一二月には同社を退職して、三〇年の記者生活を終えた。

晩年の天因は、大正九年（一九二〇）五月に漢学研究の業績により、文学博士の学位を得て、島津公爵家臨時編輯所の編纂長となり、翌一〇年年八月には、宮内省御用掛に任じられ、そのかたわら宮内省職員のために経書を講じた。また大阪学問所ともいわれた懷徳堂再建に向けて、明治四三年前後頃から精力的に活動

していた。そのような中、大正一三年（一九二四）、流行性感冒から他の病気を併発して、七月二九日、六〇歳で亡くなった。

天因の業績として、高く評価されているのは、日本における儒学の系譜や儒学者の功績を明らかにしたことであり、亀井南冥・昭陽らを紹介した「異彩ある学者」や今回、資料紹介を行う廣瀬淡窓・旭荘について述べた「亀門の二廣」などは「一種の鬼気さえ漂い、もっとも格調の高い絶品」と評されている（註4）。

## 二「亀門の二廣」とは

天因によって連載された「亀門の二廣」のタイトルの意味は、亀井南冥・昭陽父子が主催した亀井塾門下で学んだ二人の廣瀬という意味である。すなわち寛政九年（一七九七）〜同十二年（一七九九）の間に南冥・昭陽に学んだ淡窓、文政六年（一八二五）〜文政八年（一八二五）の間に学んだ旭荘のことを指す。

亀井南冥は寛保三年（一七四三）筑前国早良郡姪浜に生まれた江戸中期の儒学者である。医業のかたわら、蜚英館を起して儒学を講じていたが、福岡藩主黒田治之の命により儒員に選ばれ、徂徠学を講じる藩校甘棠館（西学）の祭酒（学政の長官）となつて、朱子学を講じる藩校修猷館（東学）と対抗した。南冥は西海第一と称せられるほどの漢詩文の才能に溢れていたが、東学との軋轢やその豪放な言動に対する反感も高まり、寛政四年（一七九二）、甘棠館祭酒の地位を追われ、蟄居謹慎の身となった。昭陽は南冥の長男で、安永二年（一七七三）八月十一日、筑前国福岡唐人町に生まれ、南冥が謹慎の身となると、家督を継ぎ、福岡藩儒となった人物である。詩才は南冥に及ばないが、その博学は当代一流であったといわれている。

淡窓が亀井塾に学んだのは、南冥が蟄居謹慎を命じられて五年後のことであった。南冥は謹慎の身分であったが淡窓は、詩稿は南冥に、また文稿は昭陽に指導を受けていた。旭荘が亀井塾に入門したのは文政六年（一八二五）のことであるが、南冥は文化十一年（一八一四）に七二歳で亡くなっていることから、この時にはもうすでに南冥は鬼籍の人となつており、旭荘は昭陽に指導を受けている。

以上のように亀井南冥・昭陽親子の亀井塾に学んだ淡窓・旭荘兄弟の伝記を書くにあたって「亀門の二廣」と名付けられた所以である。

「亀門の二廣」は『大阪朝日新聞』の一面のコラム欄に明治四一年（一九〇八）

の一月一日より二月一六日までの四七日間、全四七回連載されており、廣瀨家所蔵のスクラップブックはこのコラム欄のみを切り取って貼り付け、和綴じ装で綴じられている。表紙・裏表紙・目次を除き、全四九頁でそのうち、第一回は「亀門の二廣」の筆を起すにあつての序論、第二回から第二二回までの二一回分が廣瀨淡窓篇であり、一〜二三頁。廣瀨旭莊篇は第二三回から最終回である二五回分が二四〜四九頁となっている。

その目次は次の通りである。(頁数は廣瀨家所蔵のスクラップブックによる)

亀門ノ二廣目次

序論

廣瀨淡窓

一頁ヨリ廿三頁迄

- (一) 其ノ父祖○秋風菴月化ト長春菴桃秋 一頁
- (二) 其ノ幼時○松下筑陰○僧錢塘○高山彦九郎○佐伯遊學 二頁
- (三) 脇愚山ノ忠告○筑前遊學ノ由来 三頁
- (四) 亀門入塾○大教育家ノ鼓舞○談話ノ益 四頁
- (五) 病身ト學問○詩学○陰騭録○老子学 五頁
- (六) 立身ノ道ニ迷フ○醫力儒力○篤実家ハ役ニタタズ 六頁
- (七) 咸宜園ノ上○學級ト試験制度 七頁
- (八) 咸宜園ノ中○塾規ト塾風 八頁
- (九) 咸宜園ノ下○狂歌○代官ノ干渉○育英ノ功 十頁
- (十) 學問ト記力思索力○敬天○儒家ノ小乘 十一頁
- (十一) 玄学○學問ト工夫○其ノ詩○著書目録 十二頁
- (十二) 大村侯ノ招聘○長崎ノ遊○府内侯ノ知 十三頁
- (十三) 苗字帯刀御免○紀恩ノ詩 十四頁
- (十四) 師弟ノ誼○門人徳令ノ篤行 十五頁
- (十五) 交友○佩川石梁○山陽星巖 十六頁
- (十六) 席上走筆ハ宿構○山陽ノ詩ト雪隱○竹田ト山陽 十七頁
- (十七) 高足弟子上○宜園第一流ノ才子○十八才ノ翹楚 十八頁
- (十八) 高足弟子下○宜園第一流ノ風流僧○翰苑ノ巨擘○宜園百家 十九頁
- (十九) 其家庭○女弟秋子○四弟○青村ト林外 廿頁
- (廿) 怪談嫌○書生ノ狐憑○淨瑠璃大夫ノ入門○試場ノ詩 廿一頁

- (廿二) 其ノ死○自撰ノ誌銘○其絶筆 廿二頁

廣瀨旭莊

廿四頁ヨリ五十頁迄

- (一) 亀門ノ塾長○茶山流涕○宜園ノ若先生○代官ノ譴斥 廿四頁
- (二) 長崎ノ遊○堺ノ風雅○風呂屋征伐○京阪ノ交友 廿五頁
- (三) 江戸ノ檜舞台○大阪ノ町儒者生涯 廿六頁
- (四) 大阪住居五年○大村侯ノ聘○江戸住居四年○失敗シテ西下 廿七頁
- (五) 大阪ハ故郷○儒者評判ト名流月旦○旭莊ノ成功 廿八頁
- (六) 窮死セント欲ス○儉約還債○町儒者ノ面目 廿九頁
- (七) 記憶力ト活字典○学風ハ宋儒○吾國ノ袁子才 卅頁
- (八) 其ノ著述(上)○不朽ノ大著述 卅一頁
- (九) 其ノ著述(下)○東國詩人ノ冠 卅二頁
- (十) 其ノ出處(上)○諸侯ノ賓師 卅二頁
- (十一) 其ノ出處(下)○御城入儒者 卅三頁
- (十二) 游歴(上)○播備○作因雲伯石○長州ノ明倫館公讌 卅四頁
- (十三) 游歴(下)○北陸ノ游○加越ノ遂客令 卅五頁
- (十四) 交遊(一)○井上總州ト長州人○筒井巒溪ノ皴面○川路左衛門ノ恭謙 卅七頁
- (十五) 交遊(二)○五山ノ御世辭○諸名家ノ嘲罵○笛浦ノ暮ト蚊帳○象山ノ風采 卅八頁
- (十六) 交遊(三)○篠崎小竹ト訥堂○旭莊ノ情義 卅九頁
- (十七) 交遊(四)○浪華ノ諸儒○小山ノ褊狭○鉄兜故人ノ女ヲ贖フ○菊池溪琴ト鴨涯雅集○春樵紅蘭ノ五絃琴○棕陰冥土ノ土産 四十頁
- (十八) 交遊(五)○拙堂ト陶所○松林飯山月性劔舞圖○醫師○畫人 四十一頁
- (十九) 大塩平八郎ト幽靈○吉益掃部実話○坂本鼎齋ト大塩冤罪 四十二頁
- (廿) 交遊(六)○商人ノ文雅○鴻池善右衛門ガ事○舞ヲ以テ潤ニ代フ○清濁並セ吞ム 四十三頁
- (廿一) 門人○柴秋村○十一吟社○鼎金城藤井藍田○榎本驢齋○種子島石峰 四十四頁
- (廿二) 風采○性癖○修養ト工夫○淡旭ノ異ル所以 四十六頁
- (廿三) 尊王家○旭莊ト松陰○攘夷ノ見解 四十七頁

(廿四) 去留ノ神圖○終焉ノ地○絶筆

四十八頁

(廿五) 死生ノ際○邦福寺ノ墓○妻子○然ラバヨ二先生

四十九頁

前述したように天囚は明治三八年(一九〇五)頃から、漢学研究目的の取材旅行をよく行うようになり、「亀門の二廣」の連載を開始する以前に、九州の儒学者、特に亀井南冥・昭陽の亀門に連なる儒学者に興味を持ち、そのコラムを『大阪朝日新聞』紙上において、掲載している。「亀門の二廣」に至るまでの天囚の連載コラムを概観すると、左のとおりである。

「豊後路」 明治三九年一月一七日～二月二日

「学界の偉人」 明治四〇年 三月二日～ 四月九日

「九州巡礼」 明治四〇年 六月二六日～ 八月 六日

「異彩ある学者」 明治四〇年一月二九日～二月二日

「亀門の三女傑」 明治四〇年一月二三日～二月二日

「亀門の二廣」 明治四一年 一月 一日～ 二月二六日

明治三九年の四月に天囚は、初めて九州に取材旅行として訪れており、門司・博多・佐賀・小城・大村・長崎・鳥栖・熊本・中津・宇佐をそれぞれ訪ねた。また同年の一月に再び九州を訪れた天囚は、別府・大分・国東を訪れ、三浦梅園・脇蘭室(愚山)・日出の帆足万里の調査を行った。この時の成果が明治三九年一月～二月に連載された「豊後路」として著わされ、梅園・蘭室・万里等の大分の先哲が紹介している。

そして、明治四〇年五月に、天囚は三度目の九州旅行に訪れた。五月十七日大阪を出発して、門司・久留米・福岡(亀井父子の調査)・唐津・多久・武雄・佐世保(楠本碩水から聞き取り)・長崎・嬉野温泉・佐賀・二日市温泉・秋月(原古処の調査)・甘木・そして日田を訪れている。また福岡で調査した亀井南冥・昭陽の門下ということもあり、今回の日田調査となったようである。日田での滞在は七日間に及び、淡窓・旭荘兄弟の遺著を読み、また咸宜園とゆかりのある人々から聞き取りを行ったようである。

日田での調査を終えた天囚は耶馬溪から豊後中津へ行き、豊前京都郡の村上佛

山の遺居を訪ねようとしたが果たせず、大阪へ帰っていった。この時の取材旅行は都合二十八日間に及んだという。

この時の取材の成果が上記の紀行文や儒学者の功績を明らかにする特集として紹介されており、明治時代も四〇年近くが過ぎて、明治当時の人々の中からも忘れ去られようとしていた近世の儒学者の功績を必死に明らかにしようとする天囚の姿を一連のコラムに見ることができる。

この「亀門の二廣」は、西国で異彩を放った亀井南冥・昭陽父子、またその門下に連なる儒学者について、紹介した記事の集大成ともいえるべきものである。

今回の資料紹介では活字化されていなかった「亀門の二廣」を紹介するに留まり、天囚が著わした時点では明らかにしていなかった事項などを十分に補うまでにはいたっていない。ただ「一種の鬼気さえ漂い、もともと格調の高い絶品」と評された文章を多くの人に読んでいただき、廣瀬貞治氏が望んだように多くの人に利用していただくことを望むところである。

#### 「付記」

今回の資料紹介にあたって、公益財団法人廣瀬資料館の廣瀬貞雄氏、原田俊隆氏、廣瀬洋一氏に快く許可していただきました。深く感謝いたします。また「亀門の二廣」の原文確認については朝日新聞社にご教示いただいた。

文字入力・校正にあたっては、桑野美鈴氏・後藤澄氏・原田昭子氏・原田菜津季氏・藤田勝士氏にご協力いただいた。翻刻文についての責めはすべて筆者が負うものである。

(註1) 廣瀬貞治氏については、『日田廣瀬家三〇〇年の歩み』廣瀬先賢顕彰会、一九七三が詳しい。

(註2) 西村天囚については、「西村天囚」『近代文学研究叢書』第二十三卷、昭和女子大学近代文学研究室、昭和女子大学、一九六五、『明治新聞文學全集』(明治文學全集91)、筑摩書房、一九七九、町田三郎「西村天囚のこと」『九州の儒者たち』一九九一を大いに参考にした。

(註3) 「九州巡礼」に関しては、西村天囚・菰口治校注『九州の儒者たち』儒学系譜を訪ねて 海鳥ブックス九 有限会社海鳥社 一九九一として全文翻刻されて出版されている。

(註4) 「西村天囚」『近代文学研究叢書』第二十三卷、昭和女子大学近代文学研究室、昭和女子大学、一九六五 一四四～一四五頁

#### 参考文献

「西村天囚」『近代文学研究叢書』第二十三卷、昭和女子大学近代文学研究室、昭和女子大学、一九六五

『日田廣瀬家三〇〇年の歩み』廣瀬先賢顕彰会、一九七三

『明治新聞文學全集』(明治文學全集91)、筑摩書房、一九七九

『明治漢詩文集』(明治文學全集92)、筑摩書房、一九八三

西村天囚・菰口治校注『九州の儒者たち』儒学系譜を訪ねて 海鳥ブックス九 有限会社海鳥社 一九九一



「龜門の二廣」スクラップ(第1回及び第2回一部)

(公益財団法人廣瀬資料館所蔵)

#### 〔凡例〕

- 一、この文章は明治四一年一月一日から二月二六日にわたり、『大阪朝日新聞』に連載された「龜門の二廣」と題して連載されたコラムである。そのうち今回は、序論と廣瀬淡窓について書かれた計二二回分を紹介するものである。
- 一、原文の文字はすべて旧字体であるが、今回は原則として常用漢字に改めた。
- 一、原文の表記は旧かな使用であるが、現代かな使用に改めた。ただし送りがないだけ原文のままに残しておいた。
- 一、原文の漢字は漢数字以外は全てルビがふられている。現代かな使用にあらためてルビをふりなおした。また明らかに読みが間違っているものは適宜修正した。
- 一、本文中で明らかに間違っている事項に関しては修正した。また天囚段階で不明となっていた事項も現在明らかにしているものに関しては追記して記したものがあある(主にルビがふられていない文章は追記したものである)。

●龜門の二廣

(一) 天 四

序 論

龜井南冥昭陽の卵翼せし九州の鳳雛は、固より指を屈するに暇あらざるも、万里に雄飛して千秋に赫灼たるべき大器雄才は、廣瀬淡窓・旭莊の兄弟を以て尤と為す、淡旭二家は、世の目して詩人と為す者なり、如何にも二人者並に詩を以て旗幟と為せり、然れども世の所謂詩人は、詩酒徵逐、風流自ら喜ぶに過ぎず、而かも淡窓は足馬関を越えずして日田山中に高臥しつづ、四方の俊髦を麾き、咸宜園の盛なる、海内比なしと称せられて、其の鼓舞陶鑄の術は、維新後学政の典型と為るに至れり、是れ豈大教育家に非ずや、旭莊に至りては、足跡海内に遍ねくして、名山大川を歴覽し、一世の碩学・鴻儒と応酬し、諸侯の賓師と為りて、其の蘊蓄を政事に裨補し、日夕筆を積てずして、遊べば必ず記し、見聞すれば必ず録し、往々学問経綸の論議を挿みて、百五六十冊の大著を成す、名は日記と云うといえども、居然たる序記論説の一大文集たり、亦是れ大文章家と謂うべし、並に單に尋常詩人を以て目すべからず。

顧うに安永天明以降、各藩学を創して大に文教を興し、士子を駆つて其の中に矩々たらしむ、好学の徒、復た笈を負うて遠遊するを要せざるに似たり、而かも咸宜園は交通不便の日田山中に在りて、其の教鞭を執る者は町儒者に過ぎざるに、能く游学の徒をして遐邇雲集せしめし所以の者は何ぞや、蓋し寛政の異学禁出で、宋学一統の世と為るや、各藩の師儒は、概ね皆拘々たる曲謹の士にして、器に随い材を成す所以を知らず、奇才偉器其の範に就くを屑しとせざる者は、猶遠く良師を求めざるを得ず、況んや僧・医・庶人の子弟をや、階級の弊を避けて、皆私学に趨かざる者なし、是私学の盛なりし所以なり、而して詩は人心に入り易く、小学の徒の才を試み譽を馳せ易きより、詩を以て教を立てし咸宜園の名最も顕れて、士子を吸収せしのみならず、淡窓能く南冥の家法に加うるに、己の創意を以て、学級を設け試験制度を定め、一方には三俊五子十八才子などの目を立て、一方には後世の穎才新誌の祖とも謂うべき宜園百家詩を刻して、巧に鼓舞奨励の術を行ひしより、子弟翕然として日田の山奥深く分入りつ、是れ私学中に於ても咸宜園の最も盛を當時に鳴らしし所以と為す、然れども教育の術ありて、文学德行、人の師表たるに足らずんば、其の盛を持すること、数十年の久しきに至る

能わず、是れ淡窓の大家たる所以なり。

旭莊は龜門に出るも、物理学の臭味なく、好んで正心誠意を説きて、宋儒の理窟に陥らず、蓋し其の学は閱歴より入る、世故に諳練して、人情に精通し、事に処して迂闊ならず、吉田平陽嘗て其の経術を佐藤一齋の前に稱揚せしが、一齋旭莊と語りて善を称せり、則ち其の尋常詩人・文士と異り、聖人の道に於て、頗る心得ありしを知るべし、是れ其詩名以外に重を取りて、諸侯及び賢士・大夫に敬事せられし所以か。

淡窓は巧思を以て勝ち、旭莊は天才を以て勝ち、淡窓の詩は精鍊を以て勝ち、旭莊の詩は雄大を以て勝ち、淡窓の人と為りは循謹、老吏の風あり、旭莊の人と為りは真率、達人の趣あり、識見の高きは淡窓の長にして、規模の大なるは旭莊の美なり、而して俱に大家の風度を具えて、並に一世の通儒たり、豈一双の聯璧に非ずや。

淡窓に懐旧樓筆記五十六卷あり、旭莊に日間瑣事備忘百五十六冊あり、是れ二家の自叙伝にして、日常行事より、時勢の変遷、交朋の聚散に至るまで、日を逐うて之を録し、細大遺さず、故に此の二書を繕けば、天明の初年淡窓の生時より、文久の末年旭莊の死に至るまで、八十余年間の史実炳然として、西は九州より東は江戸に至る迄の海内名流の消息を知る可く、往々世人未知の奇聞多し、故に二家の自叙伝と称するも、実は徳川未造の文学史とや言わん、予嘗て淡窓の宗家なる廣瀬貞貞治、及び宜園文庫の委員諸子に請うて、此二大秘書を借るを得、且読み且抄し、参するに諸家の専集雜著と口碑とを以て、此の篇を作る、庶幾くは学界と教育界とに裨益する所あらんか、編者の望足れり。

●龜門の二廣

(一) 天 四

廣瀨淡窓(一)

其の父祖 ▲秋風庵月化と長春庵桃秋

廣瀨淡窓初の名は簡、又は元簡、字は廉卿、後に名を建、字を子基と改む、幼字は寅之助、長じて求馬と稱し、淡窓又は荅陽と号せり、豊後日田の人なり。

日田は幕領にして代官所あり、町家は西国諸侯の用達を勤む、廣瀨氏も亦用達の家なり、其の始祖は武田信玄の臣廣瀨郷右衛門の弟將監正直の子孫なりと伝

うるも、其の系図詳ならず、五左衛門正直に至りて、筑前より日田に移り、初め堺屋と稱し、後に博多屋と曰えり、其の孫久兵衛と云うもの俳諧を好みて桃之と号せり、久兵衛五男を生む、長は貞高と云い、平八と稱し、最も俳諧を能く

し、初め桃潮と号し、後に秋風庵月化と号して名を俳壇に得たり、秋風庵の記は雪中庵蓼太の撰ぶ所にして、庵中に蕉翁の画像及び真筆を蔵せり、其の著に

秋風庵文集二巻あり、亀井昭陽及び帆足万里之に序したるが、万里は大儒にして亦頗る俳諧を好みしもの、其の序に月化翁の発句は骨氣雄意にして、晋子の

流垂、淡々にもまさりぬべし、俳文は芭蕉翁の倣を能く写せり、今の世にはいと珍なる心地す云々とあり、月化眉目清秀、風格人に絶し、人と為り端正にして

清潔を好み、幼より老に至るまで、一言の妄語なし、尤も史類を好み、左国史漢稗史小説、有るにまかせて之を読めりとぞ、文政五年壬午に年七十六を以て歿れ

り、今も日田の咸宜園の址なる東塾の門前に一苔碑ありて、「浮世とは何て云うたぞ初桜」の一句を刻したるもの、即ち月化の面影なり。

月化は専ら俳味を樂まんが為に、年三十五の天明元年に、家を其弟三郎右衛門に譲りて秋風庵に隱居せり、三郎右衛門は即ち淡窓の父なり、其名は貞恒、

字は君亭、俳号を桃秋と云い、又は周山と号し、二江亭長春庵とも稱し、後には二世秋風庵と稱して俳壇の人と為れり、少きより讀書を好み、十八九の比には、

屏風の中に匿れて書を読むに、燈火天井に映りて、父に叱られしこと度々に及びけり、府内・中川・黒田・対州等各藩の御用達を勤め、四十人扶持を受けしが、

利慾に淡くして慈悲心に富み、常に施を好みて徳望あり、郡吏の富むもの、資本を貸して商業を勤めしも之を辞しければ、時人其迂を笑えりとなん、平日讀書に

耽りて、和漢の書を涉獵し、童子を集めて教授せしが、尤も稗官を好み、自ら

数部の小説を著せり、中にも箒木と名けし小説十五冊は、盛者必衰会者定離の理を寓して、筆を肥前に起し、陸奥の金華山に留め、文章結構、並に観る可き者あり、其の子旭莊大阪にて上木を謀りしも、果さずして家に蔵せり、当時出版の

準備にや、挿画の原稿をも存せり、是れ隠れたる小説家と云わん、天保五年八月二日に歿せり、享年七十三、廣瀨氏は代々長寿にて、率ね皆七八十に躋らざる

無く、始祖より淡窓の代まで、五世二百年に及び、後年旭莊之を松崎慊堂に語りしに、五世二百年は振古未だ聞かずとて、筆を援つて之を記せりと云う、いと目出度き家筋なり、是れ陰徳の報にもや、桃秋の配後藤氏先に歿し、七男三

女あり、淡窓は実には其の長子なり、天明二年壬寅四月十一日を以て生れたり。日田は蕞爾たる豊後山中の小邑なるも、所謂日田代官の威焰は、幕府を代表

して九州に赫々たりしが為に、各藩略を遺りて之に媚事し、使節往来に絶えず、吏人の交代に因て江戸風を移し、長崎奉行との声応に因て長崎風も亦至りしほど

に、其の人都雅にして其の俗浮華なる、殆ど山村村陋の習なく、法蘭・宝月の徒、叢林に嘔起して風雅を吹散したるを以て、文化の度も亦頗る進みしが如きも、

未だ古より其の民讀書学問を以て身を立てし者あるを聞かず、而して代官治下の俗物中に、淡窓・旭莊の如き偉人を出ししは、独り隈川の流れ、日月二山の翠、

其の秀靈を鍾めしが為のみならず、其の家庭に書香あること斯くの如く、小説家の桃秋を父とし、俳人の月化を伯父としてこそ、此の双壁は世に出でけめ。

●龜門の二廣

(三) 天 四

廣瀬淡窓(二)

其の幼時▲松下筑陰▲僧錢塘▲高山彦九郎▲佐伯游学

淡窓幼きより伯父月化に鍾愛せられて、其の秋風庵に養われけるが、五つ六つ  
の比より、古勇士の昔話を聞くことを樂しみ、中にも大江山の故事を喜びて、常  
に僮僕と頼光の鬼退治を園中に演じけり、六歳にして秋風庵より実家に歸り、七  
歳孝経の句読を其の父桃秋に受けしぞ、淡窓讀書の始なりける、蓋し桃秋は少時  
讀書の志ありけるも、家業の妨げなりとて其の父に叱られ、思うままに學問を  
為し得ざりしとの口惜しく、せめて其子には學問させんと思立ちつつ、淡窓には  
幼時より讀書を授けしとなり、八歳にして四書の素読を終り、始めて長福寺の法幢  
上人に従うて、詩経の句読を受け、九歳には椋野元俊に従うて詩書・春秋を卒り、  
更に頼宮四極(油屋三郎兵衛名は大魯字は維馨)というものに就きて、蒙求の  
講義を聴きしが、此の歳日出藩の家老帆足一弥太日田に來りて淡窓を召見し、命  
じて字を寫さしめきと云う、以て其の夙慧人に絶せしを知るべし。

年甫めて十歳の寛政三年には、始て門を出でて師に松下筑陰に従えり、筑陰名  
は夷、字は世民、一字は子爽、別に西洋と号し、通称は勇馬、後ち震左衛門と改む、  
筑後久留米の人なるが、故ありて国を去り、日田の隈町に家居して子弟に教授せ  
り、時に年二十八なり、又頼宮四極に伴われて、竹田村広円寺の法蘭上人に謁しつ、  
上人は日田の人、字は曇茂、錢塘と号して、僧大潮に學び、江戸に入りて服南郭  
(服部南郭)にも從遊せり、大潮 錢塘詩集の序に、高君秉(高陽谷)・原双桂と  
錢塘とを指して九州の三才子と稱せり、当時筑陰は之に師事し、南冥は之に兄事  
したりとぞ、淡窓筑陰に就きて専ら詩を學び、初め一日に七絶一首を課して二百  
余首を得し後、五律七律を學べりと云う、彼の詩画に名を得し雲華上人も松下門  
の同学なり。

十二の春には、父に従いて太宰府の天満宮に詣でて七律一首を賦せり、其の二  
聯に曰く、往々田間埋三碧瓦、年々碑上長青苔、古今不改天山色、南北唯看  
思水来と、此の比は七才子風を學びたりと云えるが、二聯の巧妙なる、十二歳の  
小童の作とは見えず、此の歳高山彦九郎日田に來りて、高田屋和右衛門が家に宿  
り、淡窓の父桃秋を訪い來ければ、淡窓も之に面せり、桃秋は彦九郎と至て懇親

なりしと云う、淡窓の筆記に、「仲繩年比は四十余なり、顔面雄壯にして、眼大  
に鬚多し」と云えり、彦九郎淡窓を見て才子と稱し、日田を去て後ち諸方に悠揚  
しけるが、淡窓一日百詩を詠ぜしことあり、父桃秋其の稿を彦九郎に寄しける  
に、彦九郎やがて和歌一首を贈れり、曰く、  
大和には聞くもめずらし珠を聯ね

一日に百の唐歌の声

淡窓又、「予若年にて其の人と為りを察するに及ばず、後年筑前に遊びて  
南冥先生に陪せしに、彼れの為人を稱して、非常の豪傑と云えり」と記せり、  
彦九郎善を好みて人の美を成すを樂しむ、此の少年才子を見て、悠揚惜かざりし  
も亦宜なり。

筑陰に従遊すること三年余、十三の春に筑陰佐伯侯に聘せられて日田を去り、  
此の秋八月には、法蘭上人も世を去りて、依頼すべき人もなかりけるより、翌  
十四歳の寛政七年四月には、再び筑陰に従学せん為に佐伯に遊べり、日田より  
佐伯まで三十七里、同国とは云いながら、初旅の少年に取ては遠遊なり、当時  
筑陰は佐伯藩学の祭酒たり、其下に儒員として、野村丈右衛門、山本七兵衛、  
古田節右衛門、岩崎九兵衛の四人あり、学校監は古賀五郎右衛門なり、佐伯侯  
(寛龍公) 学を好みて、杯酒燕居の際も手に巻を積てず、其の叔父扶搖公子が余  
熊耳の門人にして、亦文学ありしにも因らん、佐伯の蔵書に富めるは、海内稀有  
と聞えしが、皆侯の求むる所とかや、侯筑陰を待つこと甚だ厚く、筑陰も亦心を  
興学に尽ししより、佐伯の文教頗る振えり、淡窓留りて筑陰に學ぶこと数月、一  
夜舟游に陪して、羽明山下に遊び、筑陰笛を月明の下に吹きて高興を極めたりと  
なん、(筑陰文化七年歿年四十七) 淡窓は多病の為に、此の歳八月日田に歸れり。

●龜門の二廣

(四) 天 囚

廣瀬淡窓(二)

脇愚山の忠告 ▲筑前游学の由来

初め淡窓の父桃秋は、同国小浦の学者脇愚山(脇蘭室)と懇意にて、常に其為人を称し、淡窓をして従学せしめんとせしも果さざりけるが、斯る縁故よりして、淡窓十一二の時に詩の添削を乞い、愚山も亦一絶を香示せしことあり、其の後兩三年を経て、淡窓十四五の時にやありけん、愚山手紙を淡窓に送りて曰く、近比京師に上りしに、人盛に足下の名を伝え、且飛驒の人と為せり、因て予は其の日田の誤りなるを弁じて、同国の人なるを誇れり、足下少年にして名を發すること如此し、務めて大成を期せざる可からず、但慎みて明季の学風を為す勿れ、是れ輕薄の病を生ず云々と、淡窓の才名は十四五にして早くも上国に聞えけん、江戸の儒生某が長崎行の途すがら、日田に來りて、淡窓に相見んことを求め、且詩を贈りしは十四の冬の事なり、亦其の才名世に轟きしが為ならん、愚山は学徳並に高き重厚の君子とて、淡窓の才を称すると共に、規するに大成を以したるは、忠厚親切の至なり、且其の七才子風の詩に耽るを見て、明季の学風に染まざらんとを戒めしが如き、流石に醇儒の言と謂うべし、然れども淡窓は遂に龜門に入らざる可からざる事情ありき、而して龜門に學びて物学の弊竇に陥らざりしは、愚山の戒ありしにも因らんか。

扱も日田と龜井南冥とは浅からぬ縁故あり日田の名僧法蘭(前に出ず)宝月(名普明字は宝月号香光)は、南冥と同じく大潮門下の高足なるより、南冥も十六七の時に、日田に遊びて相良氏に宿せしことあり、淡窓の従姉夫なる相良文之進が後年南冥の門に入りしは之が為なり、淡窓七歳の時に、南冥の門人森春齋というもの、日田の秋風庵を訪いて、南冥が秋高一百二都城の詩を書きし扇子を贈りしより、淡窓始めて南冥先生あるを知りけるが、十一の時松下門の同学高橋金吾というもの、去りて南冥の門に入るに會し、淡窓も亦金吾に因つて他日入門せんことを南冥に請いけるに、南冥之を諾しければ、其の志既に決つ、此の歳南冥罪を獲て蟄居し、金吾再び松下門に歸りけるに、龜門の家法を用いて、劇論人を驚かし、より、師の筑陰すらも金吾の才学長進を稱して、我れは及ばずと云えりければ、淡窓は今更に龜門の盛を知りて、益之を慕いきとなり、

筑後柳川の牧園大野(名瀧、号茅山、通称文哉、後進士)は南冥の高足、時に年二十六、日田に來りて同学の相良文之進に宿し、法蘭・筑陰と応酬し、年十一の淡窓に贈るに序一篇を以せり、十四の秋に、秋月の佐谷龍山、馬関の藤左冲等日田に遊びて頓宮四極を訪いければ、淡窓因て之と交りしが、左冲は永富独嘯庵の姪にして南冥の門人たり詩書を善くするも其の行修まらず、後年日田人の婿となりしも、妻子を置去にせし男なり、此の男口を極めて南冥・昭陽の為人を稱し、天下第一流の人と為せり、淡窓因て左冲を以て筑游の媒と為さんとし、其の父桃秋は其の為人を喜ばざるも、詮方なくて許せりとなり、此に至りて筑前游学の事決したりき。

淡窓年十五の寛政八年秋八月、左冲を案内として筑前游学の途に上り、途に秋月を過ぎて佐谷龍山が家に宿せしに、龜門第一の詩人なる原古処、及び同門の吉田平山(名章、字煥之通称左膳平陽の養父)は、左冲及び淡窓を樂只亭に招きて詩會を開けり、古処の二人に贈りし詩に云く、

一別江湖度幾年。不レ凶同病此相憐。茅檐臨レ酒山雲白。蘿幕窺レ人溪月懸。為是阿戎談靡々。能令三狂藉舞躑々。明霄嘯詠知何処。清賞心多牛渚船。

八月十六日福岡唐人町の龜井塾に至りしが南冥は塾居中旅人に對面するを得ずとて相見るを得ず、其の子昭陽に謁して束脩を行えり、昭陽時に年二十四なり、塾中の諸生十余人、舎長は久野善次に、才学の名一時に冠たり、斯くて左冲と共に昭陽の弟大年、南冥の弟曇榮、禪師等を歴訪し、福岡に留まること六日にして一旦歸郷せしが、伯父の為に秋風庵発句集の序を昭陽に請わんとて、此の冬福岡に往復すると再度に及びしも、其の入塾は十六の春なりき。

秋風庵発句集の序を請わんとせし時、佐谷龍山曰く、昔時東涯小刻傷寒論の序を作りて、時人其の名儒の体を失うを誹れり、豈一世の儒宗にして俳書に序せんやと、之を昭陽に請う、昭陽果して黙然たり、遂に淡窓に命じて稿を起さしめ、昭陽之を添削し、法幢上人の名を以て巻首に置けり、後年秋風庵文集の序は、旭莊の請に因て、昭陽自ら之を作りし者なり

●龜門の二廣

(五) 天 四

廣瀬淡窓(四)

龜門入塾▲大教育家の鼓舞▲談話の益

淡窓は年十六の寛政九年正月を以て、いよいよ龜井塾に入り、南冥の罪を獲て以来、旅人の入塾を禁ぜられければ、淡窓も筑前の医者内山玄斐といふものの飯子と為り、内山玄簡と称して入塾せしなり、是れより先き淡窓は未だ名字あらず、左冲前年案内せし時、御身福岡に至らば、龜井先生より名字を賜わらん、氣に入らずとも改め難かるべし、自ら早く名字を定めんに若かずと云えりしより、名を簡字を廉卿と定めけるが、此に至りて仮親の名の一字を取て玄簡とぞ称しける、其の名を建字を子基に改めしは四十前後の事とぞ。

淡窓入塾の後ち始めて南冥に謁して、其の容貌奇偉非常、眼光奕々人を射るに驚き、一見して豪傑の士なるを知りけるが、程経て南冥は淡窓に向い、先日牧園文哉来りて吾子を称揚し、海内無双の才子と云えり、此の言美に当れり、併し今を以て之を見るに、外に二人なきに非ずと戯れしに、淡窓大に蹶踏たりきとなり、一場一抑其の氣を鼓舞して、以て自ら局せざらしむるは、南冥教育の妙処にして、此の一言の如き、少年才子の慢心を抑え、且其の奮発心を激するに巧なり、英雄の兵を用ゆるに似たり、詩は南冥に呈し、文は昭陽に呈して、其の添削を請いけるが、最初は会読輪講等にも、龜井風に慣れずして挫折せらるること多かりけれど、半年後には発達人を驚かせり、然れば昭陽も淡窓に向つて、吾子始て来りし比は甚だ平々たりしも、今は大に伸びたりと稱揚せり、此も亦抑揚鼓舞の技法なるべし。

淡窓が六十二の時の筆記に云く、「孟蘭盆の節に、塾生夜行して燈を觀る、南冥先生の時は、塾約頗る厳なりしが、昭陽先生に至りては、絶えて規約なし、唯青楼に遊ぶことを禁せり、此の夜始て妓院に至る、諸生云く、妓を買うの禁あるも、妓を見るの禁なしと、予れ生來花街に往かず、唯此の時のみ、生涯の一奇事、故に記す」と、博多柳町の見物を以て生涯の一奇事と追記せしほどなれば、生來花街に往かざりし淡窓の品行は、諸生の時より極めて端正なりしを知る、然れば垣を越えて柳町に通う塾中の悪書生ども、晝に帰り来れば同臭味の輩に、玄簡は眠り居るやと問うぞ常なりける、才子は才を恃みて行の修まらざるが多きに、

志氣の堅きこと淡窓の如きは、天性の美に因るなるべし。

淡窓才華夙成、加うるに好學の篤きを以して、才日に長じ學日に進めり、是れより先き江上伯華、山口土沛は龜門の冠たり、既にして昭陽の名盛に起り、古処の詩名亦謙ぐ、南冥に詩有「震平」一文有「豆の句ある所以なり、既にして大壯・大年兄弟の名隆々たり、南冥是に於て関西文章の士を稱して、我家三天子、古処一狂夫と詠じき、淡窓當時昭陽を觀ると天の及ぶ可からざるが如く、只他の三子を慕尚して流垂たらんことを願ひけるが、南冥も亦淡窓を稱して、三児及び古処に繼ぎて而して起る者は斯の子なりと曰い、龍脊甚だ厚かりき、甘棠館の火は歸省中なりしより、直に來て災を弔せり、其の故郷に歸る時、南冥送別の七律に、官字「已傾南郡帳、歸寧豈斷北堂樓」と云い、昭陽も亦七絶句を賦して之を送れり、其の三に云く。

妙年英氣説吳干。虎榜龍頭未是難。今日天官無吏部。江湖使汝布衣塞。廉也多レ文誦五車。上窺墳素一及虞初。乃公災後無遺卷。自喜猶藏行

秘書。曾聞文苑失玄珠。一夜驪龍含自趨。不識象罔何処在。九淵波黑月光孤。淡窓は災後の昭陽に姪の浜の甘古堂に從い龜井塾に在ること前後三年に及び、年十八の寛政十一年冬には、病の為に退塾して家に歸れり、淡窓曰く、予れ門に在るの日少く、教を受くるの日浅きも、先生父子之を他方に悠揚して、遠近に施しつ、龍門の一言、常人の千言万語にも勝れり、予の今日微名を儉む者は、皆二先生の賜なりと、晩年其の養嗣林外に謂て曰く、予れ少くして南冥昭陽二先生に從うて學びしが、其の益を得る者は、聴講に在らずして談話に在り、一生の識見は、二先生の話中より来る者多し、当時或は漫然之を聴きしも、後ち之を思えば、其の語の確然たるを覺う、汝等意を用いて先輩の談話を聴くと、古人教育の道と、益を受くるの法と、並に後人の則と為すべし。

●龜門の二廣

(六) 天 四

廣瀬淡窓(五)

病身と学問 ▲詩学 ▲陰鷲録 ▲老子学

淡窓の退塾は病氣の爲にて、其の症は勞瘵に似たりけるが、翌十九の寛政十二年には、果して生死の境に沈みけるほどに、昭陽も打驚きて、特に甘木に開業し居たる弟の大壮をして往診せしめしは、郷党の榮なりけり、竹田の医師に倉重湊というものあり、肥後人の養子と爲り、富田大洲に学びて、一癖ある医者なりけるが、廣生一人を治するは、千万人を治するに勝れりとして、治療に力を尽し、家人も亦誠を尽くして看護しけるにぞ、翌二十の享和元年は、病やや怠りて、甘木の大病が許に來遊せる南冥をも訪いなどしけれど、猶平癒せしにはあらで、優游病を養いつ、明けて二十一の冬、宿疾大に動き、翌年も医薬に暮れて、二十三の文化元年にこそ、ようよう平癒したりけれ、修業盛の年比に、病を養うを此に至りて五年に及びしかば、淡窓は常に修身の一大厄と爲せり、誠に然り、十歳神童と称せられて才名世に聞え、弱冠にして龜門の高足に列せし淡窓をして、更に昭陽に学ぶと五年ならしめば、嘗に詩文の長進のみならず、其力を經学に得ると測る可からざる者ありしなるべく、鬱乎として經学文章の大家と爲り、もて上国文学を圧倒するに庶幾かりけんを、惜むべし淡窓の学問修業は十八迄に卒れり、十九以後は養生片手の独学なり、經学の造詣は養生片手の独学に望む可からざるも、詩の如きは虚弱の才子に適せし学問なり、養生片手にも学習し得らるる者なり、況や淡窓の才は詩に長じて、其の嗜好は文学に在るをや、是に於て淡窓志を經学に絶ちて、力を詩学に専らにせり、養生片手の修業にして、猶且詩を以て家を成し、名を海内に震うほどの人と爲りたる淡窓の天才豈美ならずや。

淡窓は詩人として固り当代の泰斗たり、而して学界の敬意は、其の詩人としてよりも、老子学者としてに在り、予も亦初めに謂らく、当時文章に賴子成(頼山陽)あり、經学に昭陽・万里あり、淡窓固より其の敵に非ず、而して詩は今日こそ文学の精髓精華として之を尊重すれ、当時の漢学者流は、或は緒余と曰い、或は雕虫の小技と曰いて、頗る之を輕視せり、淡窓も亦単に詩人と稱せらるるを欲せず、高く自ら標榜する所以の學術を拵びて、而して老子の学に帰依し、以て異を立て高きを標せし者ならんと、然れども淡窓の為人を吟味するに、斯る功名心

ありけんとも覺えず、名を成せし後の標榜はいざ知らず、最初は斯る好奇心よりして老子を読みしにはあらで、全く其病身なりし一点が、其をして老子を喜ばしめし者の如し、筆記に拠れば、年二十の享和元年の条に、「是の歳楞嚴經を読む、是れより先き陰鷲録を読み、豪潮師を見て今又此の經を読み、稍仏經の端緒を知る、是に於て輕侮の心止みて、尊崇の念起り」とあり、又同年の条に、「予れ十九二十の間、独居事なし、秋風庵に在り、老子国字解を取りて、數遍之を読む、此より老子の学を好めり」と見ゆ、顧うに淡窓は至て正直の人として、十九二十の比、大病に犯されては、痛く憂鬱に沈みけん、斯る折に衰了凡が陰鷲録を読みては、いよいよ積善の家に余慶あり積不善の家に余殃ある所以を思い、更に豪潮律師(肥後の僧)に面して、因果応報の理を信するに至りしなるべく、遂に老子の玄理を理解するに及びては、葆墳和光の道、処生養生の術を會得して、病中の沈鬱を開くに力ありしを疑わず、斯て益老子の学を嗜み、遂に析玄あり老子摘解あり、以て老子学者と稱せらるるに至れるならん。

淡窓の儒業を開く迄の修業、及び学問の來歴は斯の如し、淡窓の淡窓たる所以は詩人としてよりも老子学者としてよりも、大教育家としての功績に存す、其の大教育家たるに至りし來歴に就ては、又いと面白き話あり。



廣瀬桃秋画像(淡窓の父) (公益財団法人廣瀬資料館所蔵)

● 亀門の二廣

(七) 天 四

廣瀬淡窓(六)

立身の道に迷う▲医か儒か▲篤実家は役に立す

淡窓臥病五年にしてやや健康に復せし二十三の文化元年には、頗る一身の方向に迷えり、初め淡窓十四五の時、秋月の医者佐谷龍山に、詩文講説を事として一生貧窮ならんより、医者と為りて富栄安逸ならんに若く無しと勧められしとあり、筑前游学より歸りて後も、人の医を勧むるに、心頗る動ける折しも、亀門の学友なる筑前の眼科医鰐阪右京日田に来れり、因て右京に就て眼科を学ばんとしけるも果さず、其の後肥前田代の学問所にて教師を求め、米二十三俵にて淡窓を聘せんとの議もありけれど、其の事成らずして遂に二十三の春をも迎えつ、医者と為るには游学せざる可からず、游学せんにも身は弱し、故郷にては儒者の糊口困難なり、然りとて何時まで父母の養に依るべき、免やせん角やすべきと案じ煩いし末、大病を治療せし医者倉重湊が、智術ありて計策に富めるを思い、大意左の如き手紙を送りて其の智慧を借りけり、曰く、

某数年来疾病多く、伏枕のみに日を過すこと、独り宿痾の害を作すのみに非ず、心中に深憂ある故なり、某幼きより専ら読書を事とせり、今日に至り身を立んとするに、儒を外にして為すべき様なし、抑儒を以て身を立んとせば、出て諸侯に事うるか、又は三都の間に行きて舌耕するか、二つの外は為すべき計なし、此の二つの者は皆多病にして之を作すこと能わず、又当県に在りて舌耕せんとするに、我が日田の地、開闢以来儒者というものあることを聞かず、れ其の業立つ可からざる故なり、某既に数年来生徒を集めて講説を為すと雖も、業を受ける者五六人に過ぎず、是れ何ぞ門戸の計とするに足らんや、又今に至りて業を変ぜんとすれば、医事の如きは素より習う所に非ず、農工商売の業、亦習う所に非ず、某今進退此に谷れり、故に年来鬱々として日を送るのみなり、願くは高明某が為に一の良策を施したまえ、若某が身計既に定りなば、心も亦止る所を得て定るべし、然らば病痾も亦日を逐うて治すべしと思わる、唯々高明の良策を願うのみ。

数日を経るも何の答もなきより、或時某が書を見たまひしやと問ひけるに、倉重は懐中より其書を取り出して地上に抛ち、冷笑しつつ云ひけるよう、此の書は

熟読せしが、離騷の文体と云うべく、一言にて済むことを百回も繰返して、怨むが如く訴うるが如し、何ぞ其の屈原に似たるや、足下の身事は天之を定めたり、足下町家に生れながら、幼より書を読み、十二三には神童と称せられ、弱冠にして其の名海西に遍し、儒を外にして何をか為すべき、活計に便ならずとて、医者と為り農商と為らば、天下の笑を如何せん、多病遠遊する能わざる身は、父母の膝下にて教授せよ、日田は儒業に便ならずというも、風土の為に非ずして、足下が心を教育の術に尽さざる為なり、足下にして心を尽さば生徒は増加せん、畢竟儒者は貧しきものなり、父母の助を借るは恥るに足らず、二十三にも為りながら、一事をも勤めざるこそ恥づべけれ、村学究恥るに足らず、聖人猶且隠見出処あるをや、足下予が言を是とせば、予れ不才なれども足下の為に郷党の父老に説きて力を出さしめんという、淡窓幡然として悟り、倉重に向て忠言を拜し、心を教授に専にせんと答えて、明春より儒業を開かんとぞ決心しける、是れ抑も咸宜園の盛を致せし根源にして、淡窓が千歳に不朽なるを得しは、倉重が忠告の力なりけり。

淡窓曰く、予が交友多けれども、益を得しは藤左冲、倉重湊の二人なり、左冲到依りて亀門に遊び、倉重に依りて身を立つるの計を決したり、二人並に君子に非ず、然れども能く人情を揣摩して游説に長じ、予が身に取っては其功忘る可からず、世の所謂篤実家は、昏々黙々して重厚の態を為し、人事を可否せず、斯る人は千万人ありとも、我が身に一毛の益なし、太史公も游侠の功を論じて、隠君子の上に在りと云えり、是れ実に謂ある言なり、予れ二子に於て亦当世の篤実家にまされりと思ふなり、後進の友を択ぶに心得あるべしと、倉重の諫、淡窓の言、並に味う可きにこそ。



秋風庵月化画像(淡窓の伯父)  
(公益財団法人廣瀬資料館所蔵)

●龜門の二廣

(八) 天 四

廣瀬淡窓(七)

咸宜園の上▲学級と試験制度

淡窓此に至りていよいよ村夫子生活を思立ち、年二十四の文化二年に、豆田町長福寺の学寮を借りて転居し、此に寺子屋を開きて子弟に教授せり、是より先き二十一の比より講説を為せしも、消間の計に過ぎず、講学を以て畢生の事業と為しは此の時に始まり、間もなく魚町の実家に帰り、土蔵の中にて講釈しけるが、会彦根侯の儒員を求むるあり、或人昭陽に託して淡窓を聘せんとせしも、故ありて之を辞し、是の歳の秋には父母と別居して、其の学舎を成章舎と名け、翌々年初めて書塾を新築して桂林園と称せり、此より弟子益進み、他国よりも来学ぶ者多し、大阪安治川南徳寺の僧惠学の入門は、淡窓二十七の時なりしが、惠学入門後、京撰の諸生来学ぶ者多かりければ、宜園百家詩にも、其の倡首を徳として特筆せり、業を桂林園に講ずるもの十一年、師弟の居る所遠く隔りて、生徒の取締不行届なるを憂い、年三十六の文化十四年には、始めて居を堀田村に卜し、桂林園を毀ちて其材を運び、新に居塾舎を建築せり、即ち是れ咸宜園にして、所謂遠思楼は其居る所なり、楼僅に六畳敷のみ、咸宜園は生徒の増加する毎に、講堂塾舎を増築して、東塾西塾の名あり、内塾外塾の称あり、外塾は下宿にして、筑後屋長兵衛の家を甲舎と称し、鍛冶屋五郎兵衛が家を乙舎と称し、舎監を置くこと内塾の如くなりしと云う。

宜園の弟子寄宿舎に在る者を塾生と云い、通学する者を外来生と云えり、塾生の数五十四人の多きに達し、内外生を合して百人以上に上りしは、実に淡窓年三十九の文政三年の春の比なり、是れより先き九州の私塾は、亀井氏を最も盛なりと為すも、其の塾生は二十四五人を出でず、其他江上荅洲、帆足万里等も、各門戸を張りて子弟を引きしが、兩三年来学徒漸く盛にして、亀江帆廣の四塾皆三十人を算するに至りしをだに、其の多きを喜びけるに、今や宜園の盛なる、他塾に超躍すること如此くなりしは、独り当時文運の旺なるに因るのみならず、淡窓の詩を以て標榜せしと、其の塾政整頓、人氣に投合する者ありしとは、亦其の主因なりけん、淡窓の学術は昭陽・万里より勝らず、日田の地僻は日出に譲らずして、福岡の便に若かず、而も子弟の龜帆二門に赴かずして、宜園に雲集せしは、

学術と地理との為のみに非ざるをや。

淡窓先輩の間に崛起して、儒を以て身を立つるの難きを知り、如何にしてか能く子弟を引くを得んと苦心せし末に、月旦なる一法を案出せり、蓋し其の心に謂えらく、大儒先生は講釈と詩文の添削にて、自ら子弟を養成するに足らん、後進予の如きは、別に招致の術なかるべからずと、因て南冥の家法を参酌して学級を設け、毎月試験の制を定めて、競争進取の心を策励せり、之を名けて月旦と云う、月旦は二十四開業の時に始まり、最初は四級に分ちしが、後ち屡更改する所あり、其の大概左の如し。

生徒の階級を十級に分ち、最初等を無級とし、無級の外は、毎級上下二段に區別し、合計十九段とし、四級上以下を下等生、五級下以上を上等生とす、(上等生の内、七級以上を上の上、六級以下を上の下とす) 下等生は輪読輪講会講等に従事せしめ、上等生を会頭として、点数を附け昇級せしむ、上等生は一月の内、二日を書会、(楷書七行十六字の写本) 三日を句読切、二日を詩会、二日を文会とし、之を試業と名け、香三線を限る、毎会監督ありて取締を為し、淡窓自ら点数を附して昇級せしむ、上等生には別に消権という者あり、経書は講義、歴史は筆記なるが、及第点に満ちざる科目あれば権と名く、更に勉強して権を消さしむ、三権以上は試業に与るを得ず。昔時の漢学塾は席順を以て競争せしむる者なきにあらざりしも、学級及び試験の密にして目備われる宜園の如き者あるを聞かず、争競は人情の常にして、及落は諸生の榮辱之に關せり、其の常情に従い、其の功名心を激し、子弟をして進級を誇り、父兄をして成業を樂ましむ、其の術や巧なり。



廣瀬淡窓の画像 (公益財団法人廣瀬資料館所蔵)



淡窓の古居 (東家)

●龜門の二廣

(九) 天 四

廣瀬淡窓(八)

咸宜園の中▲塾規と塾風

宜園には都講、句読師、舎長、威儀監の類より、主簿炊事などに至るまで、塾生の職事あり、規約にも、上は九級より下は無級に至るまで、一人たりとも無職の者ある可からずと定めたり、一日の飯米は四合五勺とし、朔望には菜に念を入れ、毎月二十七日を備日と定めて、酒菓子類を許し、外出の届を厳にして夜行を禁じ、門外を行儀作法を慎重にして風紀を取締り、尤も心を諸生の学費に致して、金銀一切を他家に預けしめ、検査考前定録といえる二様の帳面を作りて、其の失費の濫を防ぐ等、規則の綿密なるは、世事に迂闊なる学者の家法とも覚え、遠に淡窓は町家に生れて、世務にも適せし人なりけんと感じ、用意の縝密は循吏の風あるを見る、当時の私塾は西亀東廣の名あり、亀井塾の生徒は豪傑風にて、父兄の不安を免れざりしに、宜園は風儀も好しとて、父兄も安心して子弟を託せしもの如し、淡窓曰く

近世海西生徒の盛なるは、儒に亀井と予、医には村井琴山なり、村井は名分を以て相制し、受業の先後を以て席次を定め、終身其の班を改めず、龜家は意気相投するを尚び、唯才芸を取て德行を必せず、貧者は之に衣食せり、故に感奮して患難を辞せざるも、門下に跣弛の士多し、予は規約を厳にし、勤惰を督し、殆ど官制に類せり、其の弊や法あるを知りて師あるを知らず、村井は古道に近きも、其の弊は人才を束縛し、龜家は孟嘗平原の風を洩洒の間に行う者にして、予は孫呉申韓の術を礼楽の中に混す、予の人を御するは、多きも乱れざるに在り、名分を修め恩義を重んずるは後人を待つと。

顧うに教育は人に在りて法に在らず、淡窓の教育は専ら法制に拠りて、人を典型に入れんとす、是れ其の長所にして、又短所なり、然れども世運の推移は、尋常漢学塾の教授法に憚らず、而して淡窓は自ら学問文章の先輩を凌駕するに足らざるを知る、是に於て学級法試験制を定め、規約職制を創して、以て一生面を教育界に開けり、其の識見才幹、並に世儒に卓絶せずや、而して塾生にして新入生を紹介せし者には、手数料として五点を与え、以て試験点数の不足に備えしめしより、塾生争うて朋友を招致し、且能く新入生の世話を為せりという、此

は塾生招致の妙策にして、門戸の盛を致すに苦心せしこと、今の私立大学の生徒募集に努むると相似たり、蓋し淡窓は学問上の教授よりも、教育行政に長じたりしなり、淡窓の自記に云く。

初め予の教授を為ししは、以て人の師と為るに足れりと思ひしに非ず、童幼をして少しく文義に通ぜしめ、小成の後、筑前に至りて昭陽先生の門に入らしめんとするは素願なり、夙に此の意を師家に告げたり。

蓋し淡窓は高等教育位迄の程度を以て自ら任じ、亀井塾を以て大学と為ししなり、其の高足弟子にして学問長進せし諫山安民・小関亨・麻生伊織・中島大寶の如き、皆亀門に遊ばしめ、弟の旭莊をも宜園にて教育せし後は、昭陽に従遊せしめしは之が為なり。

淡窓の教育は詩を主とせしを以て、蒙求の語記は又其の重要な課業なりけり、是れ詩を作るに、蒙求の典故を自在に使用せしめん為なり、常に諸生に向て、南郭の詩は蒙求を出でず、子等も蒙求に熟せば足れりと教えたりと云、各科の試業中にも、詩は諸生の尤も楽しむ所、亦尤も力を用いし所なり、詩文の試業は線香二本を限り、塾生中に線香番を命ぜし時は、往々線香を醬油に漬して時間の早く立たぬようにしけるが、淡窓自身に線香番を為すこともあり、其の時諸生困却せりとぞ、淡窓得意の講釈は亦固り詩に在り、漢魏以下唐宋元明清に至るまでの詩を講じ、又自ら遠思樓詩鈔をも講じけり、経書は其の所長に非ず、元來正直なる人なりければ、不レ知為レ不レ知の本文を守り、諸生の質問にも、覚束なき事は知らずと答え、己の知りたることは明白に答うるを常とせり、告諭の中に曰く。

予れ未熟の学を以て童蒙の師と為りしより、今に至りて三十年、訓話句読の務はかつかつ責を塞ぐといえども、人才を養育するに至りては、微力の及ぶ所に非ず、門下の人物、父兄に忠孝を欠き、朋友に信義を失うの類、挙て数えがたし、其の本を論せば、皆教導の宜しきを失えるなり、其の事を思つ毎に、必一身に汗す、門下の者、必ずが尤にならう可からず

是れ固り過謙の辞なれども、其の人の正直温厚にして如何に謙徳に富みしかを知るべし、然れば門下の諸生に對しても、決して姓字を呼捨にせず、必ず名の下に子の字をつけて呼ぶを常としけり、其の温厚恭謙は、人の師表と為るに余あり、従遊の盛なるを致せしも亦理にこそ。

●龜門の二廣

(十) 天 四

廣瀬淡窓(九)

咸宜園の下▲狂歌▲代官の干渉▲育英の功

塾生の謝金は、束脩金一方、盆暮に一方、退塾の時に一方の規定なりけるが、帰省又は帰塾の折にも附届ありしなるべく、門生二百人に上りしこともあり、其前後費を執るもの三千に余りければ、其の盛時に於ける収入いし多かりけん、其の外に日湊銭と称する塾費ありて修繕に備え、蔵書銭と称する書物代ありて書籍購入に供したれば、師家の失費は割合に少かりしなるべし、数多の諸生雲集せしこととて、殆ど日として出入あらざるなく、出入毎に金一方を得しより、淡窓の生計頗る裕なりけるが、其の生活は質素にて、死後には余財も亦多かりしとなん、淡窓に一首の狂歌あり。

我嫌い画賛菓子箱贗画人

洗濯衣物屋前の客

画賛は人の為に嫁衣を作るもの、其の好まざりしや宜なり、一朱にても二朱にても、潤称は現金こそ重宝なれ、失礼なればなどと筆して、菓子箱に義理を濟ますは世に有勝なるを、我嫌に数えし淡窓の正直いと面白し、田舎儒者と侮りて贗画人の鼻うごめかせる、如何に面憎かりけん、洗濯衣物の強張しを嫌える、其の蒲柳の質衣に勝えざりしも知られたり、諸生は毎日日課の詩稿を玄関に出し置けば、淡窓屋迄に添削するを例としけるほどに、午前はなかなか忙しかりけん、其の忙しき中の客来、嘸迷惑なりしなるべし、此の一首淡窓のひと為り躍如として観るが如し。

宜園の盛時には、日田の商人、諸生より預りし学資を資本に廻して利潤を得たりといえ、宜園の諸生に因つて如何に日田の庄を潤せしやも亦推知すべし、中には学資なき貧書生もありて、此等は一日二食にて辛抱するもあり、一人の食を二人分ち食うもあり、医者の諸生は按摩を業とし、坊主の諸生は托鉢を為すもありけれど、二百余の学生を集めし日田の繁昌は思い知らるるなり、斯くばかり盛なりし宜園も代官の干渉にて、一時衰頽を招きしことあり。

是より先き淡窓知を代官羽倉氏に受け、十三の時召して孝経を講ぜしめられしが、羽倉氏の子永吾時に年五歳、側に侍して講を聴けり、永吾は即ち長じて名は

用九、字は士乾、簡堂と号して、大名を轟かしし羽倉外記なり、其の後淡窓の筑前より歸るや、羽倉氏其の子に命じて淡窓に学ばしめ、又淡窓に命じて月に六回書を代官所に講ぜしめ、淡窓の塾を開くに及びても、代官所の講釈は故の如くなりき、既に三河口氏代官と為り、三河口氏去りて塩谷大四郎之に代りしが、其の初は恭儉自ら守り、老を敬し善を褒し、頗る名声あり、文政二年淡窓三十八の時に、特に召出して代官所の臣籍に列し、用人格に準して興学の志を示せり、淡窓もと町人なりして、此に至りて帯刀の身と為り、頗る塩谷氏を徳とせしめ、未だ幾ならずして、塩谷代官威福を弄び、咸宜園の塾政にも干渉して、小過の為に屏門を命ぜられしこともあり、弟の旭莊を養うて嗣と為し、咸宜園の教育をも旭莊に一任するに及びては、代官の干渉殊に甚だし、旭莊屢其の意に忤うて、屏門謹慎存に至り、遂に喙を試験の点数に容れ、諸生の及落を左右するに至れり、淡窓の筆記に。

謙吉(旭莊)二月の月旦は旧例に従わず、府君(代官のこと)の意に出る者半に居る、此の法孔明が所謂予が心秤の如し、人の為に軽重を作す能わざるを師とす、是を以て衆人の心を服し、策励の具と為りしが、此に至りて明府受憎の私、旧法を失えり、嘆息すべし

と憤れり、代官の命に因つて塾制をも変改しければ、私に塾生に諭すに、社を結びて出精すべきを以し、日新社・廻瀾社・必端社・三省社等の組合を作りしが、旭莊は間もなく大阪に出で、淡窓は大病に罹り、さしも盛を極めし宜園も、塾生離散して二十余人に過ぎざるに至れり、是れ誠に宜園の危機なりき、然れども間もなく代官塩谷氏去りて干渉の跡を絶ちしかば、天保七年十一月に規約を改正し、新に告諭を作りて塾政を更張せり、教育資料載する所の者是なり、是に於て宜園の絃誦復た盛に起りたりき、而して養子青村、及び旭莊の子林外、並に宜園の学統を継ぎて絃誦を絶ず、以て維新の際に至れり、淡旭青林、世之を四廣と称す、維新後宜園一たび廢して復た興り、高足村上姑南に依りて教鞭を振りしも、久しからずして遂に廢しつ、花月川の上、日月二山の間、復絃誦の声を聞かざるも、宜園三千の弟子は、各其の長を挾みて一世を風靡し、或は文教に任じ、或は太使と為り、或は書を廟堂に挖く者あり、育英の功亦偉ならずや。

● 龜門の二廣

(十一) 天 四

廣瀬淡窓(十)

學問と記力思索力▲敬天▲儒家の小乗

淡窓は十八九の修業盛に大病を煩いしのみならず、二十八の時より眼病に罹り、暖時には病氣稍退くも、寒時には逆上して病重りけるほどに、一生の間、目を休めんとすることに注意し、唐本を読むを得ず、細字を書くを得ず、燈下に書を見るを得ず、常に自ら天の予を限るを嘆じたり、然れば門人の間に答えし夜雨寮筆記を読むに、易は弱冠の比、程朱の伝義を一覽したることあり、古註は検閲するに暇なし、尚書は昭陽翁の講釈を聴きたり、古文の真偽は知る所に非ず、詩経は師説を聞けり、春秋の一經は予が疑いを欠く所なり、程朱伊物の説は弱冠前後略其の書を涉獵したるのみにて、研究するに及ばずなどと云える、必ずしも好んで過謙の辞を為すに非ず、明白に有の儘を答えて掩飾する所なき、所謂知らざるを知らずと為すの流義に副いて、其の為人の質直を見る、然れども淡窓の記憶力は視力と反比例に強烈なり、嘗て人に向て、予は古人の詩を誦記すること三千首に及び、マサにと訓する文字の、当なりしや応なりしやを分明に記憶せざる古詩をも合算せば、五千首は誦誦し得べしと語れる由、豈驚く可き記性に非ずや、此の強大なる記力に加うるに、融洽なる咀嚼力と、精密なる思索力とを以て、故に其の学は深く且博からざるも、其の強記忘れざる旧業に對して、瞑想黙思を事としつつ、能く其の義に通じ、能く其の理に達して、以て一種の見解を下し、其の見解は往々世儒の常套を脱し、經を解き字を論ずるや、鑿々聴く可く、識見の穩健なる、之を事に施すべく、説明の平易なる、人々曉るべし、人情に通じ世故に老ゆるに非ざれば能わず、若し淡窓をして健康ならしめ、此の記憶力と思索力とを以て、群籍に博渉して以て窮理又は考証に従事せしめば、其大成は昭陽・万里の上に出すべく、三浦梅園に継ぎて一家の学説を組織せしやも知る可らず、而して才子多病、以て一生を僻地に送りてだに、能く一家言を創して、以て千古に不朽なりしを得しは、淡窓の偉大なる所以なり。

淡窓は常に門生に諭して、學問は己の身の為にするものにて、古人に奉公の為に非ずと云い、經書を読むには新註然るべし、解し難き者は其の儘に捨置け、年を経るに随つて自から其意を解せんと教え、大学に錯簡ありとも、古文尚書は

偽書なりとも、左様の詮索よりは、己の身に切なる者を取るべし、正宗の刀も錆びては用に立ず、新刀も斬味よくば武士の用に立つべし、學問は骨董屋が新古の鑑定を事とするが如くなる可からずと説き、道学に於ては程朱を尊崇して、敬天を主張し、年四十四、敬天説を作り、年五十約言を著わして其の説を明にせり、以謂らく、天は万物の父母なり、理は天より出で、義は我に由て立つ、天とは何ぞ、思議す可からず、故に敬して畏れざる可からず、敬天の意誠にして、而して後に福福の報爽わざるを知りて、善を修め悪を去るべしと、要するに其の学は天を敬すると共に鬼神を敬し、福報応報の理を借りて人を善に導かんとする者なり、是れ十八始て陰騭録を読み感悟する所ありしより先入主と為り、仏法の因果応報に對して、此の説を立てたるなるべし、朱子が人々以て聖人たるべしの説は、仏法の草木国土悉皆成仏に對して教を立てたる者なりとは、淡窓の弟子に語りし所、淡窓自身も亦朱子を學びて、儒仏一致の義を立てしにや、是れ儒家の小乗たるを免れざるも、教化の実効は、理学の高遠に倍するなるべし。



淡窓の自画賛

(「龜門の二廣」スクラップブックより転載)

廣瀨淡窓(十一)  
玄学▲學問と工夫▲其の詩▲著書目録

淡窓は程朱を尊ぶも窮理に偏せず、仏法を喜ぶも偏枯に流れず、更に老子を祖述して、之を尊んで玄聖と云い、其の教を名けて玄学と稱し、析玄三十則、四千三百余言を著わして玄理を剖析し、以て孔老の旨其の帰を同くするを説けり、予嘗て三浦梅園伝中に言えるあり、万里・淡窓の如きも、亦梅園の風を聞きて起る者なりと、梅園に玄語あり、万里に窮理通あり、淡窓に析玄あり、其の講ずる所の理と、規模の大小とは同じからざるも、其の面影は一なり、豊後学者の奇創を喜ぶは皆相似たり、而して此学风は蓋し梅園之を開けり、玄理の有無は易の陰陽なりと為して、晚年易理を思索し、義府四千五百余言を著わして、時処位に應ずる所以を明かにせり、是れ易理を説くといえども、其見地は老子より来れり、亦淡窓玄学の一端なり、淡窓嘗て、予れ少きより多病にて養生に汲汲たり、老子は仙家の祖たるにより、養生の訣を得ん為此書を讀み、頗る其旨を得たりと云えり、年三十五の時の工夫条目は、一に曰く飲食を減ず、二に曰く情欲を絶つ、三に曰く薬餌を勤む、四に曰く読誦を省く、五に曰く陰徳を行つと、年四十三自新録を作りし時の日記に曰く、予れ十八、袁了凡が陰騭録を讀み、一万善を行わんと誓いしも果さず、行事悔ゆべき者多し、此に至りて改勵の志を発すと、年五十六眼疾大に起りし時の座右の銘に曰く、勿レ過レ暖、過レ暖上レ氣、勿レ過レ飽、過レ飽塞レ氣、勿レ食レ厚味、厚味釀レ毒、勿レ營名利、名利促レ命と、独り養生の訣を老子に求めしのみならず、世事の応用も玄学を加味し、侯国の経済を論じたる迂言の如きも、亦老子の旨に基くを見る、要するに淡窓の学は雜駁なれども、程朱老仏を咀嚼して一家の言を立てて、其の説を経緯する者は老子と陰騭録となり、而して約言は天を説き、析玄は数を説き、義府は理を説き、迂言は経済を説く、四部並に小冊子に過ぎざるも、淡窓本領の在る所なり。

淡窓の詩は精鍊を以て稱せらる、少時七才子風を學び、年十八唐宋詩醇を得て、始めて疑う所あり、之を南冥に質せしに、南冥曰く、六家の詩、才力相敵す、但白樂天平弱に近し、五子に比して稍劣れり、東坡の詩は、奇拔韓詩に超ゆ、古詩最も好し、近体は自由に過ぐ、王季の間なきに若すと、是に於て始て詩道の広き

を知りて、詩風一変せりと云う、淡窓曰く、予が詩は簡潔を喜びて繁縟を喜びず、峭勁を喜びて浮緩を喜びず、漫興破間の作を喜びて、課題詠物の什を喜びずと、故に其詩に奔放雄大の作なく、而して遠思樓集中に洩れし詩の咄嗟の作にやと覺しき者は、粗笨殆ど別人の手に出るが如き者あり、蓋し一首を作るにも数日を費して推敲する流義なりけん、其の格調嚴整、懈の撃つ可き無きは之が為なり、俞曲園は東瀛詩選に評して平淡の中に精彩ありと云えり、遠思樓詩の前編は巧緻精密にして、後篇の渾成自然なるは、老熟の境に入りし為ならん、晩年の作に至りては、頗る頽唐に殆し、遠思樓詩鈔は、年五十六の天保八年に、大阪の書林河内屋茂兵衛の手に上木せり、当時礼本として五十部を淡窓に贈れり、河内屋が上木を引受けしを徳とし、詩を賦して之を謝したるにも、其の満悦は想知らるるなり、当時詩は最も世上に流行し、詩集の出版いと盛なりしが、遠思樓の売行は諸集を圧して、淡窓の名更に揚れり、梁川星巖の選べる天保三十六家詩選出でしに、淡窓も亦其の一人なりければ、予れ上国諸名家の中に列せしは、此度を始と為すとて、日記にも記せり、其の村氣ありて衝氣なきは尤も尚ぶべし、尋ぎて撰西六家の一と稱せられて、一代の詩宗たり、初め遠思樓詩を刻するに當り、長崎の高島秋帆より、清人顧純・韓野二人の作れる序文を寄せたりしも、真贋知る可からずとて世に出さざりしは、亦其の地歩を占めたるを見る。

淡窓眼病の為に文章に刻苦せず、然れども析玄・義府の文は、猶詩の精鍊簡淨なるが如く、語短くして意長く、勁健喜ぶべし、其の文の法度森然たるは、詩格の嚴整なるに似たり、要するに淡窓は法律家なり、其の塾政も法制を主とし、其の詩文も格法を主とし、経済の見も亦刑政に傾けり、蓋し老子より出でて申韓の流を酌みしか、予故に曰く、淡窓は老史の風ありと、其の著書目録は左の如し。

自新録一冊▲自新録続編一冊▲敬天説一冊▲約言一冊▲約言  
或問一冊▲再新録一冊▲析玄二冊▲迂言二冊附録一冊▲義府  
一冊▲淡窓詩話一冊▲老子摘解二冊▲夜雨寮筆記數冊▲説論  
語一冊▲説孟子一冊▲淡窓小品二冊▲遠思樓詩鈔四冊▲懷旧  
樓筆記五十六卷▲遺稿若干冊  
詩話及び説論語 説孟子 老子摘解、夜雨寮筆記は、門人の筆記に成れり。

● 亀門の二廣

(十三) 天 四

廣瀬淡窓(十二)

大村侯の招聘 ▲長崎の游 ▲府内侯の知

淡窓年六十一の天保十三年秋九月、大村侯の聘に應じて肥前に遊び、遂に佐賀を過ぎて草場佩川と唱和し、大村の藩学に講説して、隣国豊前に遊び、又は同国先き筑前游学の後は、山中に隠居して遠く出でず、肥前田代に聘せられて、郷学玖珠に勝を探りし外は、年四十八の文政十二年、肥前田代に聘せられて、郷学東明館に講説すること一月許りに及びしことあり、是を西游の極点と為し、其の後年六十の天保十二年に、弟旭荘が大坂に遊ぶを見送りて馬関に至りしを、東游の極点と為せしに、此の行海西を窮めて九州第一の繁華を目撃せしは、淡窓生涯の壮游なり。

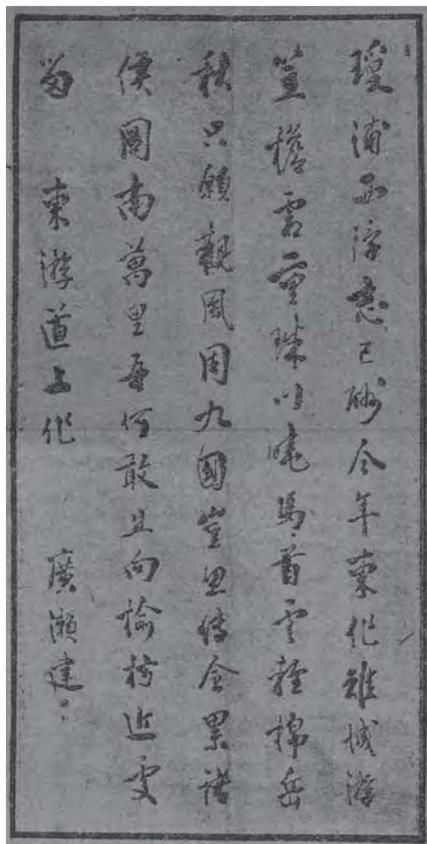
大村侯(名純顯)年少くして聡明、夙に興学の志あり、初め江戸の名儒朝川善庵(名鼎字五鼎片山兼山の季子)を聘せんとす、善庵時に平戸松浦侯の延く所と為りて、礼遇甚だ厚かりしが、平戸は大村と、古来相抗して下らざる間柄なりしより、平戸侯善庵の大村に就くを喜びずして、其の議遅滞せり、時に旭荘大坂に在り、帷を下して教授し、大村の藩臣本田蘆村(通称鉄八郎)と善し、蘆村は佐藤一齋に学びて、学風善庵と合わず、因て旭荘を薦めければ、侯乃ち旭荘を聘するの議あり、会平戸侯卒せしより、善庵乃ち聘に應じて先づ大村に至りしが、旭荘招聘の議已に決せし時とて、旭荘も亦相尋ぎて大村に入れり、時に善庵を推薦せし浪江某は善庵の門人にして家老稲田氏の一族なるが、罪を得て廃黜しけるを、浪江の党善庵と謀りて之を救わんとし、事頗る泄れ、浪江に仇する者合従して之を拒げり、是に於て藩中或は善庵に歸し、或は旭荘に歸せしもの如し、然れども大村侯善庵を待つに師礼を以して、優遇殊に渥かりければ、睽離の勢いを暴露するに至らず、旭荘も亦善庵を待つに先輩を以して、学事を議しけれども、善庵心に安んぜざりけん、御暇を願ひ出でつ、旭荘も亦半年の約にて聘に應じ、半年後は兄の淡窓に託し度き由を申出で、此に淡窓招聘とはなりしなり、善庵は淡窓着後間もなく東に歸り、旭荘も亦長崎に遊び、尋ぎて浪華に返れり。

淡窓の貴人に謁せしは、大村侯を見しを始とす、五教館の講義には、淡窓正面に坐し、大村侯側に在り、大夫以下列坐して、聴衆三百人ばかり並居けるが、

小声にて能く透り、簡明にして講釈上手と取沙汰せり、旭荘の時已に家法の月旦を創めて、学政の衰頽を振わんとし、淡窓も亦月旦を試みて策勵する所ありき、善庵大村に在ること二百余日、旭荘は百八十日、淡窓は七十余日なり、大村は一齋善庵二家の学風行われ、淡窓と其の道同じからず、故に半年の力、功を成すに至らざりしを憾みしが如きも、淡窓は此の行一世の大儒なる善庵と交り、多年神交なる佩川と唱和せしを、生涯の幸いと為せり、而して尚宿志を遂げしは長崎見物なりき、長崎には同年十一月朔日に遊びて六日に歸れり、長崎の聖堂に謁し、海西の一大繁華を目撃して、頗る胸襟を開きしも、折節高島秋帆の罪を得たるが為に、西道主人を失いしを、崎游の一厄と為せり。

此より大村侯は旭荘に五人扶持を賜い、後転じて淡窓に祿せられたり、弘化元年には淡窓再び大村に遊び、佐賀に佩川と語り、長崎にも再遊せり、前游に唐蘭館を見残しし為なりしが、一見して思いしほどに異状なることなしと記せり、帰途は唐津を過ぎて虹の松原に流連し、今宿に雷首・小琴夫妻(亀井雷首・小琴)を訪い、福岡に先師の神位を拝せり。

淡窓は大村侯の外に、知を府内侯に受けたり、府内侯は白河樂翁公の外孫にして、賢明の名あり、淡窓の弟南隊を聘して財政の顧問と為されし縁故もあり、天保十五年徴されて書を御前に講ぜしが、侯礼遇甚だ厚かりければ、筆記にも如士を以て邦君と抗礼せし寵榮を特書せり、淡窓の著書中、諸侯の政事を論ぜし迂言は、往々侯伯の間に行われ、中にも大村府内二侯の採用する所と為れりと云う。



淡窓の書(東遊)

(「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

●龜門の二廣

(十四) 天 四

廣瀨淡窓(十三)

苗字帯刀御免▲紀恩の詩

淡窓年六十一の天保十三年十二月十七日には、上下着用にて日田代官所に召出され、代官竹尾清左衛門より左の通申渡されたり。

豊後国日田郡日田町久兵衛兄

廣瀨 求馬

右多年学業相励み世上手広く教授致し候に付苗字帯刀永々差免す

右水野越前守殿仰渡され候段井上備前守殿被仰渡候間之を申渡す

寅十二月

水野越州(水野忠邦)は浜松侯にして、当時の名閣老なり、賢を挙げ能を用い、鋭意治を図りしかば、海内首を翹げて太平を望めり、而して幼時に淡窓の講説を聴きし羽倉簡堂は、越州の信任する所となりて御納戸頭に転ぜしかば、淡窓の爲に教育の功を申立しと見ゆ、簡堂の淡窓に致せし書に曰く。

野生今度の職掌は、閣老重臣にも旦夕に応接するなり、当時首相水野侯は学を好み賢を礼し、極めて政務に心を尽さる、故に先生及び旭荘が學術行事をも、野生より悉く申達せしに、甚だ渴望せらるる趣なり云々。

又日田代官所の江戸元占服部権六よりの来書に。

当今上には文学の士を重んじさせたまふこと甚し、或は召出され、或は延見を許さる、貴君の姓名、即今都下に藉々たり、若しくは寵命の沙汰あらんも難し、測、自重したまうべし云々。

是に至りて果して此の恩命あり、当時同じく恩命を蒙りしもの、京師には伊藤仁齋、那波魯堂等の子孫にして、堀川学校の地子免ぜられ、諸国に在りては伊予聖人と呼ばれし一柳侯の儒員近藤篤山(尾藤三洲門人)も、亦褒賞を蒙り、篤山褒賞の文に云く、

一柳兵部少輔家来勇之助父隱居

近藤高太郎

学問宜しく仕り行状も相勝候趣、相問候之に因て為御褒美銀十枚被下之、以上諸儒皆已に苗字帯刀の人なるより、金銀を賞賜されしなり、淡窓は塩谷代官

の時に苗字帯刀を許されて、代官の臣籍に列せしも、此は内輪の事情にて幕命に非ず、且代官の更迭する毎に、或は塩谷内と称し、或は寺西内竹尾内と称して、朝秦暮楚に近く、処士にして官府の籍に列するは、又権勢を借るの嫌あるのみならず、時に不平の事も多かりけるに、今は始めて公々然として士君子の籍に列せり、日田は昔時諸侯の国なりしかば、士人も多かりけれど、幕領と為りて二百年に近きも、苗字帯刀は旧例なし、百年前一揆起りし時、莊屋二人功ありて、其の身一代の恩典を獲たり、千原某は其の一人なり、近年には草野忠右衛門三世苗字を許され、淡窓の弟久兵衛(南陔)と小迫藤左衛門とは、一代苗字を許されしのみ、其すら士人の誇なりけんに、今は永世の苗字帯刀御免なり、是れ日田町に於ける空前の光榮なり、此永世御免は仔細ある事にて、後年旭莊佐藤一齋に逢いしに、一齋恩典の祝詞を述べ、永世御免は例なき異数なり、此は御身淡窓の嗣となりて儒業を世にするより、此沙汰ありしなりと話せりとなり、階級制度の厳なりし当時於て、編戸の平民は、仮令い学徳甚だ勝れたりとも、士人の前には頭揚らず、土下坐もすべく、斬捨御免にも苦情は言われざるに、忽ち威焰の源なる幕府より、直接苗字帯刀を許されて士籍に列せしは、儒生の面目、非常の恩典と謂うべく、今日の授爵にも比すべし、水野越州は毀誉相半して遂に敗を取りたれども、其の儒を崇む学を興せし功績と誠に大なり、而して淡窓が感涙に咽びしも亦理にて、遠思楼に載せし紀恩の六篇は、正直なる淡窓の心事を見るに足れり。

蒙恩命賦此述懷六首

葉餌宮々歲月殘。一生出処兩艱難。彼蒼特賜二安身地。不レ作耕夫不レ作宦。朝來寵命下三山村。身着逢衣二子孫。自覺一肩擔不レ起。國家恩亦聖人恩。儒戶雖レ微名分存。農工商外独稱レ尊。自今佳句行応レ富。無レ復催租吏叩レ門。誰送二微名上九天。諸公台閣定相憐。蓬山不レ是塵凡路。一語無レ由レ致二列仙。趨庭却憶兩髻初。詩礼全成訓誨余。欲レ報嘉慶人。不レ見。清香一炷淚漣如。青衫遠近訪。柴荆一。時議謬伝善誘名。今日無三人為座主。殷勤買酒謝二諸生。第五首は南冥昭陽の恩を思う者、真情流露して、読者をして亦漣如たらしむ、淡窓師弟の際に於ける、又特筆すべき者あり。



●亀門の二廣

(十六) 天 四

廣瀬淡窓(十五)

交友 ▲佩川石梁 ▲山陽星巖

淡窓は山中に隠居して、馬関以東に出遊せしことなき人として、其の交友も亦九州の人物に限られしが如し、帆足万里は淡窓二十の時に來り訪いしことありて、郵筒往來せしが、万里淡窓より長すること四歳なり、原古処とは、同学を以て交情固より密なり、佐賀の草場佩川との交は、佩川が文化八年古賀精里に隨行して韓使に接見せし事あるより、後年送行の詩を作りて之に贈りしに始まれり、但し此の時未だ相見しことあらず、其の臂を把て唱和せしは大村行の途次なりき、久留米の樺島石梁とは、未だ嘗て面晤せずして文字の交を訂せしが、石梁を以て久留米に於ける前後一人と爲し、近世の儒生往々妬心を挟みて往來交通せざるに、但石梁と佩川とは終始彼我を忘れて相交りきと自記せり、三浦梅園の子主鈴は杵築藩の郡奉行たりしより、公用を以て日田に往來し、淡窓とも親善なりき。

眼病治療の爲に筑前に赴きし時、福岡にて浦上春琴に面せしも、左したる交に非ず、大村の行朝川善庵を見しは、淡窓の幸とする所なりき、淡窓山中に隠居すと雖も、其名の四方に聞ゆるに及びては、文学の士、九州に游歴する者、往々日田に入て其の廬を訪えり、故に越夢吉詩跋に、幸いに諸名士の來訪あり、以て素望を慰む、蓋前後数百人、頼山陽・梁星巖の如きは、最も顯るる者なりと云えり。

頼山陽の來訪いしは文政元年十一月八日に在り、是れより先き淡窓二十六七の時、其の友蓑浦東伯(佐谷龍山)を介して詩稿の批評を菅茶山に請えり、時に淡窓の高足館林万里(清記)備後に遊びて茶山を訪う、茶山は淡窓の詩を評して万里に託せしに、万里は折ふし廉塾に在りし頼山陽の批評をも請うて持歸れり、是れ淡窓山陽と交りし始なり、淡窓因て万里の再游に託して、五古一篇を山陽に寄せて、以て之を謝したりき、詩鈔載する所の衡門多秋草の篇是れなり、此は文化五年の事なれば、十年目にして始て山陽と面會せしなり、淡窓時に年三十七、当日の日記に曰く。

十月八日、館林清記安芸の儒生頼徳太郎を導きて來見しむ、徳太郎名は襄、字は子成、山陽と号す、春水が子なり、時に年三十九、春水は山陽の大儒、其の

名海西に聞え、徳太郎の才力、又遠く父の上に出ず、少時國を去て京師に住す、此次海西游覽の爲に來る、予れ先年詩を以て贈答せり、故に当県に於て独り予が家を訪えり、其の旅宿は隈町に在り、前後数十日隈町に留り、数度來りて予を訪えり、予も亦其の旅館に至れり、予が宅に來りし時詩あり、曰く。

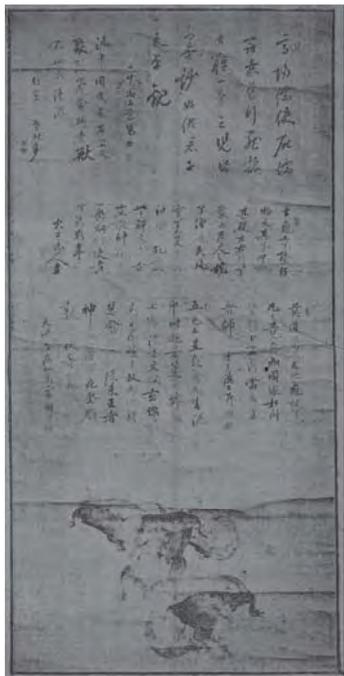
琅々啞啞出三柴関。村塾新開松柏間。斗折蛇行臨筑水。竹批馬耳見豊田。羨君白首此中住。愧我青鞋何日間。且喜一樽与醒醉。細論詩律互相刪。

(山陽詩鈔第一句作「啞啞声処認柴関」。第七句与醒醉作「共醒醉」。第八句互相刪作「手頻刪」。)

予も亦七古を以て之に贈れり、徳太郎当世の名家に於て第一流なり、予れ眼中之知る所、此の人より才あるはなし、唯其の人と爲り簡傲にして礼なく、又利を貧る、是れを以て到る処人に惡まれ、往々其の地を逐うたれたり、惜かな。山陽の通称久太郎なるも、此の比一時徳太郎と稱し居たりしなり、梁川星巖の來訪は、淡窓年四十三の文政七年九月なり、日記に云く、

二十日美濃の人梁川詩禪來り訪えり、一に星巖と号す、今年三十六、世に詩人の名あり、妻を携えて來る、是れも亦文字を知り画を善くす、但し旅宿に留めて我が家には携え來らざりし、詩禪東歸後、名譽愈振い、詩集數篇を上木し、又文政十七家天保三十六家等の書を選びて世に傳われり。

星巖の來訪うや、別に贈答なかりしと見え、星巖集にも遠思樓詩にも一字を存せず、淡窓後年越夢吉の詩に跋して曰く、今頼梁の名天下を風動し、人其の面を見て其の言を聞くを得るを以て榮と爲す、予方に当時相待つ疎なりしを悔ゆと、淡窓の世故に慣れたる、決して相待つことの疎なりけんとは覺えねど、星巖を待つに、尋常詩人を以てせしにや、淡窓の山陽に於ける、更に一場の奇話あり。



五亀の画賛  
〔「亀門の二廣」スクラップブックより転載〕

●亀門の二廣

(十七) 天 四

廣瀨淡窓(十六)

席上走筆は宿構▲山陽の詩と雪隠▲竹田と山陽

口碑に云く、淡窓は山陽が九州に遊びて、帰途日田に我を訪わんとすと聞き、窃に山陽の才に當る所以に苦心し、門下の詩僧五岳をして山陽の遊蹤を偵察せしめつ、五岳は山陽が客中の経過を探偵して帰り、福岡にては昭陽と唱酬し長崎にては古賀穀堂と徴逐し、詩を袖袂に贈り、遂に薩摩に遊びしこと、并に灘の銘酒ならでは口にせぬ事など、事も細に淡窓に報告しければ、淡窓其事実に抛りて七言古詩を作り、家有二京醞二君飲不と結びて、今や遅しと山陽の至るを待てり、席上走筆贈二頼子成一の長篇即ち是にして、席上の作にはあらぬ宿構なりけり、山陽来訪うや、淡窓酒を出して之を饗しつ、其の遊歴中の事どもを尋ね、扱も壯游なるかなとて、山陽の話せし儘を即席に作りし体にて、宿構の七言古詩を、さらさらと認めければ、流石の山陽も其詩才に驚きて面喰いけり、数日を經て山陽より淡窓へ手紙あり、過日は即席の七古に和韻せんと思ひしが、快談湧くが如くして句を得ず、廁に上りし時、懐中の韻礎を取出して詩を思ひしに、誤りて韻礎を廁中に取落せり、若し韻礎御発見成され、汚れ居らず候はば御返却下されたし云々とあり、人して廁を檢めしに、果して小さき一冊の韻礎あり、則是客廁にて家人の入る処ならねば、清潔にして書物も汚れ居らざりけるより、使に託して之を返せりと。

淡窓の席上走筆と銘打ちたる有レ客觀二九州一の七古は、遠思樓詩鈔に載せたり、如何にも宿構と覺しく、字々句句皆精鍊を極めたり、而して山陽が訪廣瀨廉卿の七律は、如何にも咄嗟の作と覺しく、村塾新開松柏間(後ち松竹間と改む)と云い、間の字重複し、且三十七の人に對して、白首など云える、亦窮すと謂うべく、其卒作なるを証して余あり、淡窓は世間を見ざるが為に一種の村氣あり、佐藤一齋松崎謙堂など、旭莊に逢いし時、令兄に宜しくとの伝言ありしをだに、いと過分と為して感激せり、然れば才名世に轟ける山陽の来訪と聞き、恥を搔かぬようにと心を用いしこと、七古の宿構にも知られ、却て其の正直を見るは、過ちを見て仁を知るの類なり、山陽が卒作は微瑕あるも、亦以て咄嗟口を衝きて出でし才氣を見るべし、而して廁中の韻礎に至りては、恐ら

くは附会ならん、昭陽門下にも此と相似たる口碑を伝う、曰く、山陽が昭陽を訪いし時、廁より帰り来て、詩が出来たりとて七律を書けり、後昭陽は門人に向いて、山陽は不埒な男なり、雪隠にて作りし詩を我に贈れり、予れ蒙史を示せしに、山陽は艱澁読む能わず、此にて雪隠の詩の敵を取りたりと云いし由、何れも似寄りたる話にて、山陽の才を忌む者の附合せしにや、又は山陽は雪隠にて詩を思ふ癖ありしにや。

田能村竹田は同国の人ながら、其の来訪いしは星巖来訪の翌年に在り、其後竹田の嗣子太一(大癡直入)淡窓の門に入りしより、屢来訪しけるが、淡窓は竹田を以て当今第一の風流宗匠と稱し、且頼子成と結びて互いに声援を為せしより、名譽は海内に伝播すと評せり、山陽・雲華・竹田・小竹など、当時文人トラストとも云うべきものにして、互に相結託して名声を伝播せしものなるべし。

其の余他国の文人にして淡窓を来訪せし者備前の中村半峰、(通称元三郎、天保三十六家の一)京師の村田庫山、(名常道、通称兵部著学庸正義及び正論新論)、賈名海屋(書家として日田に滞在せり)、仙台の齋藤竹堂(時に昇平の舎長たり)、京師の小石拙翁(元俊の子、小石元端)を初として、指数うるに遑あらず。

●亀門の二廣

(十八) 天 四

廣瀬淡窓(十七)

高足弟子上 ▲宜園第一流の才子 ▲十八才子 ▲十八才子の翹楚

淡窓隱居教授すること殆ど五十年、贄を門下に執る者前後四千余人に及び、群英雲の如く、鬱として一家を成す者も亦尠からず、今一々記述に暇あらず、此に其の最も顕れし者の姓字を挙ぐ。宜園に五子十八才子の目あり、所謂五子とは、一に加峰長卿(名亮、号穀城、本姓小関、日田人、仕秋月侯)、二に麻生彦国(名美、号緑溪、称伊織、日田人、淡窓妹婿)、三に兒玉有台(名茂、号舟村、又晚帆楼、日田人)、四に劉君鳳(名翥、号竹所、珍珠人)、五に中島子玉(名大賚、号米華、佐伯人)是れなり、加峰・麻生・兒玉の三人は、其の名甚だ顕れず、劉君鳳は帷を京師に下して、詩名藉甚なり、嘗て旨ありて経を禁内に講じきとぞ、緑芋村莊詩鈔四卷世に行わる、其の季子君平(名昇、号冷窓)も亦詩を能しき、中島子玉に至りては、宜園第一流の才子なり、頼山陽の日田に來りて淡窓を訪いし時、子玉年十八、其の座に侍りしが、山陽の簡傲なる、待つに童子を以して一言を交えず、淡窓子玉に命じて、其の作る所の詩文を山陽に示さしむ、山陽一読愕然として容を改めて曰く、吾れ殆ど人を失わんとせり、吾子の才藻、一世に独歩す、願くは思を古書に潜めよと、其の京に帰るや人に語りて曰く、予の西游、得る所の者二つ、山水に耶馬溪を得、人才に中島子玉を得たりと、子玉が名此より高し、既にして亀井昭陽に学び、後ち江戸に入りて昌平黌に学び、推されて舎長と為りしに、昇平の諸生敢て名いわずして、宜園秀才と呼べり、淡窓の名の江戸に重んぜられて諸国に聞えしは子玉の力なり、郷に歸りて藩学を督し、年三十四にして逝けり、高情自与三世人一違、我是南豊一布衣。三十六歳猶欠二。今朝天上化龍飛の詩、人口に膾炙せり、又辞世の狂歌あり、『三月の十五日こそ死ぬべけれ閻魔も花を見に出たる留守』其の遺稿未だ刻せず、惜む可きなり、以上五子は最も早く淡窓に従遊せし人々なり。

所謂十八才子は、中村文甫(名儀、号琴川、称直江、筑後人、後改姓垂井)、西秋谷(名雍、字子桑、初称恒遠雲平、豊前上毛郡人、出為小倉藩医西董庵嗣子)、积鼓月(筑後府中人)、积廓然(筑後生葉郡朝田村仏行寺)、积圓暉(筑後竹野郡惠利村長念寺のち日田浄万寺住)、积観有(周防大島

郡遠崎村)、积周邦(周防大島郡遠崎村妙円寺)、积徳令(出前)、有田大助(安芸賀茂郡広村)、小田叔甫(名重強、号筍園、称寛吾、島原人)、杉山威八郎(周防の人)、三田尻、役三義(彦山人、元は日田豆田町の鍋屋鍋屋衛門の子、手島東次)、秋月橋門(名龍、字伯起、初称水築周一、後改姓秋月、称小相日向人)、青木寛二(官治)(豊前上毛郡岸井村、のちに吉田寛治に改める)、积蘭溪(中津人、明蓮寺)、松浦寿作(元亨、号柳浦、筑後生葉郡今竹村)、小比賀彦助(肥前長崎勝山町、吏人)、松井常次(二)(安芸賀茂郡三津口村)是れなり、淡窓の醉後戯題の詩に、十八才子会一楼の句あるに因て此の目あり、皆一時の俊才なりけん、中にも秋月橋門・西秋谷の二子は其の翹楚なり、橋門年十六宜園に入りしが、貧乏最も甚だしく、筆耕して学資を作れり、代官塩谷某其の才あるを聞き、書記と為さんとせしに、龍の学問するは、人の下役たらんが為に非ずと辞退しければ、代官怒りて放逐せしむ、因て佐伯の中島子玉が家に寄寓し、既にして再び日田に入り、師命を以て昭陽に従遊し、後褐を佐伯藩に積き、維新後朝に仕えて葛飾県知事と為り、明治三年致仕して、十三年東京に歿せり、時に年七十二、為人清介高潔、古人の風あり、仏を好みて有髮僧と称せらる、其の著す所列朝垂訓二冊、好生問答二冊、漫筆五十冊、橋門韻語二冊あり、其の子新字士新、秋畝又は天放と号し、新太郎と称し、亦才藻を以て世に名あり、秋谷年十二より淡窓に学び、長じて都講と為り、又昭陽に従いて古学を講じ、更に医道を治めて、洋書を長崎の竹内氏に学び、小倉藩の侍医と為りて声誉隆隆たり、維新後は小倉中学に教師と為りしも、儒は我が祖業に非ずとて之を辞し諷詠自ら娛めり、其の詩白蘇の風を慕えり、齡大耋を踰ゆるも、耳目聰明なりしに、年八十四にて明治二十五年に歿しき。



西秋谷 82 歳の真影 (淡窓の高弟) (「亀門の二廣」スクラップブックより転載)

●龜門の二廣

(十九) 天 四

廣瀬淡窓(十八)

高足弟子下 ▲宜園第一の風流僧 ▲翰苑の巨擘 ▲宜園百家

宜園の高足弟子として、姓名を世に馳する者、曰く恒遠子達(名和、号轟谷又遠帆楼主人、豊前上毛人)、西秋谷の兄なるが、帷を中津在に下して教授せり、遠帆楼詩二卷世に行わる、曰く佐野東庵(名宏、字君朗、号贅山、又竹原、筑前甘木人)、医にして詩画を能くし、梅西舎詩鈔二卷を著せり、曰く長梅外(名允、字允文、又号南梁、日田人)、長三洲の父なり、少きより洛撰に遊び、長崎に至り、帷を彦山に下し、遂に日田に帰り、後ち東京に歿せり、著に梅外詩鈔二卷あり、曰く僧五岳(名岳、字五岳、号竹村又古竹、稱聞惠、平野氏、日田人)、詩書画の三長を擅にして、名を天下に得たり、其の詩は巧緻精密、情景並に至る、而して古風に長じ、題富士山の長篇、及び熊本城下作の七古の如き、尤も人口に膾炙せり、三十余にして始めて画を学び、四十以後専ら竹田の法に由れりと云う、其の人の氣象高潔、世俗に超脱せるを以て、書画并に煙火の気なし、是れを以て四方慕仰して、千里来り求め、絹素坐に満つるも、五岳利名に淡なるを以て、其の意に適せざれば、王公も寸縑を得可からず、人の膺を携え来りて鑑識を請う者あれば、一笑して咎めざりけり、五岳が好嫌の狂歌に。

我嫌い「テンポコ梨」に替女・焼麩

うら打唐紙・比丘尼・塩辛

我が好は酒と肴と暮と角力

金と女はいうまでもなし

故に揮毫を乞う者皆酒を以て潤と為し、岳も亦暮を打つと云う者あれば、貧生のために数十紙を揮えり、同里に竹某という暮敵あり、銭なき時は、いつも岳の画を請うて售るを常としけるほどに、骨董屋どもは此の竹某に陥うて、獲る所尠からざりけり、以て其寡慾を知るべし、而して終身娶らず、道德堅固なり、金と女の一句は、五岳の諛譎に過ぎず、亦宜園第一文雅の高僧と称すべし、曰く長三洲(名英、字世章、称光太郎、梅外長子)、幼にして神童の名あり、淡窓之を戒めて才子たらんより才翁たれと云えり、淡窓の晩年に、三才子と称せしは、三洲・林外と菊池七郎(不詳、三権七級下に至る)となり、後ち大阪に出で

旭莊に学び、阿波の柴秋村・加賀の僧白華(松本白華、本誓寺)と交遊せり、万延文久以降、海内騷然たり、三洲長州の奇兵隊に投じ、赤馬関の仏艦砲撃に敗れて、豊後の浜脇温泉場に潜匿し、物色甚だ急なるに及びて、佐伯の秋月橋門に依れり、維新後朝に官して文部大丞に累遷し、挂冠の後は翰墨を以て一世を風靡せり、三洲は詩詞書画、皆妙ならざる無し、而して最も臨池に長じ、巖谷一六・日下部鳴鶴と並に墨場の巨擘と称せられき、曰く石井南橋(名瀧二、筑後人)年甫めて十五にして、宜園の九級を卒れり、当時試業の題二三顧凶一詩に、孟德兵声烈火焚。伯符英質亦無群。不レ知奔鹿歸誰手。頼有臥龍扶此君。志氣平生吞二六合。江山終古歎三分。大星隕レ地劉天暗。五丈原頭付一暮雲と云えるもの、詩場第一の傑作と称せられしが、南橋後年才を恃みて、風流自ら喜び、遂に伸びずして歿しき、曰く谷口藍田(名中秋、肥前人)、曰く堤静齋(名正勝、豊後白杵人)、曰く龜谷省軒(名行、字子蔵、対馬人)等、或は學術を以て、或は文章・詩詞を以て、皆一家を成す者たり。

宜園百家詩初編は、専ら門弟子の詩を輯むるもの、八巻総べて二百余人、二編は淡窓の師友兄弟より同臭の徒に及び、六巻総て二百余人、三編は淡窓二氏の門人を併せ収む、六巻総て百八十余人、亦甚だ多からずや、此の書固より後進奨励の爲にして、選詩の寛なるは、小竹の序も言及せり、故に編中の作家悉く皆俊才に非ずとするも、及門子弟の才名ありし者は、蓋し採録して遺す無けん、而して此の数百人中には、郷先生として文教を裨補せし人も亦多かるべけれど、或は早逝し、或は姓字を改め、今は其詳を考え難し、譬えば三編一卷に佐々嘉あり、二首を存録するもの、即ち今の楠本碩水にして、鬱然たる朱子学の大家なるが如きあるをや、宜園の當時には、釈普寂と名乗れる貧乏僧も、今は一躍して大臣と為りし清浦奎堂(奎吾)の如き者もあるをや、明治維新の際、宜園子弟の官に就く者、松田道之(後ち東京府知事、島惟精(後岩手県令)等を初として百余人に及び、今も猶生存せる横田国臣(大審院長)、横井忠直(号古城陸軍編修)等の如き者を指数せば、其の人尠からざるべし、淡窓育英の功、顧うに亦盛ならずや。

●龜門の二廣

(二十) 天 四

廣瀬淡窓(十九)

其の家庭▲女弟秋子▲四弟▲青村と林外

淡窓に一妹四弟あり、妹を秋子と云いて、淡窓より少きこと二歳なり、淡窓少時の大病には、誠を尽して看護し、遂に兄の命に代らんとの大誓願を發しつ、豪潮律師永興寺にて加持あり、衆人退散せし時、律師は秋子を呼留め、今日加持の折、大に我が身に通徹せしことあり、大衆中非常の大願を發せし者ありと覺ゆ、是れ必ず御身ならんと云われ、秋子実を以て告げければ、律師贊嘆惜かず、秋子家に歸りて尼たらんことを請いしも、王母憐みず、時に律師京に在りて禁内に出入せしより、其の便宜にて秋子京に上り、官女風早氏(兵衛佐局)に仕えしに、間もなく風早氏時疫に罹りて歿り、秋子も亦感染して、二十二の秋の初に歿り、淡窓痛悼して私に孝弟烈女と諡せり、淡窓が彦根侯の聘に応ぜんとせしは、秋子と居相近きが故なりしに、秋子歿りしかば其の聘をも辞したりしなり。

長弟久兵衛、名は嘉貞、字は子礼、南陔と号し、幼にして淡窓に学び、頗る文字を知れり尤も經濟に長じ、代官塩谷氏の知を得て、草野某と共に水利の事に任じ、功績顯著、民其利を蒙れり、因て苗字帯刀を許されたり、後府内侯に聘せられて財務を料理し、藩政之が為に振えり、其の子源兵衛(名貞信号雨窓)、源兵衛の子七三郎(名貞正号南窓)、七三郎の子は貞治にして、宗家の祀を奉ぜり、二弟三右衛門、名は貞基、字は叔信、棟園と号す、少うして讀書を好みしが、詩は中年以後に學べり、最も貨殖に長じき、三弟弥六、名は秋雄、出でて豊前の辛島氏に贅し、後家を携えて府内に居れり、此三人の詩並に宜園百家詩に収めたり、淡窓能く家弟を教育して、人々書香を帯びしめしは感心なり、季弟は則ち旭莊、別に伝を立つ。

淡窓年二十九にして合原氏を娶りしも、多病にして子なし、初め季弟旭莊を以て嗣子と為せしが、未だ幾ならずして旭莊東游し、淡窓は常に病み、塾政頗る衰うるに及びて、高弟矢野青村を養うて義子と為し、廣瀬氏を冒さしめて之を西家に居らしめつ、旭莊の長子林外稍長するに及びて、旭莊昭穆を正し、林外は淡窓の嗣子と為れり。

林外名は孝、字は維孝、通称は孝之助、其の生るるや闊面巨眼にして、瞳子

の白黒分明なり、淡窓一見して痴物に非ざるを喜びしが、幼より淡窓の手に養われ、八歳書を読み十二能く詩を賦し文を属し、才氣英敏、夙慧人を驚かし、長光太郎菊池七郎と共に宜園の三才子と称せらる、淡窓已に永世帯刀の士人たり、其の教文に偏す可からずと為し、林外をして出でて武芸を府内に學ばしむ、林外弓馬・擊劍を學んで歸り、更に心を史學に潜め、西史には西洋英雄伝、ヨロッパ略記五、大洲総論を作り、支那史には明史史論二十余篇を作り、国史には和肅堂私史十卷を作れり、其の所長は文章に在り、暢達明快にして英氣煥發せるは、遠く淡旭の上に出ず、淡窓歿後、宜園の塾政を督して學風頗る振えり、宜園の學は初め専ら詩を尙びしも、是に至りて文章の士輩出せしは林外の力なり、維新後東京に至りて史館に入りしも、未だ其の力を展べずして、明治七年五月病んで歿せり、享年三十九(墓在小石川見樹院)、天此の才子に仮すに年を以せば、其の造詣測る可からざりしを、いと惜む可きなり、其の著す所、六橋紀聞十卷、林外漫筆二卷、及び唾壺擊碎錄、謁見錄、遺稿等若干卷あり、二子あり、長子甫、家を嗣ぎ、次子彦威蟬瀨氏を冒せり。

義子青村、名は範、字は世叔、通称は範治、豊前土田の人、本姓は矢野氏、年二十一にして宜園の都講たり、初め医たらんと欲せしも、年二十六師の姓を冒して儒業を継げり、青村の學問詞藻、並に儕輩に絶して、詢々人に接せしかば、弟子益進みて、宜園復た盛なりき、林外の長するに及びて江戸に遊び、府内侯の聘に應じて其の學政を督せり、維新後徵されて漢學所に直し、後修史局に入り、局廢せられて東宜園を創し、斯文學會に講説し、華族学校及び山梨県學徽典館の教授たりしが、明治十七年十二月病歿せり、享年六十六、青村の學は朱子を宗とし、晩に老莊を好めり、詩は其の擅長にして、兼て蘭竹を画き、又書法に巧なりき、二子あり、長は貞文(号濠田)家を嗣ぎ、嘗て衆議院議員たり、次は元義、新貝氏を嗣げり。

淡窓の兄弟は、皆嗣々たる聯壁にして、而も青村・林外の旭莊と鼎立して、互に声誉を飛ばすあり、淡窓歿して宜園衰えざりしは之が為なり。

●龜門の二廣

(二十一) 天 四

廣瀨淡窓(二十)

怪談嫌 ▲書生の狐憑 ▲淨瑠璃太夫の入門 ▲試場の詩

淡窓多病にして遠遊する能わず、又眼疾ありて燈下に書を読む能わざりければ、毎夜塾生を更番に召集し、其の故郷の話や世間話などをさせて聞くを樂みとし、名けて夜話会と云えり、足門を出でずして能く諸国の事情にも通ぜしは之が為なり、然れど横着なる書生は、夜深くると迄師の前に侍坐するを窮屈とし、早く退かんとことを希いて、善い加減の比には怪談を為せり、旭荘は有名の怪談好なれど、淡窓は甚だしき怪談嫌にて、書生の怪を語るや、いつもモーよしよしとて暇を呉れしとなり。

侍史は外来生より更番に勤めて、淡窓坐右の用事をも足し、又日記をも作る役なり、懷旧棊筆記は、此侍史をして記さしめし日記中より、要を撮りて節録せしものと見ゆ。

淡窓は陰鷲録を信ぜし人として、好生の徳あり、一日講堂より自宅へ帰らんとしけるに、塾の庭にて荒くれし塾生ども、一頭の狐を捕え居たり、淡窓打驚きて家に入り、当日の侍史なる某生に、早く塾生に諭して狐を放たしめよと命じぬ、某生はハイハイと返事をしながら、折ふし用を足し居ければ、其の事を了りて庭中に駆出見しに、早や狐は殺され居たり、死なしたり後れぬと悔みしも詮なく、其の由を復命しければ、緩慢を叱られやしけん、此れより某生は茫然として戲言など云いて、正しく狐に憑れたり、其の言う所を聞くに、平生の某としては知るまじきほどの学問上の事にも及びて、聞者舌を巻かざるなし、青村乃ち某生に向て、汝は何者ぞと問いに、我は樓の下老狐なり、毎日講釈を聞きて、史記位は読むなり、二子ありて、一を仁と云い一を義と云う仁は先日某生の怠慢にて命を救われず、遂に書生の為に殺されたり、我れ之が為に食を得ざるに因り、某生に憑きて二人前を食すと云う、青村更に何異と問答するに、答えずといふことなし、因て一分別して問ひけるよう、汝誠に靈ならば、論語に子曰がいくつあるかを知れりやと問えば、知らずといふ、汝じ子曰の数を知らず、何の靈かあらん、而も万物の靈たる人間を苦しむるは無礼なりと息巻きければ、狐忽ち落ちたりと語り伝えぬ。

安政比にもや、大阪に三好太夫という淨瑠璃語ありて、其の名隆々たりけるが、一日愛顧の某藩倉邸役人あり、三好太夫に向て、御身が世間に聞ゆるも、朝暮口に語れる文句の中には、意味の分らぬも多からん、名人ともあろうものが、己が語れる文句に知らぬ所ありては、勸学院の雀も同然なりと云いけるより、三好悟る所ありて急に旅装を整え、豊後に下りて宜園に入塾し、一年許りにして去れり、帰阪の途次博多にて市人の為に所望せられ、二夜に三十両を得ければ、乃ち浜焼鯛五百尾を購入して、宜園の同窓に贈りしことありと云う、昔の芸人の熱心感すべく、宜園の盛も想いやられつ。

試験の時間を長くせんとして、線香を醬油に浸せしほじなれば、書生が試験に苦心せしほどこそ思い知らるるれ、然れば当時試験の光景を吟せし聯あり、曰く、魂驚撃析三声外。力尽香煙一縷中。卒業前数月は率皆寢食を廢し、刻苦性を滅する者あり、登第者は淡窓自ら之を稱人広坐の中に引見して、口を極めて褒揚しけるにぞ、人々奮躍せざるは無かりける、故に又句あり、云く、九級之難如昇天。一蹶直墮千萬仞。又云く、九級之榮似衣錦。春風爛々歸故郷。一、此法支那の試験制度より来る者なり、故に斯く試験に苦心する割に大人物を出さざると、亦支那の考試と相似たり、物皆一利一害を免れず。(以上宜しく咸宜園の記事中に在るべし、前に脱漏せしを以て此に補記す)。



廣瀨南陔画像(淡窓の弟)  
(公益財団法人廣瀨資料館所蔵)

●龜門の二廣

(二十二) 天 四

廣瀬淡窓(廿一)

其の死▲自撰の誌銘▲其の絶筆

淡窓は安政三年丙辰十一月一日を以て歿す。寿七十有五。天性虚弱の人にして、高齡此に至りしは、全く養生に注意せし為なるべし。子弟私に諡して文玄先生と曰えり。淡窓平生諷墓の辞を厭いしが、是より先き十月の末に、自ら墓誌銘を撰べり、今其の墓石に刻する所即ち是なり、其の文左の如し。

文玄先生之碑

荅陽先生諱建。字子基。一号淡窓。通称求馬。豊後日田人。家世住市井。先生自幼多病。不耐農商之業。專力讀書。遂業儒。教育弟子。前後三千余人。官賞其教授及。特許世々称姓帶刀。直隸泉府。其学主大觀。与人不爭同異。旁喜弘老。世称曰通儒。所著遠思樓集前後編。析玄。義府。迂言。淡窓小品。老子摘解。皆粹行于世。生天明壬寅。没安政丙辰。寿七十五。葬中城村新兆。門人私諡曰文玄先生。遺命曰。精神歸天。骨肉遺蛻。然為子孫者。則不可不埋葬焉。至表其事業。何假二片石乎。銘曰。何所称述。一箇散儒。欲知我志。視我遺書。

安政丙辰十月自撰

弟謙謹書

先考平生厭諛墓之辞。弥留時。自撰墓誌銘如是。不肖孝謹填沒以下二十三字。余不敢增減一字。而請本生父一書。

安政四年歲次丁巳正月申流不肖孝謹識

通儒の二字は是れ淡窓の得意の処にして、亦確乎動かす可からざる者たり、而して其の学の大觀を主とするを明かにして、一字の其の本領の詩に説及ぶなし、想うに儒家者流の常として、詩人を賤しみたがる癖あり、而して学者も亦往々詩人を以て自ら居るを屑しとせず、当時宜園の弟子は、世人が其の師を待つに詩人を以てするに謙らず、往々淡窓に向て世評を憤慨しけるに、淡窓は古來詩を作る者多し、而も詩人として伝わるは少し、予れ此の名を得るは過分にあらざるやなど論せしことあり、然れども亦自ら中に憤る所なきに非ざりけん、如水庵

印譜序に、『予は詩を好む、世乃ち一種の文人あり、詩人を攻むるを以て務と為す云云』と云えり、亦不平の鳴なり、是に於て淡窓は敬天説を主張し、析玄・義府・迂言を著わして、以て一家の学説を立てたり、是れ銘に謂う所の遺書なり、亦自ら尋常詩人に非ざるを宣明する所以なるならんか、然り、淡窓は洵に尋常詩人に非ずして一世の通儒なり、而して亦不朽の大詩人なり、何者の痴漢ぞ、敢て詩人を賤しむ、詩書・礼樂は聖人の治具なり、偽詩人は言うに足らず、真の大詩人の貴ぶべきは通儒と扱はず、淡窓の自ら世称曰詩人と曰わざりしは豈謙せしか、抑も詩人の称を屑しとせざりしか、然れども淡窓は究竟詩人なり、其日記には夢中の詩を記すること多し、其精神は終始詩に傾注せり、其臨歿前二日なる十月二十九日に認めて、大阪の旭荘に寄せし手紙は、十一月十三日大阪に達せり、曰く、遠思樓前後集は猶改竄すべき処数条あり、須らく河茂に命じて改刻すべし、是れ我が絶筆なり、汝其れ体察せよと、嗚呼淡窓は死に至るまで其生命なる詩の改竄に汲々たりけるよ。(淡窓宛)

次は廣瀬旭莊



淡窓の墓

咸宜園門下生略伝(二)

恒遠 醒窓(つねとお・せいそう)

本名 恒遠 和わい市ち

字は子達、真卿。通称は頼母。号は醒窓・轟谷・樺川・遠帆楼等がある。

生没年 享和三年(一八〇三)一〇月八日(文久元年(一八六一)五月三日)

◆入門簿あり

◆入門時情報

入門年月日 文政二年(一八一九)二月十九日 一七歳

身分・職業 恒遠伝内の二男

住所 豊前上毛郡薬師寺邑(現福岡県豊前市薬師寺)

紹介者 別府一九郎

◆師事者 廣瀬淡窓

◆月旦評 六級上

◆大帰日(卒業) 文政八年(一八二五)八月二十四日

◆大帰後の職業 儒者

◆その他の情報

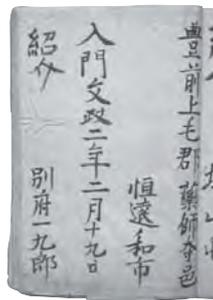
私塾「咸春園」の創設者

「咸春園跡」福岡県指定史跡

「咸春園関係資料」豊前市指定有形文化財



恒遠醒窓肖像(咸春園蔵)



咸宜園入門簿

◇恒遠醒窓の略年譜

享和三年(一八〇三)一〇月八日 豊前国上毛郡薬師寺村に生まれる

文化六年(一八〇九) 弟運平、生まれる(後の小倉藩医西秋谷)

文政二年(一八一九) 二月十九日 咸宜園に入門(一七歳)

二月二十六日 月旦評上で「入席」

四月二十六日 月旦評で「一級下」に昇級

閏四月二十五日 月旦評で「一級上」に昇級

五月二十五日 月旦評で「二級下」に昇級

九月二十七日 月旦評で「二級上」に昇級

十一月二十六日 月旦評で「三級下」に昇級

文政三年(一八一〇) 二月二十六日 月旦評で「三級上」に昇級

一月四日 名を「和市」から「頼母」に改名(一八歳)

一月二十五日 月旦評で「四級下」に昇級

文政四年(一八一二) 六月二十六日 月旦評で「四級上」に昇級

十二月二十日 月旦評で「五級下」に昇級

弟運平(十二歳)、淡窓の門に入る。

文政五年(一八一三) 一月四日 「使頼母開国語講。發周禮講。」(淡窓日記)

一月八日 「塾中ノ事。一切之ヲスルニ暇アラス。謙吉ト頼母トニ委ネタリ。」(懐旧楼筆記)

一月二十日 「以一切教學事委謙吉。塾事委頼母。」(淡窓日記)

文政六年(一八一三) 三月二十六日 月旦評で「五級上」に昇級

文政七年(一八一四) 一月二十七日 月旦評で「六級下」に昇級

一月二十六日 月旦評で「六級上」に昇級

文政八年(一八一五) 八月六日 咸宜園の「塾長」となる

八月二十四日 頼母が郷里に帰る。大帰力(卒業)(二十三歳)。

天保二年(一八三一) 咸春園に僧月性(一五歳)、東陽丹月(十四歳) 入門

天保一三年(一八四二) 三月一日 長子の精齋(敬吉郎) が生まれる。

遠帆楼詩鈔(前編) 刊行

弘化元年(一八四四) 弟子篤海量容が西国東郡草地村に涵養舎塾を開く。

弘化二年(一八四五) 五月二十五日 恒遠頼母・釈蘭谷・矢田孝治及孫六ト云フモノ。

別府ヨリ来訪ヘリ。頼母湯治ノ為メ。彼地ニ来リシ由ナリ（「懐旧樓筆記」）。

嘉永二年（一八四九）肥前松浦乾齋公の招きに依じて平戸城内で数度講義する  
安政六年（一八五九）村上仏山来訪

遠帆樓詩鈔（後編）刊行。

文久元年（一八六一）萩藩主は家臣柳沢雲平を遣わし、醒窓を萩にむかえようとしたが、病のために辞した。五月三日死去（五九歳）

文久三年（一八六三）墓碑を東光寺に建立（三回忌）

明治二年（一八七八）私塾蔵春園から私立蔵春学校と改称

明治四年（一九一一）醒窓五〇回忌に頌徳碑建立

大正四年（一九一五）醒窓、宮内省より従五位を贈られる。

昭和三年（一九六〇）五月三日 醒窓百年祭

「墓碑」東光寺境内にあり、諡は「温恭先生」とした。醒窓が生前に約束したとき  
れる友人の古香雲崖が碑文を作成し、それを門下生の別府毅窓により書し  
たものが墓碑に刻まされている。

#### ◆恒遠醒窓の事績と咸宜園の関係

恒遠家は四国伊予の豪族河野氏の一門で、遣明船の警護や貿易などに従事した河野水軍がその祖先とされ、室町時代初期に豊前の地に移り住んだとされる。その後、江戸時代初期に現在の恒遠姓を名乗るようになった。醒窓は、享和三年（一八〇三）に恒遠伝内の二男として豊前国上毛郡薬師寺村に出生し、幼名は和市、長じて頼母とした。号は醒窓。咸宜園には文政二年（一八一九）一七歳で入門し、在塾五年の間に塾長も務めた。また、退塾後は長崎に遊学。兵学者の高島秋帆宅に寄寓し、多くの文人墨客と交流を図った。文政八年、帰郷して私塾「自遠館」を開設し、これが後に「蔵春園」となった。

嘉永二年、松浦侯の聘に応じ、平戸に赴き滞留した。文久元年、萩藩主は柳沢雲平を追って恒遠を聘したが、病のため辞退した。その年の五月三日に歿した。享年五九才。

醒窓没後もその子精齋が塾を継承し、明治に入ると「蔵春学校」と名を変えたが

明治二八年（一八九五）まで存続した。

その他、恒遠家からは弟の運平（後の西秋谷）や醒窓の甥で次三郎（号は香農）が咸宜園に入門している。運平は咸宜園で都講（塾内の最高責任者）を務めた人物で、咸宜園一八才子の一人に数えられている。その後、筑前の亀井昭陽の門で学び、長崎では蘭学、熊本では医学を修めた。

明治二年、豊津藩庁が藩校「育徳館」に医学寮を設けた時に教頭に迎えられている。恒遠家は同郷の村上仏山とは漢詩人としての深い親交があった。

「主な著書」『遠帆樓詩集』『醒窓文集』『学庸解』等がある。

次に、二つの咸宜園関係史料に見る醒窓の記事について紹介する。

史料名「懐旧樓筆記」（淡窓の自叙伝）

文政二年巳卯。余年三十八。濠田ノ宅ニアリテ。業ヲ講ス。此年入門スル者。（略）恒遠和市豊前人。（略）和市後二頼母ト称ス。塾長ニ上リ。後ハ郷里ニ在ツテ。郷先生トナレリ。（略）

史料名『宜園百家詩』（全三編）咸宜園門下生たちの漢詩を中心に収録した漢詩集。醒窓は初編巻之四の冒頭に次のように紹介され、漢詩二首が収載された。

恒遠和 字子達、號轟谷、豊前上毛人○子達詩不負才、不使氣、雍容温籍、以法度勝、於諸子中、別具一格

#### ◆私塾蔵春園の教育

蔵春園の教育は、漢学塾であったが醒窓が学んだ咸宜園での経験を大いに生かし、



蔵春園現況写真（正面は求溪舎、右は晴雪軒）

咸宜園方式の教育方法に倣ったものが多いとされる。塾生は学力に応じて一九等級に分けられた。最下級を無級、下から九級、八級と続き、最上を一級とした。また、其々の級には上下の別があった。等級は平素の成績と臨時の試験とによって判断され、次第に進級した。また、全員の席序を毎月「月旦評」によって公表し、塾生たちの奮起を促した。現在、昇級する際に積み重ねた点数（加点式）を個人毎に記録した「旧点簿」が残る。学習は等級を三つに大別し、上会生（五級以上）、中会生（六・七級）、下会生（八・九級）ごとに内容が定められ、段階的に行っている。まずは素読・輪読に始まり、その後は講義形式に移行し、続いて塾生同志の討論会や会読という学習方法を採用した。学習の総仕上げは独見会（研究発表会）であったとされるが、当時の漢学塾では漢詩や漢文の作成を重要視することが多かった。また、醒窓が塾生に示した「告諭」が保存されているが、今日の「生徒心得」といった内容である。規則正しい生活を行うことが学問の上達にとつて重要であった点は咸宜園と同じである。その他、咸春園には塾生が使用したテキストや塾生使用と伝わる文机などが保管されている。

#### ◆咸春園の門下生

咸春園の門下生については、明治一年に咸春学校と名前を変えるまで約七十年間に三千名を超える入門者がいたと伝わる。その内の一部は現在も残る入門簿で確認することができる。



咸春園の入門簿（咸春園蔵）



咸春園の旧点簿（咸春園蔵）

○僧 月性（僧侶 妙円寺第一〇世・私塾「時習館」主宰）周防国大島郡の出身。咸春園には一五歳で入門。生涯を尊王攘夷、討幕運動にささげた人物で「海防僧」の異名をとった。また、親交が深かった吉田松陰にも影響を与えた人物とされる。月性は当初、咸宜園の廣瀬淡窓の門下となることを望んだとされるが、淡窓は病氣療養中であり入門はかなわなかったとされる。

○東陽円月（僧侶）豊後宇佐郡水崎村の出身。

円月は宇佐郡の真宗西光寺第二一世の五男として生まれ、月性と同じ天保二年（一八三二）に一四歳で入門した。塾では都講（塾頭）を務めている。退塾後は二七歳で本山の学林に学び、郷土では真宗の教化活動を精力的に行った。後には「豊前学派」と呼ばれる一学派を形成するに至っている。四四歳のとき西光寺内に「東陽学寮」を開設し、多くの子弟を教育したとされる。

○白石廉作（志士）長州下関の出身。

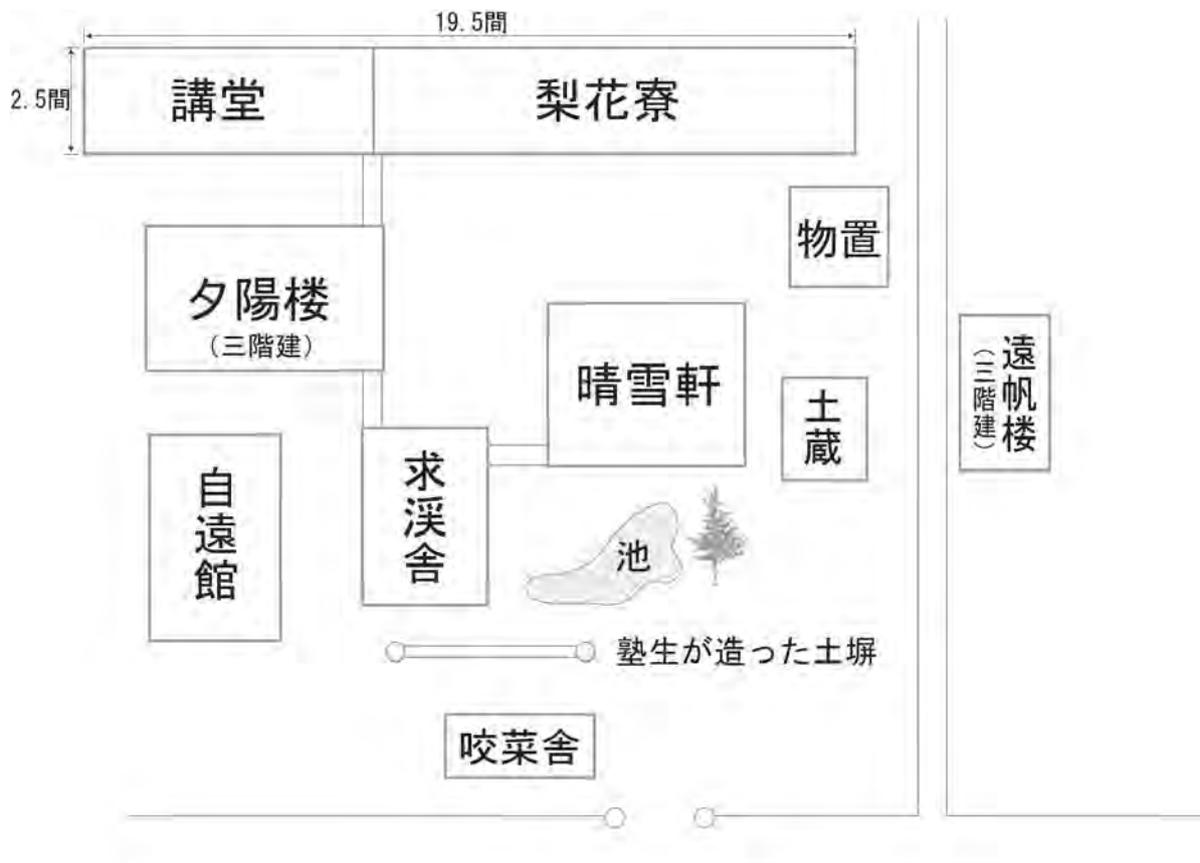
本家は酒造業、廻船問屋を営む豪商の小倉屋である。咸春園には一五歳のときに入門した。安政元年に退塾した後は下関に帰郷し、高杉晋作らが奇兵隊を結成するとそれに加わり但馬国生野で倒幕挙兵するが、敗れて斬罪となった。

○篤海量容（教育者）豊後西国東郡草地区村の出身。

量容は字は君容、号を米岳樵夫とした。醒窓門下の逸材といわれた人物で、弘化元年（一八四四）一月に、郷里の草地村入津に私塾「涵養舎」を開き、二六年間にわたつて子弟の教育を行った。当時、この地は肥前天草領であったため、その後、量容は藩学都講となつて天草へ赴いている。

そのほか、弓場春窓（豊前薬師寺村出身）のように醒窓の下で学んだ後、咸宜園に入門した者や同様に咸春園で学んだ後、近隣の私塾「水哉園」（村上仏山主宰）に入門した友石惕堂（豊前企救郡畑村出身）などがいた。

後記 本稿の作成にあたっては御子孫の恒遠俊輔氏より史料の提供ならびに御助言をいただきなりました。ここに記して感謝申し上げます。また、本稿の掲載内容については、平成二五年度咸宜園教育研究センター特別展（秋季企画展）「九州の私塾と教育〜咸宜園とその周辺〜」の展示解説書の記事を一部加筆して作成した。



蔵春園全体図 (晴雪軒・求溪舎・土蔵等が現存する)

【参考文献】

- 大塚富吉『咸宜園入門百家小伝』(大分県郷土文化研究会 一九四九)  
 恒遠俊輔『豊前薬師寺村恒遠塾』(蔵春園保存会 一九八四)  
 恒遠俊輔『幕末の私塾・蔵春園』(葦書房 一九九二)  
 岡 為蔵『豊前薬師寺村恒遠塾 附精齋字統』(築上郡教育振興会 一九五二)  
 恒遠醒窓三浦尚司校註『遠帆楼詩鈔』(草文書林 二〇〇二)  
 恒遠醒窓三浦尚司校註『遠帆楼詩鈔後編』(草文書林 二〇〇四)  
 中野範『咸宜園出身八百名略伝集』(一九七四)  
 井上義巳『福岡県の教育史』(思文閣 一九八四)  
 平成二五年度咸宜園教育研究センター特別展(秋季企画展)『九州の私塾と教育  
 ～咸宜園とその周辺～』(展示解説書)(咸宜園教育研究センター 二〇一三)

【参考史料】

- 「恒遠醒窓日記」(内、文政九年の日記には「醒窓漫録」の題がある) 蔵春園蔵  
 『宜園百家詩』初編 日田市蔵  
 「林外日記」一九卷二四冊(家宝5・1・1) 廣瀬本家蔵  
 「青邨日記」一九冊(家宝23・1) 廣瀬本家蔵

咸宜園門下生略伝(二)

中島 子玉(なかしま・しぎよく)

本名 中嶋 益多(増太) 幼名は盛太郎、字は大齋

号は子玉・米華・如玉・古香外史・韻華・海棠窠主人等がある

生没年 享和元年(一八〇二)〜天保五年(一八三四)三月十五日

◆入門簿あり

◆入門時情報

入門年月日 文化一三年(一八一六)三月四日 年齢一六歳

身分・職業 武士

住所 豊後佐伯(現大分県佐伯市)

紹介者 明石仙次

◆師事者 廣瀬淡窓

◆月日評 七級上

◆大帰日(卒業) 文政四年(一八二二)十一月二日

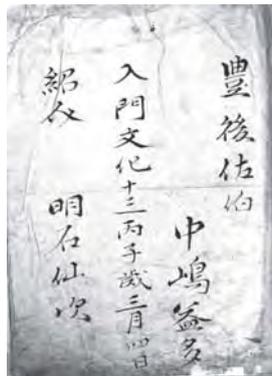
◆大帰後の職業 佐伯藩儒官

◆その他の情報

「中島子玉墓」佐伯市指定有形文化財



中島子玉肖像(日田市蔵)



咸宜園入門簿

◇中島子玉の略年譜

享和元年(一八〇二) 佐伯城下の下鉄砲町で生まれる

文化一三年(一八一六) 三月 四日 桂林園(咸宜園の前身)に入門(一六歳)

佐伯藩士の古田豪作も同日入門

三月二十七日 月旦評上で「入席」

三月二十七日 月旦評で「一級下」に昇級

四月二十八日 月旦評で「一級上」に昇級

五月二十七日 月旦評で「二級下」に昇級

六月二十八日 月旦評で「二級上」に昇級

八月一日 月旦評上で「入塾」

八月晦日 月旦評で「三級下」に昇級

九月二十八日 使益太代講於官府。(淡窓日記)

一〇月六日 月旦評で「三級上」に昇級

十一月二十九日 月旦評で「四級下」に昇級

文化一四年(一八一七) 三月 一日 月旦評で「四級上」に昇級

六月 一日 月旦評で「五級下」に昇級

八月二十六日 月旦評で「五級上」に昇級

十二月二十日 月旦評で「六級下」に昇級

文化一五年(一八一八) 一月二十日 益太帰郷するため退塾

文政元年(一八一八) 八月二十六日 月旦評で「六級上」に昇級(六月に復学)

文政二年(一八一九) 七月 五日 亀井塾に遊学

文政三年(一八二〇) 二月 八日 亀井塾から咸宜園に復学

五月二十五日 月旦評で「七級下」に昇級

文政四年(一八二二) 五月二十六日 月旦評で「七級上」に昇級

一〇月 長崎に遊学中、佐伯侯より帰藩の命が届く。

十一月二日 咸宜園を大帰(卒業)する。

江戸の昌平坂学問所に入る。

文政五年(一八二二) 一月二十七日 咸宜園の月旦評から「除名」される。

文政七年(一八二四) 三月 帰藩し藩学教授に任せられ中小姓格に列した。

一二月 肥筑京摂の間に遊び、昭陽・殼堂・小竹等と交わ

天保五年（一八三四）三月十五日 病没。死因は破傷風。享年三四歳

四月 七日 淡窓の元に中島幹右衛門より益多の訃報が届く。

二月二〇日 子玉の墓碑銘が完成し、淡窓がその父中島幹右衛門に書を送る。

#### ◆中島子玉の事績

名は益多。淡窓は増太とも記した。子玉は佐伯鉄砲町の佐伯藩士中島幹右衛門の長子に生まれた。文化一三年の一六歳の時、佐伯藩の命により同藩の古田豪作と共に学資を給されて淡窓の門に入った。居ること二年、学業が進んだので帰藩したが、既に月旦評では六級の最上位にあつた。文化一五年、子玉が帰郷する日、淡窓は別れを惜んでその出発を見送つた。その時の淡窓は「益多塾二在ルコト前後三年。予教授ヲ以テ事ヲ為シテヨリ未ダ曾ツテ人材ノ是ノ若ク俊ナル者ヲ見ズ。再遊之期知ル可カラザル也。予左右ノ手ヲ失フ如シ。」と付した。それから半年余りが経過して、子玉は再び咸宜園の門下生となり、文政四年に七級上（当時の最上級）に上つて大歸した。また、その日は咸宜園を放學（休講）とするなどの配慮を行い、門生六、七十名が遠方まで送つたと記されている。塾内では都講（塾内での最高責任者）を務めて師を援けつつ修學した。

その後は江戸の昌平坂學問所で学び、文政一一年から佐伯藩の藩校「四教堂」で藩士教育を行うなどした。子玉の才能と人間性は、淡窓が「門下の第一の英才」と称したほか、頼山陽は「天下の秀才」と激賞するなど高い評価を得ていたが、天保五年病氣により歸らぬ人となつた。享年三四歳。

〔主な著書〕「愛琴堂集七卷」「日本新樂府」（明治二年刊）「米華遺稿」等がある。

#### ◆淡窓の記録に見る中島子玉

○文化一五年正月一〇日「中島益太佐伯二歸省ス。相良亮三郎從行セリ。余送ツテ堤二至リテ別レタリ。益太去去年ノ春ヲ以テ入門シ。此二至ツテ。未タ二年ニ滿タス。然ルニ。學業昇進。誠二目ヲ驚スニ堪ヘタリ。去年來。都講トナリ。塾政ヲ幹理シテ。又其宜シキヲ得タリ。余人ヲ教ヘシヨリ以來。人才此人ヲ以テ第一

トス。其歸ルニ及ンテ。殆ト左右ノ手ヲ失フカ如シ。」（懷旧樓筆記）

○文政四年一月一日「益太歸郷。大歸也。六十七人。放學。益太在門六年。席加七級上。其人材前後先双。及其歸也。有易東之歎。其名遍施遠近。餼送之盛。從來未有也。」（淡窓日記）

○文政七年二月二六日「中島益太東都聖堂ヨリノ書信ヲ得タリ。其中大學校ニテノ變事ヲ載セタリ。聖堂ノ學生ニ狩野軍平ト云フ者アリ。會津侯ノ臣ナリ。同僚生ヲ怨ム事アリ。去十二月三日に當ツテ。西村有蔵ト云フ者ヲキリ殺シ。（略）又吉村藤兵衛松井慶蔵を打チ傷ケシカトモ。死ニハ至ラズ。黒瀧藤太ト云フ者。軍平ヲ擒ニス。時ニ益太ハ事アリテ外出セシカ。變ヲ聞イテ馳セ歸リ。黒瀧ヲ助ケテ軍平ヲ縛シタリ。已ニシテ事諸博士ニ聞シ。ソレヨリ町奉行所ニ召サレテ。訊鞠アリ。他諸生モ許多召シ出サレタリ。時ニ益太力答辭ヨリ告狀ニ至ルマテ。始末宜シキヲ得タル由シニテ。稱譽アリ。是ニ由ツテ。拔ンテラレテ齋長トナレリ。（略）」（懷旧樓筆記）

○天保五年四月七日「嗚呼哀哉。子玉爲吾黨冠冕也。世无不知。豈料衰老逢此長別也。去冬來遊大慰病懷。乃永訣也。得年僅三十有四耳。天假之年。必將成名於後世矣。聖人天喪之嘆。予亦窮比焉。回思往事。轉添痛恨。蓋亦勿思。」（淡窓日記）

○天保五年四月七日「佐伯ノ中島幹右衛門ヨリ書狀來レリ。其子益太先日病死セシ由ヲ告ケ。遺物二品ヲ致シ。其墓誌ヲ求メタリ。今年三十四歳ナリ。去年來リシコト。生涯ノ永訣トナレリ。予カ門生数千。此人ヲ以テ第一ノ英才トス。予嘗テ之ヲ品シテ。其才頼子成カ下ニ非スト云ヘリ。其人ニ至ツテハ。子成ヨリ賢ナルコト遠シ。惜哉。大成ニ至ラスシテ歿セリ。其遺稿八卷。猶外ニ編纂二及ハサルモノ許多アリ。他日ヲ待ツテ。上木ノ事アランコトヲ願フノミ。」（懷旧樓筆記）

○天保五年二月二〇日「發與中島幹右衛門書。送墓碑文也。頼久兵衛託佐伯飛脚。」（淡窓日記）

○天保五年二月二〇日「中島益太墓碑ノ文成就。之ヲ其父ニ送り遣ハセリ。彼方ヨリ托シ來リテ。既ニ久シト雖モ看待暇ナク。其後重哀ニ居ルヲ以テ。遷延シテ今日ニ至レリ。碑文ヲ予ニ請フコト。子玉力遺命ナリトソ。」（懷旧樓筆記）

#### ◆漢詩人 中島子玉

中島子玉は漢詩人としても評価が高く、その才は頼山陽も認めるほどであつた。

子玉の漢詩は、咸宜園で企画され世に出た『宜園百家詩』や近世を代表する詩人が載った『東瀛詩選』などにもその代表作を見ることができる。『宜園百家詩』初編巻三には子玉のことが次のように紹介された。

中嶋大賚 一名如玉、字子玉、號米華、豊後佐伯人○子玉在宜園、為第一流才子、

三十四而歿、淡翁每有天喪之嘆、余カ求遺篇於其門人録之、顧其全集當有上梓之曰、固非區區採擇所能盡也。

ここでは先にあげた二つの詩集に共通して収載される漢詩一首を紹介する。

訪方山完吾新居

案上紛綸書冊堆。數楹新築面江開。

催詩雨逐鳴鳩至。載酒人先賀燕來。

筍綠初為新徑竹。石青猶帶舊山苔。

南軒話罷還高枕。一榻清風夢蟻塊。

『東瀛詩選』とは、幕末維新期にジャーナリストや実業家として活躍した岸田吟香の依頼により、中国清末の儒者・俞樾が日本人の漢詩から撰して編んだ漢詩集である。光緒九年（一八八三＝明治一六年）に刊行され、収録された詩人は五五〇人で、最も多くの詩が採用されたのは廣瀬旭莊（咸宜園第二代塾主）であった。

また、淡窓の漢詩「五子ノ詩」（宜園五才子の詩）にも子玉が登場する。

此年秋冬ノ頃。予五子ノ詩ヲ作ル。詩二曰ハク。

長卿博洽才。善作三唐語。幽燕涼雄姿。可以任旗鼓。身棲橘柚林。名播菁華圃。

彦國耽佳句。冥搜要驚人。龍門波底玉。奪爲席上珍。寄語謝關子。莫誇髯絕倫。

九畹跡雖舊。芳蘭有新芽。玉郎俊秀人。咳唾粲成花。白圭柱三復。妙語本暇無。

詩家稱別才。我見平川子。禦冠御風行。飄々不可企。此君有風毛。圓也何曾死。

偉哉南溟鳥。養翼息池塘。人材觀晚節。誰得抗中郎。神駒或齧蹠。鞭策在王良。

（懷旧樓筆記）卷十八より）

〔参考〕中島子玉の墓標

先にも触れたように、子玉の死は淡窓にとつても大きな出来事であった。佐伯市の久成寺には子玉の墓標があり、三面にわたって刻された墓誌銘は子玉の遺言にあつたように淡窓が撰している。

（碑陰）

天保五甲午年

大智院徳勇日健居士

三月十又五日



中島子玉墓（佐伯市 久成寺）  
写真提供 佐藤 巧氏

（東面）嗚呼是中島子玉之墓也子玉諱大賚後改如玉號米華 増太豊後人家

世而 佐伯侯父幹右衛門子玉少而銳敏好學嘗在我門數年既而敵筑肥洛攝之間與昭陽穀堂山陽敬所小竹諸老游皆許以才子無雙又入大學委贅於博士劉侗菴先生任於齋長為祭酒林侯冠山松平侯所知數加禮接 國侯聞之擢為儒

（南面）官使賞學政青衿鄉風勃勃將興會其卒年僅三十有四配宇野氏生一男

又蚤死子玉為人洒落不務矯飾人自愛敬之詩文清新流利筆先意走實奇才也遺稿愛琴堂集七卷日本新樂譜一卷雜著未及編者又數千篇臨汲口占曰高情自與世人違我是南豊一布衣三十六鱗猶欠二今朝天井化龍飛時天保甲午三月

（西面）十五日也遠近莫不歎惜焉墓在佐伯城東碧松山久成寺碑面所題其法

謚云銘曰

何彼妍兮桃與李中郎有詩豔而綺風捲滄海廻瀾紫中郎有文奇且詭天假其才不假齒人傷斯人何忽爾遺文不祧百千祀我謂斯人未嘗死

廣 瀬 建 撰

【参考文献】

大塚富吉『咸宜園入門百家小伝』（大分県郷土文化研究会 一九四九）

佐伯市史編さん委員会『佐伯市史』（佐伯市一九七四）

佐々木均太郎講演録「咸宜園第一の俊才中島子玉」『敬天二六号』（淡窓会 一九九八）

佐々木均太郎講演録「咸宜園第一の俊才中島子玉」その2『敬天二七号』（淡窓会 一九九九）

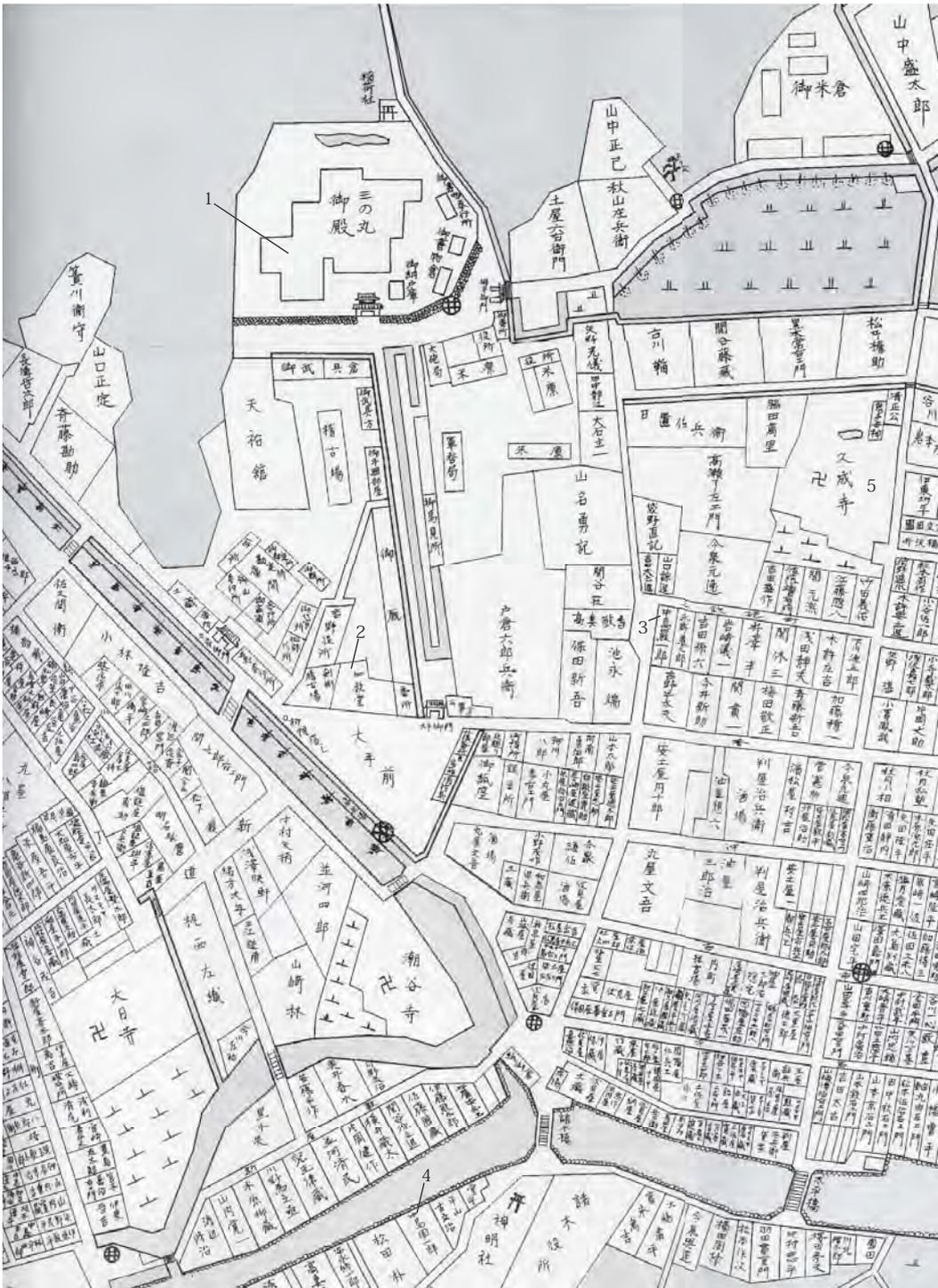
佐々木均太郎講演録「咸宜園第一の俊才中島子玉」美人二二味その3『敬天二八号』（淡窓会 二〇〇〇）

後藤孝「中島子玉の全体像・佐々木均太郎先生講演」『敬天二九号』（淡窓会 二〇〇一）

岩尾寛「中島子玉生誕二百年祭報告記」『敬天三〇号』（淡窓会 二〇〇二）

佐藤巧「藩校四教堂の人物志 中島子玉と恩師広瀬淡窓」(二〇一二)

さとうたくみ編「中島子玉の日本史・日本詠史新楽府」(二〇一三)



「明治四年頃 佐伯藩時代屋敷図」（昭和8年5月1日米澤黄波製図）に一部加筆

1. 佐伯城
2. 藩校「四教堂」
3. 中島本家
4. 中島子玉居宅
5. 中島子玉墓（久成寺）

咸宜園門下生略伝(二)

諫山 菽邨(いさやま・しゆくそん)

本名 諫山 與吉よきち

通称は東作、諱は秩、字は平甫、号は菽邨・橙園

生没年 文政八年(一八二五)三月～明治二六年(一八九三)一月二五日

◆入門簿あり

◆入門時情報

入門年月日 天保四年(一八三三)三月二八日 年齢九歳

身分・職業 医師

住所 豊後日田郡豆田町(現大分県日田市豆田町)

紹介者 諫山 安民

◆師事者 廣瀬淡窓・廣瀬旭荘

◆月日評 四権八級下

◆大婦日(卒業) 不明(弘化三年中カ)

◆大婦後の職業 医家

私塾「三隈義校(又は義塾)」の創設者

◆その他の情報

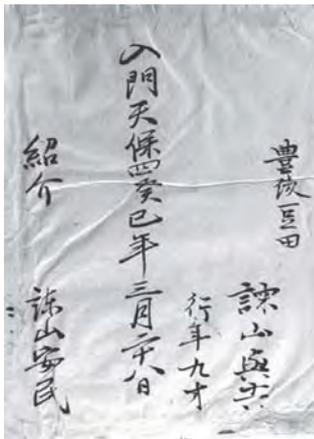
養育館創設の功勞者

咸宜園内の書蔵庫建設の功勞者

◆咸宜園第九代塾主 明治二年～明治二五年まで



諫山菽邨肖像



咸宜園入門簿

◇諫山菽邨の略年譜

文政八年(一八二五) 三月 日田に生まれる

天保四年(一八三三) 三月二八日 咸宜園に入門(九歳)

四月二六日 月旦評上で「入席」

天保八年(一八三七) 一月 再入門カ

八月二六日 月旦評で「一級下」に昇級

十一月二六日 月旦評で「一級上」に昇級

天保九年(一八三八) 二月二六日 月旦評で「二級下」に昇級

一〇月二六日 月旦評で「二級上」に昇級

天保一〇年(一八三九) 一〇月二六日 月旦評で「四級下」に昇級

天保一二年(一八四〇) 七月二五日 月旦評で「四級上」に昇級

天保一二年(一八四一) 六月二六日 月旦評で「権五級下」に昇級

天保一三年(一八四二) 一月二六日 月旦評で「二権五級上」に昇級

七月二六日 月旦評で「二権六級下」に昇級

一二月二三日 月旦評で「三権六級上」に昇級

天保十四年(一八四三) 六月二五日 月旦評で「四権七級下」に昇級

閏九月二五日 月旦評で「四権七級下」に昇級

天保十五年(一八四四) 一月二五日 月旦評で「四権八級下」に昇級

弘化二年(一八四五) 一月二二日 東作(菽邨)の弟輝蔵が咸宜園に入門

弘化三年(一八四六) この頃、大婦(卒業)したと思われる。

文久二年(一八六二) この頃から東作より菽邨へと呼び名が変わる(「林外日記」より)。

明治二年(一八七八) 一月 私塾「三隈義校」を開設

明治二年(一八七九) 医学書『天行厥病論』を著す。

明治二年(一八八八) 咸宜園第九代塾主となる

明治五年(一八九二) 四月 体調不良となり咸宜園を閉鎖

明治二六年(一八九三) 一月二五日 秋風庵で没した。(六九歳)

## ◆諫山菽郵の事績

菽郵は、文政八年に豆田町の医師諫山安民の長子として生れた。安民は豆田町の医家で、淡窓門下の中でも最古参の一人である。諫山家は本姓を菅原と称し、もとは太宰府天満宮の神職を務めていたが、羽野天満宮（日田市天神町）にゆかりを持って日田に移ってきたといわれている。最初は夕田（日田市上手町）に居住したようだが、父安民の頃には、豆田町（住吉町）の伊予屋儀七の借宅で暮らしていた。幼名は興吉とし、天保四年三月、九歳で淡窓の門に入った。天保一五年の「淡窓日記」では、すでにその名を東作と改め、嘉永年間頃には菽村としている。九歳での入門は幼かったためか、一時休業したようで、しばらくは塾での様子は記録に表れない。再び名前が見えるのが、天保八年正月の淡窓の日記で、十三才のときに再入門したのではないかとされる。その後の菽郵は勉学に励み、天保一五年一月には四権八級下まで進級した（二〇歳）。

大婦（卒業）後、福岡の亀井塾に学び、続けて肥後の深水玄門に医学を学んだ。更には京都の侍医山本大和守について医学を学んだ後に帰郷し、三四歳のときに日田で医学を開いた。淡窓や林外の記事には東作の名で往診の文字が頻繁に見られ、咸宜園では淡窓の主治医のごとく、常に師淡窓の体調を気遣っていた様子がわかる。また、官府（日田代官所）の典医となり帯刀も許された。

菽郵は咸宜園での勉学を終えた後も咸宜園との関わりを深く持ち、淡窓亡き後も咸宜園の塾主廣瀬青郵や林外の元を訪問し、囲碁を楽しんでいたことが記録に残る。

医家であった菽郵は、社会福祉事業でも大きな役割を果たしている。維新へと向かう慶応二年（一八六五）のある日、捨子を救ったことがあった。日田では当時数多くの遺児や捨子がいることを憂い、菽郵は遺児らを養育することを試みるが、その数の多さは個人では如何ともしがたく、明治二年二月、松方正義が日田県知事になると、知事に棄児救済のことを進言した。その結果、廣瀬家や草野家からも基金を得て「養育館」を建設することが出来た。医師の相良文敬と共に養育掛長として自らもその任にあたった。明治六年に閉鎖されるまでの四年間に収容した児童は一三九名の多きに達したとされる。

明治七年に咸宜園塾主の廣瀬林外が没した後、一時休園（閉鎖）していた咸宜園を再興するにあたり、明治十三年には旧友の平野五岳らと謀り、豊前出身の旧門下生・村上姑南をしてその任にあたらせた。後、廣瀬濠田を塾主に迎えたが、そ

れも長くは続かず濠田が去った後は菽郵が咸宜園の塾主となって経営と教授にあたった。当時、秋風庵などには淡窓以来の購入書籍が数千点もあり、明治二三年（一八九〇）濠田と相談し、不用となっていた東塾の家屋を売却した費用で書庫を建築して各書を保存した。宜園の蔵書が今日よく存するのは菽郵の力が大きい。晩年の菽村は咸宜園で家族と共に過ごし、明治二六年一月二五日、六九才で没した。著書に医学書「天行厥病論」や「近正伝」がある。詩文をよくし、専ら梅を題材とする「梅画」を描いた。日田の先哲の一人にも数えられ、平野五岳や千原夕田らとともに幕末維新期における日田文化の発展に寄与した文化人として名高い。

■墓は諫山家墓地（日田市秋山町夕田）にある。墓誌は廣瀬濠田によるもの。

## ◆咸宜園存続に奔走した諫山菽郵

明治四年（一八七二）、咸宜園第四代塾主の廣瀬林外（淡窓の養嗣子。実父は廣瀬旭荘）は洋学研究と新学制の視察をかねて上京するが明治七年に急逝する。そのため、一時塾を託されていた唐川即定は青郵らと相談し、咸宜園は一時閉鎖されることになった。その後、塾舎は郡役所や米会所として使用される中、淡窓創設以来の咸宜園が荒廃することを嘆いた菽郵は咸宜園の再興を望んでいた。そこで菽郵は旧門下生で専念寺住職の平野五岳らと相談し、咸宜園出身の村上姑南（中津市山国町出身）を咸宜園第六代塾主として招き再興した。ところが、明治一三年に新しく設立された日田郡組合立日田教英中学（日田市丸山周辺）に子弟を吸収されて、塾は再び中止せざるを得なくなった。

明治一五年一二月には咸宜園の再興に関して次の文書が作成されている。内容は咸宜園の旧規を永く維持保存し、塾を再興するため、趣意書に賛同した有志から資金を集めて塾の運営に充てようとしたのである。この会の名称を「宜園保存会」とした。（以下、田中晃「宜園雑記」より引用）

「宜園再興保存ノ儀ニ付淡窓先生門下諸君江御相談書」

宜園ノ盛時ハ諸君御承知ノ通ニ有之、先生没後青郵・林外ヲ継承シ、風致

ヲ維持シ、専ラ育英ノ事ニ従事致シ来リタルニ、時勢一変、青郵ハ官ニ就

キ、林外ハ不幸ニシテ病没。爾来宜園ノ家屋ハ郡役所トナリ、或ハ米会所

トナリ、庭園ハ歳月二月ニ益々以テ荒蕪ス。然ルニ先生ノ門人、諫山・棕

野諸輩此地ニ居住シ、此現場ヲ目撃シ感慨ニ耐ヘザルコト、茲二年アリ。

幸ニ先生ノ門下ニ村上姑南アリ。豊前国下毛郡中摩村ニ居住シ、医ヲ業トスルノ餘暇、生徒ノ教授ヲナセリ。依テ同氏ニ姑ラク宜園ニ入テ、教師ノ責ニ任セラレンコトヲ乞フ。(後略)

また、この書には先の趣意書の後に、全一〇条(第八条はなし)にわたって定められた事項があるので、その一部を紹介する。

第一条 宜園ヲ再興シ、旧規ヲ永遠ニ維持保存スル方法ヲ立ツルニ付テハ、先會名ヲ附セザルヲ得ズ。之ヲ宜園保存会ト云フ。

第二条 此挙ニ同意シ応分ノ贖金ヲ出スモノヲ宜園保存会員ト云フ。

第五条 広ク會員ヲ募ルニ於テハ、先ヅ内會員丈ニテ宜園ノ体裁ヲ議定セザル可ラズ。其議如左。

学科教則ハ都テ淡窓先生ノ旧ニ依ル。  
但シ時勢ノ沿革ニ随ヒ増損変更スルハ内外會員ノ公儀ニ決スベシ。

以上であるが、その他の内容では寄付金による基金の利子や「宜園ノ保存田」として買入れた土地(田地)の収益によって、教員給与や塾舎の修繕、書籍購入などの使用方法などが明記された。また、この書の発起人には諫山菽郵のほか平野五岳、南正次、椋野元卓、平島尚綱、児玉文貞、石田又玄、草野忠右衛門などの名が上がる。

その後も咸宜園の再興を望む菽郵らは、東京の青郵(第三代塾主)に咸宜園の再興を要請するなどして、明治一七年(一八八四)、青郵の長男である濠田(貞文)が日田に帰郷し、日田教英中学の校長を務めながら第八代塾主として、咸宜園を再興することになった。明治二二年(一八八八)、濠田は再び上京することになり、菽村自らが第九代塾主として咸宜園を守る決意をした。菽郵は家族とともに園内の秋風庵に移り住み、門下生の指導にあたっている。菽郵は明治二五年四月には体調不良で塾を閉じるが、咸宜園の学統を守るため尽力した。

最後に、最晩年の菽郵に次のようなエピソードがある。菽郵には一〇人の子どもがいたが、死期が迫ったある日、末娘のリンが未だ幼く、将来、父のすがたを思い起こすことが出来ないのではと不憫に思い、リンのために菽郵は写真撮影を行なった。撮影の翌日、父菽郵が逝去したと後の千原リン(故人)さんは語っている。

#### ◆咸宜園の書蔵庫建設

咸宜園において最後に建設された建物は「書蔵庫」である。書蔵庫は明治二三年(一八九〇)の建設で、淡窓が収集した咸宜園蔵書が火災で焼失しないようにと建設された。当時の塾主は諫山菽郵であったが、旧門下生や廣瀬宗家の第八世七三郎の協力によって完成を見た。当初は秋風庵の東側に建設されたが、現在は園内の北側に移設されている。以下、建設の経緯に触れた棟木の墨書銘を紹介する。

#### 「咸宜園書蔵庫棟木銘」

予之寓于咸宜園独思想藏蓄書籍於茅屋豈終保無回録之憂乎

夜半念及此不能瞑目者多矣

貞文君偶歸鄉談及文庫之事

君曰

粥鬲長物東塾以充其資

何憂不成君與敬四郎君議寄書以建築為囑

七三郎氏聞之曰我以金百七円買東塾使良匠從事焉

因相議以匠井上廣太為主任全就其功矣

明治廿三年庚寅十二月

諫山東作記



明治末期～大正初期の書蔵庫(左は秋風庵)



大正4年～昭和10年までに撮影された書蔵庫



現在の書蔵庫

◆養育館建設と松方正義

菽郵は、淡窓に做って『陰陽録』（人知れず善を積みむことで、自らの運命が開けることが説かれている）を読み、貧しい者、弱い者を憐れむ心が強く、治療代や薬代をとらなかつたとされる。また生類（いきもの）に対して憐れむ気持ちがあつても強く、売れ残つた魚や貝を買つては、逃がしたという話も伝わる。

このような性格であつた菽郵は、貧しくて子供を育てることが困難な家庭において、捨子が行われていたことに対し、心を痛めていた。明治二年（一八六九）、当時の日田県令（今の県知事）松方正義（後に内閣総理大臣）に遺児や捨子を収容して養育する施設の設立を要望した。菽郵は日田の豪商からも寄附金を募り、当時の咸宜園塾主であつた廣瀬林外も松方に対して建設の進言をしたとされる。明治二年二月、菽郵らの努力により養育館は咸宜園より南に約百メートルほどの位置で、三本松（現在の日田市営三本松駐車場）と呼ばれる土地に建設されることになり、同年六月六日に竣工した。近代日本における社会福祉施設の発祥の地ともいわれる。しかし松方が日田を去り、日田県が大分県に編入されると、養育館の存続は次第に困難となつて、明治六年（一八七三）十月に閉鎖された。短期間ではあつたが、この間に収容されて養育した児童は一三九名を数え、多くの命が救われた。



養育館図（日田市蔵）

◆養育館一件書類

廣瀬家には日田養育館に関する書類をまとめた一件の綴りがある。書類の冒頭には養育館の設置について書かれており、濫りに捨て子を勧めるものではなく、墮胎を禁じて子どもの命を救うことが目的であると書かれている。また、養育館運営に関する記述も見え、「願書浄書写方」・「政府届方補助并二死亡見点検方」など様々

な役職が書かれており、諫山東作（菽郵）の名前も「養育掛」として挙がっている。本資料には、養育館の運営状況や国の機関（太政官や民部省）や大分県、日田県等の公文書の写しが含まれており、養育館のことを知る上で貴重な史料である。



日田養育館址（日田市三本松）  
題字は松方正義

【参考文献】

- 大塚富吉『咸宜園入門百家小伝』（大分県郷土文化研究会 一九四九）
- 広瀬恒太『日田御役所から日田県へ』（一九六九）
- 中島市三郎『咸宜園教育発達史』（一九七三）
- 田中晃「宜園雑記」『敬天』一二号（淡窓会 一九八三）
- 「諫山菽村」『日田の先哲』（日田市教育委員会 一九八四）
- 『日田市史』（日田市 一九九〇）
- 森真理子「咸宜園塾頭諫山菽村宛来簡の書誌的研究」（平成三・四年度科学研究費補助金）（一般研究（C））研究成果報告書（京都大学 一九九五）
- 『廣瀬淡窓と咸宜園・近世日本の教育遺産として』（日田市教育委員会 二〇一三）

咸宜園門下生略伝(二)

朝吹 英二(あさぶき・えいじ)

本名 朝吹 英次、幼名は萬吉・鐵之助、号は真言寺、古鐵  
生没年 嘉永二年二月十八日(大正七年一月二十一日)一八四九・一九二八

◆入門簿あり

◆入門時情報 入門年月日 明治元年(一八六八)九月十五日(二十一歳)

身分・職業 朝吹謙蔵 弟

住所 豊前国下毛郡宮園村(現大分県中津市耶馬溪町宮園)

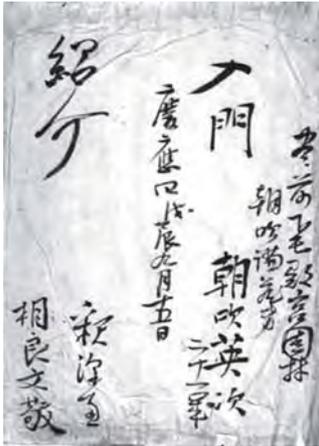
紹介者 枳 深恵・相良 文敬

◆師事者 廣瀬林外

◆月日評 不明

◆大婦日(卒業) 不明

◆大婦後の職業 実業家



咸宜園入門簿



廣瀬林外肖像

◇朝吹英二の略年譜

朝吹英二は、一八四九(嘉永二)年、豊前下毛郡宮園村(現在の分県中津市耶馬溪町宮園)で、父朝吹泰造と母幾能の二男として生まれた。朝吹家は、同村の十五代続いた大庄屋であった。兄弟は八人。男四人、女四人であった。

英二は、幼少期に村上姉南の養翼園で学んだ。姉南は、廣瀬淡窓の高弟で、豊前の三才子と呼ばれた漢学者であり医者でもあった。

一八八〇(明治十三)年に、第七代咸宜園塾主に就任した。

一八六五(慶應元)年、十六歳にして米相場を手がけ、「大胆」かつ「機敏」という商才を発揮。次の年、中津に出て渡辺重春や白石照山に漢学を学び攘夷思想を持つ。

一八六八(慶應四)年九月十五日、咸宜園に入門。廣瀬林外が塾主を務めた時代である。だが、退塾の時は不明。実兄謙三も、その二年ほど前に同塾に入門している。一八六九(明治二)年、大坂に出て福澤諭吉の従兄弟で漢学者藤本箭山に師事。次の年、諭吉と初めて対面。そのとき、牛肉を食べ、風呂でシャボンを使う諭吉の

「西洋かぶれ」に腹を立て諭吉暗殺を企てたが、失敗した。自分の考えの愚かさを悟る。そして、諭吉の人格や見識に触れ、一転して師と仰ぐようになる。その後、上京。福澤家の玄関番となり、慶応義塾に学んだ。

一八七二(明治五)年、同義塾卒業。卒業後、同義塾の出版社主任となり、『学問ノススメ』など諭吉の著作出版を数多く手掛けた。

一八七五(明治八)年、諭吉の姪(諭吉の姉婉の娘)澄と結婚。澄は、後に三井財閥を代表する経営者となる中上川彦次郎の実妹。お茶の水女子師範学校の学生で十五歳。英二は二十六歳であった。

一八七七(明治十)年、長男常吉誕生。一八八三(明治十六)年、長女福子が誕生した。

◆明治実業界の重鎮朝吹英二

英二は、明治の実業界で大きな活躍をした。ここでは、その足跡をたどってみる。一八七八(明治十一)年、三菱商会に入社。岩崎弥太郎に重用され、すぐ同会支配人となる。

一八八〇(明治十三)年、岩崎弥太郎、福澤諭吉、大隈重信らが立ちあげた我が国最初の貿易商会の取締役支配人に就任。だが、「明治十四年の政変」で大隈

重信が失脚すると、同商会は破産状態となる。英二は、巨額の借金を一人で背負い込むも、「日本一の借金王になった」と笑い飛ばした。

一八九二（明治二十五）年、経営危機に陥った鐘ヶ淵紡績会社（後の鐘紡）の専務取締役に就任。再建に向けて辣腕をふるう。同社入社は、義兄中上川彦次郎の推薦であった。

一八九四（明治二十七年）年、三井工業部理事に就任。

一八九八（明治三十一年）年、三井呉服店専務理事に就任。

一九〇〇（明治三十三年）年、王子製紙会社取締役に就任。

一九〇二（明治三十五年）年、王子製紙会社専務取締役に就任。

三井管理部長に就任。

一九〇四（明治三十七）年、芝浦製作所監査役に就任。三井呉服取締役に就任。

一九〇五（明治三十八）年、三井同族会事務局管理部長に就任。

一九〇七（明治四十）年、東京商業会議所特別議員に当選。叙勲四等授瑞宝賞。

一九〇八（明治四十一年）年、鐘ヶ淵紡績会社相談役に就任。王子製紙会社取締役会長に就任。堺セルロイド取締役に就任。

一九〇九（明治四十二年）年、泉橋病院設立、理事兼評議員に就任。東京商業会議所特別議員を重任。三井合名会社参事に就任。三井銀行監査役に就任。三井物産会社取締役に就任。東神倉庫会社取締役に就任。

一九一（明治四十四）年、恩賜財団済世会設立、理事兼評議員に就任。その後、六二歳で一切の役職を辞し、骨董三昧の余生を送る。重要文化財級のものをいくつも見出し、鋭い鑑識力を発揮した。

一九一八（大正七）年一月三十一日、東京市高輪（現在の東京都港区）の自宅で腸間膜出血で急逝。六十九歳であった。駒澤龍雲寺（臨濟宗）に埋葬されたが、今日の墓所は、鎌倉五山の一つである円覚寺佛日庵に在る。

#### ◆朝吹英二の人となり

今から一〇〇年ほど前に亡くなった人の人柄を正確に言うことは極めて困難と言えよう。英二の曾孫亮二（慶応義塾大学教授）や玄孫真理子（芥川賞受賞作家）にとっても決して容易ではないかもしれない。

『孤高の名家 朝吹家を生きる』の著者石村博子氏は、同書の中で英二のことを「誰

にもなびかぬ自由人」と述べ、「どこにも属さぬ、誰にもなびかぬ自由人・英二は、世のための大意こそ人生の物差しととらえていた」と分析している。

『朝吹英二君伝』（大西理平編・大空社）では、英二の核心を「彼が平生は愛嬌談で他愛なく笑い興じたり、表面無頓着ですこぶる無邪気であったにもかかわらず、内には稜々たる気骨を蔵し、いったん大事に臨むと、毅然たる本領を備えておった」と評している。

英二には、数多く逸話が残っている。それらを検証することで、英二の大名かな人柄が浮かびあがってくる。

○英二の生家跡は、今日では大分県中津市耶馬溪町宮園地区に寄贈され自然公園となり、地区の人々によって管理されている。その公園の入り口には、当時の松の木が姿を留めている。英二は帰省の都度、「この松の木を愛護して欲しい」と里人に頼んだ。

○宮園村の東端に「林天満宮」の社があった。そこは英二の母幾能が信仰を深めた場所であり、幼い英二の遊び場でもあった。『林天満宮』の社が破損している」との夢を見た英二は、「調べて欲しい。もしそうなら、修理のために寄進したい」との手紙を書き送った。「修理の必要あり」の返事を受け、早速多額のお金を送った。○帰郷した英二は、「宮園村には秣苺り場がなく困っている」という里人の話を聞き、裏山の官有地を買いあげ、牧草地として村に寄贈した。

○英二が遊郭吉原で馴染を重ねた芸者に、お茶羅がいた。このお茶羅に三味線を弾かせ、英二が頬被りをして遊郭中に新内を流し歩いた。

○大隈重信の政治失脚で、英二が支配人を務める貿易商會が破綻。一人で借金を背負い込み生活にも困っていたとき、三人の吉原芸者が英二を見舞った。また、馴染の芸者たちが金を集め英二を援助した。

○友人宅と思ひ込み、上がり込んで寝ていたら、全く知らない人の家だった。

○大金の入ったカバンを盗まれ交番に駆け込むと、「スリでもあなたのような服装はしていない」とあきれられた。

○英二は、お抱え車夫とそば屋へ入ると、自分より値段の高いものを食べさせた。車夫は英二の友人でもあった。

これらの逸話を一つ一つ説明する必要はなからう。「英二が、人々からいかに愛されたか。また、その理由がよく分かる」。

英二の人柄を伝えるものは「逸話」だけではなく、「実話」もそうである。英二は、徳川時代には悪人とされた石田三成の顕彰事業にも熱心だった。歴史学者渡辺世祐に委嘱して『稿本石田三成』を書かせ、その墳墓発掘にも尽力した。さらに、英二は大塩平八郎も尊敬していた。英二には、大塩平八郎に共鳴するところがあり、謀叛人の汚名を被せられたことに対する同情があったものと考えられる。これらの実話は、英二が持つ価値観の一面を物語っているようにも思える。

「朝吹英二は『独立自尊』の人」である。

この精神は福澤諭吉に学んだものと考えられる。今日なお、慶応義塾に脈々と受け継がれている精神である。

英二のそうした思想は、長男の常吉（今日の朝日生命である帝国生命保険会社社長）、孫三吉（慶応義塾大学教授・フランス文学者）、登水子（日仏の掛け橋・フランス政府レジオン・ドヌール勲賞受賞）、曾孫亮二、玄孫真理子などに大きな影響を与えた。女子学習院で学んだ登水子を除いて、他は全て慶應義塾で学んでいる。三吉は、実妹である登水子のフランス留学を手引きした。

#### ◆三吉の二男亮二とその娘真理子

朝吹英二の華麗なる血脈には驚く。ここでは、他界された人たちを除き、その血脈の一部をたどってみる。

亮二は、詩人であり慶応義塾大学法学部のフランス語・フランス文学の教授。詩人として鮎川賞も受賞している。

亮二は五歳でフランスに渡り、当地の公立小学校に入学。全校児童の中で日本人は亮二だけであった。また、学業成績も極めて優秀であった。一九六三（昭和三十八）年、十一歳で帰国して暁星小学校に入学。フランス語を忘れないようフランス人家庭教師の指導を受けた。この教師はソルボンヌ大学を卒業した若き日のフランスワーズ・モレシャンである。一度帰国するものの、再来日。NHKのフランス語講座の講師を務めるなどで、すっかり有名になった。その人柄は、人々の記憶に新しい。

亮二は同大学文学部でフランス文学を専攻。同大学院へ進み、その後は同大学でフランス語を教えている。そのフランス人並みの発音の正確さや美しさは定評がある。

亮二の一人娘真理子は、慶応義塾大学文学部（国文学専攻）・同大学院文学研究科に学んだ。同大学岩松名誉教授門下生で近世歌舞伎を研究。

二〇一〇（平成二十二年）、ドウゴマ賞を最年少で受賞。二〇一一（平成二十三年）『きことわ』（新潮社）で第一四四回芥川賞を受賞。二十六歳の若さであった。その研ぎ澄まされた言語感覚は特筆に値する。今後職業作家として大きな活躍が期待されている。

英二の実弟範治（野依家の養子となる）の曾孫野依良治は、名古屋大学の教授であった二〇〇一（平成十三年）年に、ノーベル化学賞を受賞した。

主な引用・参考文献

大西理平編『朝吹英二君伝』（大空社）

石村博子『孤高の名家 朝吹家を生きる』（角川書店）

文責 朝倉教育クラブ理事長 原 千里



朝吹英二肖像（撮影年不詳）



豊前国下毛郡宮園村の生家（撮影年不詳）



集合写真（朝吹は左端）

## I . 教育普及事業

### 1. 展示事業

#### (1-1) 常設展

会 期：平成24年4月 1日から  
平成24年7月31日まで  
内 容：廣瀬淡窓と咸宜園をテーマに日田市が所蔵する  
咸宜園関係史料を中心に展示。  
協 力：公益財団法人廣瀬資料館、光善寺、善教寺

#### (1-2) 常設展

会 期：平成24年10月4日から  
平成25年2月12日まで  
内 容：廣瀬淡窓と咸宜園をテーマに日田市が所蔵する  
咸宜園関係史料を中心に展示。  
協 力：公益財団法人廣瀬資料館、光善寺、善教寺

#### (2) 特別展：『廣瀬旭莊 — 東遊 大坂 池田 —』

会 期：平成24年8月17日から  
平成24年9月30日まで  
内 容：廣瀬旭莊が開塾した大坂での文化人との交流や  
その史跡などを紹介。  
協 力：公益財団法人廣瀬資料館  
福山誠之館同窓会  
公益財団法人亀陽文庫能古博物館  
広島県立歴史博物館  
大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構国際日本文化研究センター

堺市立博物館  
池田市立歴史民俗資料館  
大阪市立中央図書館  
関西大学図書館  
大阪大学適塾記念センター  
大阪大学大学院文学研究科懷徳堂研究センター  
大阪市史編纂所  
株式会社美々卯  
伊居太神社  
御霊神社  
統國寺 他

展示品：廣瀬旭莊肖像画  
頼山陽肖像画  
亀井昭陽肖像画  
九桂草堂随筆  
日間瑣事備忘  
当世名家 大妙々奇譚  
風流名橋競（浪華風流月旦評名橋長短録）  
風流巷之噂  
廣瀬旭莊筆五言古詩  
梅墩詩鈔  
入門簿（旭莊期）  
林田林叟筆七律双幅  
宜園百家詩  
廣瀬旭莊遺愛品 他



#### (3) 企画展：「咸宜園とその門下生たち」 — 第3代塾主 廣瀬青邨と第8代塾主 廣瀬濠田 —

会 期：平成25年2月15日から  
平成25年3月31日まで  
内 容：淡窓が咸宜園の経営を託した廣瀬青邨と、その  
長子で明治期に咸宜園塾主を務めた濠田に関係  
する史料を紹介。

協 力：公益財団法人廣瀬資料館  
展示品：廣瀬青邨肖像画  
青邨廣瀬君墓碑名（拓本）  
入門簿（旭莊期）  
入門簿（青邨期）  
青邨日記（複製）  
月旦評（慶応二年）  
月旦評（明治四年）  
『和肅堂詩鈔』（複製）  
東宜園入門簿（複製）  
東宜園入学規則（複製）  
廣瀬濠田書漢詩幅  
源兵衛雜記 他



## 2. 講座・講演会・イベント等

### ■ 講座

① 咸宜園平成門下生講座（年5回）対象：咸宜園平成門下生之会（現在、会員数約140名）参加者数のべ324名

講座	開催日	講師と演題	場所	参加者
第1回	10月14日（日） ～15日（月）	「松下村塾開塾170年記念講演とシンポジウム参加」及び下関市における淡窓ゆかりの地視察	山口県萩市ほか	12
第2回	11月20日（火）	世界遺産登録推進講演会共催（公開講座） 「西洋からみた近世日本の教育の特徴」 インディアナ大学教授 リチャード・ルビンジャー 氏	パトリア日田 小ホール	131
第3回	12月15日（土）	視察研修「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」	長崎県平戸市ほか	34
第4回	1月15日（火）	「廣瀬旭荘記念事業を振り返って」 ～あらためて旭荘書簡を読む～ 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤宗俊 氏	パトリア日田 スタジオ1	37
第5回	2月7日（木）	世界遺産登録推進講演会共催（公開講座） 「世界遺産としての咸宜園」 放送大学教授 五味文彦 氏	パトリア日田 小ホール	110



第1回【遊学】山口県萩市 城下町散策



第1回【遊学】「松下村塾開塾170周年記念講演とシンポジウム」



第3回【遊学】「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」



第4回【講義】「廣瀬旭荘記念事業を振り返って」

■講座

②名誉館長講座（定員 30 名） 講師：咸宜園教育研究センター 名誉館長 後藤宗俊 氏（別府大学名誉教授）

場所 咸宜園教育研究センター研修室 受講者数 のべ 209 名

	講座	開催日	演 題
前期日程	第 1 回	6 月 14 日（木）	仏陀最後の旅とその遺跡－世界遺産とは何か
	第 2 回	6 月 28 日（木）	パミール・カラコルムを越えて－ガンダーラの仏たち
	第 3 回	7 月 12 日（木）	バーミヤン石窟の悲劇－かくて巨大石仏は破壊された
	第 4 回	7 月 26 日（木）	敦煌莫高窟と中国の三大石窟寺院
後期日程	第 1 回	10 月 11 日（木）	アンコールワットとタイの仏教遺跡－戦争と自然災害による受難と再生
	第 2 回	10 月 25 日（木）	世界最古の木造建築－法隆寺の建造物群
	第 3 回	11 月 8 日（木）	鑑真和上と唐招提寺－小説「天平の曇」の世界
	第 4 回	11 月 22 日（木）	世界遺産への道－アジアの世界遺産から学ぶもの



前期第 1 回 6 月 14 日の様子



前期第 4 回 7 月 26 日の様子



後期第 1 回 10 月 11 日の様子



後期第 3 回 11 月 8 日の様子

■講座

③咸宜園教育研究センター定期講座（年4回）定員80名 参加者数のべ233名  
 廣瀬旭荘没後150年記念事業と連携し、旭荘関係の講座と鼎談を実施。

講座	開催日	講師と演題	場所	参加者
第1回	9月27日（木）	「淡窓・旭荘の往復書簡」 佐賀大学名誉教授 井上敏幸氏	パトリア日田 スタジオ1	73名
第2回	9月28日（金）	「大塩の乱と廣瀬旭荘」 帝塚山学院大学准教授 福島理子氏	パトリア日田 スタジオ1	56名
第3回	10月6日（土）	「廣瀬旭荘と幕末の大坂」 大阪大学講師 合山林太郎氏	パトリア日田 スタジオ1	52名
第4回	10月27日（土）	「江戸における廣瀬旭荘」 明治大学教授 徳田武氏	パトリア日田 スタジオ1	52名
		鼎談「廣瀬旭荘を語る」 明治大学教授 徳田武氏 大分県立先哲史料館主幹研究員 大野雅之氏 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤宗俊氏	パトリア日田 スタジオ1 (公開講座)	



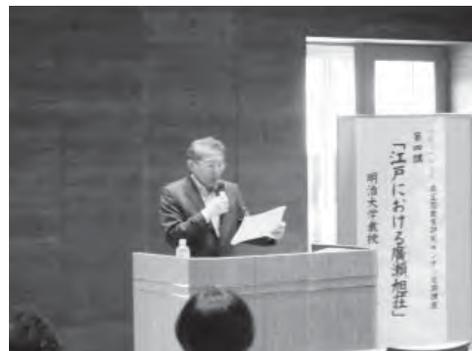
第1回 佐賀大学名誉教授 井上敏幸氏



第2回 帝塚山学院大学准教授 福島理子氏



第3回 大阪大学講師 合山林太郎氏



第4回 明治大学教授 徳田武氏



鼎談 後藤名誉館長 徳田武氏 大野雅之氏

■交流・教育普及事業

①第12回立志の道を歩こう（熊本県山鹿市の事業）

◇日時：平成24年7月24日（火）  
午前11時～午後1時

◇参加団体：山鹿市116名、日田市55名

◇協力団体：①淡窓会  
②主要地方道日田鹿本線改修促進期成会  
③JA大分ひたスイカ部会

◇記念品：日田市①「淡窓先生ものがたり」  
②「はがき・しおりと淡窓さんシールセット」



山鹿市の先哲・咸宜園門下生清浦奎吾（内閣総理大臣）さんと同じ道で咸宜園を目指します。



咸宜・桂林小児童20名が「休道の詩」を朗読し歓迎しました。



秋風庵で解説員の錦先生に咸宜園のことや清浦奎吾さんのことについてお話を聞きました。

②夏休みは、咸宜園で学ぼう！

◇目的：自由研究等で咸宜園について学ぶことで、咸宜園教育について関心を持ってもらう機会を提供すると同時に、咸宜園を訪れてもらうきっかけとする。

◇期間：平成24年8月4日（土）～5日（日）

◇内容：「咸宜園たんけん」等を実施（咸宜園や長生園などを見学）

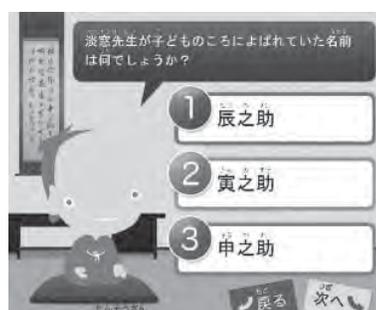
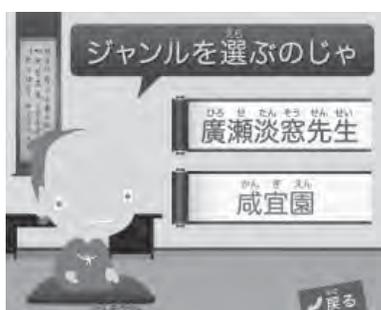
◇会場：咸宜園教育研究センターほか



山鹿市の小学生と咸宜・桂林の小学生との交流が深まりました。

③咸宜園子供クイズ

子ども向けの咸宜園クイズ（出題テーマは2種：「広瀬淡窓」「咸宜園」各10問）を制作し、研究室のタッチパネル端末の充実を図った。



### 3. 廣瀬旭莊没後 150 年記念事業

◇目的：150 回忌を迎える廣瀬旭莊の記念事業を開催。江戸や大坂、堺などで塾を経営するなど、各地に足跡を残し、また文人との交流も盛んであった旭莊について講演会の実施やシンポジウムを企画実施。特に、大阪での活動が顕著であるため、終焉の地・池田市など関係市町村や関係団体にも協力・協賛をお願いし、広域的な取組みを行った。またこれを機に廣瀬旭莊を紹介する映像を作成。

#### 【1】咸宜園教育研究センター特別展

「廣瀬旭莊—東遊 大坂 池田—」  
展示期間 8 月 17 日（金）～9 月 30 日（日）  
※大阪府池田市との協力事業  
池田市立歴史民俗資料館 特別展  
「廣瀬旭莊と池田・大坂」  
展示期間 10 月 19 日（金）～12 月 2 日（日）

#### 【2】講演会・てい談

◇日時：平成 24 年 8 月 19 日（日）13：30～16：00  
◇会場：パトリア日田（小ホール）  
◇基調講演：『詩人廣瀬旭莊の「絆」』  
講師 東京大学教授 ロバート・キャンベル氏  
◇てい談：ロバート・キャンベル氏、井上敏幸氏、  
葉室隣氏、米谷奈津子氏  
◇入場者：362 名



講演会の様子



てい談の様子

#### 【3】ロバート・キャンベル先生と高校生との交流会

ロバート・キャンベル氏の漢詩を楽しむ方法（高校生編）  
◇日時：平成 24 年 8 月 19 日（日）10：30～11：25  
◇会場：パトリア日田（小ホール）  
◇出演者：ロバート・キャンベル氏、米谷奈津子氏、昭和学園高校書道同好会・詩吟部、日田高校書道部  
日田三隅高校書道部



高校生との交流会「漢詩を楽しむ方法」



高校生による詩吟と書道吟

#### 【4】記念シンポジウム

◇日時：平成 24 年 10 月 27 日（土）  
◇会場：パトリア日田（スタジオ 1）  
◇パ 初 社：明治大学教授 徳田 武 氏  
大分県立先哲史料館主幹研究員 大野雅之 氏  
咸宜園教育研究センター 後藤宗俊名誉館長

#### 【5】旭莊紀行の刊行事業

廣瀬旭莊が旅をした中で、その足跡がよくわかる地域を調査し、本として刊行する予定（5 ヶ年計画）。

#### 【6】廣瀬旭莊の映像製作

廣瀬旭莊についてのガイダンス映像を製作  
（約 15 分）

#### 4. 刊行事業

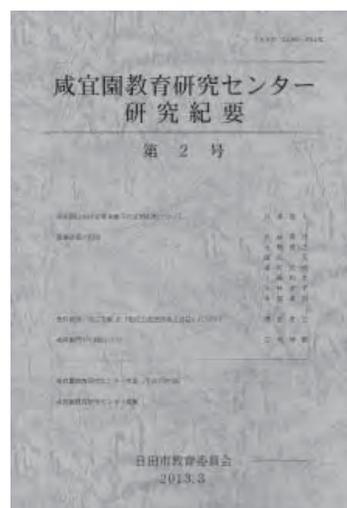
##### (1) 咸宜園教育研究センター研究紀要第2号

###### ◇研究紀要

明治期における東本願寺の清国布教について 川邊 雄大  
 廣瀬淡窓と旧宅 佐藤 晃洋  
 大野 雅之  
 園田 大  
 深町浩一郎  
 土居 和幸  
 今村 華子  
 平塚 英利  
 史料紹介 光吉文龍 述『旭莊公逝去前後之日誌』について 溝田 直己  
 咸宜園門下生略伝（一） 吉田 博嗣

###### ◇咸宜園教育研究センター年報（平成23年度）

###### ◇咸宜園教育研究センター要覧



#### 5. 訪問講座

日付	内容	申込団体	人数
平成24年 5月15日	「淡窓先生と世界遺産」	大分県庁OB会	20人
〃 6月3日	「廣瀬淡窓、人と思想」	関西陽柳会	58人
〃 6月25日	「咸宜園について」	日田市三芳公民館	25人
〃 6月25日	「淡窓先生と咸宜園」	日田市中津江公民館	28人
〃 8月21日	「咸宜園教育と廣瀬淡窓」	社民党関連自治体議員	100人
〃 8月29日	「咸宜教育を語る会」	日田市立咸宜小学校	50人
〃 9月4日	「廣瀬兄弟 - 淡窓・久兵衛・旭莊」	日田商工会議所	15人
〃 9月28日	「咸宜園門下生について」	日田市高瀬公民館	40人
〃 10月12日	「世界遺産の取組み」	小迫辻原遺跡研究会	7人
〃 11月6日	「総合的な学習の時間」	三芳小学校3年生	49人
〃 12月11日	「廣瀬淡窓と咸宜園について」	日田市天瀬公民館	80人
平成25年 1月13日	「世界遺産について」	日田商工会議所	20人
〃 2月25日	「世界遺産について」	若宮公民館	20人
〃 3月19日	「日田の先哲（廣瀬淡窓）を学ぶ」	若宮公民館	32人

※計14回 544名

#### 6. その他の取り組み

##### 第16回 平成淡窓祭

淡窓先生の遺徳をしのぶ平成淡窓祭が第16回目を迎えた。主催の淡窓会は廣瀬淡窓を顕彰するため、昭和27年にその前身となる組織を発足。現在の会員数は約350名を数える。11月1日は淡窓先生の命日。

日時：平成24年11月1日 午前10時～正午

会場：史跡咸宜園跡（秋風庵にて）

主催：淡窓会



## Ⅱ．調査研究事業

### 調査研究について

咸宜園教育研究センターでは、咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集について、下記の項目に添って進めている。これらの調査研究等を通じて日田市の教育、学術や文化の向上に寄与するものである。

- ① 咸宜園や廣瀬淡窓に関する研究図書、論文の調査および収集作業（通年）
- ② 廣瀬淡窓著述史料に基づく調査研究（通年）
- ③ 門下生に関する情報の収集（通年）
- ④ 咸宜園跡の復元に必要な資料の調査研究（古絵図・古写真・日記類など）
- ⑤ 全国に所在する教育資産について（私塾を中心に資料を収集）
- ⑥ 外部研究機関への調査委託（共同調査）
- ⑦ 咸宜園教育研究センター研究紀要の刊行

#### ②に関わる調査

##### 廣瀬淡窓著述史料を基にした調査研究

廣瀬淡窓の「淡窓日記」等を市民団体と協働で翻刻作業を行い、その成果を公開していく。平成24年度は市民サービス協働事業として行った。

◇実施内容：「淡窓日記」弘化3年（1846）7月～弘化5年（1848）7月まで作業終了

◇委託団体：漢文日記を読む会（代表：野田高巳氏）

#### ③ 門下生に関する情報の収集

##### 1. 池上秦川（門下生名：板野儀造）に関する調査

◇実施場所：岡山県総社市

◇実施時期：11月3日（土）・4日（日）

◇実施内容：淡窓時代最後の都講に関する調査。11月4日に行われた没後100年の法要に併せて調査を実施。旧宅跡に残る史料の確認調査及び子孫への聞き取り調査を行った。

指導者：鈴木理恵氏（広島大学大学院教授）



池上秦川旧宅（岡山県総社市）

##### 2. 芳川笛村（門下生名：吉川吉太郎）に関する調査

◇実施場所：千葉県松戸市

◇実施時期：12月2日（日）

◇実施内容：第4代塾主廣瀬林外期の門下生であった芳川笛村（画家）の子孫の方が以前、咸宜園教育研究センターを尋ねて来たことを縁に、今回の調査が行われた。調査には、水戸市世界遺産推進検討委員の青木美智男氏も同行いただき、調書と簡易写真撮影を行った。咸宜園門下生の大帰後の足取りを追跡できる事例であり、大変貴重である。目録作成・写真撮影等終わっていないため、調査を継続する予定である。

指導者：青木美智男氏（元専修大学教授）

##### 3. 廣瀬旭荘（門下生名：廣瀬謙吉、咸宜園第2代塾主）に関する調査

◇実施場所：東京都杉並区

◇実施時期：平成25年3月1日（金）～2日（土）

◇実施内容：廣瀬旭荘没後150年記念事業を開催したところ、廣瀬旭荘の子孫の方から連絡があり、現地調査を実施した。調査は、当センターの専門委員会委員で、大分県立先哲史料館の大野研究員と共に行った。調査の結果、旭荘の四男である敬四郎の落款や咸宜園と関わりのある人物の書幅など多くの史料が発見された。史料の大半は子孫の方のご好意で日田市に寄託いただいた。今後は、目録作成・写真撮影を行い、研究紀要で報告する予定である。



廣瀬旭荘関連史料群（東京都杉並区）

- ⑤ 全国に所在する教育遺産について（私塾を中心に資料を収集）

北部九州の私塾の調査

◇実施場所：福岡県行橋市（村上佛山「水哉園」）

◇実施時期：3月18日

◇実施内容：平成25年度事業のための予備調査。咸宜園の影響を受けた村上佛山が開いた私塾「水哉園」に関する内容。月旦評などを実見した。本調査は平成25年度実施する。

- ⑥ 外部研究機関への調査委託（共同調査）

### 1. 福岡大学

廣瀬淡窓に関わる史料の所在調査及び確認調査

◇調査先：長崎県立対馬歴史民俗資料館、台湾大学図書館貴重書、福岡市総合図書館、佐賀大学図書館市場文庫、国文学研究資料館、国会図書館、慶應大学斯道文庫

◇調査目的：咸宜園を開いた廣瀬淡窓や歴代塾主、またその門人等に関する書簡や書幅等の史料のうち、日田市が把握していない大学等の調査研究機関の所蔵資料を咸宜園教育研究センター専門委員会委員で、近世文学が専門の高橋昌彦教授（福岡大学人文学部）に調査を委託するものである。この調査を通じて、咸宜園教育の調査研究や展示公開に活かし、多くの人に咸宜園のことを知ってもらう基礎とするため。

◇調査成果：委託調査の結果、別表のとおり従来日田市が把握していなかった多くの史料所在の確認と写真データの提供を受けた。

今回の調査により、長崎県立対馬歴史民俗資料館からは、日田と対馬藩の関係を知ることができる廣瀬家に関わる古文書や淡窓著の『夜雨寮筆記』（写本版）が発見された。日田廣瀬家が対馬藩の御用達を務めていたことや対馬藩領であった田代に淡窓が出張講義に行っていたことなどもあり、対馬藩と幕府直轄地である日田との関係を考える上で貴重な史料である。また福岡市総合図書館からは、平成24年刊行された『廣瀬淡窓資料集』に掲載されなかった、新出の淡窓書簡が見つかった。その他国文学研究資料館の「広瀬青村文庫」の内、淡窓関係の資料の概要が判明したこと等多くの成果が得られた。今年度も引き続き咸宜園関係史料の把握に努めるとともに、特に広瀬淡窓が著述した刊行物の諸本調査を依頼する予定である。

### 2. 別府大学文化財研究所

廣瀬旭莊日記「日間瑣事備忘」に関する歴史地理的研究について

◇現地調査：岡山県津山市など（旭莊の訪問先などを現地確認した）

◇調査期間：2月10日～13日

◇調査目的：旭莊の日記を津山市既刊の刊行物に照らし、今後の作業方針の検討を行う。

◇事業内容：全国各地を遊歴した旭莊の事績を明らかにし、今後、出版物とする計画である。内容はセンター職員で企画・構成し、一部作業は別府大学に委託した。調査は旭莊の足跡を把握するため、主に日記「日間瑣事備忘」から旅の記述を抜き出し、紀行に関する部分を整理するとともに刊行に適したルートの選定や今後の出版物の内容および構成を検討した。次年度以降は大分県内の行程について現地踏査を実施し、旭莊紀行文の現代語訳した刊行物（一般向け）の執筆作業に取り組む予定である。

調査先	資料名	所蔵先分類	備考
長崎県立対馬 歴史民俗資料館	日田表廣瀬久兵衛・廣瀬源兵衛より豊後府内侯之御時 合申遣候書状写	宗家文庫	写真データ提出。
	日田町人博多屋三郎右衛門間合書之写	宗家文庫	
	於日田御陣屋手代役緒方口内應對之書付写	宗家文庫	
	『夜雨寮筆記』上・下（写本）	津江文書	通常非公開。
台湾大学図書館	『宜園百家詩』（初～三編）	貴重書	写真撮影禁止のため、書 誌データのみ。
	『遠思楼詩鈔』（初～三編）	貴重書	
	『梅墩詩鈔』（初～四編）	貴重書	
福岡市総合図書館	五月五日付空石（亀井昭陽）宛廣瀬淡窓書簡	文書資料室	データとして提出。
佐賀大学図書館	廣瀬旭莊書 扇面（二面）	市場文庫	写真データ提出。
	廣瀬青邨書 扇面（一面）	市場文庫	
	廣瀬旭莊書幅（一幅）	市場文庫	
	廣瀬林外書幅（一幅）	市場文庫	
	廣瀬青邨色紙（一枚）	市場文庫	
国文学 研究資料館	『迂言』（刊・半3冊）	広瀬青村文庫	写真撮影禁止のため、書 誌データのみ。
	『義府』（刊・大1冊、明治刷り）	広瀬青村文庫	
	『老子摘解』（刊・半2冊、明治刷り）	広瀬青村文庫	
	『自新録』・『再新録』（写・半2冊）	広瀬青村文庫	
	『遠思楼詩鈔』（刊・大1冊存、（坤））	広瀬青村文庫	
	『遠思楼詩鈔』（刊・半2冊）	広瀬青村文庫	
	「遠思楼文集」（写・半2冊）	広瀬青村文庫	
	「淡窓先生語録」（写・半1冊、稿本）	広瀬青村文庫	
	「淡窓詩話稿本」（写・半合1冊）	広瀬青村文庫	
	「淡窓先生手沢詩文題録・詩文雑録」（写・半2冊）	広瀬青村文庫	
	「新論」（写・半1冊、自筆稿本）	広瀬青村文庫	
	「淡窓先生手書克己篇」（写・半1冊、自筆）	広瀬青村文庫	
	久兵衛殿伸平殿江及相續候事（写・半1冊、自筆）	広瀬青村文庫	
	廣瀬淡窓（写・半1冊、濠田著か）	広瀬青村文庫	
	苓陽先生細楷李太白絶句抄（写・半1冊）	広瀬青村文庫	
	李白詩鈔（写・大1冊）	広瀬青村文庫	
	黄詩（写・半1冊）	広瀬青村文庫	
	他、月化1点、桃秋1点、旭莊9点、青邨56点、林 外22点、濠田15点、知人門人関係18点を確認。	広瀬青村文庫	
	廣瀬旭莊書簡(1通)(東海大学図書館北尾コレクション)		国文学研究資料館所蔵の 目録で確認。
国立国会図書館	広島県立歴史博物館蔵黄葉夕陽文庫目録		茶山の資料調査をすること により、淡窓・旭莊との 関連が分かる可能性あり。
慶應大学	昭陽先生文抄	斯道文庫	写真データ提出。

福岡大学委託調査成果一覧表

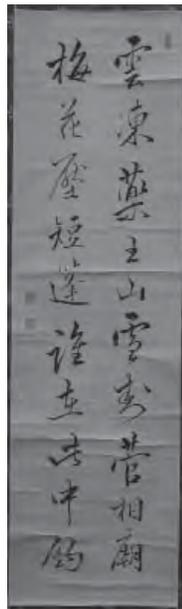
### Ⅲ．史料収集事業

#### 1. 購入史料

##### ①① 廣瀬淡窓書「雪後即事」書幅

- (1) 書幅。紙本墨書。
- (2) 初代塾主淡窓の漢詩（五言絶句二行書）。
- (3) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思樓詩鈔』に収録されている「雪後即事」である。落款に「簡」、「廉卿」の文字が見えるため、「建」と名乗る以前のものと考えられる。

(印)  
雲凍葉玉山、雪封菅相廟、  
梅花壓短篷、誰在此  
中釣(印)(印)



##### ③『淡窓六種』1巻～10巻

本資料は天保7年から安政5年までに刊行された淡窓の著述資料をまとめたものである。内容は「遠思樓詩鈔」初編・続編4冊。「析玄」1冊。「義府」1冊。「淡窓小品」2冊。「迂言」2冊。計10冊。5冊ずつそれぞれ秩に納められている。



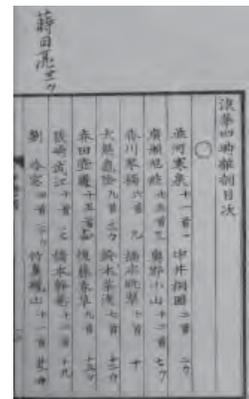
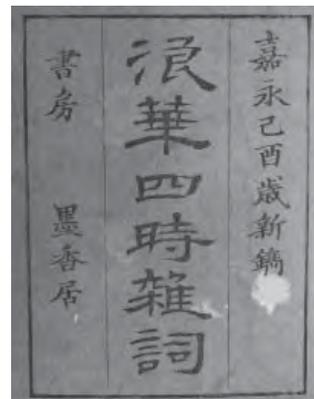
##### ②『遠思樓詩鈔』乾・坤、遠思樓詩鈔二編 乾・坤

本資料は江戸後期に刊行された廣瀬淡窓の漢詩集である。初編二冊、二編二冊。初編は天保八年（1837）刊。二編は嘉永二年（1849）刊。初編は青年期からの詩三二六首、二編は天保七年以降の詩二六二首を収めたものである。亀井昭陽、篠崎小竹、頼山陽らの題辭や評などを併録している。



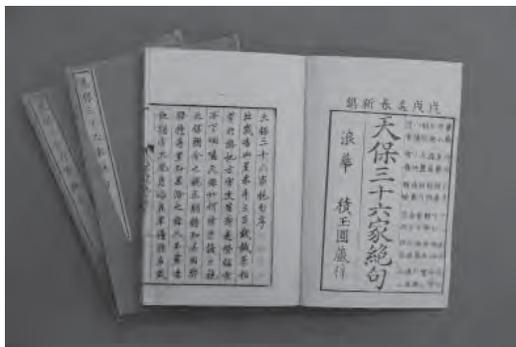
##### ④『浪華四時雜詞』

本資料は、嘉永2年己酉に刊行されたもので、並河寒泉・中井桐園・廣瀬旭莊・奥野小山・香川琴橋・橋本晩翠・大熊龜陰・鈴木茶溪・春田壺処・後藤春草・篠崎武江・橋本静庵（香坡）・劉冷窓・蒔田亮・竹鼻纜山・清水中洲・早野思齋・篠崎小竹・18人の漢詩184首が収録されている。内容は大坂をテーマにした漢詩で構成されており、咸宜園第二代塾主を務めた廣瀬旭莊の漢詩25首や咸宜園門下生の劉石舟の息子である劉冷窓（本人も門下生）の漢詩4首収録されている。



⑤『天保三十六家絶句』上・中・下

本資料は、天保9年に刊行されたもので、三上恒（静一）の編である。（三卷三冊）廣瀬淡窓を始めとして、当代の有名な文人である朝川善庵・大窪詩仏・菊地五山・梁川星巖・篠崎小竹等の漢詩が収録されている。（詩925首収録）



⑥『淡窓小品』乾・坤（嘉永2年己酉6月）

本資料は、旧稿である「淡窓題跋」あるいは「遠思楼小品」を安政2年廣瀬淡窓74歳の時に、養子の廣瀬林外が整理編纂し、「鼠壤余蔬」と題したものである。



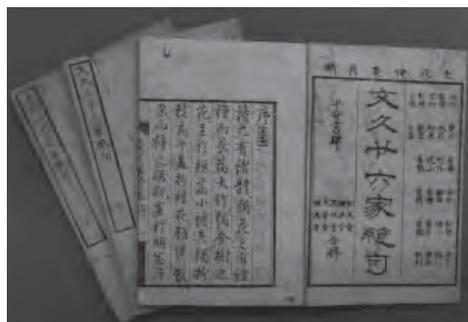
⑦『嘉永二十五家絶句』一・二・三・四（嘉永元年戊申仲夏）

本資料は、「嘉永二十五家絶句」四卷四冊 北尾墨香編 嘉永元年刊 名家20名の詩966首を収録。梁川星巖・貫名海屋・中島綜隠等。三巻には廣瀬淡窓の漢詩28首が、四巻には廣瀬旭荘の漢詩49首が収録されており、兄弟で掲載されている。



⑧『文久二十六家絶句』上・中・下（文久二年壬戌仲夏）

本資料は「文久二十六家絶句」三卷三冊 桜井成憲編 文久2年刊 詩618首収録。草場珮川・広瀬旭荘・大沼枕山・森春涛・藤井竹外他。淡窓や旭荘と交流のあった草場珮川や村上佛山、咸宜園門下生の劉石秋、柴秋邨、平野五岳などの漢詩も掲載されており、旭荘の漢詩は24首収録されている。

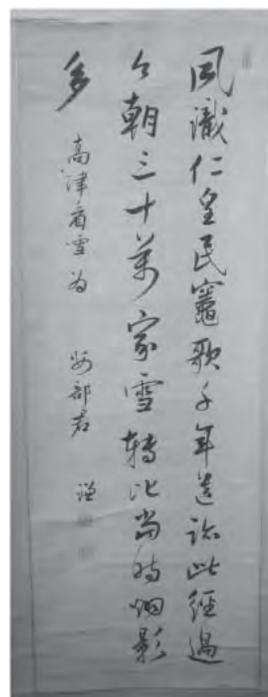


2. 寄贈史料

①廣瀬旭荘書 七言絶句 三行書「高津看雪」

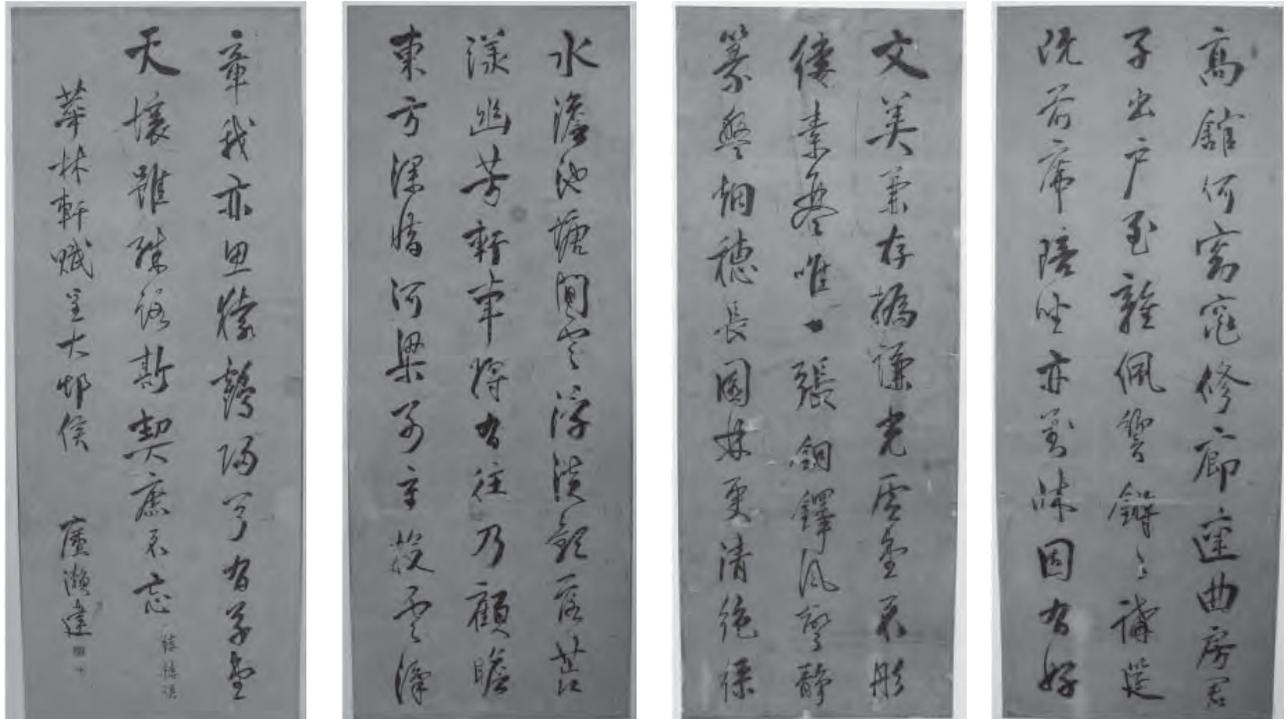
- (1) 書幅。紙本墨書。
- (2) 2代塾主旭荘の漢詩（七言絶句三行書）。
- (3) 廣瀬旭荘の漢詩集である『梅墩詩鈔』四編卷之一に収録されている「高津看雪」の書。

夙識仁皇民竈歌、  
 今朝三十萬家雪、  
 轉比當時烟影、  
 多、高津看雪為、  
 安部君 謙 (印) (印)



②廣瀬淡窓書 五言古詩「華林軒奉陪大村侯作」

- (1) 二曲一双屏風。紙本墨書。
- (2) 咸宜園塾主淡窓の漢詩（五言古詩）。
- (3) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』第二編上に収録されている「華林軒陪奉大村侯作」である。



(印)

高館何窈窕、修廊連曲房、君子出戶至、雜佩響鏘鏘、講筵既前席、陪坐亦對牀、固有好文美、兼存摛謙光、虛堂不彫縷、素琴唯一張、銅鐸風聲靜、篆盤烟穗長、園林更清絕、綠

水澹池塘、閑雲浮淡影、落澁漾幽芳、軒車將有往、乃顧瞻東方、深惜河梁別、重投雲漢章、我亦思猿鶴、歸兮有草堂、天壤雖殊路、斯契庶不忘、縷鏤誤

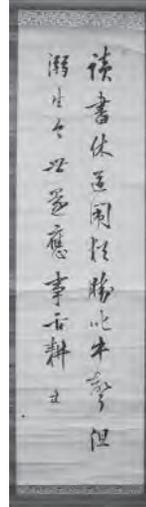
華林軒賦呈大村侯 廣瀬建 (印) (印)

### 3. 寄託史料

#### ①廣瀬淡窓書 五言絶句「示某生」

- (1) 書幅。紙本墨書。
- (2) 初代塾主淡窓の漢詩（五言絶句二行書）。
- (3) 廣瀬淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』第二編上に収録されている「示某生」である。雅号印に「苓陽」、落款に「廣瀬建印」などの文字が見える。

(印)  
讀書休道關、猶勝叱牛聲、沮  
湖生今世、還應事舌耕 建(印)(印)



#### ②廣瀬旭莊関連史料群

廣瀬旭莊の四男である敬四郎（仁四郎）家に伝わった旭莊関係史料である。旭莊の長男は咸宜園の第4代塾主となった廣瀬林外であるが、淡窓の養子となったため実質的に旭莊家を継いだのは敬四郎である。史料の中身は旭莊や交流のあった文人、また咸宜園門下生らの書幅なども含まれる。その他、明治期から現代に渡る書簡が中心である。現在、資料整理中のため、次年度以降の紀要で報告予定。

### 3. 寄贈図書

- ・足利学校書き下し 論語 高瀬享
- ・江戸の教育論 高瀬享
- ・大分県先哲叢書 廣瀬淡窓 資料集 書簡集成 大分県教育委員会
- ・「足利学校と足利氏の遺産」課題検討状況報告書 足利市教育委員会
- ・吟詠用・鑑賞用 廣瀬淡窓・旭莊名詩選択 財団法人廣瀬資料館
- ・中国古窯巡歴行記 木村貞雄
- ・霖雨 PHP 研究所
- ・関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（甲部） 関西大学アジア文化研究センター
- ・教育法規を学ぶ人のために 伊藤文一
- ・信頼を創造する公立学校の挑戦 壱岐丘の風がどのように吹いたか 伊藤文一
- ・ミッション発！えがおの種まきー教育ネットワークの輪ー風の巻 伊藤文一
- ・竹田市立歴史資料館研究報告書 平成 23 年度 竹田市
- ・竹田市立歴史資料館年報 第 11 号 竹田市
- ・敬天 第四十号 淡窓会
- ・天秤宮 36 原千里
- ・大阪府の登録文化財 活用と保存が個性あるまちをつくる 中川家住宅
- ・古事記編さん 1300 年記念「宣長ってどんな人？」 本居宣長記念館
- ・関谷学校研究 第 16 号 公益財団法人特別史跡旧関谷学校 顕彰保存会
- ・緒方洪庵生誕 200 年記念 大阪の除痘館 <改訂・増補版> 個人
- ・教育文化遺産をたずねる 山川出版社
- ・日本の誇り 103 人 元気のでる歴史人物講座 財団法人廣瀬資料館
- ・江戸女流文学の発見ー光ある身こそくるしき 思ひなれ 門 玲子
- ・江馬細香一化成期の女流詩人 門 玲子
- ・わが真葛物語ー江戸の女流思索者探訪 門 玲子
- ・季論 2 1 第 18 号 「廣瀬淡窓とその世界」 原 千里
- ・おおいたの歌碑を歩く 三代英輔
- ・大原八幡宮の米占い行事 株式会社 TEM 研究所
- ・嗚呼 時習館 ふれあい・いきいき漢学サロン
- ・泊園書院関係碑文調査報告書 泊園記念会
- ・大分県立歴史博物館年報 2011 大分県立歴史博物館
- ・平成 24 年度特別展 喫茶の世界ーお茶と日本文化 大分県立歴史博物館
- ・『天領日田』第三十・三十一合併号 「咸宜園教育再考」 天領日田を見直す会
- ・平成 24 年度特別展 『海の来嶋・山の久留嶋ー村上水軍から近世』 今治市村上水軍博物館
- ・村上水軍シンポジウム 村上水軍研究の最前線 レジュメ集 今治市村上水軍博物館

- ・学制 小論 長 太三
- ・西日本文化 通巻 460 号 「幕末最大の私塾・咸宜園と廣瀬淡窓」 原 千里
- ・適塾 第 45 号 大阪大学適塾記念センター
- ・赤ひげと小石川養生所肝煎の歴史 上巻 個人
- ・赤ひげと小石川養生所肝煎の歴史 下巻 個人
- ・君の夢 風になれ 雲に乗れ 伊藤 文一
- ・君の夢 未来へーマインド・セットを変えよ！！ー 伊藤 文一
- ・日本史の新たな見方、捉え方ー中世史からの提言 五味 文彦
- ・杉戸町史 近世資料編 杉戸町役場
- ・「大原幽学ー幕末の農村指導者ー」 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・大原幽学 復刻版 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・大原幽学遺跡「旧宅」半解体修理事業報告書 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・大原幽学記念館 10 年のあゆみ 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・大原幽学記念館報告 第一輯 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・義論集 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・国立歴史民俗博物館研究報告 第 115 集 旭市教育委員会（大原幽学記念館）
- ・草庵百話ー『肄業餘稿』ー 養父市教育委員会
- ・林良斎・池田草庵の往復書簡 養父市教育委員会
- ・吉田松陰と旅 海原 徹
- ・図説 江戸・幕末の教育力 洋泉社
- ・明治五年 「学制」ー通説の再検討ー 海原徹
- ・岡藩誕生～ 400 年前の国づくり 竹田市
- ・漢詩と人生 高瀬享
- ・漢詩をよむ 日本の漢詩（幕末～昭和） 高瀬享
- ・「近世日本の教育遺産」実施報告書 水戸市
- ・詩経 高瀬享
- ・竹田市立歴史民俗資料館研究報告書 平成 24 年度 竹田市
- ・幕末防長儒医の研究 高瀬享
- ・藩と県 日本各地の意外なつながり 高瀬享
- ・読むことの力 高瀬享

#### 4. 咸宜園関係参考文献

- ・『淡窓の申聞書 旭荘の御請書』 廣瀬貞治 1923
- ・『贈従五位廣瀬旭荘先生小傳』 廣瀬貞治 1924
- ・『池田人物誌』 下 稲束 猛、吉田鋭雄 太陽日報社 1924
- ・広瀬淡窓と広瀬旭荘『西南文運史論』 武藤長平 岡書院 1926
- ・『廣瀬家一門の光彩ー淡窓先生を中心としてー』 大分縣 日田郡教育會 1934
- ・教賢廣瀬淡窓『教育学研究』 3 巻 8 - 10 乙竹岩造 日本教育学会 1935
- ・淡窓先生と陰陽録『改修和語陰陽録』 袁了凡 四方文吉 1935
- ・教育家としての広瀬淡窓『日本諸学振興委員会研究報告』 第 1 篇 小西重直 文部省教学局 内閣印刷局 1937
- ・蛭雪事業鈔『伝記』 5-1 森銚三 伝記学会 1938
- ・広瀬淡窓を繰り返す『教育学論集』 第 3 輯 小西重直 日本教育学会 新紀元社 1944
- ・『廣瀬旭荘の講學と尊皇思想』『大阪の先賢と史蹟』 第三輯 長 壽吉 大阪出版堂 1944
- ・広瀬淡窓における敬天説の成立『人文社会科学研究報告』 1 井上源吾 長崎大学学芸学部 1951
- ・広瀬淡窓に於ける内省と実践について『西日本史学』 11 井上源吾 西日本史学会 1952
- ・遠思樓詩鈔〔広瀬淡窓〕ー近世詩抄その 1『学苑』 152 吉田澄夫 昭和女子大学近代文化研究所 1953
- ・広瀬淡窓の思想についての諸説批判『人文社会科学研究報告』 3 井上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』 3 井上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』 4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育思想、とくに訓育とその方法について『人文社会科学研究報告』 4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育管見、とくに教授の方法について『人文社会科学研究報告』 4 井上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の経済思想『經濟學論究』 8-3 東晋太郎 関西学院大学 1954
- ・広瀬淡窓の禍福応報論について『支那学研究』 12 工藤豊彦 広島支那学会 1955
- ・広瀬淡窓の老荘学について『大分大学学芸学部研究紀要』 4 工藤豊彦 大分大学学芸学部 1955
- ・日向と咸宜園『宮崎大学学芸学部研究時報』 第 1 巻 第 3 号 黒江一郎 宮崎大学学芸学部 1957
- ・黒江一郎「『日間瑣事備忘録』に見える旭荘の詩名と二三の日向人」『宮崎大学学芸学部紀要』 第 4 号 宮崎大学学芸学部 1958
- ・武谷祐之著「南柯一夢」『九州文化史研究所紀要』 10 井上忠 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1963
- ・「迂言」小考ーその学制を中心として『弘前大学人文社会』 第 28 号 教育・心理学篇 前野喜代治 弘前大学人文社会学会 1963
- ・広瀬淡窓の教育精神『芸文』 第 4 巻 第 1 号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1963
- ・『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』 廣瀬八賢顕彰会 1965
- ・大谷篤蔵「広瀬旭荘の「追思録」」『文学』 34 巻 3 号 岩波書店 1966
- ・広瀬淡窓の詩論『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』 17 松下忠 和歌山大学教育学部 1967
- ・咸宜園覚書ー九州紀行より『斯文』 47 新田大作 欺文会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-1-『芸文』 第 7 巻 2 号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-2-『芸文』 第 8 巻 1 号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1967

- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-3-『芸文』第8巻2号 大久保勇市 近畿大学文科学会 1968
- ・広瀬淡窓と高野長英『教育学雑誌』2号 松月秀雄 日本大学教育学会 1968
- ・萬善簿 広瀬淡窓先生の修練ぶり『先覚と共に』第1集 青木繁 農林叢書刊行会 1968
- ・淡窓・長英をかぼう『日田文化』第11号 中島市三郎 日田市教育委員会 1968
- ・広瀬淡窓門下萍華上人の話『日田文化』第12号 古川克己 日田市教育委員会 1969
- ・塩谷大四郎正義公の生誕二百年を迎えて『日田文化』第12号 中島市三郎 日田市教育委員会 1969
- ・広瀬淡窓の易理観—人間性研究の一環として〔付「義府（放言）」（天保12年稿）翻刻〕『近畿大学教養部研究紀要』1号 大久保勇市 近畿大学教養部 1969
- ・小倉落城〔慶応2年〕と日田・咸宜園—「林外日記」を中心として『九州大学教育学部紀要 教育学部門』15 井上義巳 九州大学教育学部 1969
- ・広瀬淡窓の思想と教育『日本歴史』第264号 青野春水 吉川弘文館 1970
- ・咸宜園をめぐる政治情勢—咸宜園と日田代官府との関係（近世日田とその周辺地域の総合的研究）『九州文化史研究所紀要』15 井上義巳 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1970
- ・咸宜園最後の講師勝屋明浜先生『大分県地方史』第56号 高倉芳男 大分県地方史研究会 1970
- ・広瀬淡窓と咸宜園『歴史残花』第4号 広瀬正雄他 時事通信社 1971
- ・豊後日田の広瀬家史料の調査によせて（研究余録）『日本歴史』第272号 杉本勲 吉川弘文館 1971
- ・咸宜園の財政—塾主の会計記録より見た『日本歴史』第276号 井上義巳 吉川弘文館 1971
- ・幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓『三田学会雑誌』64巻8号 島崎隆夫 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5月号 第276号 吉川弘文館 1971
- ・幕末経済論の一研究—経世家としての広瀬淡窓『三田学会雑誌』64巻8号 島崎隆夫 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・咸宜園と洋学『史淵』第105・106合輯 杉本勲 九州大学大学院人文科学研究院 1971
- ・井上義巳「咸宜園の財政」『日本歴史』5月号 第276号 吉川弘文館 1971
- ・巻端淳印「広瀬旭荘の来越と越中咸宜園の流れ」『富山商船高等専門学校研究集録』4 富山商船高等専門学校 1971
- ・広瀬淡窓の儒林評とその道統『近畿大学教養部研究紀要』4巻3号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
- ・万善簿のねらい〔広瀬淡窓〕『近畿大学教養部研究紀要』5巻2号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
- ・咸宜園入門者についての研究（青山学院創立100周年記念論文集）『青山学院大学文学部紀要』16号 井上義巳 青山学院大学文学部 1974
- ・田中佩刀「詩人廣瀬旭荘論」『明治大学教養論集』84号 明治大学教養論集刊行会 1974
- ・杉本勲「広瀬旭荘の海外認識と海防思想」『対外関係と政治文化』第三 政治文化 近世・近代編 森克己博士古稀記念会編 吉川弘文館 1974
- ・適材適育—広瀬淡窓とその教育思想『日本及日本人』1548号 松井康秀 J&J コーポレーション 1978
- ・広瀬淡窓について『東洋研究』49号（講演）広瀬正雄 大東文化大学東洋研究所 1978
- ・小石元瑞と広瀬淡窓の書簡『混沌』第5号 平野翠 中尾松泉堂書店 1978
- ・近世教育思想研究 -3- 広瀬淡窓の教育思想『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』5巻4号 鹿毛基生 大分大学教育学部 1979
- ・幕末私塾の学規の研究—咸宜園を中心として『教育研究』23 関山邦宏 青山学院大学教育学会 1979
- ・近世私塾の就学形態—淡窓日録の分析を中心に『人文』27 海原徹 京都大学教養部 1981
- ・広瀬淡窓の敬天説とその教育方法理論『IBU 四天王寺国際仏教大学文学部紀要』14号 井内嘉美 四天王寺国際仏教大学 1981
- ・『日本人の道德思想』〔内容〕：福沢以前の「天」の思想について（広瀬淡窓）壺井秀生 文化総合出版 1981
- ・広瀬淡窓の不安—その自己と超越的なもの『季刊日本思想史』19号 高橋文博 ぺりかん社 1983
- ・『約言』の思想について『季刊日本思想史』19号 工藤豊彦 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の教育思想『季刊日本思想史』19号 関山邦宏 ぺりかん社 1983
- ・教育理念としての「敬天」—『約言』『約言或問』をめぐる『季刊日本思想史』19号 田中加代 ぺりかん社 1983
- ・天命と人情—広瀬淡窓の敬天論をめぐる『季刊日本思想史』19号 藤本雅彦 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の教育観—「教育」の語を中心に『季刊日本思想史』19号 藤原敬子 ぺりかん社 1983
- ・『万善簿』と『陰陽録』『季刊日本思想史』19号 古川哲史 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の倫理思想『倫理学紀要』1輯 黒住真 東京大学文学部 1984
- ・広瀬淡窓の生涯とその時代区分『日本女子大学紀要 文学部』34 田中加代 日本女子大学 1984
- ・近世塾の近代化過程の研究—咸宜園と慶応義塾を例として - 前 - 近世塾の諸問題『論叢』（玉川大学文学部紀要）25 多田建次 玉川大学 1984
- ・梅溪昇『緒方洪庵と適塾生』—「日間瑣事備忘」にみえる— 思文閣 1984
- ・近世塾の近代化過程の研究—咸宜園と慶応義塾を例として - 後 - 家塾から義塾へ『論叢』（玉川大学文学部紀要）26 多田建次 玉川大学 1985
- ・広瀬淡窓研究史試論『国学院雑誌』第86巻第5号 三澤勝己 国学院大学総合企画部 1985
- ・広瀬淡窓の社会思想—『迂言』を中心に—『邂逅』3号 山崎謹哉 岡山大学倫理学会 1985
- ・近世広島における私塾教育の研究—咸宜園の系譜—（1）『芸備地方史研究』150・151号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985
- ・近世広島における私塾教育の研究—咸宜園の系譜—（2）『芸備地方史研究』152号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985

- ・広瀬淡窓の府内紀行『大分県地方史』第120号  
甲斐素純 大分県地方史研究会 1985
- ・咸宜園の教育（伝統を活かした学校教育）『学校教育研究所年報』29 鹿毛基生 学校教育研究所 1985
- ・日本教師論 -6- 広瀬淡窓とその師道論  
『東北福祉大学紀要』10 小野禎一 東北福祉大学 1985
- ・日本教師論 -7- 広瀬淡窓とその師道観  
『東北福祉大学紀要』11 小野禎一 東北福祉大学 1986
- ・広瀬淡窓「読大学」について『東洋文化』復刊第56号 三澤勝己 無窮会 1986
- ・広瀬淡窓の学統と「読論語」『国史学』129 三澤勝己 国史学会 1986
- ・広瀬淡窓と九州の儒者 緒論—同時代の交流について—  
『大倉山論集』21 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
- ・広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考—諸儒との交遊を中心として—  
『大倉山論集』22 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
- ・広瀬淡窓の学問と思想について『天領日田』第7号 深町浩一郎 天領日田を見直す会 1987
- ・日本教師論 -8- 広瀬淡窓とその師道観『東北福祉大学紀要』12 小野禎一 東北福祉大学 1987
- ・亀井昭陽の教育思想における「運命観」および「天命観」について『日本女子大学紀要』38 田中加代 日本女子大学 1988
- ・広瀬淡窓・旭荘の漢詩指導例—松永顯徳甫著「草稿」について—  
『近世文芸』49 市場直次郎 日本近世文学会 1988
- ・「広瀬淡窓」井上義巳『國學院雑誌』89巻8号 三澤勝己 国學院大學総合企画部 1988
- ・晨霜如雪—広瀬淡窓「休道」詩の成立について—  
『皇学館論叢』21巻1号 鬼頭有一 皇学館大学人文学会 1988
- ・広瀬淡窓「万善簿」について『亜細亜大学教養部紀要』37 栗田充治 亜細亜大学教養部 1988
- ・市場直次郎「廣瀬淡窓・旭荘の漢詩指導例」『近世文芸』49—  
松永顯徳甫著「草稿」について— 日本近世文学会 1988
- ・衣笠安喜編「江戸の学問—よみ・かき・そろばんまで」  
『週刊朝日 百科日本の歴史九—近世から近代へ③』朝日新聞社 1988
- ・日本教育史学の確立過程下における広瀬淡窓関係記事—  
明治期、師範学校用教育史教科書を中心に—『人間研究』26 天野晴子 日本女子大学教育学科の会 1990
- ・遠山荷塘と広瀬淡窓『明治大学教養論集』232 徳田武 明治大学教養論集刊行会 1990
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（二）—  
諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集二二号』大倉精神文化研究所 1990
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（三）—  
諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集二二号』大倉精神文化研究所 1990
- ・徳田武「広瀬旭荘の耶馬溪行」詩人 廣瀬旭荘伝—  
『江戸文学』6 ぺりかん社 1991
- ・徳田武「亀井昭陽塾再入門」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』7 ぺりかん社 1991
- ・徳田武「広瀬旭荘の亀井昭陽塾入門」『明治大学教養論集』242号 明治大学教養論集刊行会 1991
- ・岡村繁『広瀬淡窓・広瀬旭荘』江戸詩人選集九 岩波書店 1991
- ・徳田武「追補 広瀬旭荘と遠山荷塘また旭荘と原采蘋」  
詩人 廣瀬旭荘伝『江戸文学』8 ぺりかん社 1992
- ・徳田武「論詩」の成立」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』9 ぺりかん社 1992
- ・広瀬淡窓私新抄 -1-『帝塚山大学教養学部紀要』35 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
- ・広瀬淡窓私新抄 (2)『帝塚山大学教養学部紀要』36 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
- ・徳田武「昭陽塾退塾」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』10 ぺりかん社 1993
- ・徳田武「樺島石梁訪問」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』11 ぺりかん社 1993
- ・福島理子「儒者の怪奇趣味—広瀬旭荘『丑時咀』をめぐる—」  
『江戸小説と漢文学』和漢比較文学叢書第十七巻 和漢比較文学会編 汲古書院 1993
- ・三沢勝己「広瀬淡窓・広瀬旭荘と洋学 序論」『明治聖徳記念学会紀要』復刊八号 明治聖徳記念学会 1993
- ・広瀬淡窓私新抄 (3)『帝塚山大学教養学部紀要』38 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
- ・広瀬淡窓私新抄 (4)『帝塚山大学教養学部紀要』39 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
- ・広瀬淡窓と「徒然草」『大倉山論集』第36輯 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1994
- ・咸宜園—広瀬淡窓の私塾教育が今日に与える意味—  
『家庭科学』61巻3号《特集》21世紀の教育制度を考える -1- 田中加代 日本女子社会教育会家庭科学研究所 1994
- ・徳田武「旭荘」の命名」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』12 ぺりかん社 1994
- ・徳田武「廉塾」行」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』13 ぺりかん社 1994
- ・徳田武「未紹介広瀬旭荘詩文解説（一）」『明治大学教養論集』268号 明治大学教養論集刊行会 1994
- ・小堀一正「幕末大阪文人社会の動向—広瀬旭荘と藤井藍田・河野鉄兜らを中心として」『大阪の歴史と文化』和泉書院 1994
- ・廣瀬尚美『廣瀬資料館図録 天領日田の掛屋』源流社 1994
- ・新井白石と広瀬淡窓『季刊日本思想史』46《特集》新井白石 三澤勝己 日本思想史懇話会 ぺりかん社 1995
- ・山陽手批淡窓詩稿『日田文化』第38号 田中晃 日田市教育委員会 1995
- ・広瀬淡窓の自然観について『中国哲学論集』21 杜栄 九州大学中国哲学研究会 1995
- ・徳田武「廉塾」行（二）」詩人 廣瀬旭荘伝  
『江戸文学』14 ぺりかん社 1995
- ・徳田武「未紹介広瀬旭荘詩文解説（二）」『明治大学教養論集』279号 明治大学教養論集刊行会 1995
- ・中村幸彦、井上敏幸『広瀬先賢文庫目録』廣瀬先賢文庫 1995
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考（四）—  
諸儒との交遊を中心として—『大倉山論集』三七号 大倉精神文化研究所 1995
- ・寛政の教化政策と地方儒学『東洋研究』121 西江錦史郎 大東文化大学東洋研究所 1996

- ・徳田武「「廉塾」行(三)」詩人広瀬旭荘伝『江戸文学』15 ぺりかん社 1996
- ・徳田武「未紹介広瀬旭荘書牘・資料紹介一文久三年四、五月一」『明治大学教養論集』286号 明治大学教養論集刊行会 1996
- ・徳田武「「廉塾」行(四)」詩人広瀬旭荘伝『江戸文学』17 ぺりかん社 1997
- ・西江錦史郎「広瀬旭荘研究(1)系譜と活動」『東洋研究』126号 大東文化大学 東洋研究所 1997
- ・岡村繁「広瀬旭荘の遺稿とその推敲課程〔含略年譜〕」先儒祭記念公演『斯文』106号 斯文会 1997
- ・広瀬淡窓と袁枚『学林』28・29 肥田明啓 中国芸文研究会 1998
- ・淡窓詩話の文章(特集 中世・近世)『解釈』44巻3号 大木正義 解釈学会 1998
- ・三沢勝己「広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考(五)一儒との交遊を中心として一」『大倉山論集』四二号 大倉精神文化研究所 1998
- ・田中加代著「広瀬淡窓の研究」『大倉山論集』44 三沢勝己 大蔵精神文化研究所 1999
- ・広瀬淡窓の詩論とその源流一清代前期の詩論の受容を中心として一『学林』30 肥田明啓 中国芸文研究所 1999
- ・咸宜園における漢詩講釈の展開『教育学研究紀要』45巻1号 山本佐貴 中国四国教育学会 1999
- ・私塾 本立書院(東宜園)(特集 明治十年代の江戸)『江戸文学』21 宮崎修多 ぺりかん社 1999
- ・江戸時代の学習機会 - その2『九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』4 Nazario Bustos 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター 1999
- ・「松下筑陰伝攷(上)」『語文研究』86・87号 高橋昌彦 九州大学国語国文学会 1999
- ・徳田武「未紹介広瀬旭荘詩文解説(三)」『明治大学教養論集』322号 明治大学教養論集刊行会 1999
- ・大野修作『広瀬旭荘』日本漢詩人選集16 研文出版 1999
- ・咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察『大分県地方史』179号 山本佐貴 大分県地方史研究会 2000
- ・広瀬淡窓と老子思想『中国哲学論集』26 杜 栄九州大学 中国哲学研究会 2000
- ・廣瀬淡窓の詩論と咸宜園教育との関連『立命館文學』563号 肥田明啓 立命館大学人文学会 2000
- ・女流漢詩人を探す『機』No109 高橋昌彦 藤原書店 2000
- ・大野修作「『東瀛詩選』の成立と広瀬旭荘」『女子大國文』第二百二十七号 京都女子大学国文学会 2000
- ・広瀬淡窓の経世論小考『日本経済思想史研究』(1) 三沢 勝己 日本経済思想史研究会 2001
- ・月野文子「広瀬旭荘の「夜過二州橋一書二欄目一」詩:成立事情とその推敲の態度をめぐって」『文芸と思想』65 福岡女子大学文学部 2001年
- ・月野文子「広瀬旭荘の題画詩「題春川釣魚図」の手法:楽府詩「枯魚過河泣」と『莊子』寓喩」『文芸と思想』66 福岡女子大学文学部 2002
- ・西村富美子「〈論文〉広瀬旭荘生涯と作品:波華大阪の地」『紀要 言語・文学編』34 愛知県立大学外国語学部 2002
- ・大野修作「広瀬旭荘と山梨稲川一『東瀛詩選』中の詩人たち一」『女子大國文 第三百一十一号』京都女子大学国文学会 2002
- ・近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借一 一塾生を中心に『長崎大学教育学部社会科学論叢』63号 鈴木理恵 長崎大学教育学部 2003
- ・日本の経済発展と学校教育(1)『鹿児島大学教育学部教育実践センター研究紀要論文』13 神田嘉延 鹿児島大学教育学部 2003
- ・徳田武「広瀬旭荘の普通寺参詣」『明治大学教養論集』362号 明治大学教養論集刊行会 2003
- ・月野文子「広瀬旭荘の天保十五年正月詩の周辺:「肅舎」取得と江戸開塾」『文芸と思想』67 福岡女子大学文学部 2003
- ・広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1一江戸詩壇史における位置づけ(1)『茨城大学教育学部紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
- ・広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1一江戸詩壇史における位置づけ(2)『茨城大学教育学部紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
- ・日本漢詩人紀行(1)淡窓の筑遊『創文』469号 林田慎之助 創文社 2004
- ・丹波における明治維新前後 広瀬淡窓の思想『丹波』6号《特集》幕末維新を馳せた丹波の人々 奥村覚 丹波史談会 2004
- ・咸宜園の漢籍収集と塾生の閲覧『漢籍』12号 三澤勝己 漢籍研究会 2004
- ・亀田一邦「嘉永4年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に関する一考察」『山口県地方史研究』91 山口県地方史学会 2004
- ・『堺市博物館 書の世界一山下是臣コレクション一』堺市博物館 2004
- ・広瀬淡窓「歳暮」による授業実践報告『漢文教育』30 尾本優輝 広島漢文教育研究会 中国中世文学会 2005
- ・漢文教材としての広瀬淡窓一『桂林荘雜詠示諸生』教材化の背景一『二松学舎大学人文論叢』75号 小金澤豊 二松学舎大学人文学会 2005
- ・近世都市における「知」の空間と場一豊後国日田咸宜園を中心に一『年報都市史研究』13号 岩本馨 山川出版社 2005
- ・淡窓漢文日記・懐舊樓筆記にみる 天保の大飢饉『日田文化』第47号 野田高巳 日田市教育委員会 2005
- ・島岡成治「9286 広瀬旭荘における住まいと都市の場所について(建築論・場所、建築歴史・意匠)」『学術講演梗概集』日本建築学会 2005
- ・亀田一邦「広瀬旭荘晩年の赤閑厄難について『日間瑣事備忘録』に見る婚家当主清水麻之丞との粉擾顛末」『地域文化研究』20 梅光学院大学地域文化研究所 2005
- ・広瀬淡窓の「教育ノ術」礼楽刑政による解釈〔含 論評〕『日本教育史研究』25号 齋藤尚志 日本教育史研究会 2006
- ・廣瀬淡窓と陶淵明『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』林田慎之助 松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會 2006

- ・島岡成治「813 広瀬旭荘の大阪の住まいと都市へのまなざし（歴史・意匠）」『日本建築学会研究報告』日本建築学会 2006
- ・郭穎「『東瀛詩選』における俞樾の修改—広瀬旭荘の『梅墩詩鈔』との比較を通して—」『中国学研究論集』第十六号 広島中国文学会 2006
- ・咸宜園と白鹿洞書院—日中私塾の比較研究—『國學院大学大学院紀要』39号 朱 玲莉 國學院大学大学院 2008
- ・広瀬淡窓、李白への挑戦「月下独酌」論『文学』10巻3号 小財陽平 岩波書店 2009
- ・「幕末明治期の咸宜園と真宗僧」『淡窓研究会会報』川邊雄大 淡窓研究会 2009
- ・日向薬事始め（その5）日向出身の緒方洪庵・適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々『九州保健福祉大学研究紀要』10号 山本郁男・井本真澄・宇佐見則行ほか 九州保健福祉大学研究紀要委員会 九州保健福祉大学 2009
- ・広瀬淡窓における学校と社会『日本文化論叢』17号 前田勉 愛知教育大学日本文化研究室 2009
- ・休道詩鑑賞への一考『敬天』第37号 岩沢光夫 淡窓会 2009
- ・『近世文芸研究と評論』75号 [内容]: 広瀬淡窓と頼山陽 文化五年の交流を通して 黒川桃子 近世文芸研究と評論の会 早稲田大学文学部 2009
- ・広瀬淡窓の教育『杵築史談会』藤井準一郎 久米忠臣 杵築史談会 2009
- ・大野雅之「大給府内藩と廣瀬家 近説と旭荘の関係を中心に」『資料館研究紀要』14 大分県立先哲資料館 2009
- ・亀田一邦「高杉晋作の主治医 石田精一について—変革期草医の「雅」と「侠」—」『日本医史学雑誌』第55巻 第4号 日本医史学会 2009
- ・梅溪昇「広瀬旭荘と池田」『池田郷土研究』11号 池田郷土史学会 2009
- ・『託明寺縁起略伝記』 託明寺 2009
- ・『続池田学講座—人物編—新たに知る池田 改めて出会う池田—』 池田市、池田市教育委員会 2009
- ・廣瀬淡窓の詩風について—その日本化の一側面を中心に—『アジア文化交流研究』第5号別冊《特集》幕末明治期における日本文学・歴史・思想・藝術の諸相 朱 秋而 関西大学アジア文化交流研究センター 2010
- ・広瀬淡窓と陸游詩—淡窓詩の源流—『江戸風雅』第2号 黒川桃子 江戸風雅の会 2010
- ・広瀬旭荘の足利学校行『江戸風雅』第3号 徳田武 江戸風雅の会 2010
- ・苔を二広の墓碑と合原松子の墓とに掃ふ『江戸風雅』第3号 池澤一郎 江戸風雅の会 2010
- ・広瀬旭荘と『水滸伝』『江戸風雅』第3号 徳田武・土屋和之 江戸風雅の会 2010
- ・大野雅之「淡窓先生手書克己篇」にみる廣瀬淡窓の苦悩 末弟旭荘のこと『史料館研究紀要』15 大分県先哲資料館 2010
- ・川崎理恵「近世社会における暦占の実態 広瀬旭荘と古谷道庵を素材に」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編9』京都女子大学大学院文学研究科史学専攻 2010
- ・亀田一邦『幕末防長儒医の研究』知泉書館 2010
- ・神戸輝夫「旭荘の漢文日記」『潮 一月号』潮出版社 2011
- ・合山林太郎「幕末京撰の漢詩壇 広瀬旭荘・河野鉄兜・柴秋村を中心に（特集 近世韻文の力）」『日本文学』60巻10号 日本文学協会 2011
- ・黒川桃子「亀井少榊小伝—父昭陽の詩文を通して—（上）」『江戸風雅 第五号』江戸風雅の会 2011
- ・徳田武「囲記事 広瀬林外と川路聖謨・安井息軒・大沼枕山」『江戸風雅』第五号 江戸風雅の会 2011
- ・『廣瀬淡窓の生家—廣瀬家の歴史と業績—』日田市教育委員会 2012
- ・『吹田市立博物館 大庄屋 中西家名品展』吹田市教育委員会 2012

## IV . 教育 顕彰 事業

### 4. 咸宜園教育顕彰事業

#### ■ 顕彰事業

① 咸宜園教育顕彰事業（「咸宜園の日」関連行事）

□ 募集期間：平成 24 年 6 月 1 日から 11 月 1 日

◇ 募集件数：学術研究部門（6 件）  
教育文化部門（2 件）

◇ 表彰式・基調講演・研究発表  
：平成 25 年 2 月 23 日（土）

◇ 会場：パトリア日田（小ホール）

◇ 基調講演：

「廣瀬淡窓の教育実践についてー君の夢 未来へー」  
福岡女学院大学教授 伊藤 文一 氏

◇ 研究発表：「下関開業時代における岡研介の事績及び寄萬背景に関する考察」

ー本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開ー

学術研究部門 優秀賞 亀田 一邦 氏

【学術研究部門】優秀賞 1 名

賞名	名前	所属	論文名
優秀賞	亀田 一邦 かめだ かずくに	九州国際大学 客員教授	下関開業時代における岡研介の事績及び寄萬背景に関する考察ー本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開ー
評価	咸宜園門下生・岡研介（後に鳴滝塾の塾頭）の卒業後の活躍ぶりを明らかにしたもので、独自の史料を発掘するなど先行研究にはあまり見られない斬新性があったことから評価に値する。		

② 淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～

学校の取組みを広く市民等知ってもらうことを目的とし、咸宜園や咸宜園教育等について関心をもってもらうきっかけとする。

◇ 期間：平成 25 年 2 月 17 日～3 月 3 日

◇ 展示場所：パトリア日田（ギャラリー）

◇ 参加校：小学校 7 校、中学校 2 校

③ その他

咸宜園教育遺産世界遺産登録推進 小学生作文コンクールの実施

◇ 主催：豆田地区振興協議会

◇ 作文テーマ

① 咸宜園と廣瀬淡窓に関すること

② 咸宜園で学んだこと

◇ 応募件数 31 件

最優秀賞 「廣瀬淡窓先生の教え」

優秀賞 「咸宜園の係」、「淡窓先生と咸宜園に学ぶこと」、「淡窓先生から学んでいること」



亀田 一邦 氏



作文コンクール受賞者



福岡女学院大学教授 伊藤 文一 氏

## V．世界文化遺産登録推進の取り組み

### (1) 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なものである。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあり、人類の残酷な歴史を刻むものや戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれている。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものである。

○世界遺産リストに記載されるまで

- ①条約締約国の推薦：締約国の政府が国内の世界遺産候補の中から、条件の揃ったものを世界遺産委員会に推薦。（各国の世界遺産暫定一覧表記載の資産から推薦される。）世界遺産委員会の事務局としての機能はユネスコ世界遺産センターが担っている。
- ②専門機関による調査：世界遺産委員会の依頼により、文化遺産はICOMOS、自然遺産はIUCNが候補地の評価調査を行う。
- ③世界遺産委員会での審議：ICOMOSやIUCNなどによる評価調査報告を受け、毎年1回開催される世界遺産委員会において、世界遺産リストへの記載物件の可否を決定する。

### (2) 事業の概要

日田市では平成22年度に世界遺産推進室を開設し、茨城県水戸市の弘道館及び偕楽園、栃木県足利市の足利学校と連携し、「近世日本の教育遺産群」という主題で咸宜園の世界文化遺産登録を目指して取り組んでいる。

世界文化遺産として登録されるには、ユネスコが定めた基準である「顕著で普遍的な価値」を証明する必要がある。そこで、「近世日本の教育遺産群」が持つ「顕著で普遍的な価値」を証明するために、世界遺産推進室では日田市世界遺産登録検討委員会の指導の下、咸宜園に関する学術的な調査研究を咸宜園教育研究センターと両輪となって作業を進めている。また、この取り組みは行政のみで進められるものではなく、市民の機運の醸成と協力が必要となってくる。市民と行政とが一体となって取り組むことが重要となることから、調査研究の結果を公表し、情報を共有することで普及啓発につなげ、一人でも多くの市民の協力を得ることができるよう取り組まなければならない。

○調査研究

平成22年度から進めてきた調査研究の成果を、平成24年度に報告書として刊行した。この報告書は水戸市や足利市と共同によるものではなく、日田市の資産（私塾・咸宜園、豆田町）について、世界遺産登録を目指す視点でまとめたものである。「本編」と別府大学文化財研究所と共に「淡窓・咸宜園の放学・遊山」についての調査結果をまとめた「資料編」がある。他に、世界遺産登録に向けて必要となる構成資産を保護するための「保存管理計画」や「緩衝地帯」（バッファ・ゾーン）の方針検討のため、岡山理科大学と共に調査を進めた。

#### 第1章 私塾「咸宜園」の調査研究

- 第1節 私塾「咸宜園」の変遷
- 第2節 廣瀬淡窓の人物と学問・思想
- 第3節 咸宜園の教育内容
  - (1)「咸宜園」以前の日田の教育環境
  - (2)「咸宜園」教育の特色
  - (3)月旦評と学則三科
  - (4)全人教育
  - (5)門下生の内訳
  - (6)塾外教育
- 第4節 咸宜園の規約と塾則
- 第5節 咸宜園の経営
- 第6節 咸宜園の範囲と建造物
- 第7節 門下生追跡調査
- 第8節 咸宜園教育の普及・拡大
- まとめ 近世日本の私塾

#### 第2章 咸宜園と豆田町

- 第1節 関連資産の整理
  - 第2節 国指定等文化財
  - 第3節 歴史文化遺産
  - まとめ 咸宜園と学びの町・豆田
- #### 第3章 類似資産との比較研究
- 第1節 国内教育遺産との比較研究  
(国内私塾一覧表)
  - 第2節 国外教育遺産との比較研究
  - まとめ 東アジアの書院・私塾
- #### 第4章 世界文化遺産登録の取り組みに向けて
- 第1節 構成資産の検討  
—顕著で普遍的な価値の証明—
  - 第2節 保存管理計画の方針

○調査研究報告書（資料編）の内容

第1章 淡窓・咸宜園の放學・遊山と寺社参詣

- 1 北部・花月川以北
- 2 日田盆地東部 城内・田島地区とその周辺
- 3 盆地西部
- 4 隈川と隈町
- 5 高瀬・石井地区
- 6 その他日田周辺

第2章 淡窓・咸宜園の「放學・遊山」と寺社参詣関係記事集成

（史料1）淡窓・咸宜園の「放學・遊山」と寺社参詣—『懐旧樓筆記』及び「日記」より

序 淡窓・幼時の楽しみ

- 1 北部・花月川以北の地区
- 2 日田盆地東部 城内・田島地区とその周辺
- 3 盆地西部
- 4 隈・高瀬・石井区
- 5 その他周辺地区

（史料2）淡窓・咸宜園の「放學」記事集成—「日記」より

第3章 咸宜園教育関連史跡等調査カード（放學・遊山）



日田市世界遺産調査報告書

○普及啓発

①世界遺産登録推進講演会

市民の理解と協力、機運の醸成を図るため2回の講座を開催した。

【第1回】講師にリチャード・ルビンジャー氏（米国インディアナ大学教授）を招き、西洋から見た近世日本の教育について、自身の日本における在学中の体験談などを交えて分かりやすい講演をしていただいた。

日 時：平成24年11月20日（火） 19：00開演

会 場：パトリア日田 小ホール

講 師：リチャード・ルビンジャー氏

演 題：「西洋から見た近世日本の教育の特徴」

参加者：130名



講師：リチャード・ルビンジャー氏

【第2回】講師に五味文彦氏（東京大学名誉教授・放送大学教授）を招き、咸宜園が世界遺産としてどのような価値があるのか、広く歴史の見方などについての講演をいただいた。

日 時：平成25年2月7日（木） 19：00開演

会 場：パトリア日田 小ホール

講 師：五味文彦氏

演 題：「世界遺産としての咸宜園」

参加者：110名



講師：五味文彦氏

## ②市民協同の取組み（咸宜園平成門下生之会の活動）

世界遺産登録を目指す取組みは市民と行政とが一体となって取組むことが重要となることから、市民による応援団体「咸宜園平成門下生之会」が平成23年度に発足した。この団体は廣瀬淡窓や咸宜園について学習すると同時に、世界遺産登録の取組みを市民の側から支援する活動を中心とする。今年度は咸宜園に関する講座や国内の暫定リスト一覧表記載資産等の視察研修を中心に活動した。（3ページ参照）

## ③情報発信

市ホームページの更新や広報紙の活用、各種イベント会場において世界遺産の取組みを図示したパネル展示を実施し情報発信に努めた。

## （3） 他市との連携

茨城県水戸市、栃木県足利市と連携し、各市の事務局による事務連絡会議と検討委員による合同学術会議を開催した。「検討状況中間報告書」作成のため、「顕著で普遍的な価値の証明」について協議したほか、事務連絡会議では、協議会設立に向けて調整を図った。

### ①事務連絡会議の開催

○平成24年5月27日（都内）

協議内容

- （1）取組み状況について
- （2）連携組織の設置等について
- （3）その他

○平成24年8月9日（都内）

協議内容

- （1）連携組織の設置等について
- （2）平成25年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算（案）について
- （3）関係自治体による合同学術会議の開催について
- （4）その他

○平成24年10月17日（都内）

協議内容

- （1）協議会の規約・規程（案）について
- （2）平成24年度協議会の事業計画・予算（案）について
- （3）平成25年度協議会の事業計画・予算（案）について
- （4）その他

### ②合同学術会議の開催

○平成24年5月27日（都内）

協議内容

- （1）取組み状況について
- （2）連携組織の設置等について
- （3）比較研究等について
- （4）その他

○平成24年8月22日（都内）※国際シンポジウム実行委員会設立会議を同日開催

協議内容

- （1）世界遺産暫定一覧表記載資産候補検討状況報告（案）について
- （2）今後の進め方について
- （3）その他

○平成24年10月2日（都内）

協議内容

- （1）世界遺産暫定一覧表記載資産候補検討状況報告（案）について
- （2）これまでの意見等を受けての修正の方向性（案）について
- （3）専門部会の担当事項と部会委員の構成（案）について



国際シンポジウム実行委員会設立会議

○平成24年10月2日（都内）

協議内容

- （1）世界遺産暫定一覧表記載資産候補検討状況報告（案）について
- （2）これまでの意見等を受けての修正の方向性（案）について
- （3）専門部会の担当事項と部会委員の構成（案）について

#### (4) 教育遺産世界遺産登録推進協議会

##### ①設立総会

「近世日本の教育遺産群」として、咸宜園と共に世界遺産登録を目指す茨城県水戸市の藩校「弘道館」と栃木県足利市の「足利学校」。この関係三市は、相互の連絡調整の円滑化及び一体的な事業の展開を図ることを目的として、平成24年11月に「教育遺産世界遺産登録推進協議会」を設立した。協議会は、市長と教育委員会教育長、学識経験者（商工会議所会頭、専門家、県の担当課長）を委員とし、国内外の教育遺産に係る調査研究、教育遺産を活用した普及啓発に関することなどを所掌する。

○平成24年11月18日（水戸市）

議案第1号 教育遺産世界遺産登録推進協議会規約について

議案第2号 平成24年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算について

世界遺産登録を目指す3市長共同声明の採択

##### ②国際シンポジウムの開催

11月18日に教育遺産世界遺産登録推進協議会の設立にあわせ、水戸市が事務局となり、アメリカと韓国から専門家（研究者）を招き「国際シンポジウム」が開催された。日田市からは吾妻重二委員が参加。この国際シンポジウムは国内外及び文化庁へのPRとして、継続していく事業と位置づけている

日時：平成24年11月18日（日曜日）午後1時～午後5時

会場：水戸芸術館 ACM 劇場

タイトル「近世日本の教育遺産」

プログラム

・午後1時～1時20分 開会・主催者あいさつ

・講演 午後1時20分～午後3時50分

「世界遺産の現状と課題」 近藤 誠一氏（文化庁長官）

「西洋からみた近世日本の教育の特徴」 リチャード・ルビンジャー氏（インディアナ大学教授）

「東アジアにおける教育遺産の様相」 李 相海氏（イ・サンヘ）（成均館大学教授）

・パネルディスカッション 午後4時～午後5時

コーディネーター：日高 健一郎氏（筑波大学大学院教授）

パネリスト：リチャード・ルビンジャー氏、李 相海氏、五味 文彦氏（放送大学教授）

橋本 昭彦氏（国立教育政策研究所総括研究官）、吾妻 重二氏（関西大学教授）

コメンテーター：稲葉 信子氏（筑波大学大学院教授）

参加者数 319人



3市の市長、教育長、商工会議所会頭ら



パネルディスカッションの様子

##### ③専門部会の開催

これまで関係自治体による合同学術会議で検討されてきた世界遺産登録に向けた調査・研究等については、専門部会A（登録推進戦略の検討）、専門部会B（国内外の教育遺産の評価）、専門部会C（保存管理方策の検討）に分かれ、各専門部会による検討・協議を重ねる。

○第1回専門部会B 平成24年12月7日（都内）

(1) 座長の選出について（橋本昭彦部会員を座長に選出）

(2) 検討状況報告書（素案）の修正の方向性（案）について

(3) 今後の進め方（案）について

(4) その他

- 第1回専門部会C 平成25年2月12日(都内)
- (1) 座長の選出について(江面嗣人部会員を座長に選出)
  - (2) 検討状況報告書(素案)の修正の方向性(案)について
  - (3) 今後の進め方(案)について
  - (4) その他

- 第1回専門部会A 平成25年3月28日(都内)
- (1) 座長の選出について(日高健一郎部会員を座長に選出)
  - (2) 検討状況報告書(素案)の修正の方向性(案)について
  - (3) 平成25年度国際シンポジウムの開催(案)について
  - (4) その他

- ④事務連絡会議の開催
- 平成25年2月12日(都内)
- 協議内容
- (1) 世界遺産登録推進国際シンポジウム「近世日本の教育遺産」実施報告書(案)について
  - (2) 教育遺産世界遺産登録推進協議会ホームページについて
  - (3) 今後の進め方(案)について
  - (4) その他

- 平成25年3月4日(都内)
- 協議内容
- (1) 世界遺産登録推進国際シンポジウム「近世日本の教育遺産」実施報告書(案)について
  - (2) 平成25年度国際シンポジウムの開催(案)について
  - (3) 平成25年度教育遺産世界遺産登録推進協議会事業計画・予算(案)について
  - (4) その他

**(5) 経過**

日田市においては、これまでの調査研究の成果をまとめた報告書の刊行に向けて、委員会を開催し、検討委員から意見をいただいた。また、連携している茨城県水戸市、栃木県足利市との間においては、各市の事務局による事務連絡会議と有識者による合同学術会議を開催した。11月の協議会設立後は、有識者による専門部会や事務連絡会議を重ねた。

日程	内容
平成24年5月27日	合同学術会議開催
8月9日	事務連絡会議開催
8月22日	合同学術会議・国際シンポジウム実行委員会設立総会開催
10月2日	合同学術会議開催
10月17日	事務連絡会議開催
11月18日	教育遺産世界遺産登録推進協議会設立総会・第1回協議会会議
11月18日	水戸市にて国際シンポジウム開催
11月20日	第1回日田市世界遺産登録推進講演会開催(講師:リチャード・ルビンジャー氏)
12月7日	第1回専門部会B開催
12月23日	第1回日田市世界遺産登録検討委員会
平成25年2月7日	第2回日田市世界遺産登録推進講演会開催(講師:五味文彦氏)
2月12日	第1回専門部会C開催
2月12日	足利市教育委員が日田市を行政視察
2月12日	水戸市議会が日田市を行政視察
2月15日	備前市議会が日田市を行政視察
2月17日	水戸市教育長が日田市を表敬訪問
2月28日	第2回日田市世界遺産登録検討委員会
3月4日	事務連絡会議開催
3月28日	第1回専門部会A開催

## Ⅵ . 利用状況・日誌抄

### (1) 利用状況 (平成24年4月1日～平成25年3月31日)

月	H24年度	市内小中学校	その他団体	一般・個人
4	1,302名	6団体 26名	16団体 243名	1,033名
5	2,007名	2団体 131名	20団体 325名	1,551名
6	894名	1団体 31名	17団体 230名	633名
7	1,131名	2団体 35名	19団体 502名	594名
8	1,397名	0団体 0名	16団体 299名	1,098名
9	1,732名	3団体 62名	26団体 456名	1,214名
10	1,868名	2団体 146名	37団体 671名	1,051名
11	2,509名	8団体 397名	40団体 790名	1,322名
12	856名	4団体 137名	13団体 210名	509名
1	914名	8団体 256名	13団体 206名	452名
2	1,417名	11団体 380名	18団体 306名	731名
3	1,730名	6団体 138名	17団体 341名	1,251名
計	17,757名	53団体 1,739名	252団体 4,579名	11,439名

※上記の他、パトリアでの開催事業（記念事業の講演会やシンポジウム、定期講座等）の参加人数は約 1,100 名を数える。

### (2) 日誌抄

#### 2012.4.1 常設展示 (～7.21)

- 4.12 「咸宜園研修」(東明中学校1年生)  
史跡咸宜園跡・咸宜園教育研究センター
- 5.18 平成24年度第1回咸宜園教育研究センター  
一運営委員会 咸宜園教育研究センター
- 6.14 名誉館長講座(年8回)(～11.22)  
咸宜園教育研究センター
- 7.24 第12回立志の道を歩こう(熊本県山鹿市)  
咸宜園教育研究センター
- 8.4 夏休みは咸宜園で学ぼう!  
咸宜園教育研究センター他(～8.5)
- 8.17 特別展「廣瀬旭荘—東遊 大坂 池田—」  
咸宜園教育研究センター(～9.30)
- 8.19 廣瀬旭荘没後150年記念事業講演会・鼎談  
パトリア日田(大ホール)
- 9.27 定期講座(年4回)(～10.27)  
パトリア日田スタジオ1
- 10.4 常設展(～2.12)  
咸宜園教育研究センター
- 10.14 咸宜園平成門下生講座(年5回)(～2.7)
- 10.19 特別展「廣瀬旭荘と池田・大坂」(～12.2)  
大阪府池田市立歴史民俗資料館  
(日田市協力事業)

#### 10.23 くまモン 咸宜園来訪

- 史跡咸宜園跡・咸宜園教育研究センター
- 12.23 平成24年度第1回咸宜園教育研究センター  
専門委員会 咸宜園教育研究センター
- 1.14 平成24年度第2回咸宜園教育研究センター  
専門委員会 咸宜園教育研究センター
- 1.28 平成24年度第2回咸宜園教育研究センター  
運営委員会 咸宜園教育研究センター
- 2.15 企画展「咸宜園とその門下生たち—第3代塾主  
廣瀬青邨と第8代塾主 廣瀬濠田—」  
咸宜園教育研究センター(～3.31)
- 2.17 淡窓先生に学ぶ～学校の取組み～  
パトリア日田(ギャラリー)(～3.3)
- 2.23 咸宜園教育顕彰事業(「咸宜園の日」)  
パトリア日田(小ホール)

## Ⅶ. 各種委員委員会・職員名簿

### (1) 咸宜園教育研究センター運営委員会委員名簿

任期：平成 24 年 6 月 1 日から 2 年間

選出資格	氏名	所属	
学識経験者	大神 信 證	日田市文化財保護審議会副会長	
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授	
	佐藤 誠一郎	淡窓会代表	
	武内 真 司	社団法人日田市観光協会理事	
	武内 正 英	(一財) 日田市公民館運営事業 団公民館館長会会長、咸宜公民館館長	
		廣瀬 貞 雄	財団法人廣瀬資料館理事長
	三宅 多加子	日田書道協会	
	合原 多賀雄	日田市教育委員会教育長	

### (2) 咸宜園教育研究センター専門委員会委員名簿

任期：平成 24 年 6 月 1 日から 2 年間

選出資格	氏名	所属
学識経験者	海原 徹	京都大学名誉教授
	大野 雅之	大分県立先哲史料館主幹研究員
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	高橋 昌彦	福岡大学人文学部教授
	豊田 寛三	別府大学学長
	中島 三夫	日田市文化財保護員

(50 音順)

### (3) 世界遺産登録検討委員会委員名簿

任期：平成 24 年 5 月 25 日から 2 年間

選出資格	氏名	所属
学識経験者	吾妻 重二	関西大学教授
	海原 徹	京都大学名誉教授
	江面 嗣人	岡山理科大学教授
	後藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	豊田 寛三	別府大学学長

(50 音順)

### (4) 職員名簿

咸宜園教育研究センター

職名	氏名
名誉館長	後藤 宗 俊

(平成 24 年 4 月 1 日現在)

職名	氏名
所長	高瀬 享
係長	工藤 聖二
主査	吉田 博嗣
主査	古城 智浩
主事	溝田 直己
研究員	深町 浩一郎

(平成 24 年 4 月 1 日現在)

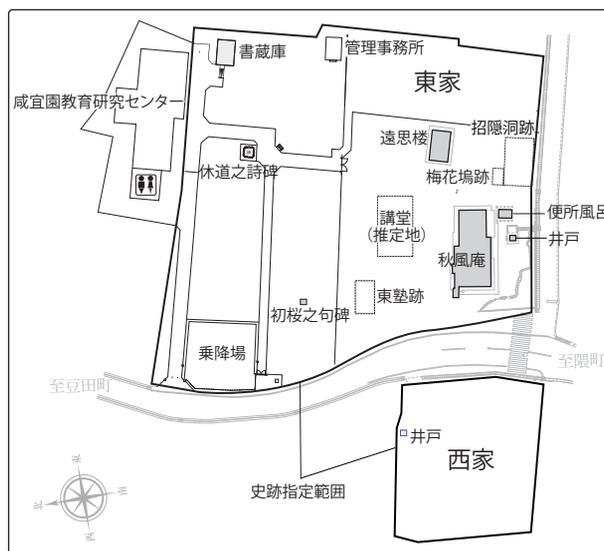
世界遺産推進室

職名	氏名
室長	高瀬 享
係長	工藤 聖二
主査	吉田 博嗣
主査	古城 智浩
主任	原田 弘徳
主事	溝田 直己
主事補	廣末 雅代

(平成 24 年 4 月 1 日現在)

## I . 沿 革

- |                |   |                |   |
|----------------|---|----------------|---|
| 明治 30 年 (1897) | 9 月 咸宜園閉塾                               | 平成 21 年 (2009) | 9 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催                       |
| 明治 46 年 (1913) | 淡窓先生頌徳祭<br>(生誕 130 年祭) 開催               | 平成 22 年 (2010) | 1 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催                       |
| 大正 5 年 (1916)  | 淡窓図書館建設                                 |                | 3 月 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催                       |
| 大正 8 年 (1919)  | 休道の詩碑建立                                 |                | 10 月 咸宜園教育研究センター開館<br>記念式典、記念事業(記念講演会・座談会) 実施 |
| 昭和 7 年 (1932)  | 7 月「咸宜園跡」が国指定史跡に指定                      |                | 「咸宜園門下生子孫の集い」開催<br>(日田市制 70 周年記念事業)           |
| 昭和 23 年 (1948) | 「広瀬淡窓墓」が国指定史跡に指定                        | 平成 23 年 (2011) | 10 月 平成 23 年度特別展<br>「近世の私塾—西日本を中心として—」開催      |
| 昭和 30 年 (1955) | 11 月 淡窓百年祭 (100 回忌) の開催                 |                | 11 月 私塾フォーラム開催                                |
| 平成 2 年 (1990)  | 3 月『第 3 次日田市総合計画』で咸宜園跡の保存整備を計画          | 平成 24 年 (2012) | 3 月 第 1 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施              |
| 平成 4 年 (1992)  | 2 月 史跡咸宜園跡保存整備構想を策定                     |                | 8 月 廣瀬旭莊没後 150 年記念事業(特別展・講演会・鼎談) 実施           |
| 平成 5 年 (1993)  | 史跡咸宜園跡保存整備事業着手                          |                | 11 月 教育遺産世界遺産登録推進協議会発足・世界遺産登録推進国際シンポジウム開催     |
| 平成 6 年 (1994)  | 1 月 秋風庵等保存修理事業実施<br>(~平成 8 年)           | 平成 25 年 (2013) | 2 月 第 2 回 咸宜園教育顕彰事業 (「咸宜園の日」) 実施              |
| 平成 7 年 (1995)  | 3 月 史跡咸宜園跡内秋風庵等保存修理委員会発足 (~平成 12 年度)    |                | 3 月 廣瀬淡窓旧宅が追加指定され、<br>廣瀬淡窓旧宅及び墓に名称変更          |
| 平成 9 年 (1997)  | 1 月 遠思楼復元修理事業<br>(~平成 12 年度)            |                |   |
| 平成 15 年 (2003) | 史跡咸宜園跡保存整備委員会発足<br>(~現在に至る)             |                |   |
| 平成 17 年 (2005) | 史跡咸宜園跡保存整備実施設計<br>淡窓先生百五十年祭 (150 回忌) 開催 |                |   |
| 平成 19 年 (2007) | 11 月 史跡咸宜園ガイダンス棟実施設計<br>史跡のガイダンス施設として実施 |                |   |
| 平成 20 年 (2008) | ~設計                                     |                |   |
| 平成 21 年 (2009) | 咸宜園教育研究センター建設 (国土交通省所管のまちづくり交付金事業を導入)   |                |   |



咸宜園教育研究センター及び史跡咸宜園跡位置図

## II. 施設の概要・組織

### (1) 設置目的

咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与する。

(2) 設置年月日 平成 22 年 4 月 1 日  
(平成 22 年 10 月 2 日開館)

(3) 設置場所 日田市淡窓 2 丁目 2 番 18 号

(4) 設置の概要 公開展示室・研修室・研究室を備えた「史跡咸宜園跡」のガイダンス施設。

- ①構造・規模 木造平屋造 建物延べ面積  
約 373㎡（専有面積）
- ②開館時間 午前 9 時から午後 5 時
- ③休館日 ・水曜日  
(水曜日が国民の祝日または振替休日  
に当るときはその翌日)  
・年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）

### ④主要な施設

◇公開展示室（約 108㎡）

- 常設展示
- 企画展示
- 特別展示

◇研修室（約 73㎡）

咸宜園入門ばっくすの体験や各種研修に利用

◇研究室（約 61㎡）

図書コーナーやパソコン閲覧コーナーを設け、廣瀬淡窓や咸宜園のことなどについて、自由に調べることが可能。ただし、図書の貸し出しは行わない

◇収蔵庫（約 44㎡）

### (5) 主な業務

- ①咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究調査並びに関係資料の収集、整理及び保管
- ②上記①の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- ③咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- ④史跡咸宜園跡の公開

### (6) 組織

①咸宜園教育研究センター  
名誉館長（非常勤）

所長

- 係長 1
- 主査 2
- 主事 1
- 臨時職員 3

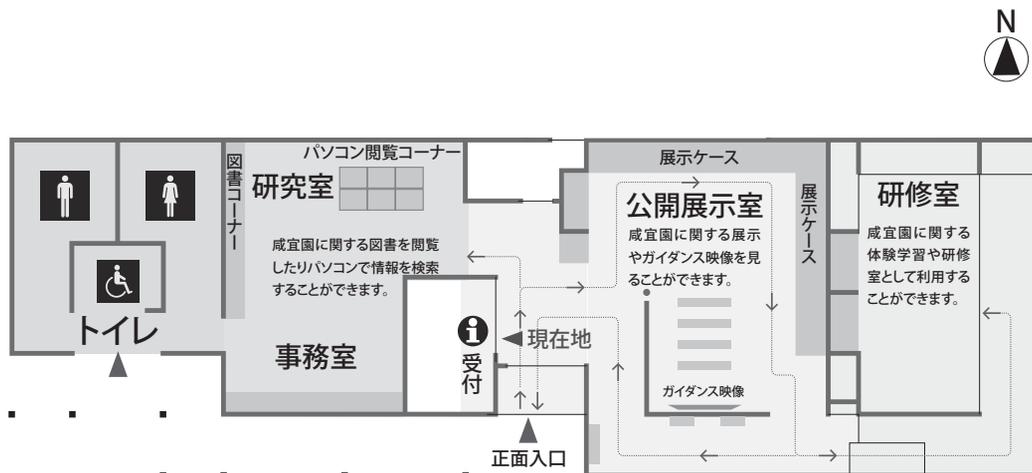
（内、学芸員資格者 2）

②世界遺産推進室

室長

- 係長 1
- 主査 2
- 主任 1
- 主事 1
- 主事補 1

（内、学芸員資格者 4）



咸宜園教育研究センター平面図

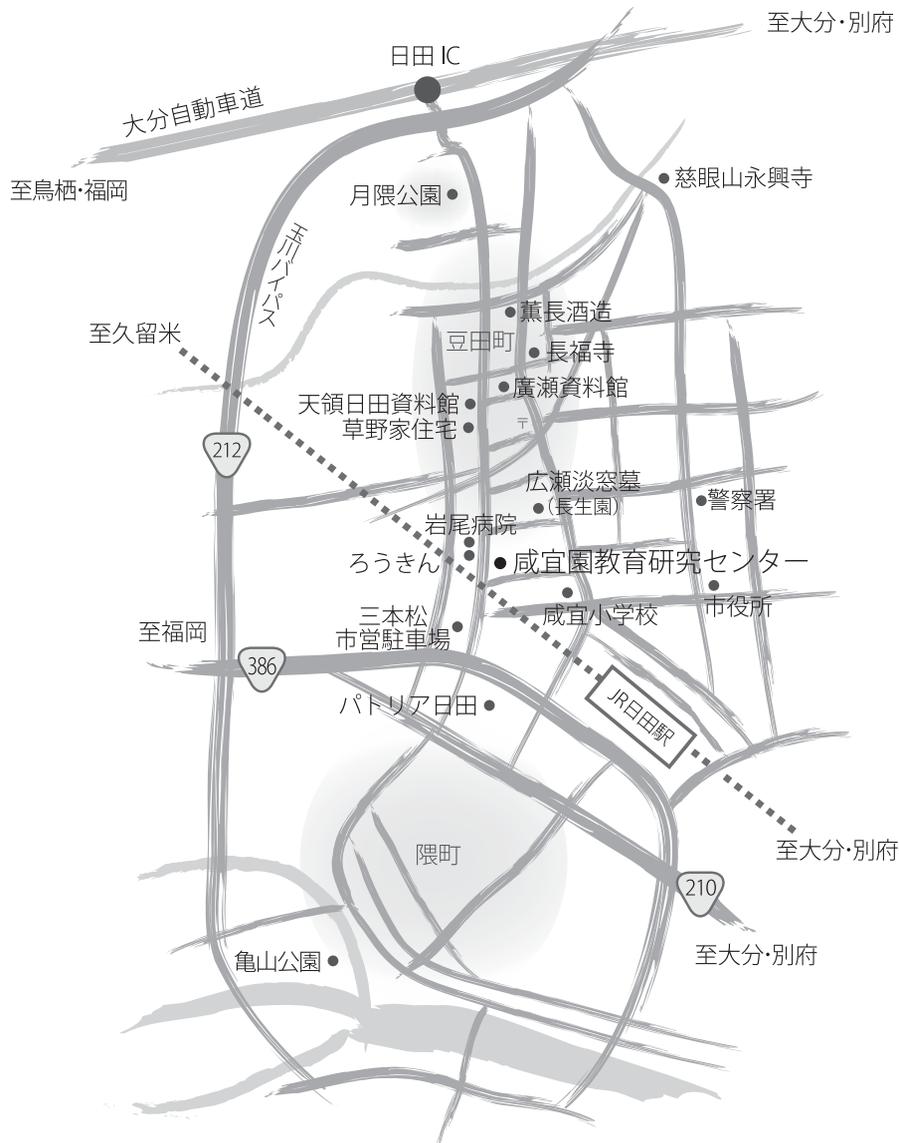
### Ⅲ．利用案内

#### (1) 開館時間

- 公開展示室：午前9時から午後5時
- 研修室：午前9時から午後5時
- 研究室：午前9時から午後5時  
(入館時間は、午後9時から午後4時30分)
- 休館日：・水曜日（水曜日が国民の祝日または振替休日  
休日に当たるときはその翌日）  
・年末年始（12月29日～1月3日）

#### (1) 交通

- JR久大本線：「日田駅」下車徒歩約10分
- 高速バス：「市役所前」下車徒歩約7分
- 車：大分自動車道「日田IC」から約5分  
・専用駐車場には10台駐車可能  
・乗降場は大型バス3台まで乗降可能



## IV . 条 例 ・ 規 則

### 1. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例

平成 22 年 3 月 24 日  
条例第 9 号

(設置)

第 1 条 咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与することを目的として咸宜園教育研究センター（以下「センター」という。）を設置する。

(名称及び位置)

第 2 条 センターの名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 咸宜園教育研究センター

位置 日田市淡窓 2 丁目 2 番 18 号

(業務)

第 3 条 センターの業務は、次のとおりとする。

- (1) 咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究並びに関係資料の調査、収集、整理及び保管
- (2) 前号の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- (3) 咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- (4) 史跡咸宜園跡の公開
- (5) 前各号に掲げるもののほか、センターの運営に関する事務のうち、教育委員会が必要と認める業務

(開館時間及び休館日)

第 4 条 センターの開館時間は、午前 9 時から午後 5 時まで（入館時間については、午前 9 時から午後 4 時 30 分まで）とする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、開館時間を変更することができる。

2 センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

- (1) 水曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和 23 年法律第 178 号）に規定する休日に当たるときは、当該休日以後の直近の休日でない日）
- (2) 12 月 29 日から翌年 1 月 3 日まで

(入館料)

第 5 条 センターの入館料は、無料とする。

(入館の制限)

第 6 条 教育委員会は、センターの入館者が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、入館を拒み、又は退館を命ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他センターの管理上支障があるとき。

(原状回復義務又は損害賠償)

第 7 条 故意又は過失によりセンターの建物、設備、展示物等を損傷又は滅失した者は、直ちにこれを原状に復し、又はその損害を賠償しなければならない。た

し、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、損害賠償義務の全部又は一部を免除することができる。

(研修室の利用の許可)

第 8 条 研修室の利用（体験学習の利用を除く。以下同じ。）をしようとする者は、あらかじめ、教育委員会の許可を受けなければならない。許可を受けた事項を変更しようとするときも、同様とする。

2 教育委員会は、前項の許可をするに当たっては、管理上必要な条件を付することができる。

(利用許可の制限)

第 9 条 教育委員会は、その利用が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしないことができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) 研修室の建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他研修室の管理上支障があるとき。

(利用許可の取消し等)

第 10 条 教育委員会は、利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、利用許可を取り消し、又は研修室の利用を停止し、若しくは制限することができる。

- (1) 利用許可の条件に違反したとき。
- (2) 偽りその他不正な手段により利用許可を受けたことが明らかになったとき。
- (3) この条例又はこの条例に基づく教育委員会規則の規定に違反したとき。
- (4) その他研修室の管理上支障があるとき。

2 教育委員会は、前項の規定による利用許可の取消し等によって利用者が損害を受けても、その賠償の責めを負わないものとする。

(目的外利用又は権利譲渡の禁止)

第 11 条 利用者は、研修室を利用許可を受けた目的以外に利用し、又はその利用する権利を他の者に譲渡し、若しくは転貸してはならない。

(使用料)

第 12 条 利用者は、別表に定める額を使用料として前納しなければならない。ただし、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、使用料を後納することができる。

(使用料の減免)

第 13 条 教育委員会は、前条の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当するとき、使用料を減額し、又は免除することができる。

- (1) 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。
- (2) 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第

1 条に規定する設置目的に沿って利用するとき。

(使用料の不還付)

第 14 条 既に納入された使用料は、還付しない。ただし、次の各号のいずれかに該当する事由に基づいて利用を中止したときは、既納の使用料の全部又は一部を還付することができる。

- (1) 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。
- (2) 利用者が自己の都合により 2 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。
- (3) 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。

(咸宜園教育研究センター運営委員会の設置)

第 15 条 センターの適正かつ効果的な運営を図るため、咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の所掌事務、組織その他必要な事項は、教育委員会規則で定める。

(委任)

第 16 条 この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から起算して 7 月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。ただし、第 15 条及び次項の規定並びに附則第 3 項の改正は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

(平成 22 年教委規則第 11 号で平成 22 年 10 月 2 日から施行)

(準備行為)

2 教育委員会は、施行の日前においても、この条例に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例（昭和 31 年条例第 167 号）の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

別表（第 12 条関係）

区分	単位	金額	備 考
研修室	1 時間につき	320 円	1 常設電灯以外の電気を利用するときは、1 回につき 410 円を加算する。 2 冷暖房を利用するときは、1 時間につき 200 円を加算する。

備考 1 日の利用時間は、原則として 3 時間を限度とする。

## 2. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例施行規則

平成 22 年 3 月 25 日  
教委規則第 2 号

(趣旨)

第 1 条 この規則は、咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例（平成 22 年条例第 9 号。以下「条例」という。）の施行に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用申請)

第 2 条 条例第 8 条第 1 項の許可を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、咸宜園教育研究センター研修室利用許可申請書（様式第 1 号。以下「利用許可申請書」という。）を教育委員会に提出しなければならない。

(利用許可)

第 3 条 教育委員会は、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしたときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可証（様式第 2 号。以下「利用許可証」という。）を申請者に交付するものとする。

(利用者の遵守事項)

第 4 条 利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 他人に危害を及ぼし、若しくは迷惑となる物品又は動物を持ち込まないこと。
- (2) 研修室内において、許可を受けずに物品の販売若しくは陳列をし、又は看板その他の広告物の掲示若しくは配布をしないこと。

(3) 利用を終了したときは、研修室内を整理整頓すること。

(4) その他職員の指示に従うこと。

(利用許可の変更等)

第 5 条 利用者は、利用許可の変更又は取消しを求めようとするときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消申請書（様式第 3 号）に利用許可証を添えて教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の利用許可の変更又は取消しを許可したときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消許可証（様式第 4 号）を利用者に交付するものとする。

3 利用者は、前項の規定による利用許可の変更の許可を受けた場合において、既納の使用料の額が変更後の使用料の額に対して不足額を生じるときは、直ちに、当該不足額を納付しなければならない。

(使用料の減免)

第 6 条 条例第 13 条の規定による使用料の減額又は免除（以下「使用料の減免」という。）ができる場合及び減免の率は、別表第 1 に定めるとおりとする。

(使用料の減免の申請)

第 7 条 使用料の減免を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料減免申請書（様式第 5 号）に利用許可申請書を添えて教育委員会に提出し、

承認を受けなければならない。

(使用料の還付)

第8条 条例第14条ただし書の規定による既納の使用料の還付ができる場合及び還付の率は、別表第2に定めるとおりとする。

(使用料の還付の申請)

第9条 使用料の還付を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料還付申請書(様式第6号)を教育委員会に提出し、承認を受けなければならない。

(損傷等の届出)

第10条 咸宜園教育研究センター(以下「センター」という。)の入館者は、センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、咸宜園教育研究センター施設等損傷(汚損・滅失)届(様式第7号)を教育委員会に提出しなければならない。

(寄贈及び寄託)

第11条 センターは、咸宜園に関係する資料の寄贈及び寄託を受けることができる。

2 前項の資料の所有者は、センターに当該資料を寄贈し、又は寄託しようとするときは、資料名、数量等を明記した寄贈・寄託申込書(様式第8号)を教育委員会に提出しなければならない。

3 教育委員会は、前項の規定による資料の寄託を受けるものと決定したときは、預かり証(様式第9号。以下同じ。)を寄託者に交付し、受託控(様式第10号)をセンターに保管するものとする。

4 寄託期間は、原則として3年とする。ただし、教育委員会が特別な事情があると認めるときは、この期間を短縮することができる。なお、寄託の更新を妨げないものとする。

5 前項の期間の起算日は、寄託資料をセンターが受託した日が1月1日から6月30日までのときは1月1日、7月1日から12月31日までのときは7月1日とする。

6 寄託者は、寄託期間中に、特別の理由により寄託資料の一時返還を受けようとするときは、寄託資料一時返還申請書(様式第11号)を教育委員会に提出しなければならない。この場合において、寄託資料の一時返還を受けようとする者が寄託者の代理人であるときは、その旨を証明する書類を添付しなければならない。

7 教育委員会は、前項の寄託資料の一時返還を承認したときは、寄託資料一時返還承認書(様式第12号)を寄託者に交付し、当該寄託資料を一時返還するものとする。

8 寄贈資料又は寄託資料の保管その他の取扱いについては、センターの所蔵する資料に準じて行うものとする。ただし、寄贈者又は寄託者と利用制限等に関して特約があるものについては、この限りでない。

9 資料の寄贈又は寄託に要する経費は、寄贈者又は寄託者の負担とする。ただし、特別の事情があるときは、この限りでない。

10 寄託資料が汚損し、損傷し、又は滅失したときは、教育委員会が補償するものとする。ただし、天災その他やむを得ない事由によるものであるときは、その賠償の責めを負わないものとする。

11 寄託資料の所有者が譲渡により変更が生じたときは、譲渡人は、速やかに預かり証に所有権の移転を証

明する書類を添えて教育委員会に提出し、その旨の書き換えを受けなければならない。

12 寄託者は、預かり証を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、速やかにその事実を証明する書類又は当該預かり証を教育委員会に提出し、再交付を受けなければならない。

(資料の館外貸出し)

第12条 収藏品等の資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、教育委員会が、博物館、図書館、学校等において学術上の調査研究又は教育普及の目的で使用され、かつ、取扱い上安全性が確保されると認めるときは、この限りでない。

2 前項の館外貸出しを受けようとする者(以下「貸出し申請者」という。)は、咸宜園資料貸出し許可申請書(様式第13号)を教育委員会に提出しなければならない。

3 教育委員会は、前項の館外貸出しを許可したときは、咸宜園資料貸出し許可書(様式第14号)を貸出し申請者に交付するものとする。

(撮影、複写等の許可)

第13条 収藏品等の資料を学術上の調査研究等の目的で撮影し、若しくは複写し、出版物等への掲載をしようとする者又は模写、模造等をしようとする者(以下「撮影等申請者」という。)は、咸宜園資料撮影等許可申請書(様式第15号)を教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の規定による撮影等を許可したときは、咸宜園資料撮影等許可書(様式第16号)を撮影等申請者に交付するものとする。

(運営委員会の所掌事務)

第14条 条例第15条に規定する咸宜園教育研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)は、教育委員会の諮問に応じ、条例第3条各号に掲げる業務に関する事項について審議し、及びこれらの事項について教育委員会に建議する。

2 運営委員会は、前項に定める事項のほか、センターの運営に関する事項について、教育委員会に意見を述べることができる。

(運営委員会の組織等)

第15条 運営委員会は、委員10名以内で組織する。

2 委員は、学識経験者等のうちから、教育委員会が委嘱する。

3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員が欠けた場合における補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 運営委員会に会長及び副会長を置き、委員の互選により定める。

5 会長は、会務を総理する。

6 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

7 運営委員会の会議(以下「会議」という。)は、会長が招集し、会長がその議長となる。

8 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開き、議決をすることができない。

9 会議の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

10 運営委員会に、専門の事項について審議する必要が

あるときは、臨時委員を置くことができる。

11 臨時委員は、教育委員会が運営委員会の意見を聴いて委嘱する。

12 臨時委員は、専門の事項について審議し、運営委員会への報告が完了したときは、解職されるものとする。

13 運営委員会の庶務は、教育委員会において処理する。  
(評価委員会)

第 16 条 センターに収蔵する咸宜園に関する資料の購入価格の適正な評価を行うため、咸宜園教育研究センター収蔵資料評価委員会（以下「評価委員会」という。）を置き、評価委員若干名で組織する。

2 評価委員は、教育委員会の諮問に応じ、センターが購入しようとする資料の評価を行い、その意見書を提出する。

3 評価委員は、学識経験者のうちから、教育委員会が委嘱する。

4 評価委員の任期は、1 年以内とする。

5 評価委員は、職務上知り得た秘密のほか、自己が評価委員であることを他に漏らしてはならない。

6 購入しようとする資料について利害関係を有する評価委員は、当該資料の評価に加わることができない。

7 評価委員会の庶務は、教育委員会において処理する。  
(委任)

第 17 条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この規則は、条例の施行の日から施行する。ただし、第 11 条から第 16 条まで及び次項の規定並びに附則第 3 項の改正は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

(準備行為)

2 教育委員会は、施行の日前においても、この規則に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市教育委員会事務委任規則の一部改正)

3 日田市教育委員会事務委任規則（昭和 39 年教委規則第 10 号）の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

別表第 1（第 6 条関係）

減免ができる場合	減免の率	備 考
1 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。	免 除	1 号の免除は、使用料の減免の申請を省略することができる。
2 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第 1 条に規定する設置目的に沿って利用するとき。	免 除	

別表第 2（第 8 条関係）

還付ができる場合	還付の率	備 考
1 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。	10 割	還付金に 10 円未満の端数があるときは、これを切り捨てる。
2 利用者が自己の都合により 10 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	7 割	
3 利用者が自己の都合により 2 日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	5 割	
4 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。	10 割	

咸宜園教育研究センター

研究紀要 第三号

二〇一四年三月二十四日印刷発行

編集 日田市教育庁咸宜園教育研究センター

〒八七七・〇〇二二

大分県日田市淡窓二・二・一八

咸宜園教育研究センター

発行 日田市教育委員会

印刷・製本 日田時報紙器印刷株式会社

THE KANGIEN EDUCATION RESEARCH CENTER  
B U L L E T I N

Vol. 3

OKA Kenkai's Medical Achievements in Shimonoseki and Discussion of the Various  
Circumstances Leading to His Decision to Live There: KAMEDA Kazukuni  
How Did Western Medicine Develop in a Port City Located on the Western Tip of  
Honshu at the End of the Bunsei Era?

About Hirose Tanso's self-reflections and beliefs on health. FUKAMACHI Koichiro

A historical introduction about volume 1 of the document "kyoraiki"  
in Hirose's collection. YOSHIDA Hiroshi  
SONODA Hiroshi

Introduction by Nishimura Tenshu about Hirose Tanso and Hirose Kyokuso  
who went to Kamei's private school. MIZOTA Naoki

The biographic background of the students of Kangien. (2) YOSHIDA Hiroshi  
HARA Chisato

---

Research Center Annual Report (Fiscal 2012)

Research Center Directory

March.2014